

平成19年度国際子ども図書館
児童文学連続講座講義録

絵本の愉しみ (2)

—アメリカ絵本の展開—

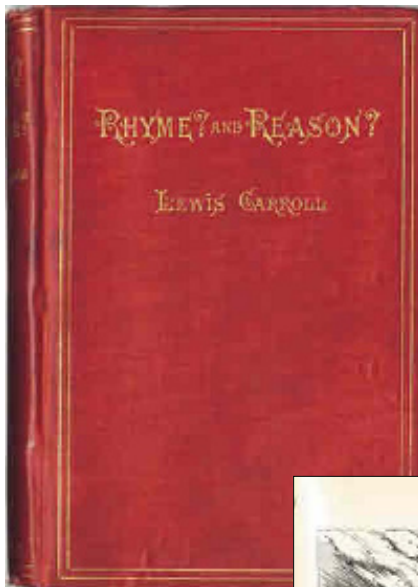


2008年10月

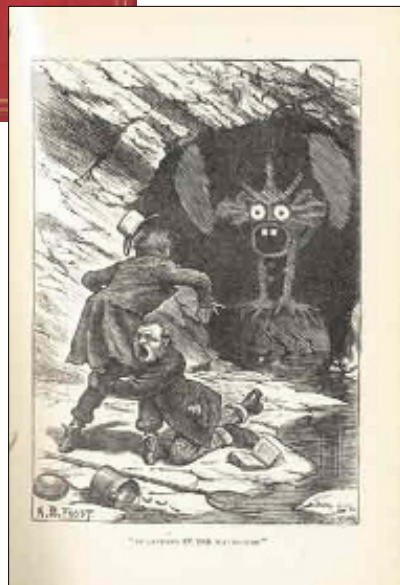
国立国会図書館国際子ども図書館



Mother Goose in white / by J. F. Goodridge
 (当館請求記号 Y17-A1796) p.14参照



Rhyme? and reason? /
 by Lewis Carroll ;
 with sixty-five
 illustrations by
 Arthur B. Frost and
 nine by Henry
 Holiday
 (当館請求記号
 Y8-B3198)
 表紙 (上)、挿絵 (下)
 p.19参照



色相環、明度と彩度
 p.134参照

平成19年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録

「絵本の愉しみ（2）－アメリカ絵本の展開－」

目 次

刊行にあたって	齋藤友紀子	3
凡例		4
草創期－ワルダ・ガグ以前	吉田 新一	6
開花期－第二次世界大戦末まで	吉田 新一	27
発展期－第二次世界大戦後	三宅 興子	51
最盛期－モーリス・センダック その1	吉田 新一	78
最盛期－モーリス・センダック その2	灰島 かり	106
非日常の世界－物語る手法のからくり	藤本 朝巳	122
参考図書を紹介－アメリカの絵本を知るためのブックリスト	福士 輝美	150
絵本ギャラリーを紹介	小沼 里子	165
講師略歴		171

「児童文学連続講座講義録」の刊行にあたって

国際子ども図書館は、全国の各種図書館等で児童サービスに従事している図書館員を対象に、国内外の児童書・児童文学に関する幅広い知識の涵養を目的として「児童文学連続講座」を毎年開催しています。第1回の平成16年度は「ファンタジーの誕生と発展」、平成17年度は「日本児童文学の流れ」、平成18年度は「絵本の愉しみーイギリス絵本の伝統に学ぶー」をテーマとしました。

平成19年度の児童文学連続講座は、平成19年10月15日～17日の3日間、「絵本の愉しみーアメリカ絵本の展開ー」をテーマに、国際子ども図書館のホールで開講されました。前年度のイギリス絵本に引き続き、吉田新一（総合監修）、三宅興子、灰島かり、藤本朝巳という錚々たる講師陣が、草創期から現在に至るアメリカ絵本の流れを辿る心踊る旅の道案内になってくださいました。本書はその講義録です。実際の講義は、スライドや国際子ども図書館の所蔵資料を用いて行われましたが、講義録では、講師の方々のご協力を得て、スライドや実物がなくても講義を楽しんでいただけるよう、表現に工夫をこらしてあります。

児童文学連続講座は、国際子ども図書館が広く内外から収集した児童書を紹介し、当館の業務・サービスに対する理解を深めていただくことも目的としています。今回は、当館職員による科目として、「参考図書の紹介ーアメリカの絵本を知るためのブックリスト」及び「絵本ギャラリーの紹介」を加えました。また、講義で紹介された資料のリストを収録し、当館所蔵資料には、請求記号を付してありますので、興味のある方は、是非、資料にあたってみてください。また、吉田先生が「草創期ーワンダ・ガグ以前」で紹介された資料のいくつかは、絵本ギャラリー「アメリカの絵本 黄金期への幕開け」に掲載されており、当館ホームページからご覧いただけます。

「児童文学連続講座」はおかげさまで毎年好評を得ておりますが、場所や時間の制約もあり、受講できる人は限られております。本講義録の刊行により、講座の成果をより多くの方々に享受していただければ幸いです。

末尾ながら、お忙しい中、快く講師をお引き受けいただき、本講座を実りあるものにするためにご尽力いただきました講師の皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成20年10月

国立国会図書館国際子ども図書館長

齋藤 友紀子

凡例

- 本書は、平成19年10月15日から17日の3日間にわたって国際子ども図書館で開催しました「国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って（総合テーマ：絵本の愉しみ—アメリカ絵本の展開—）」を元に編集した講義録です。
*次ページの日程表もあわせてご参照ください。
- 講義当日に各講師が配布した「レジюме」、「紹介資料リスト」もあわせて掲載しました。「レジюме」は講義本文の前に、「紹介資料リスト」は講義本文の末尾に掲載しています。
- 「紹介資料リスト」は、講義の中で紹介された資料についてリスト化したものです。書誌事項は、原則として国立国会図書館の目録の表記を採用しました。邦訳があるものは、原書と邦訳を組にして表にしました（国立国会図書館所蔵資料を掲載しましたので、原書の書誌事項は初版本とは異なる場合があります）。
*所蔵のない原書の書誌事項については、『世界児童・青少年文学情報大事典』（勉誠出版）、OCLC（Online Computer Library Center）の目録等を参考にしました。
- 「紹介資料リスト」の「請求記号」の項には、国際子ども図書館の請求記号を記載しました。国際子ども図書館が所蔵しない場合は、国立国会図書館東京本館の請求記号を記載し、（本館）と付記しました。国際子ども図書館と国立国会図書館東京本館に所蔵する場合は※を付けました（所蔵状況：平成20年7月現在）。
- 講師の肩書きは連続講座当時のものです。

平成19年度「国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って」
総合テーマ「絵本の愉しみ—アメリカ絵本の展開—」日程表

総合監修 吉田 新一（国立国会図書館客員調査員、立教大学名誉教授）

○1日目 10月15日（月）

時 間	内 容	講 師
9時30分～ 10時	開会の挨拶・諸連絡	国際子ども図書館職員
10時～ 12時	草創期—ワンダ・ガッグ以前	吉田新一（国立国会図書館客員調査員、 立教大学名誉教授）
13時30分～ 15時30分	開花期—第二次世界大戦末まで	吉田新一
15時45分～ 16時30分	絵本ギャラリーの紹介	小沼里子（国際子ども図書館職員）

○2日目 10月16日（火）

時 間	講義名	講 師
10時～12時	発展期—第二次世界大戦後	三宅興子（梅花女子大学大学院非常勤講師）
13時～14時	①国際子ども図書館館内見学 ②講義紹介資料の自由閲覧等 (①②は選択とする)	国際子ども図書館職員
14時～16時	最盛期—モーリス・センダック その1	吉田新一
16時15分～ 17時00分	参考図書の紹介—アメリカの絵本を知るためのブックリスト	福士輝美（国際子ども図書館職員）

○3日目 10月17日（水）

時 間	講義名	講 師
10時～12時	最盛期—モーリス・センダック その2	灰島かり（翻訳家）
13時～15時	非日常の世界—物語る手法のからくり	藤本朝巳（フェリス女学院大学教授）
15時～ 15時30分	休憩、修了証書授与	
15時30分～ 17時	研修生意見交換会	吉田新一、国際子ども図書館職員

レジュメ

アメリカの絵本 草創期（ワンダ・ガアグ以前）

吉田 新一

アメリカ絵本の黄金時代をもたらした原動力の一つである、19世紀からの子どもの本の普及活動を跡づけながら、この国の黎明期の絵本を見てみましょう。

- 1833 *Mother Goose's Melodies. The only Pure Edition* (Munroe & Francis, Boston)
- 1835 *The Adventures of A, Apple Pie who was cut to pieces and eaten by twenty six young Ladies and Gentlemen* (George W. Burgess, New York)
- 1848 *A Visit From St. Nicholas* by Clement C Moore, LL.D., with original cuts designed and engraved by Boyd (Henry M. Onderdonk, New York)
- 1858 *The Eventful History of Three Little Mice and How They Become Blind* illustrated by Winslow Homer (published as part of the Good Child's Library of E. O. Libby & Co., Boston) [Y8-A109]
- 1879 *Nursery Rhymes and Melodies of Mother Goose* illustrated with 50 full page sketches 'in white' by J. F. Goodridge (Lee & Shepard, Boston) [Y17-A1796]
- 1887 Palmer Cox (1840—1924) ; *The Brownies, Their Book*
(‘The Brownies’ Ride’ in *St. Nicholas*, Feb., 1883)
- Howard Pyle (1853—1911)
- 1881 *The Lady of Shalott* by A. Tennyson
- 1888 *Otto of the Silver Hand*
- 1903 *The Story of King Arthur and His Knight*
- A (rthur) B (urnett) Frost (1851—1928)
- 1881 *Uncle Remus: His Songs and his Sayings*, by Joel Chandler Harris
- 1884 *Stuff and Nonsense*
‘Our Cat Eats Rat Poison’ (*Harper's Magazine*, July, 1881)
- 1884 *Rhyme? and Reason?* By Lewis Carroll [Y8-B3198]
- William W (allace) Denslow (1856—1915)
- 1900 *The Wonderful Wizard of Oz*
- 1902 *Denslow's Night Before Christmas* by Clement C. Moore [Y17-A432]
- Elmer Boyd Smith (1860—1943)
- 1905 *The Story of Noah's Ark*
- 1913 *The Railroad Book*
- Jessie Willcox Smith (1863—1935)
- 1905 *A Child's Garden of Verses* by Robert L. Stevenson
- 1914 *The Jessie Willcox Smith Mother Goose*

C. B. Falls (1874—1960)

1923 *A B C Book*

cf. William Nicholson's *An Alphabet* (1898), *The Square Book of Animals* (1899) and *The Velveteen Rabbit* (by Margery Bianco, 1922)

1924 *The Petersham; Poppy Seed Cakes* (by Margery Clark) [Y8-B2759]

§ Magazines for young people —

The Youth's Companion (1827—1929)

St. Nicholas Magazine (1873—1943)

Harper's Young People: An Illustrated Weekly (1879—99)

§ Library work with children

1803 Caleb Bingham, a bookseller による The Bingham library 開設。

1805 Dr Jesse Torrey による The Lebanon Juvenile Society for the Acquisition of Knowledge が New Lebanon, New York に誕生。

1835 'Uncle' Dexter が West Cambridge, Massachusetts に the library to children を開く。

1838 多くの公共図書館が子どもの利用を禁じていたので、New York 市は学校図書館新設のため 55,000ドルの支出をはじめた。当時子どもは Apprentices' Libraries から本を借りていた。しかし、The Sunday School library が子どものための本の最大の供給者で、the American Sunday School Union (founded in 1817) が子どもの本のトーンと内容に大きな影響を及ぼしていた。

1876 American Library Association (ALA), founded

この年から1900年にかけて、公共図書館の子どもに対する態度が変化していった。

1877 Mrs Minerva L. Saunders, Librarian at Pawtucket, Rhode Island が自館に子ども専用のコーナーを設け、子ども用の椅子を置き、児童書を貸し出し始めた。

1882 Miss Caroline M. Hewins が、ALAの大会で、「あなたは少年少女に読書の喜びをエンカレッジするためにどんな工夫をしていますか？」というアンケート調査をもとに、児童奉仕に関する発表をおこなう。(アンケート結果はエンカレッジではなかったという。)

1894 Miss Lutie Stearns of Milwaukee Public Library が Lake Placid, New York で開催された ALAの大会で Report on Reading for Young を発表する。それは、公共図書館における利用者の年齢制限の撤廃と、児童奉仕者のいる子どものための特別室の設置を訴える内容であった。

1895 Boston Public Library が新館をオープンして、一室に開架書棚を設け、子どもの本2000冊を置く。

1897 Philadelphia における ALA の大会で初めて library work with children が全体会で討議される。図書館に於ける児童奉仕の必要性が認識された。

1890年に Brookline で開設された児童室がパイオニアとなって、1900年までに全米各地の公共図書館に児童室が開かれた。

1900 ALAに the Section for Children's Librarians が設けられた。(これが1941年に、the Children's Library Association of the Division of Libraries for Children and Young People となった。) この Section の第一回会議が1901年に開かれ、A. C. Moore が議長となり、以後の会議内容が毎年 *The Library Journal* に掲載され、多くの刺激を与え、children's

librarian、children's library work、children's literature が重要視されるようになり、子どものための文学がすべての文学の vital part であるとの認識が広まり、ここから子どもの本の selection と use のための criteria が発展していった。そして、ポール・アザールの『本・子ども・大人』（1932）における「アメリカの子どもの図書館への激賞」を生んだ。

1906 1895年に Pratt Institute Library で開設された児童室の責任者だった Anne Carroll Moore が、New York Public Library に children's department を新たに開設するため招聘される。A. C. Moore は Pratt Institute 時代から児童奉仕の専門職の必要を唱えて、彼女によって The Training School for Children's Librarians が開かれ、1917年までその養成に携わった。1909年には Cleveland Public Library で、Caroline Burnite も児童図書館員養成クラスを開いた。

(以上は *A Critical History of Children's Literature* (Macmillan, New York, 1953) の第3章12節による。)

草創期—ワンダ・ガァグ以前

吉田 新一



はじめに

おはようございます。

この連続講座、昨年は「イギリスの絵本の流れ」をテーマと致しましたので、今年はそれとペアになるように、「アメリカの絵本の流れ」を考えてみることにしました。「流れ」と言いましても、限られた時間内でのことです。昨年と同じく、幾人かの作家にしばって、アメリカ絵本の展開を考え、愉しんでいくことになろうかと思えます。

講座を企画したときに、国際子ども図書館のホームページの〈お知らせ〉で、アメリカ絵本の流れについて、私が認識しているところをごく短く書きましたので、それをもう一度ここで読ませていただいて、講座の始まりとさせていただきます。

「絵本好きの人たちには忘れられない絵本、『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』、『アンディとらいおん』、『げんきなマドレーヌ』、『カモさんおとおり』、『ひとまねこぎるときいろいぼうし』、『ちいさいおうち』、『もりのなか』、『ぼくの にんじん』、いずれも第二次世界大戦中〔1937（昭和12）年～45（昭和20）年〕に、アメリカで誕生していた絵本たちです。『100まんびきのねこ』（*Millions of cats*, 1928）で独自の絵本芸術の花を咲かせ始めたアメリカは、上記の大戦中から戦後へかけて絶頂期を迎えていました。そして『かいじゅうたちのいるところ』（*Where the wild things are*, 1963）が出現して、時代は新たな色彩をおび始めました。それを「expansion、exploration、sometimes exploitation（拡張と探求、時に私的利用）の時代」と呼んでいる批評家が出てきました。純金と鍍金を混同せず、皇帝が着衣しているか、はっきり見きわめてほしい、とその批評家は叫びます。ここ

では輝かしい発展をとげてきたアメリカ絵本の今日までの歩みを振りかえって、絵本の本質を学ぶ参考に使いたいと思います。」

このような認識から、本年の講座をアメリカ絵本の、①草創期（ワンダ・ガァグ以前）、②開花期（第二次世界大戦末まで）、③発展期（第二次世界大戦後）、④最盛期（センダック）、⑤多様化期（センダック以後）、と分けて考えてみることにしました。

では、早速「草創期（ワンダ・ガァグ以前）」から始めさせていただきます。

お手元にお配りしてある〈草創期の年表〉を、ちょっとご覧いただきましょう。アメリカは独立宣言をしたのが1776年で、それからジョージ・ワシントンが初代大統領を務めたのが1789～97年、首都がワシントンD.C.に決まったのが1800年、アメリカ・カナダの国境線が確定したのが1818年、というようにアメリカの国づくりが進んでいく初期の頃、ここでは年表を1833年から始めました。そして、『100まんびきのねこ』（1928）が出る直前のピーターシャム夫妻の『けしつぶクッキー』（*The Poppy Seed Cakes*, 1924）までを、「草創期」と考えました。その間の各事項については、後から順次、触れていくことにして、まずは1902年のデンスロー（D. D. Denslow, 1856～1915）の『クリスマスのまえのぼん』（*Denslow's Night Before Christmas*, 1902）から始めさせていただきます。

デンスローの『クリスマスのまえのぼん』

この『クリスマスのまえのぼん』は、サンタクロースが家々の煙突からはいって、子どもたちの靴下にプレゼントを入れていくという、子どもた

ちがクリスマスに抱くもっともポピュラーなサンタクロースのイメージを、広く普及させた物語詩です。毎年クリスマスシーズンが近づくと、この歌物語による新しい絵本が必ず出版されていますので、皆さんにとっても、クリスマスの本といえなくこれ>とっておられる方が多いでしょう。(ちょっと脱線しますが、ついでに、もう一つ『クリスマスの12にち』(The Twelve days of Christmas)というわらべ唄が、クリスマス期になると愛唱されて、その新しい絵本がやはり毎年出版されています。恋人に贈るプレゼントが12日間、日毎にひとつずつ増えていく<積み上げ唄>です。12日間というのは、12月25日から、東方の三博士がキリストの誕生を祝うために、星に導かれてベツレヘムへやってくる1月6日までのことで、これがクリスマス期でして、この唄は子どもたちによって、クリスマスの遊び唄として、欧米で広く愛唱されています。イギリスのブライアン・ワイルドスミスの『クリスマスの12にち』(講談社)などが、絵本としてよく知られています。)

さて、1902年に出版されたデンスローの『クリスマスのまへのぼん』ですが、福音館書店の渡辺茂男さん訳で、話の内容をよくご存じかと思いますが、クリスマスイブの夜、家中が寝静まったところへ、サンタクロースが空中を、8頭のトナカイが引く橇でやってきて、煙突から子どもたちの部屋へ降り、プレゼントを靴下につめて去っていく。その物音で起きたお父さんが、事の顛末を目撃するという構成で話が進行します。お父さんの見たサンタクロースの風貌は、というと—

りょうめの なんと くりくり していること！
えくぼの なんと たのしそうなこと！
ほおは バラのよう
はなは サクランボそっくり！
おどけた ちいさな くちを
きゅっと しめ
あごひげは
ゆきのように まっしろ。
パイプを
しっかり くわえ

のぼる けむりが あたまの まわりで
はなかんむりのように ゆらいでいます。
ちいさい からだに おおきな かおで
かわいい おなかを しています。
わらうたびに まるい おなかは
ボウルに 入れた
ゼリーのように ふるえます。
まるまる ふとった
ほんとに ゆかいな こびとの おじいさん。

おじいさんは ひとつも いわないで
すぐに しごとに かかります。
くつした いっぱい おくりものを つめると
くるりと からだの むきを かえました。
それから ひとさしゆびを
はなの よこに ちょいと あて
こくんと うなずくと えんとつに
もぐりこみ
のぼっていきました。

(渡辺茂男訳)

これ、まさに私たちが抱いているサンタクロースのイメージですね。で、さきほど、この話は歌物語だと申しました。原文(英語)は韻文で書かれていますから、今読んだところの最初の部分を、英語で見てください。

His eyes, how they twinkled!
his dimples how merry!
His cheeks were like roses,
his nose like a cherry!
His droll little mouth was drawn
up like a bow.
And the beard of his chin was
as white as the snow;
The stump of a pipe he held
tight in his teeth,
And the smoke it encircled
his head like a wreath;
He had a broad face and
a little round belly
That shook, when he laughed,

like a bowl full of jelly.

ご覧のように、行の最後の音が、merry, cherry; bow, snow; teeth, wreath; belly, jerry と韻を踏んでいますね。2行ずつ韻を踏むカプレット (couplet, 2行連句) で書かれています。単語を2、3辞書で調べれば、構文が易しいので、中学3年の英語力があれば、楽に読みこなせるでしょう。なによりも、声に出して読むとひじょうにリズムカルで、唱えやすいでしょう。6行目の、the smoke it という言い方は、ナーサリーライム (Nursery Rhyme) でよく出てくる表現で、the smoke と言っておいて、もう一度それを it と言い換えるのですが、リズムを整えるためです。

さて、当時すでにポピュラーであったこの歌物語に、デンスローがイラストレーションをつけたわけですが、年表で2年前に、彼はフランク・ボーム (Frank Baum) の『すばらしい魔法使いオズ』 (*The Wonderful Wizard of Oz*, 1900) にイラストレーションをつけています。「オズの魔法使い」はディズニー映画でも、またミュージカルでも親しまれている、アメリカの代表的な子ども向けのファンタジーであることは、申すまでもありません。

デンスローは、家庭の事情で20歳頃から生活のために働き始めていましたが、1882年に結婚した頃からは、ニューヨークで雑誌のイラスト描きや、芝居の舞台衣装のデザインなどを始めていました。(この人、3度も離婚、結婚を繰り返して、全米の各地へ、仕事を変えては移動し、しばしば仲間と不和を引き起こしていました。フランク・ボームとも作品の著作権のことで喧嘩別れしています。しかし、磊落な性格の人で、周囲の人には愛され、イラストレーターやデザイナーとして人気は絶大でした。それで、後年バーミューダ群島に島を買い、自らキング・デンスロー一世と称して、執事長、提督など、廷臣を抱えて、王宮もどきの生活をしましたが、時代は進み、人々の趣向も変わり、晩年は人気を失い、失意の最後をとげたとされています。)

19世紀末に、デンスローはイギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動に強い関心をもちました。

特にウォルター・クレインから影響を受けたようです。クレインと同じく、日本の浮世絵からも学ぶところが多かったといえます。その活動には、劇場のポスター描きもありました。イギリスのウィリアム・ニコルソンらのベガスタッフ・ブラザーズや、フランスのロートレックなどとも同時代でしたから、アール・ヌーボー調のポスターの時代で、デンスローも流行に同調するところがあったようです。

従ってデンスローの『クリスマスのまえのぼん』 (正確なというか、正しいタイトルは *Denslow's Night Before Christmas* です) を、以上のような背景からご覧になると、デザインがアール・ヌーボー調であることが、理解できます。イギリスのウォルター・クレインに似たところが多く、色は平塗り、太い黒の枠が好まれ、輪郭線がはっきりしていて、影をもつ立体感はなく、二次元的な絵ですね。タツノオトシゴと、Denslow の略である Den を組み合わせたサインも、クレインの鶴のサインを真似て考えたといわれています。しかし、デンスローの場合は、絵に枠を設けながら、枠を抜けてページいっぱい絵が広がり、ダイナミックな躍動感を感じさせるので、人気がありました。「オズの魔法使い」の挿絵が好評だったのも、物語と絵のチームワークのよさによりました。今日の目から見ても、イラストレーションがよく<絵語り>している点が、評価できます。

『クリスマスのまえのぼん』 (ここでちょっと注意しておきますが、福音館書店版は原書と比べるとページのレイアウトがかなり変えられています) は原書では、テキストの文字が肉太の活字で、濃いつやのある黒で印刷されていて、文字とカットの絵が、バランスよくレイアウトされています。タイポグラフィーが、ページのレイアウトに欠かせない要素の一つであることがわかります。また、内扉のタイトルページも、原書では短冊型の絵と肉太の文字との組み合わせで、まさにアール・ヌーボーそのものというデザインです。

話の冒頭の「クリスマスのまえのぼんのことでした。いえのなかは ひっそり しずまりかえり なに ひとつ ねずみ いっぴき うごきません。」というくだりの絵は、子どもたちが1年

間大いに遊んだらしい（というのも、破れ太鼓や、くたびれはてた動物や少女の人形、縄跳びの縄などの）玩具が、乱雑にゴミの山と化しています。サンタクロースに新しい玩具をお願いするように打ち捨てられ、家中みんな寝静まっていた、という画文一体のページと読めます。

次の見開きページでは、文字はなく、右側ページでは、普段だったら、夜行性のネズミの起きている時間ですが、今夜ばかりはベッドで熟睡しています。「ねずみ いっぴき うごきません」という文が、絵でそのように具体化されています。左ページでは、サンタクロースが子どもたちから届いた手紙を読んでいます。プレゼントの品を考えているところでしょう。そして、次なる見開きで、子どもたちがお願いしたプレゼントの受け皿、靴下が暖炉に吊るされています。時計は正12時を指して、今や真夜中です。(改めてお断りしますが、これらは英語の原書のレイアウトでの読みです。) ずっと見ていくと、日本の張子の虎の(郷土)玩具や羽子板も出てきます、ジャポニスムですね。また、サンタの土産を入れた袋からは、「オズの魔法使い」のブリキの人形も描かれています、絵描きさんのお愛嬌、あるいは読者へのサービスでしょうか。

以上、この絵本は確かに当時のアメリカ絵本界における成果を物語る作品ではありますが、ヨーロッパからの強い影響下での収穫、といわなければなりません。が、そのことはしばらく置くとして、『クリスマスのまえのぼん』のテキストに、話を移しましょう。

クレメント・ムーアのクリスマスプレゼント

<草創期の年表>をもう一度ご覧いただくと、1848年に*A Visit from St. Nicholas*というものが出版されています。この『聖ニコラスがやってきた』(邦訳なし)が実は、以上で見てきた『クリスマスのまえのぼん』の元の、本来のタイトルでして、作者はヘブル語の辞典などを作ったクレメント・ムーア(Clement C. Moore)という神学博士でした。これはその歌物語が初めて絵本になったものです。

博士には9人お子さんがいましたが、そのうち

6人が、このお話を最初に、聞いた子どもたちだったそうです。ムーア博士は1822年のクリスマスイブに、わが子たちをよろこばせようと、これを初めて創作しました。そして、子どもたちに聞かせました。(一家のお父さんがわが子のために、このようにお話を作って、クリスマスプレゼントにする例は、有名なものではドイツのハインリッヒ・ホフマンによる『もじゃもじゃペーター』があります。また、『ホビットの冒険』や『指輪物語』の作者J.R.R. トールキンも、わが子たちに毎年、サンタクロースになりすまして、北極からのサンタクロースの絵手紙を書いていました。)

ところで、クレメント・ムーアが子どもたちにしたその話を、翌年、ある女性が見せてもらい、写させてもらいました。それを*Troy Sentinel*というローカル紙の編集者に見せました。すると1823年12月23日の「トロイ・センチネル」紙に、それが作者名なしで掲載されてしまったのです。ムーア先生は無断で自分のものが出たことを、もちろん不快とされたようですが、物語は作者不明のまま人気を呼び、その後クリスマス期になると、あちこちの新聞に掲載されるようになりました。そして、1829年になってようやく、作者があることを「トロイ・センチネル」紙が明らかにしましたが、依然として実名は伏せられていました。実名がちゃんと明らかになったのは、なんと16年後、1838年12月25日の*Troy Budget*紙においてでした。こうした経緯があって、作品は、初めて1844年に、ムーア博士自身の詩集*Poems*に収録されました。そして、1848年に、ニューヨークのHenry M. Onderdonkという出版者が、地元の木版画家T.C. ボイド(T.C. Boyd)に挿絵を依頼して、タイトルも『クリスマスのまえのぼん』として、絵本の形で初めて出版しました。それが、年表1848年にあるものです。なお、この歌物語にはそれ以前、1830頃にマイロン・キング(Myron King)という木版画家が、サンタクロースがトナカイの引く橇で家々の屋根の上を飛んでいくイラストレーションを1枚作っていたので、その1枚が、この物語の最初の挿絵ということにはなっているのですが。

この1848年版の*The Night Before Christmas*

は、アメリカの Dover Publications から1971年に解説付き ファクシミリ版として出ています。今も入手可能かは不明ですが、それにはもちろん T. C.ボイドによる6葉の挿絵も、それから解説文の中には、マイロン・キングによる最初の1枚の挿絵も出ております。

アメリカ版マザーグース

さて、それではもう一度〈年表〉へもどりましょう。最初の1833年の *Mother Goose's Melodies* をご覧ください。イギリスでは子ども向けの出版が18世紀半ば少し前から始まり、マザーグースの唄が印刷され始めました。もっとも古いもので、1744年の *Mary Cooper* による *Tommy Thumb's Pretty Song Book* というのがありました。また、1766年には John Newbery の *Mother Goose's Melody, or Sonnets for the Cradle* が出ていました。それらを受けて、アメリカでもイギリスで出た本を、海賊版ですが、そっくり出版し始めていました。1825年頃に、子ども向けに出た *Mother Goose's Quarto, or Melodies Complete* はその一例ですが、この版は流行らなかったようです。しかし、それを精選して作った、1833年出版の *Mother Goose's Melodies* は好評で、1860年代まで版を重ねて、広く普及したようです。これは、ボストンのマンロウ & フランシスが出した本で、96ページからなる袖珍版でしたが、モノクロームながら、本文全ページに挿絵がついていました。アメリカで出た最初のオリジナルなマザーグース絵本を選べと言われたら、このマンロウ&フランシス版であると一般に言われています。(この本も、ファクシミリによる普及版が、アメリカの Dover社から1970年に出ていて、E. F. Bleiler による詳しい解説がついています。)

ともかくこの頃から、アメリカではマザーグースの唄の本が盛んに出版されて、その中から、〈年表〉では、1835年のアルファベットの唄の本『AはアップルパイのA、26人の小さい淑女・紳士によって分けられ、食べられたアップルパイのおはなし』(*The Adventures of A, Apple Pie who was cut to pieces and eaten by twenty six young Ladies and Gentlemen*, 1835 邦訳なし)

と、それから1879年出版のJ.F.グッドリッジによる挿絵がついた『ナーサリー・ライムズと、マザーグースのメロディーズ』(*Nursery Rhymes and Melodies of Mother Goose*, 1879 邦訳なし)を挙げてみました。

前者は挿絵が手彩色で、カラフルです。テキストの方は有名なアルファベットの唄ですから、ご存じの方も多いでしょう。アップルパイをかじったり (bit)、それにお辞儀 (curtsy) をしたり、その夢を見たり (dream)、と a,b,c,d,...と各字母をイニシャルにもつ語が選ばれて、アップルパイが分配される話になっています。最後の Z は Zebra (シマウマ) に乗った少年が自分の分け前を取り、“Though his share was the last. Yet he liked it the best.” (最後まで喜んで分け前をいただきました) と、めでたく話は完結しますが、その一つ前のページ、WとXのページでは、作者は苦勞しています。すなわち、まずWでは“W watched it.”と文があって、絵はW少年がアップルパイを見張っています。次のXという字母は、Xで始まる語が少ないので、アルファベット絵本の作者を泣かせる箇所ですが、ここではどういう工夫がなされているかといいますと、一人の女性が自分の分け前を奪いとうろと、襲ってきます。テキストは、“X storm'd for a share” (分け前を奪いに来た) ですが、続けて、文字を小さく落として、“Like a vixen so bold. You'd have thought had you seen her 'Twas Xantippe the scold.”と書かれています。すなわち、「乱暴狼藉な vixen のように (襲ってきた)、もしあなたが見たら、ソクラテスの悪妻クサンティッペじゃないか、と思ったことでしょう」とあります。vixenは雌ギツネという意味の他に、がみがみ女という意味があります。またクサンティッペも固有名詞でなく、普通名詞では、がみがみ女という意味ですから、要するに〈女が猛烈な形相で〉襲ってきたということなのです。Xで始まる語に苦勞して、いささか苦しまぎれに、「Xは、XantippeのX、vixenのxです」と言っているわけです。それに合わせて、一つ前のWでは、見張りを登場させて、連携をもたせたというわけです。

このマザーグース本から44年後の1879年に出た *Nursery Rhymes and Melodies of Mother Goose* が、もう一例のマザーグース絵本です。こちらは国際子ども図書館に所蔵されていますから、関心のある方は実物をご覧ください（口絵参照）。挿絵がユニークなので、取り上げてみました。タイトルの添え書きに“in white”とあるように、木版画は普通は黒い線が凸でプリントされるのですが、ここでは逆で、線描がホワイトで、地が黒です。そして、絵の描き方が無造作とも思えるような表現で、しかし、今日の目から見ると、意外に現代風なのです。というよりも、マザーグースのナンセンス性にひじょうによくマッチした絵でして、私は好きです。ちょっとイギリスのエドワード・リアのナンセンスソングのイラストレーションに似ています。

以上、マザーグースの絵本が、イギリスの場合と同じく、アメリカでもまず最初に、子ども向けに出始めていたことを申し上げて、＜草創期＞がマザーグース絵本で始まっている点を指摘してみたわけです。

発見されたウインスロー・ホーマーの挿絵

では、次は＜年表＞で、1858年の『奇談 視力を失った3匹の子ねずみ』(*The Eventful History of Three Little Mice and Hero They Become Blind*, 1958 邦訳なし)へ移りましょう。この本のイラストレーターは、ウインスロー・ホーマー(Winslow Homer, 1836~1910)です。ホーマーは19世紀アメリカで、もっともすぐれた画家でした。

ホーマーの活躍期は、新聞・雑誌が盛んに出始めた時代でした。が、まだ写真を印刷する技術がなかったので、映像を描ける人の需要がひじょうに大きかった時でした。ウインスロー・ホーマーも、雑誌にカットをせっせと描いていました。もちろんメインはタブロー画家の仕事で、風景画、特に海の景色を描くのが得意でした。南北戦争時には戦場の情景も描いています。すぐれたデッサン力の持ち主で、写実画にたけていました。

18歳からボストンでリトグラフの修業をして、31歳から *Ballou's Pictorial Drawing-Room*

Companion という週刊誌や、当時トップの *Harper's Weekly* 誌のためにカットを描いていました。そうした仕事の経験から、絵に語りを加えるコツを覚えて、彼の描くカットは“narrative pictures”（物語る絵）が特徴だと言われるようになりました。成人向けの小説や詩、また楽譜の表紙絵などにも手をそめていました。『ハイアワサの唄』を書いたロングフェローの詩にも、挿絵を描いています。そして、子ども向きの本では13冊もの本に挿絵を描いています。ただし絵の数は、そう多くはありませんでした。が、最初に挙げた1858年の『奇談 視力を失った3匹の子ねずみ』には、フルセットで挿絵が描かれています。実はこの作品は、長い間忘れられていて、というか、埋もれていた作品でした。本当にごく最近、1996年に改めて発見されて出版され、大きな注目を集めることになった曰く付きの作品です。ホーマーの研究者たちにも、ずっと見落とされていたのです。

作品はニューヨークのオックスフォード大学出版部から、同社の＜The Opie Library＞の一冊として出版されて、モーリス・センダックが激賞の序文を書いています。その冒頭でも、「できればこの序文を＜ウインスロー・ホーマー、その児童書イラストレーターとしてのシークレット・ライフ＞と名づけたい」と、センダックも言っています。

前置きが長くなりましたが、作品にはいりましょう。これは物語ですが、元になっているのは、マザーグースの有名な唄で、ご存じの方も多いと思います——

Three blind mice
See how they run
They all run after the farmer's wife,
She cut off their tails with a carving knife;
Did you ever see such a sight in your life,
As three blind mice?

これも英語が平易です。「目の見えない3匹のねずみが 走っていくのを見てごらん みんなで、農夫のかみさんを追っかけてるよ でも、か

みさんは肉切り包丁で3匹の尻尾を切ってしまった 3匹の目の見えないねずみの受けた そんなひどいこと、あなたは今までに見たことあった？」

英語を見ると、mice が走って、農夫の wife を追いかけて、wife は knife で mice の尻尾を切った、そんな mice のひどい話を、あんたの life で見たことありますか？というのですから、英語は押韻しています、マザーグースですからね。この唄のイラストレーションはたくさんありますが、3匹のねずみがおかみさんを追いかけている絵か、おかみさんが肉切り包丁で3匹のねずみの尻尾をちょん切るところが、まあ一般的です。

それに対して、ウィンスロー・ホーマーがイラストレーションをつけたテキストは、なぜ3匹のねずみは目が見えなくなったのか、を主題としています。(マザーグースの唄に対するそのようなアプローチの仕方は、挿絵画家にはかなりあります。例えば、なぞなぞ唄のハンプティ・ダンプティでは、<ハンプティ・ダンプティはなぜ塀から転げ落ちたのでしょうか>と問いを設定して、例えば、イラストレーションで<飛んで来た蜂をよけて転げ落ちた>ところを描くわけです。「ヒッコリ・ディッコリ・ドック ねずみが時計をかけあがる 時計が一時を打つたらば ねずみはかけおきた ヒッコリ・ディッコリ・ドック」という唄では、<猫がねずみを追いかけている絵>を描いて、ねずみが時計をかけあがった理由を、絵で語ったりします。そういう趣向でもって) <3匹のねずみはなぜ目が見えなくなったのでしょうか>という問いから誕生した物語に、ホーマーがイラストレーションを描いたのです。

テキストは、だれが書いたかは不明です。最初に言いましたオックスフォード大学出版部の本の解説によりますと、当時、というのは19世紀半ばですが、ちょうど現代絵本が誕生し始めるころで、それまでのチャップブックの流れから、今度は、現代絵本の前身であるトイブックというのが出始めていました。そのトイブックで出てきたテキストを、ホーマーが使ってイラストレーションを描いた、と解説されています。

で、まずはそのテキストをやや詳しくご紹介すると――

農夫のグランピー (Grumpy) さんちは大きな家で、納屋もあり、たくさんの馬、牛、豚、鶏を飼っていたが、住んでいたのは奥さんと手伝いのスーザン (Susan) だけで、子どもはいなかった。

この家にミセス・マウス (Mrs Mouse) とフリスキー (Frisky)、 그레이シー (Graysay)、ロングテール (Longtail) の3匹の子ねずみが住んでいた。フリスキーが一番やんちゃだった。母さんねずみは子どもたちに常日頃、家の外は危険だから、外へは出ないようにと注意していた。

ある夜、3匹の子ねずみたちは、家の地下へ食べ物を探しに行った。食べ物がのっている棚に上がろうとしたが、いつもそこに寄せかけてあるホウキが、今日はない。すると、フリスキーが床に落ちている紐を見つけて、紐の先をくわえると、棚の脇にある扉の蝶番につかまって、 그레이シーに、紐の他方の端にぶら下がり、ブランコの要領で棚へ飛び上がれと言う。 그레이シーがためらっていたので、ロングテールが先に棚へ上がって、むしゃむしゃと食べ始めた。それで 그레이シーもブランコの要領で棚へ上がった。最後になったフリスキーは、棚の上の2匹に紐の端をもってもらい棚にあがった。3匹は美味しいミンスパイやパンのかたまりを腹いっぱい食べて、農夫のかみさんが見たらどんなに怒ることか！と言っていた。と、フリスキーが、外の納屋へ行こうと言いだした。しかし、 그레이シーとロングテールは、母さんに禁じられているから、外へは行かないと言って、2匹は母さんのもとへもどった。

母さんはフリスキーが外へ行ったと聞いて心配したが、そのフリスキーは納屋へ入ると、寝ていた馬のペギーのそばを通ったとき、尻尾で馬の足にさわってしまったので、鼻をこっぴどく蹴とばされてしまった。逃げ帰ったフリスキーを、母さんはこれでこりたろうと、叱るよりも傷の手当をねんごろにしてやった。

農夫のかみさんが大いに怒ったのはもちろんで、手伝いのスーザンに、ねずみを見つけたらこっぴどくやっつけてやる、と断言した。

フリスキーは、母さんの手厚い手当のおかげで、元気になると、長く寝ていたから、少し散歩してくると言って、一人で出かけていった。グランピー

家には、スポッティ (Spotty)、ホワイティー (Whitey)、ブラッキー (Blacky) という3匹の子猫がいたが、その3匹が、外出したフリスキーを見つけると、すぐに追ってきた。フリスキーは必死で壁の穴へ逃げ込み、帰宅するとこの冒険を母さんに自慢げに話した。母さんは学校へ行ってちゃんと勉強しなければだめ、と言った。が、フリスキーは子猫たちから無事に逃げられたので、自信がついて、グランピー夫妻が夕食をとっている部屋へも出入りするようになった。ある晩、フリスキーはグランピーのかみさんがチーズを作っているのを見て、今夜あれを食糧部屋へ置くな、と思い、グレイシーとロングテールを誘って、食べに行こうと言った。母さんも誘ったが、母さんは風邪をひくのを恐れて、チーズをみやげにもってきてくれと言って、行かなかった。

3匹はチーズを腹いっぱい食べると、みやげのチーズを引きずって帰り始める。が、途中で手伝いのスーザンがおきっぱなしにしていた酢の入った大鉢を見つけると、3匹は苦勞して鉢の中を覗いた。中に液体があるのを知って、酢とは知らず、後で魚釣りに来ようと相談し、朝食は魚だと期待に胸をふくらませつつ、チーズを引きずって帰った。母さんは大喜びで、子どもたちに、ではゆっくりお休みと言った。

しかし、3匹はフリスキーの発案でほうきの先を食いちぎって釣竿をつくり、母さんの針箱から糸をもってきて、釣りの支度をするので出かけた。大鉢のふちに登るのに苦勞したが、やっと釣り糸をたれることができた。が、そこでバランスを崩し、3匹は同時に酢の中へ転落、悲鳴をあげて這い上がろうとするが、目が見えなくなっていた。酢で完全に失明したのだ。もがいてもがいてやっと鉢の外には出たが、逃げ込む壁の穴が見えない。やがて夜が明け、グランピーのかみさんが朝食のパンを取りに、パン切り包丁を持ってやってきた。そして、3匹を見つけると、たちまち「これぞ憎っきねずみども」と、まずフリスキーをつかまえて、尻尾を切り、ブラッキー、ブラッキーと猫を呼ぶ。ブラッキーはやって来るなり、ペロリとフリスキーを飲み込む。つぎにグレイシーをつかまえ尻尾を切ると、ホワイティー、

ホワイティーと呼んで、ホワイティーもグレイシーをペロリと飲み込む。最後にロングテールも尻尾を切られ、スポッティにペロリと食べられてしまった。グランピーのかみさんは尻尾3本を、ねずみがいつも出入りしている壁の穴の前に置いた。

一方、ねずみの母さんは3匹の寝ているところへ行ってみると、子ねずみたちがいない。母さんねずみはすぐに食糧部屋へ向ったが、壁穴の前に3本の尻尾があったので、いそいでこの家から逃げ出すことにした。しかし、子猫3匹と親猫が、すかさず母さんねずみを追っていった。そして、それっきりこの家から、ねずみも猫も姿を消してしまった。

以上がお話の概要ですが、ひじょうにコミカルで、またトラジカルな内容ですね、それにしても、最後がちよっと謎です。この結末をどう解釈したらよいのでしょうか。

当時のトイブックを見てみますと、例えば、去年お話したのですが、ランドルフ・コールデコットの『かえるくん恋をさがしに』(A Frog He would a-Wooing Go, 1883)でも、最後は、話の主人公である動物のねずみも蛙もみんな、猫に食われて終りになる悲劇でした。元はバラッドですが、バラッドには悲劇的なものがひじょうに多いのです。ビアトリクス・ポターの創作でも、例えば『ピーターラビットのおはなし』(The Tale of Peter Rabbit, 1902)では、お父さんがパイにさかれて消えていますし、それから『ずるいねこのおはなし』(The Sly Old Cat, 1906)では、最後に猫もねずみも一巻の終りで、ぱっと消えてしまいます。そうした点を考慮しても、この『視力を失った3匹の子ねずみ』の最後の部分は、ユニークというべきでしょう。

では、ウインスロー・ホーマーはこれにどういうイラストレーションを描いたのでしょうか。全部で17枚描いています。いずれもデッサンのしっかりした写実画です。

最初に母ねずみが3匹の子ねずみを見守っているところが描かれています。建物の床下か壁の裏とおぼしき場所です。母ねずみは眼鏡をかけて、後ろ足で立っています。実際にねずみが起立した

ら、そういう格好というかポーズになるだろうと思える立ち姿で描かれています。

次は、食べ物がのっている棚へ上がるために、フリスキーが床に落ちている紐を見つけた場面です。フリスキーが、いかにもこれで、といわんばかりに床の紐に飛びつくところです。グレイシーでしょうか、ロングテールでしょうか、1匹が2脚直立で、それを見守っています。3番目の絵は、フリスキーがドアの蝶番にへばりついて、紐の端をくわえて、先に棚に上がったロングテールにつづき、グレイシーが紐の端をくわえて体をゆすり、棚へ上がろうとしている場面です。棚の上のロングテールと、蝶番のフリスキーと、紐の端をくわえているグレイシーが、全身像でしっかり描かれて、顔にもそれぞれ表情がありますね。4番目の絵は、棚の上の2匹が、フリスキーがくわえている紐を、懸命に引き上げているところです。ロングテールでしょうか、反り身になって紐を引っ張っています。

次の絵は、サイズが前より小さく、カット風ですが、フリスキーが納屋で馬のひずめで跳ね飛ばされているところがクローズアップで描かれています。フリスキーの鼻の周囲には吹き出た血が赤く染められています。次は、帰宅したフリスキーが、鼻と目のあたりを縞模様の布でしばってもらい、ベッドに横たわり、眼鏡をかけた母ねずみが心配そうに付き添っている場面です。完全に擬人化されていて、人間の親子のようです。次もカットサイズですが、傷が癒えて、一人散歩にでたところでしょう、後ろ脚の直立姿勢で描かれています。同じページの下の絵は、子猫3匹がフリスキーを追って壁の穴に突進するところですが、それをせせら笑うような顔付きで、上段に描かれたフリスキーは見ています。次のカット絵では、椅子に掛けて向き合っている農夫の夫婦の脚をクローズアップで描き、男性のくるぶしあたりにフリスキーが乗っている景です。

次の10番目の絵は、母さんへみやげのチーズの塊を、3匹の子ねずみが協力して運んでいる場面です。1匹が丸いチーズを尻尾でグルッと巻き、その尻尾の先を他の2匹が引っ張っています。11番目の絵は、運ぶ途中で（酔が入った）大鉢を、

3匹が肩車などして、鉢の縁から中を覗き込んでいる場面です。次の12番目の絵は、チーズ運びの続きで、今度は1匹が仰向けに寝て、腹の上にチーズを載せて抱えています。その尻尾を他の2匹が引っ張っています。これも動きのある絵で、2匹がチーズを腹に載せているねずみの長い尻尾を、綱引きのポーズよろしく引っばっています。

次なる絵は、酔の入った大鉢の縁に、3匹が手製の釣竿を持って立っているところです。3匹はなにやらうれしげに叫んでいるようです。しかし、次の絵は、3匹が同時に酔の中へ転落する瞬間です。

そして、残る3枚の絵はまず、グランピーのかみさんが、1匹のねずみの背中をつまんで、憎っくきねずみめ、と怒りの表情をしています。手伝いのスーザンも脇から覗いて、ねずみを見ています。二人の顔と胸元がクローズアップされています。次は、本書で一番大きなサイズの絵で、1ページ大に描かれています。この話の元のわらべ唄の、農夫のかみさんがねずみの尻尾を切る場面なので、ここが一番重要な場面と取ったのでしょうか。ねずみたちは大きなテーブルの上で、1匹はすでに尻尾を切られて、ブラッキーにくわえられています。もう1匹も尻尾を切られて今しもグレイシーにつかまろうとするところです。そしておかみさんは、最後1匹の尻尾に、振りあげた包丁を打ち下ろすところ。そばにはスポッティがせまっています。おかみさんはすさまじい形相をしています。スーザンは長い柄の箒をさかさにもって、おかみさんの後ろで、こちらはうれしげな顔付きで立っています。

最後の1枚は、カットサイズで、母ねずみが壁穴の奥から顔を出し、ネズミの尻尾3本を発見したところを描いています。

先にも申しましたように、絵はねずみを擬人化して描いていますが、徹底的に写実の絵です。ホームアの絵を見ていると、同時代のランドルフ・コールデコットや、その後のビアトリクス・ポターの擬人化動物の描き方にそっくりで、この3者はほとんど優劣なしと言える、素晴らしいデッサン力を持った画家たち、と言えるでしょう。また、イラストレーションの付け方も、物語のハイライト

場面というか、劇的な場面というか、実的に的確に選んで絵画化しています。センダックが19世紀半ばに出たこの作品を、最高傑作と折り紙をつけているのは、まさに適評であろうと納得できます。ストーリー自体はホーマーのものではないとしても、漂うアイロニーなど、これもコールデコットやポターのそれに通じていると申さねばなりません。私もこのウィンスロー・ホーマーの作品を、アメリカの絵本・イラストレーションの〈草創期〉における、もっとも優れた一つと思っています。

挿絵全盛期を開いたハワード・パイル

イギリスの場合と同じく、19世紀後半から20世紀へかけて、アメリカも挿絵の黄金時代を迎えていました。それは印刷技術の発達と深い関係があることでしたが、同時にその時期に、すぐれたイラストレーターが多数輩出していたことにもよりました。しかし、なんとと言っても、ハワード・パイル (Howard Pyle, 1853~1911) がダイナモでした。先程来の〈草創期の年表〉に、青少年向けの雑誌 (Magazines for young people) として、3つ挙げましたが、当時は他にもまだたくさんの雑誌が出ていました。イラストレーターたちはこれらの雑誌で大いに活躍をしていました。が、先鞭をつけたのは、ハワード・パイルでした。パイルは創刊まもない、もっとも良質な児童雑誌である『セント・ニコラス』でデビューしてから、挿絵画家として旺盛に活躍をしました。リチャード・ダルビーは『〈子どもの本〉黄金時代の挿絵画家たち』 (*The Golden Age of Children's Book Illustration*, 1991) の中で、パイルの登場の意義を、こう述べています。

「ハワード・パイルは19世紀後期のアメリカにおける挿絵本の発展に一大変革をもたらした人であった。1880年頃までアメリカでは…本や雑誌に少しでも挿絵を描くということは、画家の品格を損なうとも考えられていた。そのため挿絵画家という職業は、パイルがイギリスのそれを目指して一大運動を起こすまで、ほとんどないに等しかったのである。パイルはそれから

30年も経たないうちに、アメリカに挿絵の全盛時代をもたらしたのだった。そして、多くの若き芸術家や弟子たちが20世紀にも挿絵画家としてやっていけるような地盤を築きあげたのである。」

パイルの活躍は、ご存知と思いますが、挿絵画家としてばかりではなくて、作家としても大きな仕事を残しました。『ロビン・フッドの愉快な冒険』、4冊のアーサー王伝説もの、『銀のうでのオットー』、『胡椒と塩』 (邦訳なし)、『ふしぎな時計』などなど、創作の筆をも振るいました。もちろんそれらに自分で挿絵を描いていますが、それらによって、彼のイラストレーションのスタイルをうかがうことができます。ペンによる単色の絵は、ドイツ・ルネッサンス期の版画家アルブレヒト・デューラーをしのばせるものであり、また、それにイギリスのラファエル前派や、その後のアーツ・アンド・クラフツで見られる装飾性が加味されている、と言ったらよいでしょうか。

パイルには、さらにもう一つ別の貢献もありました。後進の育成です。1884年からフィラデルフィアのドレクセル美術学校で教鞭をとっていましたが、1898年に故郷へもどって、デラウェアとペンシルヴァニアの州境を流れるブランディワイン川沿いに、私塾を開き、「ブランディワイン・イラストレーション・スクール」と名づけて、そこで多くの画学生を熱心に教育しました。その結果、彼のもとから、マックスフィールド・パリッシュ、ジェッシー・ウィルコックス・スミス、N.C. ワイエスといった著名な画家が多数輩出しました。Henry C. Pitz による伝記 *Howard Pyle ; Writer, Illustrator, Founder of the Brandywine School* (1975) を見ますと、“Howard Pyle students”として、実に110名もの画家名がリストアップされております。

パーマー・コックスのこと

先ほど児童雑誌「セント・ニコラス」 (*St. Nicholas*, 1873-1943) の名をちょっと出しましたが、この雑誌は1873年に、『銀のスケート靴』 (*Hans Brinker, or, The Silver Skates*, 1865) の作者であ

るメアリ・メイプス・ドッジ (Mary Mapes Dodge) の編集で、1873年に月刊誌として創刊されました。児童に教養と健全な娯楽を提供することを目的とし、物語、詩はもちろん、科学や社会の分野、また、なぞなぞやパズルなどの娯楽、さらには読者の投稿など、内容が多彩な雑誌でした。そうした中から、パーマー・コックス (Palmer Cox, 1840~1924) の「ブラウニーもの」を、ちょっと紹介しておきます。

コックスは1880年に、Arthur Gilmanの*Alphabet Book*という絵本に挿絵を描くことになりました。そのとき、子どもの頃に知ったスコットランドの民話に出てくるブラウニーという妖精にヒントを得て、頭と胴がまるまるして、脚のひよる長い、滑稽な小人を考えついて、それを使って挿絵を描きました。それから、その小人の話を、脚韻をふんだ2行連句 (rhyming couplet) で綴った物語を創作し、挿絵をつけたものを、1883年に「セント・ニコラス」誌で連載し始めました。これが子どもたちに大好評で、彼のブラウニーのキャラクター商品まで出始めました。コックスのブラウニーは全部男で、区別は着衣と帽子でできていました。そして、彼らに世界旅行をさせたのです。それらが1887年に*The Brownies, Their Book*というタイトルで合本されると、ベストセラーになりました。コックスはそれで、故郷のカナダで“Brownie Castle”という豪邸まで持つことになったといえます。ブラウニー話は世紀をまたいで1914年までつづきました。

「セント・ニコラス」誌は国際子ども図書館にほぼ全巻そろっていますから、関心のある方は是非とも、発表当時の「ブラウニーもの」をごらんになってみてください。

漫画の出現

ところで、ブラウニーものは漫画のはりりとして子どもたちに親しまれたものでした。それで<年表>では、A.B.フロスト (A. B. Frost, 1851~1928) の漫画を挙げてみました。フロストは、ジョエル・チャンドラー・ハリス (Joel Chandler Harris) の有名な『ウサギどん・キツネどん』 (*Uncle Remus*, 1881) に挿絵を描いた

画家で、1884年にはルイス・キャロルの『ライム? それとも、理性?』 (*Rhyme? and Reason?* 邦訳なし) にも挿絵を描いています (口絵参照)。ここでご紹介するのは、1881年7月号の*Harper's Magazine*に掲載され (作品集*Stuff and Nonsense*に収録され) た“*Our Cat Eats Rat Poison*” (うちの猫、殺鼠剤を食う) です。

これは6コマの漫画で、キャプションがついています。①Act1 Suspicion (疑念)、②Act2 The Pang (激痛)、③Act3 The Flight through the Hall (ホールを飛び出す)、④Act4 Startled Ones (みんなびっくり)、⑤Act5 The Beginning of the End (終末の開始)、⑥Curtain Requiesscat in Peace (安らかに憩わんことを)、と6幕の芝居仕立てになっています。まず①リビングルームで女性が椅子に掛けて編物をしている前で、猫が (ウッ!) という顔つきで、片方の前脚を、腹にあてている。②猫は目をむき、絶叫し、全身宙に飛び上がる。傍らの女性は椅子ごと後ろへ吹っ飛ばされる。③ホールから横つとびで、階段下へ飛び出た猫を、避けようとした少年が、水差しを盆にのせてやってきた男の腰にかじりつく。水が床に散る。④次の部屋で散髪中の子どもが、飛んできた猫にはじきとばされる。猫は床屋の股下を突き抜ける。⑤猫、子どもの寝室へ飛び込み、おたふく風邪で寝ていた兄弟のベッドの下で、断末魔状態。病人二人はベッドの上で震えあがる。⑥猫、ベッド下から部屋の中央へ出て悶絶死する。扉の外からは、子どもらが恐る恐る中を覗きこんでいる。

私は今、アメリカ絵本史の名著、Barbara Baderの*American Picture Books, from Noah's Ark to the Beast Within* (1976) に収録されている映像で、これを紹介しているのですが、同書にはフランスの*Contes a Sara*誌 (1898) に載った、ステンレン (T. A. Steinlen) の“*The Sad Tale of Bazouge*”が紹介されています。クロナキドリと思しき鳥が、グラスのワインを飲んで、酔っ払い、酩酊し、悶絶するまでの6態をコミカルに描いたもので、フロストの漫画と、よく通じるカリカチュア画です。

19世紀後半も、さらに後半へ入ると、このよう

に漫画が始まります。当初は漫画と絵本は未分化でした。ドイツでは1844年にハインリッヒ・ホフマンの『もじゃもじゃペーター』が、また、1865年にはウィルヘルム・ブッシュの『マックスとモーリッツ』が出ています。いずれも絵本と漫画が未分化状態であったことがよくわかります。イギリスでも、諷刺雑誌「パンチ」(1842年創刊)におけるカリカチュアが、絵本へ合流していきますから、漫画は絵本と直結して始まったと言ってよいでしょう。ただ、漫画は滑稽の要素をメインにして、それが次第にセンセーションナリズムへ傾斜していき、エロ、グロ、ナンセンス、暴力へと卑俗化していき、下品、軽薄へと下降線をたどって、絵本と袂を分かつことになりませんが、やがてディズニーのアニメーションが出現して新時代を迎え、いわゆる劇画も誕生して、新しい展開へと入るわけですが、パーマー・コックスやA.B.フロストの存在を、そういう流れの中に置いて、見る事ができるでしょう。

余談になりますが、モーリス・センダックはニューヨーク市でたまたま開催中の「ウィンザー・マッケイ展」に出会って、ちょうど製作中の『まよなかのだいどころ』のために、マッケイの漫画が大きなヒントとなり、作品がディズニーとマッケイへのオマージュとして、誕生したわけですが、そのマッケイ (Winsor McCay, 1867?~1934) についてちょっと触れておきますと、1905年10月15日の*The New York Herald*紙の日曜版に、「眠りの国のリトル・ネモ」(*Little Nemo in Slumberland*) というカートゥーンを初めて寄稿しました。それは1911年7月までつづく長期連載漫画となり、大人気を呼びました。(その後、ランドルフ・ハーストの*New York American*紙に、タイトルを*In the Land of Wonderful Dreams*と変えて、引き継がれたそうです。) 6歳位の少年リトル・ネモ (ネモはラテン語で無名人という意味で、そのnobodyさが、すべての子ども読者と同性性をもっていたわけです) が主人公で、彼が毎夜夢を見る、それもほとんどいつも恐怖の夢を見て、最後の一齣で目覚める、というパターンの繰り返しでした。

以上のことなどをつなげてみると、漫画が子ども

のための大衆文化として成立していった過程が読みとれるのではないのでしょうか。

アメリカの児童図書館の活動

さて、<年表>にもどりまして、後半にありますLibrary work with childrenへ移りましょう。アメリカで子どもの本が素晴らしい発達をとげた背景には、図書館員の働きが大きく寄与していたことは、改めて申し上げるまでもありませんが、<草創期>における、その方面の道筋をここでちょっと振りかえっておきたいと思います。<年表>に拾い出したのは、アメリカの図書館員の方々によって書かれた児童文学史*A Critical History of Children's Literature* (1953) に記録されているものによりました。そこに箇条書きしたものを、ざっと読んでまいりましょう。

1803年にビングガム (Bingham) という人が、日本でいう家庭文庫のような、The Bingham Libraryという子ども向けの図書館を開設しています。そして、移民の国でしたから、中近東の子どもたちを対象にしたNew Lebanonも誕生しました。

1835年には“Uncle” Dexterが、やはり子どものための図書館をつくります。

1838年、多くの公共図書館が子どもの利用を禁じていたので、ニューヨーク市は学校図書館新設のために55,000ドルを支出し始めます。当時子どもはApprentices' Librariesから本を借りていました。しかし、The Sunday School Libraryが子どものための本の最大の供給者となりました。1817年に設立されたthe American Sunday School Unionは子どもの本の傾向と内容に大きな影響を及ぼしていました。日曜学校はイギリスでも盛んで、イギリスの児童文学の歴史を見ると、早死にする子が地獄に落ちないようにと、子どもに早くからキリスト教を教え導くなど、宗教色の強い本が主流となりました。先ほどのウィンロー・ホーマーも、彼が出す本はもっぱらSunday School Unionから出ていました。にもかかわらず、『奇談 視力を失った3匹の子ねずみ』のような「教訓性に乏しい本がなぜ出たのだろう」と、センダックも解説の中で驚いているほ

どです。

1876年にアメリカ図書館協会 (American Library Association [ALA]) ができましたが、その頃から、子どもに対する公共図書館の対応が変わり始めました。そのことについては、幾人かの人が先駆的な研究、調査をし、発表をしていて、ようやく1897年のALAの大会で、児童サービスの重要性が認識されるようになりました。そのあたりからアン・キャロル・ムーア (Anne Carroll Moore) の名前が出てきて、児童奉仕の専門職の必要性がとえられ、そのための養成所が開かれました。

1906年に、Pratt Institute Libraryの児童室責任者だったアン・キャロル・ムーアが、New York Public Libraryのchildren's departmentへ招かれて、本格的な児童図書館員活動が始まることになります。

フランスの比較文学者だったポール・アザール (Paul Hazard) が、1932年に『本・子ども・大人』を出しました (日本では1957年に紀伊国屋書店から翻訳が出ました) が、フランス人の立場から、なぜ南欧に比べて、北欧圏では児童文学が豊かなのかを論じています。冬が長く暗い夜が多いからとか、子どもに対する認識が違うとか、昔話が豊富なためとか、その理由を考えていますが、アザールは諸国をめぐって、アメリカへ来て非常に驚きました。彼の言う一端をちょっと読んでみましょう。

「メイフラワー号の人びとがアメリカに持ちきたったたくさんのお金のすぐれた感情のなかには、その後、長い年月がたち、種族がいろいろと混淆したにもかかわらず、いまもなお永続して保たれているものがある。子どもに対する尊敬と愛情もそのひとつである。しかも、この尊敬の念と愛情とは、新しい土壌にみごとに実を結んだ。アメリカ合衆国で、子どものために印刷された本がどのくらいあるか知っているだろうか。一九一九年には千二百万冊、一九二五年には二千五百二十万冊、一九二七年には三千百万冊である。一九一九年には青少年向けの新しい作品が四百三十三冊発表された。一九二九年にはそれが九百三十一にもおよんだ。大きな書店で、児童部やそれ専門の職員を持っ

ていないような店はひとつもないし、その児童部は、大人の書籍を扱う部門に負けないほどの活躍をしている。いま、わたしの目の前には、すばらしいカタログ、「子どもの本のなかの黄金の国」 (Realms of Gold in Children's Books) がある。これは上品な体裁で絵まではいって、八百ページにわたって、原典であれ、翻訳であれ、子どもが読みたいと思う英語で書かれた本はすべて紹介されていて、なかには要約までのっているものもある。」アザールは、アメリカではいかに図書館活動が活発であるかをこのように実例を挙げて縷縷述べているのです。

今ここに出てきた、本のカタログ、ブックリストですが、アン・キャロル・ムーアが中心となって、アメリカで非常に充実、発達しました。ポール・アザールが言っている『子どもの本のなかの黄金の国』は、ブックリストとしてはもっとも定番のもので、国際子ども図書館の第二資料室にも、その改訂版があります。Five Years of Children's Books: a Supplement to Realms of Goldというタイトルで、1936年に出ているものです。私はカナダのトロント市の「少年少女の家」で、そこで編纂されたBooks for Boys and Girlsというブックリストを知りました。それは5年ごとに追加版 (supplement) が出ていまして、何年か経つと、それらをまとめた改訂版が出ています。入手可能なものをブックリストに載せていくのです。常に実用的なものとして改訂していくのです。選書の基本が定まってい、永続性のあるブックリストなのです。ポール・アザールが渡米したとき、アメリカではすでにそういうものが完成していました。とにかく、アザールは子どものための図書館活動がいかに充実しているか、驚異の目を見張ったのです。アメリカでは19世紀から20世紀へかけて専門のブックショップができ始めて、そこからもブックリストが出ていました。

アメリカでは、本ばかりではなく、日本でいう家政学ですね、子どもの心理学的な発達と身体的な発達を科学的に追及する学問が発達しました。そして、そこから自ずと子どもの教育に関心が向けられて、さらにそこから、子どもの本が持つ役割の大切さが認識されていったのです。こう言い

ますと、何か本が教育と深く結びついていると思われるかもしれませんが、アメリカの図書館は、学校図書館とはっきり性格を区別しています。学校図書館は教科との結びつき、また教師との結びつきがつよいものですが、そういう狭い意味での教育からは、ある意味で解放されて、純粹に読書の愉しみに子どもを誘うのが、公共図書館の使命であるとの認識がありました。それがよき時代のアメリカの公共図書館であり、アメリカにおける児童書の出版だったのです。いずれにしても家政学が20世紀初めに、先進の科学として発達したお陰で、アメリカの絵本は、開花期、発展期、絶頂期へという道筋をたどれたのだと、私は思います。

20世紀を迎えて

20世紀を迎えたところでまず、エルマー・ボイド・スミス (Elmer Boyd Smith, 1860~1943) を見ましょう。

ボイド・スミスは、フランスのブーテ・ド・モンヴェル (Boutet de Monvel, Louis Maurice, 1851~1913) や、スウェーデンのカール・ラーション (Carl Larsson, 1853~1919) と同時代、ということもあって、この三人の絵のスタイルにある共通性を、私は感じています。特にボイド・スミスはフランスで絵を勉強した人でもありますから。その作品から2冊、挙げてみました。『ノアのはこ舟のものがたり』(The Story of Noah's Ark, 1905) は題材が『旧約聖書』からですので、一応キリスト教絵本ということになりそうです。しかし、動物オンパレードの「ノアの話」は中世から教会の聖劇として親しまれていましたが、歴史的に見て近代文学は、教会における聖劇の通俗化から誕生しました。野外ページェントなどでノアが、船に乗りたがらない妻を、力づくで船に押し込んだり、怒った妻がノアにびんたを食わせるなど、観衆を笑わせるアドリブを入れたりしたことから、宗教劇は教会を出て巷の大衆娯楽へと変質して、近代文学を産むことになりました。ボイド・スミスの『ノアのはこ舟のものがたり』も、そういう庶民的ユーモアで味付けされた読み物です。恐竜など巨大動物は、はこ船には大きすぎて、このときから化石動物となったとか、はこ船作り

に雇われた船大工たちが給料アップを要求してストライキを起こしたとか、漂流する船の中で、動物たちやノアの間人家族がいらだち始めたとか、ヒューマンな香りあふれたエピソードが工夫されています。それらを29×22センチサイズの本のページいっぱい、26葉の挿絵が絵解きしていますから、楽しい絵本です。邦訳版 (ほるぷ出版1986) もあるので、手にとってゆっくりごらんになることをお勧めします。

ボイド・スミスにはまた、『農場の本』(邦訳なし)、『海岸の本』(邦訳なし) といった一連の知識の絵本があります。その中から『鉄道の本』(The Railroad Book, 1913 邦訳なし) を見てみましょう。汽車は今では過去の時代のものになってきましたが、人間味を感じさせる動く機械の蒸気機関車には、今も愛着する人が少なくありません。バージニア・リー・バートンの『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』や、阿川弘之の『きかんしゃやえもん』が、今も子どもたちを喜ばせている所以です。そうした心情で、スミスの『鉄道の本』を読まれたら、大いに楽しめるでしょう。大陸横断鉄道ができて間もない頃に出たこの絵本は、当時のアメリカ人たちにとっては、汽車と汽車旅へのロマンをかき立てて、ひとしおの感慨を抱かせたことでしょう。ボブ (Bob) とベティ (Betty) 兄妹の家の庭先に線路が敷かれ、目の前を汽車が通り始めた、という出だしで物語が始まります。二人は機関手と親しくなって、汽車の機関室に乗せてもらったり、蒸気機関車にまつわるもろもろを体験することになります。テキストと絵がページ見開きの左右に配されて、テキストのページには単彩のペン画のカットが、1ページ大の彩色の写実画は明るい色彩と端正なデザインで、知識絵本として多くの情報を伝えています。

次に、ジェシー・ウィルコックス・スミス (Jessie Willcox Smith, 1863~1935) の絵本を見ましょう。ハワード・パイルに最も可愛がられた女流画家です。子どもの姿を描くのが得意な画家でした。というよりも、子どもに関心を集中しつづけた画家というべきでしょう。Gene Mitchellという人が編んだスミスの画集 (The Art of Jessie Willcox Smith, 1980; E.P. Dutton) でも、本の正式タイト

ルは“The Subject Was Children”（主題は子どもたちだった）です。画家になることを人生の最大目標にして、結婚はしませんでした。ほとんどの画家が男性であった中で、彼女は女流画家として、女性の目で見た子どもを生涯描きつづけました。彼女の描く、写実的な幼い少女像は、特に美しい肌を感じを上手にとらえて、愛らしさを強調している感があります。無心に遊ぶわが子の姿に、母親がそっとカメラを向けて、子どもの見せる瞬間の美をとらえたような趣があります。彼女は子どもと同時に、子どもの母親もたくさん描いています。多くは子どもをいつくしむ母親の姿ですが。また、その絵からは自ずから物語が浮かび上がってくることも特色です。例えば、“Punishment”（おしおき）という題の絵では、部屋の片隅にお人形が叱られて立たさされていて、それに背を向けた少女が籐椅子に掛けて、片腕を頭にそえ、目を据えて怒り顔をしています。人形遊びをしていて、人形がいうことをきかなかつたにちがいありません。どんないざこざがあったのでしょうか。また、ソファで絵本を見ている少女。絵本はウィリアム・ニコルソンの*Animal Book*です。“Climbing into the Tub”（湯舟にはいる）という絵では、裸の少女が湯舟の縁をまたぐ姿で描かれていますが、浴室の壁面には、ウィリアム・モリスがデザインしたかと思われるようなアーツ・アンド・クラフツ風の装飾タイルが張られています。いずれの絵も、時代の雰囲気をよく映していると思います。

ウィルコックス・スミスは*The Ladies' Home Journal*、*Collier's*、*Scribner's Magazine*、*Century*、*Good Housekeeping*といった雑誌で、表紙絵やイラストレーションを描いて評判をとりましたが、グリムの昔話や、イギリスの昔話、ジョージ・マクドナルドの『北風のうしろの国』やチャールズ・キングズリーの『水の子トム』などのファンタジー作品や、スティーヴンソンの『子どもの詩の園』や、『マザーグースの唄』などにも、挿絵をつけています。中でも、*Mother Goose* (1914) は、ことばの伝える情景を素直にイメージ化し、デッサン力ある単色のスケッチ画、彩色の一枚絵を多数収めた絵本として、ウィルコク

ス・スミスの代表作となっています。

さて、＜年表＞では＜草創期＞の最後をピーターシャム夫妻の『けしつぶクッキー』にしましたが、実はピーターシャム夫妻の活動のメインは次の＜開花期＞ですので、今日はその前にある C. B. フォールズ (C. B. Falls, 1874～1960) で区切ろうと思います。

フォールズの*ABC Book* (1923) は、評価について、多少意見の相違があります。これをアメリカ独自の絵本の誕生と評価する人と、やはりアメリカ独自といえば、ワンダ・ガァグの『100まんびきのねこ』とする意見の人とがありますが、私はやはりガァグの方であろうと思っています。

フォールズの『エイ・ビー・シー・ブック』は、そもそも画家の3歳の幼い娘さんのために作ったものでした。イギリスのクレインやコールデコットの絵本が木口木版で制作されたのに対して、これは板目木版による4色刷りの絵本でした。AはAntelope (羚羊 [レイヨウ]) のA、BはBear (熊) のB、CはCat (猫) のC、DはDuck (あひる) のD、というように以下、象、狐、麒麟、馬、トキ、ジャガー、カンガルー、…最後のXはXiphius (メカジキ) のX、YはYak (ヤク) のY、ZはZebra (シマウマ) のZと、メカジキの魚以外は、四足動物か鳥、すなわち動物アルファベットの絵本です。縦長画面の上部、約4分の3が絵に、下部4分の1が文字と、ページが配分されて、文字は黒で、絵は板目木版で鮮やかな4色の平塗りです。動物は幼い子どもにもよく分かる形で描かれていて、子どもが文字を学習するABC絵本として、ひじょうによく出来ています。ご覧になってすぐ気づかれるでしょうが、19世紀末から始まったポスター美術の表現です。＜年表＞に挙げてありますが、先ほども名をあげた、イギリスのポスター画家ベガスタッフ兄弟の一人ウィリアム・ニコルソンが制作した*An Alphabet* (1898) と*The Square Book of Animals* (1899)、この2冊と比べてみれば一目瞭然、ニコルソンに学んで描いたということはわかります。しかし、デッサンは圧倒的にニコルソンの方が優れています。影響のことはおくとして、フォールズの色彩感覚はポスター的で極めて鮮やかで明るく、これはやは

り新大陸アメリカならではの、色彩が生きています。アメリカ人の制作であり、ヨーロッパ風とは異なるABC絵本である、たとえば、アメリカ色の最初の絵本と評してもよいでしょう。アメリカ図書館界の実力者であったアン・キャロル・ムーアは「カラー・プリンティングにおいても、デザインにおいても、これほど見事なABCブックが

大西洋のこちら側で誕生したことに、私たちは大きな誇りを感じる」と評したことばに、アメリカの絵本の〈開花期〉を迎えるところへ、ついにやって来たという感を持つことができます。

(よしだ しんいち 国立国会図書館客員調査員、立教大学名誉教授)

「草創期—ワンダ・ガァグ以前」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	Mother Goose's melodies : containing all that have ever come to light of her memorable writings		McLoughlin [18--?]	19-115 (本館)
2	The adventures of A. apple pie : who was cut to pieces and eaten by twenty six young ladies and gentlemen		George W. Burgess 1835	所蔵なし
3	A visit from St. Nicholas	Clement C. Moore 作	Spalding & Shepard 1849	KS164-116 (本館)
4	The Eventful history of Three blind mice	Winslow Homer 絵	Oxford University Press 1996	Y8-A109
5	Mother Goose in white	J.F. Goodridge 作・絵	Lee and Shepard 1879	Y17-A1796
6	The Brownies, their book	Palmer Cox 作・絵	century 1887	所蔵なし
7	The Lady of Shalott	A. Tennyson 作 Howard Pyle 絵	Dodd 1881	所蔵なし
8	Otto of the silver hand	Howard Pyle 作・絵	Scribner 1888	所蔵なし
	銀のうでのオットー	ハワード・パイル 作・絵 渡辺茂男 訳	学習研究社 昭和42	Y7-954
9	King Arthur	Howard Pyle 作 Don Hinkle 作 Jerry Tiritilli 絵	Troll Associates c1988	Y17-A1487
10	Uncle Remus : his songs and his sayings	Joel Chandler Harris 作 A.B. Frost 絵	Grosset & Dunlap c1921	KS158-127 ※
	ウサギどんキツネどん	J.C.ハリス 作 八波直則 訳	岩波書店 1987.11	Y8-4879
11	Stuff and nonsense	Arthur Burdette Frost 作・絵	Fantagraphics Books; Bilingual 版 2003.12	所蔵なし
12	Harper's Magazine		Harper's Magazine Foundation	Z55-A176 (本館)
13	Rhyme? and reason?	Lewis Carroll 作 Arthur B. Frost 絵	Macmillan 1884	Y8-B3198
14	The wonderful Wizard of Oz	L. Frank Baum 作 W.W. Denslow 絵	D. Campbell 1992	Y8-A185
	すばらしい魔法使いオズ	L.フランク・ボーム 著 W.W.デズロー 画 石川澄子 訳	東京図書 1988.6	KS152-E64 ※

草創期－ワンダ・ガアグ以前

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
15	Denslow's Night before Christmas	Clement C. Moore 作 W.W. Denslow 絵	W. Heinemann 1903	Y17-A432
	クリスマスのまえのばん	クレメント・C.ムーアぶん わたなべしげおやく ウィリアム・W.デンスロウえ	福音館書店 1996.10	Y18-12112
16	The story of Noah's ark	E. Boyd Smith 作・絵	Holp Shuppan 1984	Y17-B5600
	ノアのはこ舟のものがたり	エルマー・ボイド・スミスさいわ・え おおばみなこやく	ほるぷ出版 1986.3	Y18-1783
17	The railroad book	E. Boyd Smith 作・絵	Houghton Mifflin, 1983, c1913	所蔵なし
18	A child's garden of verses	Robert Louis Stevenson 作 Jessie Willcox Smith 絵	Gramercy Books 1998, c1985	Y8-A5153
19	The Jessie Willcox Smith Mother Goose	Jessie Willcox Smith 作・絵	Pelican Pub. Co. 1991	Y17-B3014
20	The ABC book	C.B.Falls 作・絵	Doubleday, c1923	所蔵なし
21	The poppy seed cakes	Margery Clark 作 Maud & Miska Petersham 絵	Doubleday & Company c1924	Y8-B2759
	けしつぶクッキー	マージェリー・クラーク作 モードとミスカ・ピーターシャム絵 渡辺茂男訳	ペンギン社 1981.2	Y7-9501
22	The youth's companion			所蔵なし
23	St. Nicholas : a monthly magazine for boys and girls		Educational Pub. Co. [etc.]	Z57-A5
24	Harper's young people		Harper & Brothers	所蔵なし
25	本・子ども・大人	ポール・アザール著 矢崎源九郎,横山正矢訳	紀伊国屋書店 1957	909-cH42h-Y ※
26	A critical history of children's literature : a survey of children's books in English from earliest times to the present, prepared in four parts under the editorship of Cornelia Meigs	Cornelia Meigs 作	Macmillan c1969	YZ55-A78
27	クリスマスの12にち	ブライアン・ワイルドスミス作 石坂浩二訳	講談社 1997.10	Y18-M98-110
28	〈子どもの本〉 黄金時代の 挿絵画家たち	リチャード・ダルビー著 吉田新一,宮坂希美江訳	西村書店 2006.8	KC482-H586 ※

レジュメ

アメリカの絵本 開花期（第二次世界大戦末まで）

吉田 新一

1930年代、40年代のいわゆる <May Massee ブックス>を中心に、多彩な才能が生み出した絵本を愉しんでみます。

- 1927 William Nicholson; *Clever Bill*
1928 Wanda Gag; *Millions of Cats*
1929 Petershams; *Miki*
1930 Marjorie Flack; *Angus and the Ducks*
1931 The Petershams; *The Christ Child*
Feodor Rojankovsky; *Daniel Boone*
1932 The d'Aulaires; *Ola*
Marjorie Flack; *Ask Mr. Bear*
1933 M. Flack & Kurt Wiese; *The Story about Ping*
W. Gag; *The ABC Bunny*
Roger Duvoisin; *Donkey-donkey*
1934 Lois Lenski; *The Little Auto*
Ludwig Bemelmans; *Hansi*
1935 Marie Hall Ets; *Mister Penny*
Wanda Gag; *Gone Is Gone; or The Story of a Man Who Wanted to Do Housework*
1936 L. Lenski; *The Easter Rabbit's Parade*
Munro Leaf & Robert Lawson; *The Story of Ferdinand*
1937 Boris Artzybasheff; *Seven Simeons: A Russian Tales*
Dr. Seuss; *And to Think That I Saw It on Mulberry Street*
Virginia Lee Burton ; *Choo Choo*
Dorothy P. Lathrop & Helen D. Fish; *Animals of the Bible*
1938 The Caldecott Medal founded
James Daugherty; *Andy and the Lion*
Clare Huchet Bishop & Kurt Wiese; *The Five Chinese Brothers*
1939 Marie Hall Ets; *The Story of a Baby*
L. Bemelmans; *Madeline*
Hardie Gramatky; *Little Toot*
V. L. Burton; *Mike Mulligan and His Steam Shovel*
1940 Dr. Seuss; *Horton Hatches the Egg*
Robert McCloskey; *Lentil*

- Dorothy Kunhardt; *Pat the bunny*
- 1941 H. A. Rey; *Curious George*
R. McCloskey; *Make Way for Ducklings*
M. W. Brown & Leonard Weisgard; *The Seashore Noisy Book*
- 1942 V. L. Burton; *The Little House*
Margaret Wise Brown & Clement Hurd; *The Runaway Bunny*
F. Rojankovsky; *Tall Book of Mother Goose*
- 1943 James Thurber & Louis Slobodkin; *Many Moons*
The d'Aulaires; *Don't Count Your Chicks*
M. W. Brown & Jean Charlot; *A Child's Good Night Book*
- 1943 M. H. Ets; *In the Forest*
Ruth Kraus & Crockett Johnson; *The Carrot Seed*
H. A. & Margaret Rey; *Pletzel*
- 1944 The Petershams; *The Rooster Crows*
- 1945 Alvin Tresselt & Leonard Weisgard; *Rain Drop Splash*
Golden MacDonald & Leonard Weisgard; *The Little Island*
- 1946 A. Tresselt & Roger Duvoisin; *White Snow Bright Snow*
M. H. Ets; *Oley, The Sea Monster*
Marcia Brown; *Stone Soup*
M. W. Brown & Clement Hurd; *Goodnight Moon*
- 1947 R. McCloskey; *Blueberries for Sal*
Berta & Elmer Hader; *The Big Snow*
M. W. Brown & Garth Williams; *Wait Till the Moon Is Full*
- 1948 L. Lenski; *Cowboy Small*
R. Krauss & Marc Simont; *The Happy Day*
Leo Politi; *Song of the Swallows*
M. W. Brown & C. Hurd; *My World, a companion to Goodnight Moon*
M. W. Brown & L. Weisgard; *The Important Book*
- 1949 R. Duvoisin; *Petunia*

§ 3 preeminent junior book editors of 1920s and 1930s

Louise Seaman of Macmillan

May Masee of Doubleday, later of Viking

Ernestine Evans of Coward-McCann

§ Lucy Sprague Mitchell (1878—1967)

Educator, author, and founder of

The Bank Street College of Education in New York City

'Here and Now Story Book' in 1921

Bank Street's educational philosophy (empirical theories)

'Young children experience reality in the *here and now*.'

'Children focus on sensory experiences, find the familiar world fascinating (and so have no

need for fairy tales), and think in terms of relationships, and understand language by playing with it—that is, the sound of words can be as important as their meaning.’

Mitchell’s students —

Margaret Wise Brown, Ruth Krauss, Edith Thacher Hurd (Clement Hurd’s wife)

アメリカの絵本・開花期（ワnda・ガアグの出現から1950年まで）

- ① ウィリアム・ニコルソン 『かしこいビル』 (1927)
- ② ワnda・ガアグ 『100まんびきのねこ』 (1929)
『ABC うさぎ』 (1933)
- ③ ロバート・マックロスキー 『ハーモニカのめいじんレンティル』 (1940)
『カモさんおとおり』 (1941)
『ゆかいなホーマーくん』 (1943)
『サリーのこけももつみ』 (1948)
『海べのあさ』 (1952)
『すばらしいとき』 (1957)
『沖釣り漁師のバート・ダウじいさん』 (1963)

McCloskey says of his work ‘I have one foot resting on reality and the other foot planted firmly on a banana peel.’

参考：渡辺茂男 『アメリカのむかし話』 (偕成社文庫)

同上 『すばらしいとき』 (大和書房)

レイチェル・カーソン 『センス・オブ・ワンダー』 (新潮社)

- ④ ジェームズ・ドーハーティ 『アンディとらいおん』 (1938)
- ⑤ ヴァージニア・リー・バートン 『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』 (1937)
『マイク・マリガンとスチーム・ショベル』 (1939)
『名馬キャリコ』 (1941)
『ちいさいおうち』 (1942)
『ロビン・フッドの唄』 (1947)
『せいめいのれきし』 (1962)

参考：バーバラ・エルマン 『ヴァージニア・リー・バートン

— 『ちいさいおうち』の作者の素顔—』 (岩波書店)

- ⑥ マーガレット・ワイズ・ブラウン 『ぼくにげちゃうよ』 (1942)
『おやすみなさいのほん』 (1943)
『ちいさな島』 (1946)
『おやすみなさいおつきさま』 (1947)
『まんげつよるまでまちなさい』 (1948)
- ⑦ ドクター・スース 『マルベリーどおりのふしぎなできごと』 (1937)
『ゾウのホートンたまごをかえす』 (1940)
- ⑧ ドロシー・クンハート 『ぱたぱたバニー』 (1940)

開花期—第二次世界大戦末まで

吉田 新一



翻訳絵本と原作のタイトル

昼食後なので、なるべく子守唄にならないようにお話を進めていきたいと思います。

午後は、アメリカ絵本の流れの〈開花期〉です。お手元の資料で、主要な絵本を編年で、敢えて原題で、リストアップしてみました。どの作品も、これはいい、これもいいと順にお話しし始めたら、2時間どころか、2日ぶつつづけにお話ししても時間が足りないでしょう。この時期は文字通り、絵本の花が百花撩乱と咲き始めた時期ですから。もう一つ、〈紹介資料リスト〉がお手元にありますが、当館の係の方が作成してくださって、翻訳のあるものを併記してくださいました。

で、ちょっとここで翻訳と原作のタイトルについてコメントをしてみたいと思います。海外ものを扱うには、原作で論じるのが筋ですが、その訳本を参考にするときは、注意して頂きたいことがあります。たとえば、1936年の *The Story of Ferdinand*、「フェルディナンドのおはなし」は、邦訳名は『はなのすきなうし』ですね。この日本語タイトル、子どもさんには確かに親しみやすいのですが、作品をそう単純化していいのでしょうか？読む前から〈花の好きな牛のお話ですよ〉と言われて読めば、ああ花の好きな牛のお話だった！で終わってしまいそうで、そこがちょっと心配なのです。大人が読むと、平和主義を謳っている絵本と解るでしょう。また〈花の好きなフェルディナンド〉と言わずに、〈花の好きな牛〉と言い切ってしまうのもいかがなものでしょう。大勢の中の一人、フェルディナンドという、この世に二つとない個性について、描いている絵本ですよ。考えてみると、海外のものは、子どものものばかりではなく、たとえば『ボヴァリー夫人』や『カラマー

ゾフの兄弟』など、無愛想なくらい、タイトルには主人公の名しか出ていません。シェイクスピアも『オセロ』『ハムレット』『リア王』など、ずいぶんぶっきらぼうな題ですね。しかし、仮に『ハムレット』を、『悩める男の話』なんて言ってしまったら、そんな単純なものじゃないといわれてしまいます。どういうハムレット像で演出をするかが演出家の仕事、俳優の仕事でしょう。シェイクスピア作品は〈粹〉であると言った演出家がありました。安易な単純化はできませんね。みんな個性を描いているのです。単純化できないから、「フェルディナンドのおはなし」と言っているのです。読み始めると、フェルディナンドが牛だと解りますが、ずいぶん変わった牛の話ですね。それがどう変っているのか、それは〈お話〉でなければ語りきれなかったのでしょうか。個性ってひじょうに微妙なものですから、そう簡単には単純化はできませんよね。そう考えれば原題の持つ重みというものが、改めて認識できるのではないのでしょうか。

1932年の *Ask Mr. Bear* も邦訳は『おかあさんだいすき』というタイトルですが、原題は、お話の最後の結びのことば、“Danny gave his mother a Big Birthday Bear Hug.”という文章とセットになっていると思います。タイトルの意味(謎)が最後に解ける仕掛けになっている、と考えられます。私は今、邦訳の題名にケチをつけているわけではありません。元のタイトルの意味するところを考えて、作品を味わうのが、海外作品を論じる時には大切だという点を、申し上げたかったので。

ではもどって、〈年表〉にある作品をずっと見てくださると、〈開花期〉がいかに豊かで、ふくらみのある時代であったか、実感していただける

でしょう。しかし、最初にも申しましたように、時間が限られていますから、ほんの僅かなことしか、ここではお話しできません。

そこで、「ワング・ガグとその流れ」というふうに、焦点をしばって、今日はお話しすることにいたします。

編集者メイ・マッシー

午前の最後に、ピーターシャム夫妻の『けしつぶクッキー』(*The Poppy Seed Cakes*, 1924)を残しましたので、そこから始めましょう。ピーターシャムは夫妻が共同で絵本を作りました。妻のモード(Maud)はアメリカ生まれですが、夫のミスカ(Miska)はハンガリーの出身でした。

ミスカのように海外からアメリカへ渡ってきた人たちが、多くはヨーロッパからですが、この時期アメリカ絵本の発展に大きく寄与しました。それぞれ母国の文化を背負って、しかもひじょうに才能のある人たちでしたから、その才能をアメリカで、フルに開花させたわけです。で、その開花を助けた、いわば産婆役がメイ・マッシー(May Masee, 1883~1966)という、ライブラリアン出の編集者だったのです。年表のうしろに、1920、30年代の優秀な編集者3名の名を挙げておきましたが、その一人がメイ・マッシーで、初めはDoubleday社で、後にはViking社で活躍した人でした。

メイ・マッシーは絵本編集者として、アメリカへ亡命したり移民したりしてきた移住者の中に、豊かな才能を見付けて、助言し、出版の機会を与えました。ロシアからの移民で、*Seven Simeons; A Russian Tale* (1937)で有名なボーリス・アーチバーシェフ(Boris Artzybasheff, 1899~1965)を初め、『オーラのたび』や『ひよこのかずはかぞえるな』(*Don't Count Your Chicks*, 1943)のドーレア夫妻、夫のエドガーはドイツ出身で、妻のイングリはノルウェーの出身でした。「マドレーヌ・シリーズ」のペーメルマンズ(Ludwig Bemelmans, 1898~1962)は、オーストリア出身でした。中国での生活経験を生かした『アヒルのピンのぼうけん』(*The story about Ping*, 1933)のクルト・ヴィーゼ(Kurt Wiese, 1887~1974)は、

ドイツ出身でした。それから、日本から渡った『からすたろう』の八島太郎(1908~1994, 本名 岩松惇)も、みんなメイ・マッシーから恩恵を受けました。彼らは、〈メイ・マッシー・グループ〉と呼ばれましたが、中にはそうした移住者ではなくアメリカ生まれで、メイ・マッシーに育てられた人も多く、たとえば、ロバート・マックロスキー(Robert McCloskey, 1914~2003)がその一人でした。

ピーターシャム夫妻

ピーターシャム夫妻へもどりまして、夫妻が挿絵を描いた『けしつぶクッキー』は、渡辺茂男さんの訳でご存じの方も多と思います。ストーリーはベテラン図書館員二人の合作によるもので、ヨーロッパの古い国からきた4歳の男の子アンドルーシクと、そのおぼさんのカチューシカ、そして友だちの少女エルミンカにまつわる、8つの童話で構成されています。これはアメリカで最初の、しかも、もっとも成功した幼年童話と評され、児童文学史で幼年童話のマイルストーン的位置を占めています。ピーターシャム夫妻による挿絵と造本は、ひじょうにユニークなものでした。ハンガリー出身のミスカらしく、出身地のフォークアートを有効に生かして、装飾的なデザインで飾られています。まずテキストページのレイアウトですが、カットの図案を白抜きにして、地を単色平塗りとしたフレームを作り、その中にテキスト(文)を取めています。そして、フルカラーか単色の挿絵が1ページ大で、テキストページの間に入れ、内容と造本がみごとに調和している、きわめて洗練された優品と言えます。

夫妻は他の作家のものに挿絵を描くばかりでなく、自ら文も絵もかいた作品を数多く制作しました。代表作は、ミキという少年を主人公に、ハンガリーの生活や習慣を描いた *Miki* (1929 邦訳なし)で、これはメイ・マッシーによって international picture book と呼ばれましたが、今風に言えば、国際理解に資する絵本です。

また、モード夫人がバプティスト派牧師の娘でしたから、夫とキリスト教絵本をいくつも手がけています。中でも『幼子キリスト』(*The Christ*

Child, 1931 邦訳なし)は傑出していました。タイトルの通り、キリストの誕生から少年時代までを、聖書のエピソードでつづったテキストが、モノクローム画と、リトグラフと水彩による美しい彩色のイラストレーションで飾られています。この絵本のために、夫妻は3カ月もパレスティナへ取材旅行を行い、メイ・マッシーの助言によって、当時カラー印刷がもっとも優れていたドイツのライプツヒで製版をした絵本で、写実の美と様式の美を巧みに融合させた、アール・ヌーボー調のイラストレーションは、今見てもほれぼれします。

夫妻は1946年に、前年に出した『雄鶏は鳴く、アメリカわらべ唄集』(*The Rooster Crows; A Book of American Rhymes and Jingles* 邦訳なし)によって、コールデコット賞を受賞していますが、これは必ずしも夫妻のベストとは言いがたく、初期の作品がはるかに優れていました。とは言っても、晩年の作で、邦訳もある『あかいくるまのついたはこ』(*The Box with Red Wheels*, 1949)は、動物と幼い子どもの交流を描いて、絵もテキストもチャーミングな、佳作の一つと言えるでしょう。

『かしこいビル』

それでは、今日の資料へ入りましょう。やはりお手元にある(ワンダ・ガアグの出現から1950まで)をご覧ください。

最初にニコルソンの人形物語絵本『かしこいビル』(*Clever Bill*, 1927)を挙げました。ニコルソンはもちろんイギリスの作家ですが、これが次の『100まんびきのねこ』(*The Millions of Cats*, 1929)を産む元になったので、ここから始めることにしました。メリーちゃんはおばさまのところへお泊りに行くので、旅行トランクに玩具を詰めています。ところが、ご秘蔵の兵隊人形のビルを詰め忘れてしまって、ビルが夢中でメリーを追いかける、という話です。

絵を見ると、おばさんから招待状が来た時、もう真っ先にビルは手紙の上のっています。僕も一緒に行くと言っているのですね。ビルがテキストで言及されるのは、それから5場面も後で、メリーが「もちろんビル・デイビスはおいていけ

ないわ」と言ったときです。そこでは、ビルは手にしたシンバルをパンパンと鳴らして喜んでいません。ビルがおばさんのところへ一緒に行きたい気持ちが、絵からよく伝わってきます。ニコルソンはこの絵本で細かに絵語りをしています。以前、邦訳書(ペンギン社版)の解説で、それについてやや詳しく、私は書きましたので、それを参考にさせていただきます。

ニコルソンはこれより以前、1923年にマージェリー・ビアンコの『ビロードうさぎ』(*The Velveteen Rabbit*)に挿絵を描きました。子どもの本に彼が登場した最初の作品です。それをアメリカの有名なライブラリアンであるアン・キャロル・ムーアが真っ先に高い評価をして、その原画展をニューヨーク公立図書館で開きました。このおかげで、ニコルソンはアメリカで注目をされたのでした。

そしてニコルソンは、今度はストーリーも挿絵も自分一人で、自分の娘のために『かしこいビル』(1927)を創作したのでした。イラストレーションは、一見無造作と見える線の描き方ですが、確かなデッサン力で、みな目を見張ったのです。余分なものを一切省いて、白黒のコントラストで画面が構成され、隅々まで洗練されたセンスがみなぎっていました。ストーリーも、挿絵の場面展開も、スピーディーなテンポと、劇的効果が十分で、理想的な出来栄の絵本でした。

この絵本は横25センチ×縦18.8センチと、横長のサイズでしたから、ページを開くと見開きで、倍の横長スペースが得られましたが、ニコルソンはそれを活用せず、見開き左右を一単位ずつ個別の絵を描きました。もちろん絵と絵の連続性は十分とれていましたが、見開きで得られた2ページ分の横長スペースはまだ未活用でした。それをフルに活用したのが、2年後に誕生する『100まんびきのねこ』(1929)でした。

『100まんびきのねこ』

『100まんびきのねこ』はいろんな意味で、アメリカ絵本史で、画期的な絵本と言えます。本のサイズは『かしこいビル』と全く同じでした。ページをめくっていけばすぐに解りますが、どのペー

ジもイラストレーションとテキストが有機的というか、調和的に配置されています。そして、どの見開きも文と絵のレイアウトが異なって、二つと同じ形はありません。単調な繰り返しをしていません。横長のスペースが、ひじょうに有効に、効果的に使われています。たとえば、最初の見開きは、おじいさんがねこやまへ行くまでの長い道のりを、横長スペースにカーブする対角線で描き、距離感を出しています。おじいさんが、ねこやまへ来て、あのねこ、このねこと、ねこを捨ていく場面では、4つのカット風の絵と文字が、左右対称に配置されています。「なんびゃくも、なんぜんも、なんまんも、なんびゃくまんものねこを、ぞろぞろつれて、おじいさんとねこのだいぎょうれつ」が行く場面では、見開きの左が遠景を、右が近景を描き、遠景では幾つもの山を越えてくるようすが、近景では遠近感を強調して、旅するおじいさんが描かれています。左右のページが連続しているようで、しかも、おじいさんの姿は両ページにあります、異時同図という表現法が使われています。これによって時間の経過も描き出されています。同様な表現法は、後の池の場面でも、草原の場面でも使われています。みなさんも改めて、絵本をめくって、ページ毎に異なるデザインや、絵と絵の連続性などを、ゆっくりと味わって楽しんでみてください。

一方、テキストですが、これも声に出して読んでみてください、ひじょうに口になめらかで、耳にメローディアスな響きを楽しむことができます。とりわけ、繰り返し出てくる文、“Cats here, cats there, Cats and kittens everywhere, Hundreds of cats, Thousands of cats, Millions and billions and trillions of cats.” は、なんとも心地よいリズムです。そして、文の文字が、活字体ではなく、手書きの、角に丸味をもった、肉厚の美しい文字です。これが曲線をメインにしたイラストレーションとひじょうによくマッチしているのです。これはワンダの弟ハワード (Howard) が、田舎風を感じ出した文字として書いたのです。そして、文字も絵も、独特のつやのある、さえた黒インキで印刷されています。

ギャグは15歳で父を、24歳で母を亡くし、弟妹

の生活と教育を両親に代わってみなければなりませんでしたが、寝食より絵が好きで、貧乏に耐えながらも、絵筆を捨てませんでした。やがて木版、エッチング、リトグラフなど版画の技法を習得して、1926年と28年にニューヨークで個展を開きました。そのときカワード・マッカン社の名編集者アーニスティーン・エバンズに見いだされ、子どもの本のイラストレーターとなったのです。そういう来歴の人でしたから、印刷インキの色合いにも、版画家らしい繊細な感覚を持っていました。彼女の黒は、とりわけ注目されて、以後多くのイラストレーターが、〈ギャグの黒で〉と印刷業者に指定するようになったといえます。

ここで改めて指摘しておきたい、彼女によるイラストレーションですが、表題は『100まんびきのねこ』とありますが、実は内容は「いっぴきのねこのおはなし」ではありませんか。表紙をめくって出てくる内扉、タイトルページは、文字は Millions of Cats とあっても、絵には1匹のねこしか描いてありません。また、お話が終って、裏表紙を閉じる前のページ、そこにも1匹のねこが、お話を締めくくるように描かれています。ということは、ギャグは絵でちゃんと、これは〈いっぴきのねこのおはなし〉ですよ、と断わっているのだと思います。

この作品のアメリカ性は、いろいろあると思いますが、ページのレイアウトについては、個人的な一つの才能によって出来たものとしても、話の全体の作り方は、昔話を踏まえながら、一方で、おじいさんとおばあさんがペットのねこを手に入れようとする、ひじょうに現実的な、というか日常的な話でありながら、他方で、100まんびきなどという途方もない数のねこが出てきて、しかも、ラストでは、ねこ同士のすさまじい争いというブラックユーモアもあり、結末は100まんびきどころか、たったいっぴきのねこを飼うという、ある意味でのどんでん返しで閉じられています。おじいさんが最後に、私が選んだねこだと威張って言っているのも滑稽ですが、お話全体は、途方もない誇張（ある意味で、ほら話）と、徹底した現実主義が、合体したユーモア話なのです。このあたりがもっともアメリカ的であると私は思っ

います。このことは、今日の私の話のポイントになるはずなので、心にとめておいてください。

『ABC うさちゃん』

ワンダ・ガアグの、私の好きな作品に、版画家出身の人らしい、北欧昔話の挿絵本『すんだことはすんだこと』(*Gone Is Gone*, 1935) があります。これは本の大きさが、15センチ×12センチ、60ページ程の袖珍本で、黒インキによる木版画が44葉も楽しめる絵本です。そこでもガアグの絵語りがとても光っています。版型、造本、挿絵と、3拍子そろった、チャーミングな絵本です。残念ながら、邦訳版は、サイズを22センチ×15.5センチと大きくして、挿絵もその分拡大されて、本来の引き締まった凝縮感が失われて残念です。が、お話は、亭主がおかみさんと仕事を交換して失敗の連続という滑稽話ですから、お話を訳本でぜひお楽しみください。

もう1冊、ガアグの素敵な絵本をご紹介します。邦訳はありませんが日本の書店で、ペーパーバック版をよく見かけるので、興味をもたれたら入手なさり楽しんでください。

タイトルは『ABC うさぎ』(*The ABC Bunny*, 1933 邦訳なし) で、とてもユニークなABC絵本です。ABC絵本は、午前中でもお話ししましたが、このガアグのものは、創作の歌物語、お話ABCです。原文をちょっとお目にかけてみましょう。“A for Apple, big and red / B for Bunny snug a-bed / C for Crash! D for Dash! / E for Elsewhere in a flash” とつづきます。「Aはリンゴ (apple) のA、Bはうさちゃん (bunny) のB、Cはドシン! (crash) のCと、ピョン! (dash) のD、Eはたちまち (in a flash) ほかのところへ (Elsewhere) のE」。これにそれぞれ絵がついて、Aでは木になっているリンゴ、Bではそのリンゴの斜め下、草の葉の上でまどろむうさぎ、CとDでは、リンゴの実がさっと落ちて、うさぎがびっくりして走り出し、Eでは Elsewhere と書かれた道標が差す方向へうさぎが走っていく絵が、描かれています。この後、うさぎはカエル (frog) と出会い、空の雲行きが悪くなって、突風 (gale) と雹 (hail) にみまわれて逃げ出し、

昆虫 (insects) やカケス (jay) や子ねこ (kitten) やトカゲ (lizard) などにも出会って、間で昼寝 (napping) をしたりしますが、無事に自分のねぐらへもどってめでたし、という物語が語られています。

先ほどの英文ですが、AとBでは最後の語が、redとa-bed、CとDとEではcrashとdashとflashと言うように、短いフレーズが脚韻を踏んで語られ、唄で綴られているのです。物アルファベットでは、Aはappleのa、Bはbearのb、Cはcatのc、Dはdogのd、といったように単語 (物) が単独に提示されていくのですが、ガアグのアルファベットは「大きな、赤いりんごと、心地よさげに寝ているうさちゃんがありました。突然ドシン! とリンゴが落ちて、うさちゃんはピョンと跳ね起きて、急いでよそへ避難です。そしたら太っておかしな顔のカエル (Frog—he's fat and funny) に出会いますが、カエルがうさちゃんに言います<雨が降りそうです> (Looks like rain)」というように、語られていきます。歌物語のアルファベットで、なかなか凝った、苦心の作と言えるでしょう。秀逸なABC絵本と言われて当然です。ページのレイアウトは、下3分の1が文字スペース、上3分の2が絵のスペースで、絵は濃淡の黒で、文字はアルファベットのキャピタル文字を大きく鮮やかな朱で、他の文字は黒で、プリントされています。ここでも文字は、弟のワードによる書き文字で、また前と後の見返しでは、この唄アルファベットに妹のフラビア (Flavia) が作曲した“ABC Song”の楽譜が載せられています。3姉弟妹による合作絵本でもあるのです。繰り返しますが、これは英語圏で数あるアルファベット絵本中でも、とりわけ見事な作として、高い評価を受けていて、ある意味でABC絵本の古典でもあります。

ロバート・マックロスキーの作品

先ほどワンダ・ガアグの『100まんびきのねこ』のところで申しましたが、現実主義的写実主義とほら話 (誇張) との合体という、少なくとも20世紀中頃までのアメリカン・オプティミズムを背景に生まれてきた、きわめて明るい滑稽文学を、ア

メリカ性の一つとして挙げるならば、まさにその原点というか、スターティングポイントとして、『100まんびきのねこ』を位置づけることが出来ます。今、その系譜に立つ一人として、ロバート・マックロスキーを挙げてみたいと思います。

マックロスキーは、先ほど申しました〈メイ・マッシー・グループ〉の一人ですが、彼は当初、文学はヨーロッパの伝統を受けて、古典重視だと思込んでいたので、そういうタイプの試作品を持ってメイ・マッシーを訪ねたところ、アメリカはもうFrontier（開拓線）の時代を過ぎて、Regionalism（地方主義）の時代でしたから、メイ・マッシーは、自分が身近で熟知しているものを素材に創作するようにと勧めました。そこで生まれた第1作が『ハーモニカのめいじんレンティル』（*Lentil*, 1940）でした。そして、第2作が『カモさんおとおり』（*Make Way for Ducklings*, 1941）だったのです。

『ハーモニカのめいじんレンティル』は、オハイオ州のアルトという町に住む少年レンティルと、その町出身の有名人カーター大佐が帰郷したときの出来事をめぐる話でした。町中がカーター大佐の歓迎ムードにわいているとき、大佐と小学校が同級だった一人のすねもの〈にがむしじいさん〉（Old Sneep）が、やっかみから意地悪を演じます。大佐が到着する田舎の駅での歓迎式で、〈にがむしじいさん〉はひそかに駅舎の屋根に登り、上からレモンをすすって見せて、吹奏楽隊の歓迎演奏を妨害します。それを救ったのがレンティル少年のハーモニカという話です。日本流に言えば、レモンならぬ酸っぱい梅干をすすする音で、演奏者は口がすぼまって、楽器が吹けなくなってしまいます。こんな（オーバーな）誇張が、お話の山場で出てくるのです。帰郷した大佐は、全町民にアイスクリームを振る舞い、新しい病院を町に寄付しますが、これらは当時のアメリカ地方都市でさもありなん現実的な話です。しかし、レモン汁の一件は、全くふざけたほら話です。このためにお話全体が滑稽話となり、挿絵もレモン汁をすすする音で楽団員の口がすぼまるようすや、故郷に帰ったカーター大佐のはしぎ振りなど、漫画じみた誇張で描かれ、滑稽感が増大されています。

作品の中ほど、〈にがむしじいさん〉の妨害で、吹奏楽が演奏できなくなったとき、レンティルが得意のハーモニカで急場をしのぎますが、そのとき吹いた曲が「かわいい あのこが やってくる、

おかを こえて げんきよく、かわいい あのこが やってくる、六とうだての ばしゃにのってくる！」“Comin' 'round the Mountain When She Comes.” “Driving Six White Horses When She Comes.” でした。これについて邦訳で、訳者のまさきるりこさんが「この歌は、アメリカ人なら必ず子どもの頃、歌って知っているといわれるほど親しまれている曲です。…このメロディーを聞くとみな、西部の町に初めて汽車がやってきた時の胸のたかまりを思い起こすのだと、アメリカの友人が語ってくれました」と、解説されています。（より詳しい説明は、邦訳書をご覧ください。）これなども、作品の特色であるlocality（地方性）をよく表している点でしょう。繰り返しになりますが、こういう事実とほら話（の嘘）が合体したところが、いかにもAmerican tall tale（アメリカのほら話）そのものと言えるわけです。

第2作の『カモさんおとおり』は、あまりにも有名で、どなたも先刻ご承知の絵本ですが、これの舞台はボストンの町で、ローカルの味がはっきりしています。挿絵は町の当時のたたずまいを正確に写してとり、マックロスキーがそこで実際に見聞した出来事をそっくり物語化したものでしょう。ルームメイトだった『はなをくんくん』（*The Happy Day*）の作者マーク・サイモント（Marc Simont）の証言によれば、マックロスキーはかもの子を買ってきて、バスルームで飼いながら、その生態、行動を観察しスケッチして挿絵を描いていたそうです。絵は確かに写実に徹してはいませんが、ここでも、少年の自転車を通り過ぎる時のマラードおくさんの驚愕ぶりや、かもの家族が車の往来が激しい道路で立ち往生する場面など、実に諧謔心に溢れています。お手元の資料にマックロスキー自身のことばを挙げておきました。「私は常に、片足を現実におろし、もう片足をバナナの皮の上をしっかり乗せている」と、ご自分で言っているのですから。

2年後1943年には、短編集『ゆかいなホーマー

くん』(Homer Price)が出ました。これは完全にほら話集です。中の一話「ドーナツ」(The Doughnuts)では、ホームー少年が、新式の労力節約機に凝っているおじさんの食堂で、狂ったドーナツ自動製造機を運転して、ドーナツ製造が止まらなくなってしまう。この騒ぎを増幅させるのが、来店した客のサンドイッチマンと、金満家夫人とそのショウファーで、彼らは世話好きでプラクティカルなヤンキーぶりを演じます。ドーナツ自動製造機などという労力節約機が出てくるあたりは、同時代のドクター・スース (Dr. Seuss, 1904~91) の、たとえば、部屋の混乱をいっきよに片付けてしまう自動敏速掃除機の登場する『キャッツインザハット』(The Cat in the Hat, 1957) などとも共通する、ファンタジーとほら話の合いの子の話と言えそうです。マックロスキーは、ここでも食堂内にあふれかえるドーナツを克明に写実画として描いていて、滑稽感を強調しています。まさに片足がバナナの皮の上で滑っているところでしょう。

なお、『ゆかいなホームーくん』の冒頭(日本語版では内扉のページ)に出てくる絵について一言しておきましょう。古代ギリシアの詩人ホームー(ホメーロス)の胸像が台から下ろされて、代わりにホームーくんの顔がのっている図ですが、メイ・マッシーの助言に従った結果を滑稽に描き出したものです。ホームーくんのおじさんがユリシス(Uncle Ulysses)という名前なのも、もちろんギリシアのホームー作『オデュッセイア』のローマ名ですから、ホームーくんと連動して、これもパロディです。このユリシスおじさんの方は、田舎の食堂の亭主ですからね。

先ほどから〈ほら話〉と何度も言ってきましたが、亡くなられた渡辺茂男さんが編んだ『アメリカのむかし話』(偕成社文庫)をご覧になると、アメリカの昔話が〈インディアン伝説〉〈ヨーロッパからつたわった話〉〈黒人の民話〉〈ほら話〉と4種類に分類されています。そこで〈ほら話〉が、唯一〈アメリカ人による独自の〉むかし話ということになりますから、渡辺さんは後書きで、「たつまきにのったり、山をひとまたぎすることなど、ふつうの人間にできるはずがありません

んが、これは、大成功をねがう人間の望みを、あらわしているのです。こんな、あけっぴろげな、おおげさなうそは、じめじめしたところがなくて、ときには、わたしたちを、とても、ゆかいにしてくれます。」と〈アメリカ人のほら話〉の特徴を説いておられます。この本から、ちょっと一例を挙げてみましょう。

カウボーイの子でしたが、たまたまコヨーテに育てられたピッコース・ビルは、たいへんな怪力の持ち主です。10メートル先の牛や馬など造作なく捕らえてしまう、投げなわの名人でした。しかし、ビルはもっと長いロープが必要になって、自分で牛の皮をあんで、長い投げなわを作りはじめます。

牛の皮は、つぎのようにして、あつめました。まず、年とった牛をさがしました。年とった牛は、林のおくふかくに、ひっそりとすんでいます。その背中には、コケがはえ、顔は、しわだらけで、灰色をしています。ビルは、こんな牛を見つけると、耳の皮をめくり、うしろにまわると、両うでで、しっぽを、しっかりとにぎります。そこで、「ヤッホー」と、大声をだすのです。すると、牛はびっくりして、皮からとびだしてしまいます。ビルは、こうして、コケのはえた、じょうぶな皮を、あつめました。三、四年たつと、やっと、投げなわができあがりました。その長さは、地球の赤道とおなじ長さで、中国からこちらがわの動物は、なんでも、生けどりにすることができるようになりました。(渡辺茂男訳)

ざっとこんな調子で話が展開するのが〈ほら話〉なのです。

マックロスキーの最後の作品『沖釣り漁師のバート・ダウじいさん:昔話ふうの海の物語』(Burt Dow Deep-Water Man; A Tale of the Sea in the Classic Tradition)は、いわばマックロスキーによるほら話のきわめつけです。

バート・ダウじいさんは年とった沖釣りの漁師で、とうに引退していましたが、老朽の小船〈潮まかせ号〉(Tidely-Idley)に乗って、今も風の

日には海へ出ていました。ある日沖へ出て釣り糸をたれると、とんでもない大物、クジラを釣り上げてしまいます。釣り針が、尻尾にひっかかっていたので、針を取ってから小さい傷に、手持ちの〈赤白のしまもようの ばんそうこう〉を張ってやりました。が、クジラ騒動で気がつくのが遅すぎました。海が急に時化始めたのです。もう港へ帰るとまはありません。窮余の一策、クジラに「このわしらを、のみこんではくれんかね—むろん、ほんの いったきだけ—つまり、突風がおさまるまでじゃ？」とたのんで、くじらの口へ舟をつっこみます。「のどちんこにも さわらずに、くじらののどから食道をぬけて、胃ぶくろの中へ舟を」すすめます。やがて嵐が去ったころ、再び海へでると、今度はたくさんのクジラに包囲されます。やがて、1頭だけがばんそうこうをもらったと、他のクジラがやきもちをやいているとわかり、じいさんはすべてのクジラの尻尾にばんそうこうを張って騒ぎを取めます。「パートじいさんは つぶやいた。〈まさか ちっぽけなばんそうこう ひとつはこが がかいくじらどもを こんなによろこばせるとはおもわなんだ！〉」（わたなべしげお訳）じいさんはぶじに港へもどって、お話はハッピーエンドになります。

もう改めて解説する必要はないでしょう。これぞまさに〈ほら話〉の見本、豪快で、痛快なく昔話ふうの海の物語〉です。『ハーモニカのめいじんレンティル』に始まり、『沖釣り漁師のパート・ダウじいさん』で、マックロスキーによるアメリカン・トール・テールは見事な完成をみたと言えるでしょう。

さて以上、マックロスキー絵本の一つの特徴を中心にお話ししてきましたが、マックロスキー絵本では、別に大切な特色について触れておかなければなりません。

1952年の『海べのあさ』は、作者の家族の生活がリアルに、愛情豊かに描かれています。これはメイ・マッシーが、自分のよく知っている身近なことで創作をなささいと言ったことに通じる点で、家族は、もっとも身近なテーマの一つです。作品原書のタイトルは*One Morning in Maine* (1952) 〈メイン州での、ある朝〉の出来事です

から、地名がまず実名で出てきます。メイン州は、家族の夏の住まいがあるところでした。お話では、マックロスキー夫妻と長女のSal(サリーちゃん)、妹のlittle Jane (ジェインちゃん)、それにペットも登場しています。

ある朝サリーは、ベッドを出て、着替えて廊下へ出ると、隣の部屋からジェインが裸で出てきました。ガウンを着せて、一緒に歯磨きを始めます。と、自分の歯がぐらついているのを発見、サリーは急いで階下のお母さんのところへとんで行きます。ダイニングキッチンでは、お母さんが床に座って、サリーと同じ目線で話します。「それは、きょうサリーが、大きな子になったという しるしなのよ。」と教えているお母さんの腕には、ペット犬のペニー (Penny) が顔をのせて、聞き耳をたてています。お母さんの背後からはジェインと猫が近づいてきます。このページの文は、サリーとお母さんの会話だけを書いています。絵ではジェインやペットたちの行動も描かれ、また、朝食の用意が始められているキッチンのようすもスケッチされています。次の見開きも、文はお母さんとサリーの会話ですが、絵ではジェインが、カップのミルクをこぼして、それを猫が頂戴していますし、ペニーはテーブルの下で上目づかいに、親子の会話に聞き耳を立てています。ここでは前ページの部屋が、前とは逆方向から描かれて、窓の外には海岸が見えています。サリーは食事を終えて、そこへお父さんのハマグリ取りの手伝いに行きます。でも、サリーの頭は、抜けそうになっている歯のことでいっぱい。お父さんのところへ着くと、もちろん早速に歯のはなしです。お父さんの顔、姿は、写真で見るマックロスキーその人です。ハマグリ取りに夢中になっている間、気づかぬまにサリーの歯が消えてなくなっていました。探しても見つからず、あきらめて家へ帰り始めると、カモメの羽が一枚落ちているのを見つけ、サリーはなくなった歯の代わりに、それで秘密の願いをします。(乳歯が抜けると願いをするのは、私の思い出にもあります。下の歯のときは屋根の上へ、上の歯のときは縁の下へ、「鬼の歯と代われ」ととなえて投げました。洋の東西、似た風習があるのですね。) ここまでのイラスト

レーションで、メイン州の海岸のたたずまいが、鮮やかなイメージとして、読者の脳裏に見えてきます。こうした写実画が、マックロスキーはひじょうに上手です。

さて「ふたりが 家につくと、おかあさんとジェインが、みるくのあきびんをいれた箱と、買ってくるものの名まえをかいた紙をもって まっています。あきびんは、港のおみせへかえすのです。」絵では、ペットのペニーも猫も一緒に出てきています。ジェインはサリーの手をぐいぐい引いて、早く舟に乗りたがっています。そして、次のページでは、サリーがおねえさんぶりを發揮して、ジェインに救命具を着せています。また、故障したモーターのロープを引っ張っているお父さんの顔は真剣そのもの。ボートのクローズアップも正確なデッサンです。そして、バックスハーバー(Buck's Harbor) へ着いたときは、サリーが真っ先にコンドンさん(Mr. Condon) のガレージへ向って走って、歯が抜けてしまったこと、ボートのモーターが故障してしまったことを伝えています。そこから先の2見開きでは、自動車修理場の内部が、まるでカメラがとらえたかのように細かく描写してあります。ここでも絵を見ると、いつときもじっとしていないジェインの行動が描きだされています。サリーは、捨てられたスパーク・プラグをすかさず拾って、ジェインの分のお願いをしています。次のコンドン兄弟の店では、やはりサリーが歯の抜けたニュースを真っ先に伝えていますが、ジェインも負けじとプラグを握って入ってきます。次のページでは、店の客たちとサリーの会話が、文に書かれています。絵ではジェインが活動的で、前ページでベンチの下にいた猫に、すぐちょっかいを出して、猫に逃げられています。二人のコンドンさんはいかにも兄弟、よく似て描かれています。娘ふたりの願いごとは、アイスクリームをもらって、めでたく成就。最後のページでは、ボートのモーターも快調に、昼食のクラムチャウダーの待つわが家へと向う、親子3人の姿はハッピーそのものです。これこそアメリカンドリームが、アメリカンリアリズムで描かれた、アメリカンピクチャーブックと呼ぶべきでしょう。

これより4年前に出た『サリーのこけももつみ』

(*Blueberries for Sal*, 1948) も、同じく家族の物語ですが、ここではサリーとお母さんの話です。二人はある日、近くのBlueberry Hillへブルーベリーを摘みにでかけます。おりしも同じ場所へ熊の親子がブルーベリーを食べにやってきます。そして、人間と熊の、親と子が、途中で入れ違ってしまうお話になります。以前、神沢利子さんとこの絵本の話が出たときに、神沢さんはここで作者が、人間と動物を全く等価に、平等に扱っているところが素晴らしいと、絶賛されていました。確かに、これはまさかの話で、そうあったら素晴らしいだろう、という作者のドリームが書かせたお話でしょう。フィクションではありますが、これはファンタジーではありません。その一つの証拠は、イラストレーションにあると思います。絵本の前後の見返しに、同じ絵が描かれています。それは若きマックロスキー夫人と幼いサリーちゃんですが、キッチンで収穫したブルーベリーを瓶詰めをしているところです。キッチンのリアルな描写、先のコンドンさんの自動車修理場の描写と全く同じ筆法です。小さな猫の子が2匹います。暦と時計から、8月のある日、午後4時頃です。窓は開け放たれ、カーテンのそよぎから微風が室内へ入ってきています。レンジでは鍋が二つ湯気をあげています。ついさっき熊の子と入れ違ったサリーは今、瓶の蓋のゴムのパッキンを大匙と自分の腕に通して遊んでいます。夏の屋下がりの穏やかな家庭の風景がリアルに、細かく描かれているタブロー画で、熊の親子もBlueberry Hillのどこの一角で、午後のひと時をなごやかに過ごしているに違いありません。これがマックロスキーのパーソナルドリームであったのでしょうか。それに神沢さんは感激したのだと思います。

マックロスキー家族は、メイン州のペノブスコット湾(Penobscot Bay)の美しい入り江に浮かぶ小島で夏を過ごしていました。自然の溢れるその島での生活を、詩情豊かな文章と水彩画の挿絵でつづった絵本『すばらしいとき』(*Time of Wonder*, 1957)も、マックロスキー家族の姿を描いています。二人の娘に語りかける形で語られていますが、ここでは自然が主人公です。早春の雨と霧で、林の下生えのシダが芽を伸ばし始め、

ミツバチやハチドリも飛び始め、様々な鳥がうた
いだし、初夏はたちまち夏のさかりへと、季節が
移っていきます。子どもたちは夏の昼間も夜間も、
存分に満喫しています。秋のハリケーンシーズンの
到来で、烈風は大きな樹木を根こそぎ倒してい
きます。そうして、家族は海の潮の香りをなつか
しみながら、来年の春まで、南の島へとここを去っ
ていくのです。さながらベートーベンの田園交響
曲を聞く心地で、作品を読み終わることになりま
す。

メインの自然と言えば、環境学者のレイチェル・
カーソンもまた幼い子どもと共に、ここで自然の
息吹を体に深く味わって、あの『センス・オブ・
ワンダー』(A Sense of wonder)を残しました。
イギリス19世紀の美術評論家で社会思想家であつた
ジョン・ラスキン (John Ruskin) は、3 W (ス
リー・ダブリュー) を奨励しました。それは英語
で、Work、Wonder、Worship の三つのWでした。
人は自然を観察し探索 (work) する、その神秘
に驚異 (wonder) する、そして、最後に、創造
主に畏敬の念を禁じえなくなる (worship) 、と
いう3 Wでした。マックロスキーの作品も、まさ
に Time of Wonderで、<大自然の懐で驚異する
とき>を描いています。作品の訳者である渡辺茂
男さんは、翻訳の前にマックロスキーの招きで、
作品の舞台、作者の夏の住まいを訪ねられ、その
訪問記を詩情溢れる文章でつづっておられます。
『子どもの館』に発表されたものが、『すばらしい
とき：絵本との出会い』(1984 大和書房) に取
められていますので、絵本『すばらしいとき』と
共に、ぜひ一読されることをおすすめします。

ドーハーティの『アンディとらいおん』

それでは、『100まんびきのねこ』から、『レンティ
ル』『沖釣り漁師のバート・ダウじいさん』へと
連なる系譜へもどって、次はジェームズ・ドーハー
ティ (James Daugherty, 1889~1974) の『アンディ
とらいおん』(Andy and the Lion, 1938) を見る
ことにしましょう。

作者のドーハーティは、ある冬の夕べ、妻と最
近見た芝居の話をしているうちに、劇場の観客を
捧腹絶倒させながら感銘を与えたバーナード・

ショー (Bernard Shaw) 作『アンドロクレスと
らいおん』(Androcles and the Lion, 1912) を思
い出して、急に目を輝かせると、アトリエへ飛び
込んで、僅か数分で『アンディとらいおん』の下
絵を描きあげてしまったといいます。それから数
週間後、ニューヨークでバイキング社のメイ・マッ
シーにそれを見せると、すぐに出版がきまりました。
しかし、完成稿ができ、じきに校正刷りも出
て、出版を待つばかりになったとき、メイ・マッ
シーから編集スタッフの中に、この絵本には文章
を添えるべきだという意見がある、という話を聞
かされました。ドーハーティは絵で十分ストー
リーを語ってあるので、文章は不要と答えました。
マッシーは自分もあなたと同意見だけれど、他人
が正しいということもあるので、スタッフが仮に
つけてみた文章をともかく見てほしい、と求めま
した。ドーハーティは1、2ページ見て「余分
です」と言って返しました。マッシーはしばし沈黙
の後、「では、どういう文章なら<余分>でないか、
ふたりでちょっと考えてみませんか」ときそい、
ついに私たちが今見ている文章が、30分たらずで
全部出来上がったということです。

こういうエピソードを聞いて、改めて『アンディ
とらいおん』を絵だけで (文の助けを借りずに)
読んでみると、なるほど絵で十分ストーリーは語
られているように思えます。

この絵本の誕生のきっかけとなった、ショーの
芝居は、有名なローマの伝説による作品でした。
それは、アンドロクレスという奴隷が逃亡してつ
かまり、罰にライオンのいる闘技場に投げ込まれ
たのですが、幸運にも昔彼が足のとげを抜いて
やったライオンだったので、餌食にならなかった
という話です。ドーハーティはそれを、アメリカ
の地方都市——絵で見ると Anderson Villeとい
う町ですね——に住むアンディという少年の<英
雄ばなし>にして、全体をアメリカ風のほら話に
仕立てたのでした。従って、それにふさわしく絵
はダイナミックな筆致で描かれ、大振りなジェス
チャーにはどこか漫画に通じる親しみとおかしみ
があり、ページをめくっていくと、随所に笑いが
込められています。

その中で、アンディの腰巾着犬であるプリンス

は、なかなか愉快的な存在です。話の進行にこの犬、大いに一役をかっています。まず表紙からして、タイトルの文字は、ANDY and the LIONですが、絵は「アンディとらいおんとプリンス」ではありませんか。前後の同じ見返しでも、プリンスはちゃんと一役果たしていますね。もちろん内扉のタイトルページにもいます。話の始まり、アンディが図書館へ向うところから、学校へ行く途中まで、プリンスはずっとくっついていて、が、道の曲がり角で、大きな岩のかげから突き出たらいおんの尻尾が動いた時から、プリンスはそれこそ尻尾をまいて姿を消してしまいます。が、万事がめでたくおさまって、最後のパレードのところへくると、なんとプリンスは堂々と先頭を歩いているではありませんか。J.R.R. トールキンに『農夫ジャイルズの冒険』(Farmer Giles of Ham) という滑稽な戯作的小品がありますが、それに臆病だけれど忠犬のガームが登場しています。そのガームは、まるでプリンスの生まれかわりのように、性質と役柄がとてもよく似ているのです。

それはさておき、ドーハーティがマッシー女史と一緒に後から添えたという<文>が<絵>と、どんなふうにチームワークしているか、一部を見てみましょう。らいおんがとげのささった足をアンディに見せているページから、順に4ページ先まで見ていくと、それぞれ左ページが文字ですね。その文字ページで最後の語が< BUT > < FORTUNATELY > < THEN > < THE THORN > と、いずれも次のページにつづくことばですから、これらを声に出して読むと、次のページをめくる間に、短い休止がはいります。その<間>が、実はストーリーの進行に重要なサスペンスをもたらしています。すなわち、文章が途中で区切られたことで、独特の効果が生まれています。言い換えると、<文>の助けがあって初めて得られる効果と言えます。そして、最後のとげがスポンと抜けた瞬間では、見開きページの両端に、一語ずつ< CAME > と< OUT > が分けて置かれています。二文字の長い間隔が、またもう一つの<間>で、抜ける瞬間を劇的に演出しています。以上のアニメーション的連続画を見ていくと、大粒の涙は、らいおんが痛がっている表現であり、結ばっ

た尻尾は、とげ一本を抜いてもらう直前の百獣の王の恐怖と苦痛の一瞬をうつしています。このように<絵>が感情の興奮を誇張しているのに対して、<文>は感情を一切交えず、簡潔にこの進行を述べているだけなので、その対照がまたストーリーに劇的効果を加えています。このように見てくると、マッシー女史が最後まで編集スタッフの意見を尊重した見識に、改めて感心させられます。この絵本が、(余分ではない)文のおかげで、愉しさをいっそう増大させたことが明らかになったのですから。

もう一つ、初めのほうで、アンディがらいおんの夢をたっぷり見て目覚めた朝の場面ですが、アンディは家の裏へ出て顔を洗っているときも「らいおんの ことばかり かんがえていました。」(村岡花子訳) という文で、「おとうさんから、みみのうしろも あらうように、」と注意されています。また絵の方では、ダイニングキッチンでお母さんがコーヒーをついでいます。ごく普通の朝の情景の中で、アンディの頭の中だけは、らいおんのことでいっぱい、この組み合わせが、『100まんびきのねこ』における日常性と誇張の合体と共通する<ほら話>の特質になるのですね。

最後に余分なことを一つ。もう36年も前のことですが、私がニューヨークの公共図書館を訪ねたとき、もらった英語とスペイン語の図書館案内が、二つ折りパンフレットで、その表には、絵本『アンディとらいおん』の内表紙の次の献辞に描かれている絵が、また裏には、内表紙の前の遊び紙にある「らいおんを足台にソファに座って本を読みふけているアンディの絵」が、載せられていて(今はどうでしょうか?)、"Reproduced with the permission of Mr. Daugherty" と記されていました。この絵の2頭のらいおんは、ドーハーティの献辞にある通り、ニューヨーク・パブリック・ライブラリーの入り口にあるライブラリーらいおんのLady Astor とLord Lenoxで、ロンドンのトラファルガー広場の4頭のらいおんがモデルです。日本の三越デパートの入り口のらいおんも親戚だと思います。

バージニア・リー・パートンの絵本

アメリカ絵本の〈開花期〉で、もっとも価値ある仕事をしたのはバージニア・リー・パートン (Virginia Lee Burton, 1909~68) でしょう。

お手元の資料をご覧になってわかるように、パートンは、1937年の『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』(Choo Choo) からはじまり、ドイツの開戦で第2次世界大戦がはじまる1939年に『マイク・マリガンとスチーム・ショベル』(Mike Mulligan and His Steam Shovel) を、1941年に『名馬キャリコ』(Calico the Wonder Horse) を、そして、1942年には『ちいさいおうち』(The Little) を、大戦中にもかかわらず優れた作品をつぎつぎと出していました。晩年(1964年)に日本へも来られましたが、ヘビースモーカーだったためでしょうか、肺癌のために59歳で惜しくも亡くなられました。が、1962年の『せいめいのれきし』(Life Story) に至るまで、どの作品もベストという、本当に素晴らしい絵本作家でした。幸い Barbara Elleman による伝記 *Virginia Lee Burton, A Life in Art* (2002) が出て、邦訳も岩波書店から出ましたので、詳細はそちらを参考にさせていただきます。

ここでは、これまでの話につづけて、ワンダ・ガガとつながり、従って、ほら話の要素などを、お話ししてみたいと思います。

処女作『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』についてですが、その前に、エピソードがあります。『ちいさいおうち』でコールデコット賞を受賞したとき、受賞講演でパートンはこんな話をしました。

「先ず皆さんに、とうとう印刷されて日の目を見ることがなかった、私の処女作の悲しいお話をしなければなりません。私はそれを、大志を抱く初心者の意気込みでいっしょうけんめい、文を書き、絵を描きました。友人たちも私自身も、これは非の打ちどころない、よくできた作品と思っていました。

ところが13人もの児童書の編集者たちが全員、そうは思ってくれなかったのです。とうとう原稿が私のもとへもどってきたとき、編集者

たちによる不人気の理由がわかりました。というのは、もどってきた原稿を、当時4歳だった私の息子アリスに、せめてもと思い、読んでやったのです。ところがなんと、息子はたいくつして最後まで読み終わらないうちに眠ってしまったのです。それは、私が受けた最良の批評でした。以来、この物差しで、作品を書いています。子どもの本は子どものためのものです。これはもちろん疑いのない自明のことですが、自明であるがために、かえって無視され、忘れられてしまっています。」

パートンは、このことばの通り、すべての作品を、わが子とその友人らに、まず読んでやって、彼らから批評やアイデアをもらって、制作していました。『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』ももちろんそのようにして、長男のアリス (Aris) のために作りました。原書は最初に献辞が出てきます(残念ながら、邦訳版では省かれていますが)。床に座り、玩具の汽車で遊ぶアリス少年に、上からスポットライトがあたっていて、少年の背後には、流線型のディーゼルカーでしょうか、そこに至るまでに、汽車がどんな形、姿で発達してきたか、6つの絵で示されています。それは汽車の進歩を教えるばかりでなく、歴史的な時間の流れや文化の発達も暗示している絵と言ってよいでしょう。

パートンの作品では、特に『ちいさいおうち』で顕著のように、時間の観念を子どもにわかりやすく具体的に教える試みがなされています。『マイク・マリガンとスチーム・ショベル』では、時代の流れで消えていくショベル・カーの運命を描いていますが、時間の連続性や、文化の歴史の変遷など、〈時〉をめぐるテーマが内包されています。そして、最後の作品『せいめいのれきし』では、銀河系の始まりから話が起こされて、人類の歴史を通覧し、現在の個人へと、時の流れをたどった気宇壮大な構想が実現されています。このように見てくると、『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』の献辞の絵は、パートンの絵本に寄せるファンダメンタルなメッセージであろうと思います。

さて、『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』の

ページをめくっていくと、機関車<ちゅうちゅう>が、小さな駅や大きな駅を通過して、煙を抜き、道路を横切り、“Through the tunnel and over the hills”（トンネルをぬけ、おかをこえ）という場面へきます。そこには、汽車の線路が、バートン独特の優美な曲線を描いて、トンネルを抜けて、3つの丸い丘を越えていく景があります。その次のページでは、列車が鉄橋を渡る背後の景色にも、線路の走っている丸い丘の連なりが描かれています。数ページ先の、跳ね橋が上がっているのに列車が飛び越えてしまう場面でも、同じように線路が遠くの丘からいくつもの丸い丘を越えてくるのが見えます。距離感を感じさせるこのような描き方は、(覚えておいででしょうか?)『100まんびきのねこ』で、おじいさんがたくさんのねこをつれて「ひのあたるおかをこえ、すずしいたにまをとおって、おばあさんのところにかえる」ときのイラストレーションで、ガアグが描いていた丸い3つの丘の連なりと、そっくりではないでしょうか。そのはずで、バートンはガアグから学んで、応用しているのです。ガアグから学んだと思われる点は他にも、(ガアグのときに申しましたように) ページにおける、イラストレーションと文字との有機的な配列です。バートンの絵本では、文字の組み方が、絵の一部分として計算され、レイアウトされています。テキストとイラストレーションをワンセットでデザインすることも、ガアグがヒントになっていたはずで

さて、<ちゅうちゅう>がいよいよ一人で走り出すと、「いきおいよく はたけの あいだをはしりましたので、うしや うまや にわとりはととも びっくりしました。ひとも おどろきました。いくにんかの ひとたちは たかい とうに よじのぼりました。」というくだりから、次のページへいくと、<ちゅうちゅう>の猛烈な走りに「じどうしゃや とらっくは、あわてて ぶれ一きを かけましたので、みんな がちゃがちゃ ぶつかりあってしまいました。」(むらおかはなこ訳)。さらに次のページでは、<ちゅうちゅう>が開いている跳ね橋を飛び越えています。この前後の4ページのイラストレーションを見ると、絵はことばよりもはるかに誇張して、混乱のよう

すを物語っています。無機物の列車が勝手に走り出すマシーンアニミズムのお話で、これはもうれっきとした<ほら話>そのものです。

では、次の『マイク・マリガンとスチーム・ショベル』へ移ります。これはアリスの弟マイクのために作られた絵本です。やはり、最初に“To Mike”という献辞があります。原書でみると、To Mikeの文字と走っている少年の絵が、ちょうどページの対角線上にきれいに並んでいます。邦訳版では文字を取り去っているので、男の子の絵がぼつんとあるだけになりました。原書と訳書、両者を並べて見ると、実感できるでしょう、バートンは文字と絵のバランスを考えて、ページ全体をレイアウトしているのです。どのページも、このように美的構成を注意深く考えて作られています。

この絵本では見返しに、ショベルカーと各部の働きを説明した絵が、のっています。子どもは絵本で知識も求めているけれども、本文の中にそれを入れすぎると、ごたついてしまうから、このように本文とは別に、子どもの知識欲を満たす工夫が有効だと、バートンは言っていて、これが具体例の一つです。『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』の見返しにも、機関車<ちゅうちゅう>の活動エリアが鳥瞰できる絵をのせています。それによってお話は立体的に理解でき、子どもたちを楽しませます。このように、見返しの処理もバートンはたいへん上手です。

『100まんびきのねこ』との共通点が、この絵本にもあります。ページをめくっていくとすぐにわかるように、どのページも二つと同じレイアウトは見られません。試みに最初から順に見開きのデザインをくらべながら見てください。変化に富んだ毎ページのレイアウトは、本当にみごとです。

ところで、このお話の、ある意味でヒーローは“the little boy”（ちいさな おとこのこ）です。献辞のページで、まず登場していますが、本文に入ってしばらくは登場していません。彼はイラストレーションでまず姿を見せています。マイクとメアリがポッパビルの町へやって来たときの見開きのページです。道で、ちいさいおとこのこが白い犬をつれて、遠くに見えたマイクとメアリに、

手をふっているでしょう。しかし、テキストの方で彼が最初に出てくるのは、もう2つ先のページからです。そうして、新しい市役所の地下室を掘り終わったら、メアリの出口がなくなって、出られなくなった！ときに、「それまで たいへん ずかかにしていた あの おとこのこ」が、「メアリの あたらしい しやくしょの ボイラーに」すればいいと言って、彼はいっきに物語りのヒーローになってしまいます。

実は（これも邦訳版では省かれています）原書では、このことば“Let her be the furnace for the new town hall *”に、*じるしが付いています。また、ページの下に小さい文字で“Acknowledgments to Dickie Birkenbush”（ディッキィ・バーケンブッシュに感謝して）と書かれています。これだけなので、読者には謎でしたが、バーバラ・エルマンの伝記『ヴァージニア・リー・バートン』が出て、謎がとけました。

この絵本の製作中のこと、バートンは当時13歳のディック・バーケンシップという少年のいる家へ、少年のおばあさんを訪ねて行きました。そしてたまたま、バートンが「困ったことがあるの。私、スチーム・ショベルに市役所の地下室をほらせたんだけど、どうやって外に出したらいいかわからないのよ」（宮城正枝訳）と言ったのでした。すると、ディック少年は自分だったらどうするか考えて、夕食が終わる前に「地下室に置いたままにして、ボイラーにしたらいんじゃないの？」と言ったそうです。2年後に彼の元へ、バートンから新刊のサイン入りの『マイク・マリガンとスチーム・ショベル』が届き、開くと自分のことばに*がついて、名前が書かれていて、びっくりしたというのです。これは、まさに作家のシンセリテイですね。ついでに、『ヴァージニア・リー・バートン』にはまた、バートンの次男マイケルの思い出も載っています。「母はこの本を書きながら、試しに部分部分を私や兄や近所の子どもたちを集めて、読んで聞かせました。僕たちがもじもじはじめると、母は言うのです。もう一度書き直してくるわってね。」

『ちいさいおうち』は、なんと言ってもバートンの代表作です。いいえ、アメリカ絵本史におけ

る金字塔の一つです。この作品については、すでにいろいろ語られてきました。皆さんもこの絵本には、子どもさんとのかかわりで多くの経験をお持ちでしょう。ですからここでは、話を2、3のことにとどめさせていただきます。

バートンはこの絵本でも、まずは絵で物語を語ったと言っています。それから、全場面を、アトリエの壁に並べて貼ってみて、（完璧主義者でしたから）自分が納得するまで何度も描き直しました。破棄した絵の数はたいへんなものだったといえます。そうして絵が出来上がると、あらかじめテキストのスペースとして空けておいたところへ、用意した文を入れていくのですが、当然そこで、文を縮めたり、延ばしたりしなければなりません。こうしてテキストが完成するのだそうですが、仕上がったテキストを読んで、全く無理のない、自然で、過不足を少しも感じさせないテキストであるのに、改めておどろき、これはまさに神業、と言いたくなります。

この物語には、生活に便利な都市化が進むことへの不安があって、他方、そのために田園の自然へのあこがれがあります。そのほぎまで、「しっかり じょうぶに たてられた」家ならば、心ある人によって生き続ける道が開かれる、という確信も語られています。また、『マイク・マリガンとスチーム・ショベル』では、マイクとスチーム・ショベルのメアリが、運河を掘り、山を切り拓き、線路を通し、ハイウエーや飛行場を作り、ビルの地下を掘るなど、盛んに開発に従事してきたことを、誇らしげに語る部分もあります。バートンの中には、そういう時代に肯定的な態度と、批判的な態度と、建設的な態度が、バランスよく均衡しあって、成熟した大人の態度を見ることができません。

『ちいさいおうち』の見返しでは、<ちいさいおうち>が6つ1列3段にパターン化されて描かれています。それぞれの<家>周囲と、前を通る乗り物に、変化が描きこまれています。初めは人が馬に乗っていますが、最後には馬を車に乗せて人が運んでいます。乗り物の進化が、巧みに、ユーモアをこめて、描かれています。2段目右端には、自動車がパンクして立ち往生している絵が描かれ

ていますが、これはタイヤがチューブに進化したことも語っています。

バートンは、絵の細部は、それ自身がなにかを語ると同時に、全体の一部としても機能していなければいけないと、言いました。たとえば、ブルトナーが<ちいさいおうち>の平穏な日常を破って、開発を開始する場面では、家のそばに老人が杖をついて立っています。さらに開発が進む次のページでは、老人はもう消えて、かたわらの木が今度はつかえ棒をされています。さらに次のページでは、その木が消えています。これらの細部は、それぞれ<ちいさいおうち>の苦境を物語ると同時に、それらの連続で、開発が喪失を引き起こすようすを描き出しています。部分が全体の一部として機能している実例の一つでしょう。

1940、1950、1960年代アメリカには、バートンに代表されるような、奇をてらうことのない、よい意味で健全な、成熟した大人の、中庸を尊ぶ絵本が多数生まれています。アメリカのよき時代のよき絵本たち、センダック出現までのアメリカ絵本に、私はかぎりない郷愁と、深い愛着を覚えています。

お手元の資料には、まだこの先にお話しする予

定の作家、作品が挙げてありますが、はや予定の時間が来てしまいました。マーガレット・ワイズ・ブラウンは『おやすみなさいのほん』(*A Child's Good Night Book*, 1943) でよく知られていて、この時期以後に大きい存在の一人になるのですが、さいわい次に三宅興子先生が取り上げてくださるようなので、バトンを三宅先生にお渡しさせていただきます。

ドクター・スース、この人もアメリカの<ほら話>の系譜に立つジャイアントの一人です。日本では渡辺茂男さんがいっしょうけんめい翻訳、紹介なさいましたが、日本人には何かいまいちアピールしない絵本作家のようです。しかし、この作家をはずしてアメリカ絵本史は語れません。また、そのためには少しゆとりをもってお話しをしなければならぬので、残念ながら時間切れで、今回は割愛をさせていただきます。

これまでご清聴をいただき、ありがとうございました。

(よしだ しんいち 国立国会図書館客員調査員、立教大学名誉教授)

「開花期―第二次世界大戦末まで」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	Clever Bill	William Nicholson 作・絵	Heinemann Young Books 1999, c1926	Y17-A6227
	かしこいビル	ウィリアム・ニコルソン 著 まつおかきょうこ, よしだしんいち 訳	ペンギン社 1982.6	Y17-9393
2	Millions of cats	Wanda Gag 作・絵	Coward-McCann 1977, c1956	Y19-A669
	100まんびきのねこ	ワンダ・ガグ 文・絵 いしいももこ 訳	福音館書店 昭和36	児726-cG13h
3	Miki	The Petershams 作・絵	Doubleday 1929	所蔵なし
4	Angus and the ducks	Marjorie Flack. 作・絵	Doubleday c1930	Y17-A4292
	アンガスとあひる	マージョリー・フラック 著・絵 瀬田貞二 訳	福音館書店 1974	Y17-4234
5	The Christ child	Matthew and Luke 作 Maud and Miska Petersham 絵	Doubleday c1931	Y19-A164
6	Daniel Boone	Feodor Rojankovsky 絵	Domino Press [1931]	Y17-A7889
7	Ola	Ingri & Edgar Parin d'Aulaire 作	Doubleday c1932	Y17-A3609
	オーラのたび	ドーレア 夫妻 作 吉田新一 訳	福音館書店 1983.3	Y17-9314
8	Ask Mr. Bear	Marjorie Flack 作・絵	Simon & Schuster Books for Young Readers c1932	Y17-A6478
	おかあさん だいすき	[マージョリー・フラック 著・絵]	岩波書店 1954.4(第6刷:1961.11)	Y18-N03-H502
9	The story about Ping	Marjorie Flack 作 Kurt Wiese 絵	Viking c1933	Y17-B4872
	あひるのピンのぼうけん	マージョリー・フラック ぶん クルト・ヴィーゼ 絵 まさきりこ 訳	瑞雲舎 1994.11	Y18-9797
10	The ABC Bunny	Wanda Gag 作・絵	University of Minnesota Press 2004	Y17-B8950
11	Donkey-donkey	Roger Duvoisin 作・絵	Whitman 1933	所蔵なし
	ロバのロバちゃん	ロジャー・デュボアザン ぶん・絵 くりやがわけい 訳	偕成社 1969.5 (28刷:2002.12)	Y18-N03-H355
12	The little auto	Lois Lenski 作・絵	Random House c1962, 2001 printing	Y17-B596
	ちいさいじどうしゃ	ロイス・レンスキー ぶん・絵 わたなべしげお 訳	福音館 1971	Y17-3526
13	Hansi	Ludwig Bemelmans 作・絵	Viking Press 1934.	Y8-B2716
	山のクリスマス	ルドウィヒ・ベームエルマン 文・絵 岩波書店 編	岩波書店 昭和28	児943-cB45yl

開花期―第二次世界大戦末まで

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
14	Mister Penny	Marie Hall Ets作・絵	Viking Press 1935	所蔵なし
	ペニーさん	マリー・ホール・エッツ作・絵 松岡享子訳	徳間書店 1997.6	Y9-M97-22
15	Gone is gone, or the story of a man who wanted to do housework	Wanda Gag 作・絵	University of Minnesota Press 2003	Y17-B4099
	すんだことはすんだこと：または家のしごとがしたくなったおやじさんのお話	ワンダ・ガアグ作・絵 佐々木マキやく	福音館書店 1991.5	Y8-8287
16	The Easter Rabbit's Parade	Lois Lenski 作・絵	Oxford University Press 1936	所蔵なし
17	The story of Ferdinand	Munro Leaf 作 Robert Lawson 絵	Hamish Hamilton 1966	Y19-A356
	はなのすきなうし	マンロー・リーフ文 ロバート・ローソン絵 岩波書店訳編	岩波書店 昭和29	児726.7-cL43hl
18	Seven Simeons : a Russian tales	Boris Artzybasheff 絵	Viking Press 1937	所蔵なし
19	And to think that I saw it on Mulberry Street	Dr. Seuss 作・絵	Random House c1964	Y17-A7888
	マルベリーどおりのふしぎなできごと	ドクター・スース作 渡辺茂男訳	日本パブリッシング 1969	Y7-1549
20	Choo choo	Virginia Lee Burton 作・絵	Houghton Mifflin c1965	Y19-A788
	いたずらきかんしゃちゅうちゅう	バージニア・リー・バートン ぶん・え むらおかはなこやく	福音館書店 1961.8	Y18-N03-H555
21	Animals of the Bible	Dorothy P. Lathrop 作	HarperCollins c1965	Y5-A12
22	Andy and the lion	James Daugherty 作・絵	Viking press 1938, c1966	Y19-A623
	アンディとらいおん	ジェームズ・ドーハーティ ぶん・え むらおかはなこやく	福音館書店 1961.8	Y18-N03-H514
23	The five Chinese brothers	Claire Huchet Bishop 作 Kurt Wiese 絵	Coward-McCann c1938	Y17-A1161
	シナの五にんきょうだい	クレール・H.ビショップぶん クルト・ヴィーゼえ かわもとさぶろうやく	瑞雲舎 1995.10	Y18-11201
24	The story of a baby	Marie Hall Ets 作・絵	Viking Press 1939	所蔵なし
	赤ちゃんのはなし	マリー・ホール・エッツぶん・え 坪井郁美やく	福音館書店 1982.6	Y11-1829
25	Madeline	Ludwig Bemelmans 作・絵	Simon and Schuster c1939	Y17-B3599
	げんきなマドレーヌ	ルドウィッヒ・ベームルマンズ作・画 瀬田貞二訳	福音館書店 1972	Y17-3889

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
26	Little Toot	Hardie Gramatky 作・絵	G.P. Putnam's Sons 1992. c1967	Y17-A6361
	ちびっこタグボート	ハーディー・グラマトキーさく わたなべしげおやく	学習研究社 2005.7	Y9-N05-H297
27	Mike Mulligan and his steam shovel	Virginia Lee Burton 作・絵	Houghton Mifflin c1967	Y17-A6235
	マイク・マリガンとスチーム・ショベル	バージニア・リー・バートン ぶん・え いしいももこやく	福音館書店 1978.4	Y17-5742
28	Horton hatches the egg	Dr. Seuss 作	Random House 1968, c1940	Y17-A510
	ゾウのホートンたまごをかえす	ドクター=スースさく 前田三恵子やく 横山隆一え	学習研究社 1975.11	Y9-N04-H217
29	Lentil	Robert McCloskey 作・絵	Puffin Books 1978, c1968	Y17-A7548
	ハーモニカのめいじんレンティル	ロバート・マックロスキーぶんとえ まさきりこやく	国土社 2000.9	Y18-N00-340
30	Pat the bunny	Dorothy Kunhardt 作	Simon and Schuster 1940	所蔵なし
	ぱたぱたバニー	ドロシー・クンハート作 すえよしあきこ訳	講談社 2003.3	Y18-N03-H184
31	Curious George	H.A. Rey 作・絵	Houghton Mifflin c1993	Y17-A5090
	ひとまねこざるときいろいぼうし	H.A. レイ文,絵 光吉夏弥訳	岩波書店 1998.2	Y18-M98-283
32	Make way for ducklings	Robert McCloskey 作	Viking Press 1941, c1969	Y19-A840
	カモさんおとおり	ロバート・マックロスキー著 磯貝瑤子訳	日米出版社 昭和25	児726.7-cM47k
	かもさんおとおり	ロバート・マックロスキー文・絵 わたなべしげお訳	福音館書店 昭和40	Y7-240
33	The seashore noisy book	Margaret Wise Brown 作 Leonard Weisgard 絵	HarperCollins 1993, c1941	Y17-A6471
	うみべのおとのほん	マーガレット・ワイズ・ブラウン 文 レナード・ワイズガード絵 江國香織訳	ほるぷ出版 2007.8	Y18-N07-H289
34	The little house	Virginia Lee Burton 作・絵	Houghton Mifflin c1969	Y19-A845
	ちいさいおうち	ば-じにあ・ば-とん文・絵 岩波書店訳編	岩波書店 昭和29	児933-cB974tl
35	The runaway bunny	Margaret Wise Brown 作 Clement Hurd 絵	Harper Collins 1991, c1972	Y17-A21
	ぼくにげちゃうよ	マーガレット・ワイズ・ブラウン ぶん クレメント・ハードえ いわたみみやく	ほるぷ出版 2003.7	Y18-N03-H326
36	Tall book of Mother Goose	F. Rojankovski 作	Harper & Bros 1942	所蔵なし

開花期—第二次世界大戦末まで

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
37	Many moons	James Thurber 作 Louis Slobodkin 絵	Harcourt Brace Jovanovich c1971	Y19-A851
	たくさんのお月様	ジェイムズ・サーバー原著 ルイス・スロボドキン画 光吉夏弥訳	日米出版社 1949.12	Y9-N07-H129
38	Don't count your chicks	Ingri & Edgar Parin d'Aulaire 作	Doubleday c1943	Y17-A3605
	ひよこのかずはかぞえるな	イングリとエドガー・パーリン・ ドーレアさく せたていじやく	福音館書店 1978.2	Y17-5676
39	A child's good night book	Wise Brown 作 Jean Charlot 絵	HarperCollins 1992, c1978	Y17-A649
	おやすみなさいのほん	マーガレット・ワイズ・ブラウン ぶん ジャン・シャローえ いしいももこやく	福音館書店 1962.1	Y18-N03-H513
40	In the forest	Marie Hall Ets 作・絵	Puffin Books 1976, c1972	Y17-A2772
	もりのなか	マリー・ホール・エツツ文・絵 まさきりこ訳	福音館書店 昭和38	Y17-16
41	The carrot seed	Ruth Krauss 作 Crockett Johnson 絵	HarperCollins c1973	Y17-A6407
	ぼくのにんじん	ルース・クラウスさく クロケット・ジョンソンえ わたなべしげおやく	ペンギン社 1980.9	Y18-N07-H386
42	Pletzel	H.A. & Margaret Ray 作・絵	Harper 1944	所蔵なし
	どうながのプレツェル	マーグレット・レイぶん H.A.レイえ わたなべしげおやく	福音館書店 1978.10	Y17-6068
43	The rooster crows	Maud and Miska Petersham 作・絵	Macmillan Publishing Co. c1973	Y19-A852
44	Rain drop splash	Alvin Tresselt 作 Leonard Weisgard 絵	Mulberry Books 1990, c1974	Y17-A1046
	あまつぶぼとりすぶらっしゅ	アルビン・トゥレスェルトさく レナード・ワイスガードえ わたなべしげおやく	童話館出版 1996.6	Y18-12533
45	The little island	Golden MacDonald 作 Leonard Weisgard 絵	Doubleday & Co. c1946	Y19-A830
	ちいさな島	ゴールデン・マクドナルドさく レナード・ワイスガードえ 谷川俊太郎やく	童話館出版 1996.9	Y18-M97-4
46	White snow bright snow	Alvin Tresselt 作 Roger Duvoisin 絵	Lothrop, Lee & Shepard c1947	Y17-B5099
	しろいゆきあかるいゆき	アルビン・トゥレスェルトさく ロジャー・デュボアザンえ えくにかおりやく	ブックローン出版 1996.1	Y18-11585

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
47	Oley, The sea monster	M.H.Ets作・絵	Viking press 1947	所蔵なし
	海のおばけオーリー	マリー・ホール・エツ文・絵 岩波書店編	岩波書店 1954	児933-cE85u
48	Stone soup : an old tale	Marcia Brown作・絵	Scribner c1947	Y17-A1859
	せかい おいしいスープ：あるむかし ばなし	マーシャ・ブラウンさいわ・え わたなべしげおやく	ペンギン社 1980.2	Y17-7394
49	Goodnight moon	Margaret Wise Brown作 Clement Hurd絵	Harper Trophy [1982], c1975	Y17-A8042
	おやすみなさいおつきさま	マーガレット・ワイズ・ブラウンさく クレメント・ハードえ せたていじやく	評論社 1979.9	Y17-6637
50	Blueberries for Sal	Robert McCloskey作・絵	Viking Press 1948, c1976	Y17-A433
	サリーのこけももつみ	ロバート・マックロスキー文・絵 石井桃子訳	岩波書店 1976.12	Y17-5097
51	The big snow	Berta and Elmer Hader作・絵	Simon & Schuster Books for Young Readers c1976	Y17-A521
52	Wait till the moon is full	M.W.Brown作 Garth williams絵	Harper 1948	所蔵なし
	まんげつによるまでまちなさい	マーガレット・ワイズ・ブラウン さく ガース・ウィリアムズえ まつおかきょうこやく	ペンギン社 1978.7	Y18-N02-8
53	Cowboy Small	Lois Lenski作・絵	Random House c1977, 2001 printing.	Y17-B598
	カウボーイのスモールさん	ロイス・レンスキーぶん・え わたなべしげおやく	福音館書店 1971	Y17-3614
54	The happy day	Ruth Krauss作 Marc Simont絵	Harper & Row c1949	Y17-A3599
	はなをくくん	ルース・クラウス文 マーク・サイモント絵	福音館書店 昭和42	Y17-248
55	Song of the swallows	Leo Politi作・絵	Scribner 1949, c1948	Y19-A834
	ツバメの歌	レオ・ポリティ文・絵 岩波書店訳編	岩波書店 昭和29	児726.7-I922t
56	My world : a companion to goodnight moon	Margaret Wise Brown作 Clement Hurd絵	HarperCollins c1977	Y17-A8034
	ぼくのせかいをひとまわり	マーガレット・ワイズ・ブラウン ぶん クレメント・ハードえ おがわひとみやく	評論社 2001.10	Y18-N01-456
57	The important book	Margaret Wise Brown作 Leonard Weisgard絵	HarperCollins Publishers c1977	Y17-B2726
	たいせつなこと	マーガレット・ワイズ・ブラウン さく レナード・ワイズガードえ うちだややく	フレーベル館 2001.9	Y18-N01-398

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
58	Petunia	Roger Duvoisin 作・絵	A.A. Knopf c1977	Y17-A6331
	ペチューニア	ロジャー・デュボアザンさく・え まつおかきょうこやく	日本パブリッシング 1970	Y7-2153
59	Homer Price	Robert McCloskey 作・絵	Viking Press 1943, c1971	Y8-A1043
	ゆかいなホームーくん	ロバート・マックロスキー文・絵 石井桃子訳	岩波書店 昭和40	Y7-284
60	One morning in Maine	Robert McCloskey 作・絵	Viking Press 1952	Y17-A3608
	海へのあさ	ロバート・マックロスキー文・絵 石井桃子訳	岩波書店 1978.7	Y17-5930
61	Time of wonder	Robert McCloskey 作・絵	Viking Press 1957, c1985	Y19-A839
	すばらしいとき	ロバート・マックロスキーぶんとえ わたなべしげおやく	福音館書店 1978.7	Y17-5919
62	Burt Dow:deep-water man	Robert McCloskey 作・絵	Virking Press [1963]	所蔵なし
	沖釣り漁師のバート・ダウじいさん： 昔話ふうの海の物語	ロバート・マックロスキーさく わたなべしげおやく	ほるぶ出版 1976.9	Y17-5248
63	アメリカのむかし話	渡辺茂男編訳	偕成社 1977.12	Y7-6391
64	すばらしいとき：絵本との出会い	渡辺茂男著	大和書房 1984.7	UG71-47 ※
65	A sense of wonder	Rachel Carson 著 Charles Pratt 著		所蔵なし
	センス・オブ・ワンダー	レイチェル・カーソン〔著〕 上遠恵子訳	新潮社 1996.7	M71-G3
66	Calico, the wonder horse, or, The saga of Stewy Stinker	Virginia Lee Burton 作・絵	Houghton Mifflin 1997	Y17-A6229
	名馬キャリコ	バージニア・リー・バートンえ・ぶん せたていじやく	岩波書店 1969	Y17-608
67	Song of Robin Hood	Anne Malcolmson 編 Virginia Lee Burton 絵	Houghton Mifflin c1975	YMZ-A16
68	Life story	Virginia Lee Burton 作・絵	Houghton Mifflin c1990	Y17-A6239
	せいめいのれきし	バージニア・リー・バートン文・絵 いしいももこやく	岩波書店 昭和39	Y11-94
69	Virginia Lee Burton : a life in art	Barbara Elleman 作	Houghton Mifflin 2002	Y6-B51
	ヴァージニア・リー・バートン： 『ちいさいおうち』の作者の素顔	バーバラ・エルマン〔著〕 宮城正枝訳	岩波書店 2004.3	KC511-H33 ※
70	あかいくるまのついたはこ ：モウドとミスカ・ピーターシャムの えほん	モウドとミスカ・ピーターシャム作 渡辺茂男訳	童話館 1995.3	Y18-10706
71	The velveteen rabbit, or, How toys become real	Margery Williams 作 William Nicholson 絵	Delacorte Press [1991]	Y8-A6033
	ピロードうさぎ	マージェリィ・ウィリアムズぶん いしいももこやく ウィリアム・ニコルソンえ	童話館出版 2002.3	Y9-N02-120

レジュメ

アメリカの絵本発展期—1940—50年代—

三宅 興子

1940—50年代のアメリカの絵本は、今日でも読みつがれている作品を数多く残しています。レオ・レオーニやトミ・ウンゲラー、マーシャ・ブラウンやバーバラ・クーニーと名前をあげていくと、オリジナリティがあって、しかもわかりやすく深いものを表現できた画家が大勢いたことがわかります。その理由を考えていきます。

1. 日本への影響から

- ・1945年以後のアメリカの政策
- ・「岩波の子どもの本」(1953年から)
- ・「世界傑作絵本」(福音館書店、1961年から)

(参考文献：『日本における子ども絵本成立史』ミネルヴァ書房)

- ・現在も復刻されている40—50年代の絵本

2. アメリカにおける背景

- ・児童図書館のネットワーク
- ・書評雑誌 *Horn Book Magazine*
- ・1938年のコールデコット賞の制定
- ・アメリカ・グラフィック・アート協会による「児童書展」の開催(1942年より)

3. アメリカの絵本の特徴

- ・多文化を受け入れている国として

わかりやすさ 編集者の役割の大きさ
画家の出身地域や国の文化背景

普遍性と独自性という重層

4. 1940-50年代の外国からきた絵本画家

- ・第二次世界大戦の影響 多国籍の画家が集まる
- ・レオ・レオーニ(1910-99)の場合

・トミ・ウンゲラー (1931-) の場合

・ロジャー・デュボアザン (1904-80) の場合

5. アメリカ生まれの絵本画家

・クレメント・ハード (1908-88)

『おやすみなさい おつきさま』 (1947)

・ガス・ウィリアムズ (1912-96)

『しろいうさぎとくろいうさぎ』 (1958)

6. 二人のアメリカを代表する絵本画家

(ア) マリー・ホール・エッツ (1893-1984)

『もりのなか』 (1944)

(イ) マーシャ・ブラウン (1918-)

『三びきのやぎのがらがらどん』 (1957)

7. アメリカの絵本のなかの日本

(ア) 八島太郎 (1908-94)

『からすたろう』 (1955)

『あまがさ』 (1958)

8. なぜ、いま、1940—50年代の絵本なのか

アメリカの絵本発展期・追加

1. 取り上げる価値のある画家は、大勢います

Robert Lawson

Robert McCloskey

Virginia Lee Burton

Marc Simont

Barbara Cooney

Ezra Jack Keats

その他、多数

2. ドクター・スースについて

The Cat in the Hat, 1957 刊行50年記念絵本が出ている

3. ディズニーの絵本

4. 「ゴールデンブックス」— 書店以外でも販売したアメリカの絵本といえば、これ
1942年創刊

そこから生まれたキャラクター

活躍した画家

Randolph Caldecott Medal (コールデコット賞)

年	書名	画家	作家	当館請求記号
1938	Animals of the Bible	Dorothy P.Lathrop		Y5-A12
1939	Mei Li	Thomas Handforth		Y17-B8274
1940	Abraham Lincoln	Ingri&Edgar Parin D'Aulaire		Y3-A82
1941	They Were Strong and Good	Robert Lawson	Robert Lawson	Y19-L425-A303
1942	Make Way for Ducklings	Robert McCloskey	Robert McCloskey	Y19-M127-A840
1943	The Little House	Virginia Lee Burton	Virginia Lee Burton	Y19-B974-A845
1944	Many Moons	Louis Slobodkin	James Thurber	Y19-S634-A851
1945	Prayer for a Child	Elizabeth Orton Jones	Rachel Field	Y19-J76-A353
1946	The Rooster Crows	Maud and Miska Petersham		Y19-P484-A852
1947	The Little Island	Leonard Weisgard	Golden MacDonald pseud	Y19-W427-A830
1948	White Snow,Bright Snow	Roger Duvoisin	Alvin Tresselt	Y17-D987-A623
1949	The Big Snow	Berta Harder, Elmer Hader		Y17-H128-A521
1950	Song of the Swallows	Leo Politi		Y19-P769-A834
1951	The Egg Tree	Katherine Mihous	Katherine Milhous	Y19-M644-A829
1952	Finders Keepers	Will and Nicokas	Will and Nicokas	Y17-W689-A408
1953	The Biggest Bear	Lynd Ward		Y19-W259-A345
1954	Madeline's Rescue	Luding Bemelmans	Luding Bemelmans	Y17-B455-A652
1955	Cinderella	Marcia Brown	Charles Perrault	Y17-B879-A442
1956	Frog Went A-Courtin'	Feodor Rojankovsky	再話 John Langstaff	Y19-R741-A359
1957	Tree Is Nice	Marc Simont	Janice May Urdy	Y19-S611-A835
1958	Time of Wonder	Robert McCloskey	Robert McCloskey	Y19-M127-A839
1959	Chanticleer and the Fox	Barbara Cooney	Geoffrey Chaucer	Y19-C775-A848
1960	Nine Days to Christmas	Marie Hall Ets	Marie Hall Ets and Aurora Labastida	Y19-E85-A849
1961	Baboushka and the Three Kings	Nicolas Sidjakov	Ruth Robbins	Y17-S568-A646
1962	Once a Mouse ...	Marcia Brown		Y19-B879-A346
1963	Snowy Day	Ezra Jack Keats		Y17-K25-A747
1964	Where the Wild Things Are	Maurice Sendak	Maurice Sendak	Y17-S474-A746
1965	May I Bring a Friend?	Beni Montresor	Beatrice Schenk de Regniers	Y17-M811-A518
1966	Always Room for One More	Nonny Hogrogian	Sorche Leodhas	Y19-H716-A360
1967	Sam,Bangs,and Moonshine	Evaline Ness	Evaline Ness	Y19-N463-A358
1968	Drummer Hoff	Ed Emberley		Y19-E53-A189
1969	The Fool of the World and the Flying Ship	Uri Shulevitz	再話 Arthur Ransome	Y17-S562-A409
1970	Sylvester and the Magic Pebble	William Steig	William Steig	Y17-S818-A4307
1971	A Story, a Story	Gail E. Haley	再話 Gail E. Haley	Y19-H168-A343
1972	One Fine Day	Nonny Hogrogian		Y17-H716-A126
1973	The Funny Little Woman	Blair Lent	再話 Arlene Mosel	Y17-L574-A3639
1974	Duffy and the Devil	Margot Zemach	再話 Harve Zemach	Y17-Z53-A3606
1975	Arrow to the Sun	Gerald McDermott		Y19-M134-A720
1976	Why Mosquitoes Buzz in People's Ears	Leo and Diane Dillon	再話 Verna Aardema	Y19-D579-A351
1977	Ashanti to Zulu	Leo and Diane Dillon	Margaret W.Musgrove	Y19-D579-A310
1978	Noah's Ark	Peter Spier		Y19-S755-A844
1979	The Girl Who Loved Wild Horses	Paul Goble	Paul Goble	Y19-G575-A363
1980	Ox-Cart-Man	Barbara Cooney	Donald Hall	Y19-C775-A832
1981	Fables	Arnold Lobel		Y19-L797-A850
1982	Jumanji	Chris Van Allsburg		Y17-V217-A904
1983	Shadow	Marcia Brown	原作 Blaise Cendrars	Y19-B879-A842
1984	The Glorious Flight	Alice & Martin Provensen		Y19-P969-A843
1985	Saint George and the Dragon	Trina Schart Hymen	再話 Margaret Hodges	Y17-H996-A315
1986	The Polar Express	Chris Van Allsburg	Chris Van Allsburg	Y19-V217-A833
1987	Hey, Al	Richard Egelski	Arthur Yorinks	Y19-E29-A347
1988	Owl Moon	John Schoenherr	Jane Yolen	Y19-S365-A838
1989	Song and Dance Man	Stephen Gammell	Karen Ackerman	Y17-G193-A577
1990	Lon Po Po	Ed Young		Y17-Y71-A639
1991	Black and White	David Macaulay	David Macaulay	Y17-M117-A414
1992	Tuesday	David Wiesner	David Wiesner	Y17-W651-A620
1993	Mirette on the High Wire	Emily Arnold McCully	Emily Arnold McCully	Y17-M133-A470
1994	Grandfather's Journey	Allen Say	Allen Say	Y17-S274-A1228
1995	Smoky Night	David Diaz	Eve Bunting	Y17-D542-A599
1996	Officer Buckle and Gloria	Peggy Rathmann	Peggy Rathmann	Y17-R234-A446
1997	Golem	David Wisniewski	David Wisniewski	Y17-W815-A899
1998	Rapunzel	Paul O. Zelinsky		Y17-Z49-A2780
1999	Snowflake Bentley	Mary Azarian	Jacqueline Briggs Martin	Y11-A1008
2000	Joseph Had a Little Overcoat	Simms T aback		Y17-T112-A6368
2001	So You Want to be President?	David Small	Judith St. Georg	Y1-A126
2002	The Three Pigs	David Wiesner		Y17-W651-A7994
2003	My Friend Rabbit	Eric Rohmann		Y17-R738-B2083
2004	The Man Who Walked between the Towers	Mordicai Gerstein		Y17-G383-B3054
2005	Kitten's First Full Moon	Kevin Henkes		Y17-H513-B3983
2006	The Hello, Goodbye Window	Chris Raschka	Norton Juster	Y17-R223-B4475
2007	Flotsam	David Wiesner		Y17-W651-B7868

発展期—第二次世界大戦後

三宅 興子



はじめに—アメリカ絵本の発展期を語ること

おはようございます。私は「イギリスの絵本のことでしたら何でも聞いて」というところがあるのですが、アメリカの絵本については、60年代から70年代にかけて子どもの本についてアメリカで勉強していた時に、リアルタイムでいろいろ見ているのですが、研究者としてあまり見たことがありませんでした。アメリカ絵本史も、1冊だけアメリカで大部なものが出ているのですが、パースペクティブに程よくまとめたものは、日本でもアメリカでもまだない状況の中で、アメリカ絵本の発展期について話をするようにという課題をいただいたのは、私にとって非常にいい機会になりました。

本当に百花繚乱といいますか、この時期は20年代、30年代の後を受けて、いろいろな才能がニューヨークめがけてやってきて、そこで花開くのですね。それをどんな形でお伝えするのかというのはとても大きな課題でした。うまくいくかどうかわかりませんが、やってみます。

動物のイメージを探って

昨日の吉田先生のご講義の終わりのときに、アメリカ絵本のなかでライオンがたくさん出てくるという質問が出たのですけれども、私もずっと前から図像的なことに非常に興味があります。ライオンはイソップ寓話からずっと、絵として出てきているのですね。いたるところにライオンの図像、イメージ、イラストレーションがありまして、非常に奥深いものです。ですからインスタント的なお答えは難しい。

子どもの本の中にライオンが入ってきて、たとえばちょっと思い出しただけでも『ラチとらいお

ん』(*Laci es az Oroszlan*, 1961)というハンガリーの絵本があります。日本でもライオンを描いている画家がいますし、実際にライオンがいない国で、ライオンの図像がたくさんある、しかも子どもの本のなかに取り入れられて、非常に面白い形で使われているのは、考えるに値するテーマです。たぶん、ライオンは百獣の王、動物のなかでも一番の王だということがあると思うのですね。センダックが『ピエールとライオン』(*Pierre : a Cautionary Tale in Five Chapters and a Prologue*, 1962)という小さな本を描いているのですが、それなどはライオン像というものを頭のなかで咀嚼してイメージとして出してくる上で、一番いいヒントになる本ではないかと思います。百獣の王ですけれども、わあっと口を開けるとそこに吸い込まれそうな怖さがある。女の子の話でライオンが出てくるものもありますが、だいたい男の子(boy)の話が多いですよ。強くて怖いという二つの要素は、特に男の子の成長の上で欠かせない重要なキャラクターではないかな、と思います。

ライオンが活躍する一方で、ネズミも多いでしょう。最も力が弱くて、そのへんでちょろちょろして、でもがんばって繁殖していますよね。ネズミにもいろいろなイメージがくっついていて、絵本の歴史をたどっていきますと、ネズミの時代があると思うし、それから、今日お話しするところでは、ウサギが大活躍します。ウサギはちょっとおどおどしていて弱くて、でもかわいらしくてふわふわした感じで、触りたくなるようなイメージです。クマもあります。クマは猛獣なのにライオンとは全然違う役割で、やわらかくて「くま抱っこ」という感じで出てきます。

それぞれの子どもの本には動物の絵やイメージがあふれていて、それぞれ違いますけれども、絵本の歴史の上で「この時代にはクマが多いな」とか「この時代にはウサギが多いな」とか。今は何の時代かわかりますか。ブタです。ブタさん大活躍です。太っていて汚くてというイメージですね。なまけもので。でも今のブタってそれをひっくり返したようなイメージでたくさん出てきていますよね。バレリーナだったり。もともとの、いやしんぼうで、なまけもののイメージもどこかでは、残しながら新しい。どちらにしても動物は人間のシンボルですから、いろいろなものをそこに織り込むことができ、新しいキャラクターとして出ていますね。絵本というのは、描く側、作る側にとっては既成のイメージに対する挑戦なのですね。だから新しいいろいろなものが出てくる。

発展期の時代—日本への影響

絵本が出てくる土壌といいますか、歴史のようなものを考えていきますと、昨日、吉田先生がお話になったアメリカ絵本がガーッと出てくる時代というのは、アメリカの国自身も非常に力が強かった。国力が強い。いろいろなところで経済的な発展がありますから、そういう時期にはその国のいろいろなところにエネルギーが出てくるのですね。絵本にもとてもエネルギーが出てくる。昨日見せていただいたもののなかで、ほら話というのがありましたね。だんだんとエネルギーが爆発してくるような、ああいうのってやっぱりアメリカなのですね。

今日はそういうものを受けて次の時代にいくわけですが、子どもの研究といいますか、子どもがどんな本が好きか、わかってきたこともあって、少し心理的なものが加わってきて、いっそう発展していくのが大雑把に言えばこの時期だろうと思います。

それから日本人としてぜひ知っておかないといけないところは、用意しましたレジュメに簡単に書きましたとおり、日本への影響がすさまじくあったということです。というのは、日本の敗戦後、アメリカ軍がやってきて、日本のいろいろなところに、特に子どものことに関心を持った。ま

ず給食制度の中でパンとか粉ミルクとか、食料のような形で助けてくれた反面、日本の伝統食が少しずつ変わっていく契機にもなっています。

もう一つ大きかったのは図書館情勢でしょうか。日本人があんな無謀な戦争に踏み込んだのは、一方的な情報の制限があって、情報を自由に取れなかったからではないかとアメリカ軍は考えたようです。私が初めて1964年にアメリカに行ったときに、「こんな国と戦争をしたのか」と思いました。広さも豊かさもいろいろなものが違いすぎました。もしそのことを知っていたら、本気で「精神力で勝つ」なんて考えなかっただろうと素朴な印象としてありました。慶應義塾大学の図書館学科ができたのですが、その図書館学科で学ばれた方が、戦後のアメリカ絵本を私たちに紹介してくださいました渡辺茂男先生とか、大月ルリ子さんです。また、東京子ども図書館を作られた松岡享子さんとか、いろいろな方に大きな影響を与えていった。それからまた、石井桃子さんも、編集者としてアメリカをずっと旅をして歩かれて、編集者とか司書とか、いろいろな人にお会いになって、子どもの本のあり方を聞いてこられた。そういうものを参考にして、戦後の日本は始まりました。

アメリカは第二次世界大戦といっても、前の時代とそんなに途切れて次の戦後が始まっているわけではない。しかし日本の場合は、ばさっと一回切れまして、戦後にリセットするような形で、違うものを入れながらやってきた。今また「戦後すぐにアメリカ一辺倒ではなかった」ということを、みな一所懸命言っている時期に入りましたが、すごく影響は大きかったと思うのですね。そこで翻訳され紹介されお手本になっていったものというのが、アメリカのこの時代—20年代、30年代、40年代、50年代、60年代くらいの絵本の数々だったと思います。

たとえば、今も出ている「岩波の子どもの本」ですが、あの中には『ちいさいおうち』(*The Little House*, 1942)とか、『はなのすきなうし』(*The Story of Ferdinand*, 1936)とか、アメリカ絵本がいっぱい入っています。アメリカ絵本でないものも、一度英語を通して輸入されているケースが多い。「岩波の子どもの本」については様々

な参考書もありますので、これくらいにとどめま
すけれども、そういうものを見て「絵本にもこん
なものがあるのか」と目覚めた人たちは多かつた
のです。それから福音館書店が「世界傑作絵本」
というシリーズを出し始めます。これは「岩波の
子どもの本」が同じ大ききで同じスタイルにし、
横書きで左から開けるものを、右で縦書きの形に
無理やり押し込んで同じ形にとどめたので、「これ
では絵本の面白さがかなり減る」ということで、
できるだけ原著に近い形で出していく、というこ
とを始めました。現在も出版され続けているもの
も多いです。そういうことにつきまして、『日本
における子ども絵本成立史：「こどものとも」が
はたした役割』（三宅興子編著 ミネルヴァ書房
1997）の中で、簡単ですが一覧表を挙げて、どう
いう影響があったのかを書いていますので、この
件もこのくらいにしておきます。

そして、もう一つこの時代で大きいのは、現在
も40年代、50年代の絵本はたくさん私たちの身近
に生き残っているのですね。絵本というのは、
100年以上生き延びる本は本当に少ないです。一
世代は大丈夫ですが、次の世代というのはなかなか
難しい。今その境目で、40年代、50年代の絵本
が今の世代に受け継がれるかどうかのところにか
かっている。また、新たに、一度翻訳されて消え
ていたものが、復刊という形で出ています。自分
が子ども時代に楽しんだ本が今ないというので、
出版社に声を届けて復刊する、というのもあるの
です。「1年間に出た絵本であなたほどの絵本を
推薦しますか」といったアンケートが来た場合、
その1年間に出たものをずっと見ていったとき
に、新刊とは「どこか違うな」と思うものが入っ
ています。出版年を調べると、だいたい50年代く
らいにアメリカで出ていた絵本で、一度出版され
ているけれども途切れたものとか、なんらかの形
でその時代には紹介されなかったもので、絵本の
持っている空気が全然違うのです。「えーっ、こ
んなのが新刊本として出た」という感慨がありま
して、それを出版しようとした気持ちがよくわ
かったりします。現在の絵本の持っているものと、
そこに成立している世界が全然違って、その
世界に対しては「いいなあ」と思う気持ちを読者

である私が持つということだろうと思います。そ
れがどういうものかということも、今日、もしか
してお話しできればいいと考えているテーマの一
つです。

アメリカにおける背景

これは前置きで、アメリカの絵本のことを言わ
ないといけないのですが、アメリカの絵本を考え
ていくときに、いくつかの要素があると思います。
一つは、非常に装丁の立派な、経済的にも非常に
高い絵本が潤沢に出ていた時代は、児童図書館と
いいますか、図書館の子ども室のようなものが、
予算を潤沢に使えた時代だったかな、と思います。
いいものを出してクオリティが高ければ図書館が
買ってくれるから、ある冊数は期待できるのです
ね。もしコールデコット賞のようなプラスアル
ファのものがつければ、世界的に売れるという結果
にもなります。

そういうものを理論的に支えたものとして、今
も続いている書評雑誌の *Horn Book Magazine* が
あります。功罪はあると思いますが、新刊書が出
ると出版社がここに送るのですね。そして書評に
取り上げてもらおうとする、書評に取り上げられ
て一定の評価を受けると、この雑誌をチェックし
ている人は多いので、かなり売れ行きが期待でき
るし、また書評する人たちに対する信頼性も高
かったと思います。いろいろな子ども観がありま
すから、ある人がいい絵本だといっても、こっち
の人は「こんなのひどい」と思うようなことがあ
ります。そういうものを見る眼が、書評をする人
たちの中にもあったので、一定の信頼感はずっと
あって、石井桃子さんが戦前に子どもの本のこと
を勉強するのに、この雑誌を購読していて、情報
源だったといわれています。私も初めて子ども
の本を勉強したときには、*Horn Book Magazine*
を購読していましたし、それを見て学んでいま
したし、そこからいろいろな情報を得ることができ
ました。

もう一つ、1938年にコールデコット賞ができて
います。資料として一覧表をつけました。これは
国際子ども図書館に作ってもらったのですが、こ
れだけ見ていると、アメリカ絵本の歴史がわかり

ます。ここの図書館でも1冊を除いて全部持っているので、一度チェックしたら面白いと思います。最初の頃は、*Animals of the Bible* (1937 邦訳なし) とか、『エイブラハム・リンカーン』(*Abraham Lincoln*, 1939) とか、*They Were Strong and Good* (1940 邦訳なし) とか、ちょっと教訓的な、勉強になるような絵本が並んでいますが、その次には『カモさんおとおり』(*Make Way for Ducklings*, 1941) とか、『ちいさいおうち』(*The Little House*, 1942) とか、『たくさんのお月さま』(*Many Moons*, 1943) とか、物語本で今も読まれているものが出て、少しずつ考え方が変化しているのがわかると思います。この賞に入ると非常に売れるので、グッドクオリティのものを作ろうという、そういう動きともつながっていきました。

これで一概にアメリカ絵本が語れるというそうではなくて、本当の意味でのアメリカ絵本を作ったものは、実は賞など受賞していません。後で申し上げますが、ドクター・スース (Dr. Seuss) は受賞していない。トミ・ウンゲラー (Tomi Ungerer) の本も、本当に版を重ねていますが、この人も受賞していません。受賞リストには載らなかった作品にエリック・カール (Eric Carle) の『はらぺこあおむし』(*The Very Hungry Caterpillar*, 1969) があります。くいしんぼうのあおむしがどんどん食べていくというこの絵本は、世界的なベストセラーですが、受賞リストには入っていませんし、ここで漏れているものは意外に多いのです。それはどうしてかというところ、レジュメにも書いたのですが、アメリカ・グラフィック・アート協会 (American Institute of Graphic Arts) と関係があります。これはイラストレーターの業界団体です。その団体が、1942年からだったと思うのですが、子どもの本展 (Children's Book Show) をやりまして、グラフィックデザインから見てすぐれた子どもの本を選んで、それをアメリカのいろいろなところに持って行って、巡回していきました。これはグラフィックデザインをやっている若い人たちにとっては、大きな励みになったようです。つまりよいデザインをして、そこで認められると仕事がある。

それからもう一つ、この展覧会がすぐれていたところは、本というものを「もの」として、ジャケットから裏表紙まですべて神経が行き渡るような、そういう全体を対象としたものだったことです。装丁とか、タイポグラフィー、これは文字ですね、その内容にふさわしい文字のスタイルを選ぶ、それから紙の質とか大きさとか、様々な要素を入れて、トータルで絵本なんだ、ということを目に見えるような形で示していったわけです。

アメリカの絵本の特徴

それからもう一つ、レジュメの「アメリカの絵本の特徴」のところに「多文化を受け入れている国として」と書いたのですが、いろいろな人が集まって、「人種のるつぼ」ということが昔言われました。現在はそうではなく、違いを認めながら共生していく、という考え方に変わってきていますけれども。いろいろな国のものを受け入れていて、貪欲なところがありますが、そこで出されている本はどうしてもみんなにわかるものでなくてはいけない、というところがありました。アメリカの絵本が60年代、70年代の日本に受け入れられたのは、本当に平易でわかりやすく、見ればわかるというものであったからだと思います。そういうものを作る陰で編集者の役割が大きかった。昨日の吉田先生のお話でメイ・マッシーという人が紹介されましたが、出版社の児童書部門の長についている人たちは編集者としてすぐれていました。その人たちのアドバイスを聞いて、みんな「そうですか」と言って変えたりしている。面白いくらい権威を持っていたわけです。メイ・マッシーだけでなく、今日お話しするマーガレット・ワイズ・ブラウン (Margaret Wise Brown) もそういう仕事をしていますし、アーシュラ・ノードストロームも、非常に親分肌な人でいろいろな人を育てていますし、そのもとにいた人、ハーパーアンドロウ (Harper & Row) という出版社の児童書部門で働いていた人たちの中から、いろいろな編集者を生んでいます。私が面白いと思うのは、日本で絵本の名編集者といわれている松居直さんとか、至光社の武市八十雄さんとか、こぐま社の佐藤秀和さんとか、全部男性ですよ。アメリカ

の編集者は全部女性なんです。

もう一つ、名編集者のいろいろなアドバイスを聞いて、本が作られていったという良さと同時に弊害も—あまり語られていないことですが—あるのです。それは検閲 (censorship) です。必ずその人たちのお眼鏡にかなわないと次へ行けないわけですから、へたをすればいわゆる検閲になることがわかりますね。そのために出されなかった本も数々あります。見えないですけども。アメリカの絵本は全部そういうものを経て出てきているということを、どこかで私は忘れないでおきたいと思っています。アメリカで出版されようとすれば「違いを認めて共生していこう」だったらいいのですけれども、「こういうのだったらアメリカの子どもにわからないから、アメリカ文化に合うように変えてください」というふうに働いていった面がかなりあります。これは渡辺茂男先生にうかがった話ですけども、「くまくんの絵本」のシリーズの中にお風呂に入る絵本がありますが、日本のお風呂とアメリカのお風呂は全然違いますよね。アメリカで出すときにその場面だけ1枚書き直さなくてはならなかった、ということを知った覚えがあります。日本ではお風呂場の外で体を洗いますよね。その絵にはダメ出しがされたのです。いろいろな分野から貪欲に取り入れたんですけども、そこにはある種の検閲のようなものが働いていたということは、いつもどこかで忘れてはならないような気がします。そのときに一番大事なのは、子ども観だと思っています。「子どもに理解されるもの」というイメージがみんなのなかにあるとすれば、それによって慣らされていくといいますか、そういうものもうんとあった。そこをくぐり抜けていろいろな面白い本が出ているというの、一つの事実としてありますけれども。名編集者を讃えるあまり、そういう検閲の問題をおろそかにはできないかなと思います。その人たちが人種偏見主義者であったとか、そういうことを言っているのではなく、純粹に「アメリカの子どもたちに」という形で仕事をされたと思いますし、ある一定のイデオロギーに固まった人たちだと思いたくないのですが、今の目で見ると、この時代のアメリカ絵本が、白人的で中産階層よ

り上で、暖炉のある家で、みんなに「おやすみなさい」と言われて、広い子ども部屋があってそこで眠っているような子どもたち向けの絵本であったということは言えます。「それがなんで悪いねん」と言われるとそうではなくて、今の目から見ればそういう狭さを持っていた、ということです。このことは、すごく政治的な、ポリティカルなことに属するので、ポリティカルコレクト—政治的にみて正しい—という検閲がいいように働いているときにはいいのですが、そうでないときには違う結果を生むことにつながります。普段あまり意識されないことですが、子どもの本を見るときには、そのことは非常に大事なのではないかと思います。

なかなか本題に入りませんが、もう一つ。画家の出身地や国の文化背景をどんなふうに絵本に入れていったか、というのも非常に面白い話題です。簡単なことしか言えないのですが、いろいろな国の人たちがその文化を背負ってアメリカに来て、そこで自分の国の文化のにおいのするものを発表しましたから、そのことを考えていく上で、今のアメリカの国際戦略みたいなものと合わせ鏡にして考えていくと面白いかな、ということで今日はとどめたいと思います。

それからレジュメに書きました「普遍性と独自性という重層」。画家の方たちは、今までの人がやらなかった、自分のオリジナリティをものすごく大事にする人たちです。しかし、オリジナリティが行き過ぎると、だれにもわからない結果になる。時代を先に行き過ぎていても絵本は成立しません。子どもが共感できる共通の何かがあって、その層みたいなものを上手に作っていくところで絵本ができていくということがわかってきました。絵本というのは、資本主義の国、経済的に発達していく途上のところでだいたいどの国でも面白い成熟期を迎えています。アメリカもこの絵本の作り方みたいなものをわりといろいろな人がわかってきて、平均点以上のものが出せるようになってくる、という時期でもあるかと思っています。

1940—50年代の外国からきた絵本画家

以上をふまえて、具体的にどういう人がどうい

う作品を作ったのかに入っていきます。第一次世界大戦、第二次世界大戦の、ヨーロッパの人たちに与えた影響は多大でした。勝ち負けも大きかったし、人の行き来も大きかったし、それから自国文化のアイデンティティをどう考えるかということも大きかったですし、いろいろな問題を持っていたかな、と思います。吉田先生のお話のなかではピーターシャムという人たちが出てきますが、この人たちはハンガリーの出です。ドーレア夫妻はノルウェーですね。ロジャンコフスキーはロシア出身ですし、マーク・シーモントはパリ生まれのスペイン人。それから『げんきなマドレーヌ』(Madeline, 1939)を描いたベームエルマンズはオーストリア生まれ、チロルの人で、『山のクリスマス』(Hansi, 1934)という作品を描いて「岩波の子どもの本」になっています。フランソワはフランス生まれですし、クルト・ヴィーゼはドイツ人ですし、『ひとまねこぎる』(Curious George, 1941)を描いたH.A.レイという作家はドイツ系の人です。という風にちょっと取り出すだけでもかなりたくさんの方がアメリカに渡って、作品を発表しています。

そのどれにも触れる余裕がないので、今回はそういう人たちとはちょっと違う観点を持っているレオ・レオーニとトミ・ウンゲラーを取り出して、あと外国系の画家の代表としてデュボアザンという人を選んで、お話ししてみます。

レオ・レオーニ『あおくんときいろちゃん』

レオ・レオーニ (Leo Lionni) は、『あおくんときいろちゃん』(Little Blue and Little Yellow, 1959)という絵本で有名な方です。しかもこの絵本は1959年ですから、私が取り上げる時代では後の方の人ですが、この人は先ほど言いましたアメリカ・グラフィック・アート協会の会長をしていて、グラフィックアートの世界では幅広く仕事をした人なのです。この人が才能を発見して絵本の世界へいった画家たちもいて、大きい存在です。この人が絵本を作ったのは実はお孫さんのため、というか、ヨーロッパを旅していて汽車の旅だったそうで、汽車の退屈をまぎらせるために、紙をちぎってお話を描いたと伝えられています。“This

is little blue. Here he is at home with papa and mama blue.” “Little blue has many friends” というふうに進んでいきます。子どもと一緒にこの本を読むと、その後、みんなこの種のものを作りたがるのですよ。紙を置いておいたらちぎって。頭の中がものすごく活発になって、イメージーションが刺激されるようです。非常に素朴な発想でできている本のように一見思えるのですが、そこはグラフィックアーティストなのですね。余白の使い方とか、これなんかもなにも書いていませんが、“with papa and mama blue.” どっちがパパでどっちがママに見えますか。これもお友だちの家で、これも同じく両親と住んでいますが、これが家で、というふうに、そういわれると見える、というのがあります。たとえば、これは教室ですよ。 “In school they sit still in neat rows.” 教室ではしっかりと座っているのですが、“After school they run and jump.” これだけで放課後の喜びを表しています。抽象画の世界と通じるものがあると思うのですが。「こんな絵本みたことない」という…。これはあおくんが遊んでいるところですけれども、どうしてもきいろちゃんが見つからない、という場面がありまして、“He looked here and there” と、もうがっかりしているというか、バックの黒もあって思いますよね。そうしたら次のところでぱっと赤がある。こういう処理が本当に面白い本です。

『スイミー』など

レオーニは回顧展で見ると、美術家といいますが、アーティストとして、非常に幅広い仕事をしたのがわかります。そういう中から『あおくんときいろちゃん』をお作りになったのですが、これ以後、面白くなられたのか、『アレクサンダとぜんまいねずみ』(Alexander and the Wind-Up Mouse, 1969)ですとか、日本では『スイミー』(Swimmy, 1963)という作品が教科書にも載ったので、とても有名になったのですけれども。この小さな魚たちが、みんなで大きなものと戦っていく。それからこの『フレデリック』(Frederick, 1967)というネズミは詩人なのですね。みんながせつせと働いているときに、なんにもしないで

ぼーっとしているネズミなのです。自分の哲学を盛るとでもいうのですか、日本では谷川俊太郎さんというすばらしい訳者を得て、日本人の好みにも合ったのでしょうけれども、ずーっとたくさんの作品が翻訳されています。それは、この人の中に流れている戦後の平和への思いとか、アートへの思いとか、そういうものが非常にわかりやすいからでしょう。しかも『あおくんときいろちゃん』じゃないですが、始めは単なる丸に過ぎないものが、いろいろなものに見えてきたり、いろいろなことを自分の中で発展させていくことができ、多くの人に支持されたのだと思います。

作品は少しずつ、教訓的というのとは違いますが、わかりやすい形になっていきました。『フレデリック』は自叙伝として読めるのですが、「アートなんて何になるの」と汗水流して働いている人たちからは思われることに引け目のようなものを持っているのでは、と大人の読者には伝わるようなところがあります。普遍性とオリジナリティ(独創性)の層が一つの本になっているものが一番わかりやすい絵本画家ではないか、と考えています。

トミ・ウンゲラー 『すてきな三人ぐみ』

トミ・ウンゲラーを取り上げてみます。この人がアメリカ人といえるのか、アメリカの絵本と言っているのか、少し微妙なところがあるのですが、アメリカで主に仕事をしていて、そこで名前が出た方ですし、英語で発表しておられますので、そのように言ってもいいかなと思います。1931年の生まれで、今もお元気で活躍しておられるのですが、図書館的に言えば、アンゲラーとか、いろいろな訳名が出ていて、日本語でどんなものが出ているか検索するのが難しかったです。今は、たぶんウンゲラーでいたい統一されています。実際の名前の読みに近いのであれば、アンゲラーよりもむしろウンゲラー。どちらも間違いではないのですが。

ウンゲラーは、アルザス生まれです。アルザスはフランスの端っこの方で、ドイツとの国境のところです。フランス領になったり、ドイツが来たらドイツ語圏になったり、そういうところで生まれ育っておられる。今この人の出身の町ストラス

ブルが、この人の美術館を作ろうとしています。このことは彼のアイデンティティを考える上ですごく大きいと思います。先ほど言いましたハーパーアンドロウ (Harper & Row) のアーシュラ・ノードストロームが、彼の才能を評価しました。1957年にアメリカに渡って、イラストレーターとして多くの仕事をする。それが挑発的なのですね。エロティックであったり、ブラックユーモアだったり、反戦的な、戦争に対する思いがひときわ強いものですから、折からのアメリカのマッカーシズムと触れたりとすごく波乱に満ちていて、絶えず論議を呼んでいました。

最初に出た作品が『へびのクリクター』(Cricitor, 1958) で、へびを主人公に描きます。蛸とか、変わったものばかりキャラクターに選んでいます。そこから「かわいらしいふわふわのウサギちゃんとかクマちゃんとかはいやよ」という感じはすごく伝わってきます。40年代、50年代の絵を描く人たちやアーティストのなかでは「甘っちょろい19世紀的なビクトリア朝のゴテ趣味はいやだ」という、一つのアンチ・ビクトリア朝みたいなものがあった。もっとすっきりした今の時代にアピールするものでありたい、というのがあった。ウンゲラーはそのことがひときわ強かったのでしょうか、へびを主人公に作品を描いたということからも、この人の強烈な自我がうかがい知れます。それが1958年ですよ。私たちがよく知っている作品としては、『すてきな三にんぐみ』(The Three Robbers, 1963) という題で翻訳されているものがありますが、Three Robbersですから、「三人のどろぼう」でいいはずなのですが、なぜそこに「すてきな」をつけないといけないのか。そのへんのことはまた別の問題なのですが、日本では翻訳されると、ちょっと甘くなるのですよね。

暗闇の中で光っている目、それからこの真っ赤なまさかり—この表紙のインパクトは大きいのですが、貸出し率がとても高いのです。「こんなものがなんでうちの子は好きなんだろう」とお母さん方は仰天されたようです。一緒に読んでいってやっとわかってくるのですが。主人公はどろぼうなんですね。暗闇の中で光っている、この怖さ。

彼はグロテスクなものをぎりぎりのところで止めていますけれども、子ども向きのものにこの怖さのようなものを非常に上手な形で入れています。冒頭に三人組の姿がありますが、見ていきますと、これは黒ですし、これなんかすごいですよね。ズームすることもありませんけれども、ちょっと怖いですよ。目も描かれてないです。表紙だけでどれだけ多くのことを語っていることか。その次のページの武器も、ものすごく迫力がありますね。どろぼうに行き、月夜ですよ。話が進んでいて、盗んだものを城に持って帰る。

でも、あるときにティファニーという女の子をさらいます。外見はすごく怖いのですけれども、さっきの目つきと全然違った描き方をしています。本当に大事にやさしくくんでいるのがわかります。そして続々と困った子どもたちが来て、お城のなかで暮らしていく。そして、この城の屋根はおじさんたちの感じに類似しているのですが、そこで暮らしていく、という物語を作ったのです。

これがどうして子どもたちにここまで支持されるのか。言ってしまうと、この怖さとやさしさ—つまり、うわべはどろぼうであり、人さらいであるけれども、その人たちはもう片方から見たら、権力と戦い、というとおおげさですけども、子どもたちの味方として守っていく—という形で描いているわけです。いろいろな読みができると思うのですが、私は友達と二人で、ほとんど3時間くらい熱中してこの絵本のことをしゃべった覚えがあって、「いやー、こんなにすごいことが引き出せるのだな」と改めてびっくりした本です。じっくりと見ていただきたいです。物語としてはとても単純ですけども、彼が描こうとした世界は深いものがあって、子どもがどこかでその世界に共感していくところがあると思います。

『キスなんて大きらい』

1970年代は至光社が丸善という本屋さんで毎年、世界絵本原画展を開いていました。それを私は楽しみにしていましたけれども、そこで初めて『キスなんて大きらい』(No Kiss for Mother)のこの猫の絵と出会いました。その頃の洋書は1ド

ルが365円ととても高価で、しかもウンゲラーのことは全然知らなかったのですけれども、この表紙の猫に魅せられて、この本を買ったという記憶が残っています。

物語と絵にはグロテスクなところがあって、主人公は、夢の中でネズミを取って食べているし、「歯を磨きなさいよ」とうるさく言われて磨いています。反抗的な態度で、しかもRatmanというマンガの本を読んでいる。それから、ネズミのミンチ肉を作っている場面もあります。

この本が出版されたとき、ものすごい批判を浴びました。どうしてかということ、一つはちょっとグロテスクである、ということが一番の原因だったのと、それから、これは朝食の場面ですが、お酒があるとか…。アメリカでは図書館員というのは、おばさんが多くて保守的で、頭が固いというイメージがありますけれども、そのときもいわゆる良識を代表する人たちから、子どもが親をだます、お母さんに対する強烈な反抗心を描いた話ですので、非難が出て、図書館では全然買ってもらえなかった、という伝説の本なのです。

日本でも矢川澄子さんの訳で出ましたが、子どもの手にどれだけ渡ったかよくわかりません。というのも、かなりこの絵本は、読者対象の年齢が高かったからです。日本で絵本というどうしても幼児向きと思われがちで、そこにずれがあって、どれだけ日本の読者を獲得したかわからないのです。

これは今となっては、ウンゲラーの自伝的な作品で、母親の持っている愛情の両面性、なにかあるとキスをして「あなた大事よ」と言っているのだけれど、子どもにとっては抑圧的であるという複雑な関係を描いていると思います。でも出版当時は子どもって単純だと思っていたのか、そういうふうにはあまり読めなかった人たちが「本当に趣味が悪い」とか「下品だ」とか…。確かに品がいいとは言いませんが、ある強烈な、家庭の中での葛藤のようなものを、猫の家の物語として間接話法で伝えている、今となっては貴重なものだと思いますが、批判にさらされてしまいました。そして彼は「絵本はもう作らない」、「絵本という世界はあまりにひどい」ときっぱりやめてしまう

のですよ。Allumetteという本をもう1冊だけ作るのですけれども。

『ゼラルダと人喰い鬼』など

あと二作、それまでの作品で大事なものがあるので紹介しておきます。『ゼラルダと人喰い鬼』(Zeralda's Ogre, 1967)の表紙ですが、これは人喰い鬼なのですね、すごく怖い。それからこのナイフを見てください。この表紙にはすごく迫力があって、これに魅せられて「怖いけれども面白そう」と手にとる子どもは多いです。個性的な『月おとこ』(Moon Man, 1964)とか、面白い絵本をたくさん作るのですが、小さい子ども向けのかわいいものに慣れている人たちにとっては、あまりに強烈すぎて受け入れられなかったようなのです。Allumetteを作ってから、いったん子どもの本に決別します。自分に子どもが生まれたこともあってカナダなど各地で暮らし、1998年からまた、子どもの本に帰ってきました。50年代か60年代に大きな衝撃と問題を提起した画家として取り上げてみました。ぜひ子どもと一緒に読んでみてください。

デュボアザンの動物を主人公にした絵本

ロジャー・デュボアザン(Roger Duvoisin)は、スイス人といっているのでしょうか。舞台美術などいろいろなことをやった人で、『ペチューニア』(Petunia, 1950)とか『ベロニカ』(Veronica, 1961)は、ご覧になったことがあると思います。『ペチューニア』は、おばさんがちょうが主人公で、いろいろな冒険というかおかしなことを起こす非常ににぎやかな絵本です。「子どもに向く」と思われてウンゲラーよりも受容されました。『ごきげんならいおん』(The Happy Lion, 1954)が代表作でしょうか。動物を主人公にした、100人いたら90人ぐらいまでがわりと好きな絵本を作った人といえるでしょう。いろいろな動物を上手に書く人がいると思いますが、デュボアザンの表紙は動物の目がこちらを向いていて、子どもが手に取りやすく制作されています。こうした表紙の描き方をすると、子どもが絵本の中に入るときに、ぼんと入りやすい。そういうことがわかってきた時

代の作家だと思います。

クレメント・ハード『ぼくにげちゃうよ』

アメリカ生まれの人たちの中で二人だけ取り出してみます。一人はクレメント・ハード(Clement G Hurd)で、もう一人はガース・ウィリアムズ(Garth Williams)です。

クレメント・ハードは、私も昔、『ウィルキイのちきゅう』(Wilson's World, 1971)を翻訳しまして、面白い人だと思っていました。余談ですが、私は翻訳には向かないということが、この仕事をしてすぐわかったので、これ以後、翻訳には手を出していません。どうしてかといいますと、どちらかという評論などのクリティカルな言葉を鍛えたので、「ここはいらぬのにな」と思ってしまって、ストレスになるのです。

この人の日本でよく読まれている本として『ぼくにげちゃうよ』(The Runaway Bunny, 1942)と、『おやすみなさいおつきさま』(Goodnight Moon, 1947)があります。マーガレット・ワイズ・ブラウン(Margaret Wise Brown)との合作絵本が8冊あるのですが、現在も日本語に翻訳されているのがこの2冊です。

『ぼくにげちゃうよ』は、さっきの『キスなんて大きらい』の幼児版です。これはお母さんから逃げていくけれど、お母さんがあくまで追いかけてくる、という話です。子ウサギがいて、「いえをでて どこかへ 行ってみたいになりました」(いわたみみやく ほるぷ出版 1976)。みんなそうですね。家で安定したいけれども外に行きたい、という矛盾した思いを持っている。「かあさんがおいかけてきたら」「ぼくは おがわの おさかなになって、およいでいっちゃうよ」と言うと「おまえが おがわの おさかなになるのなら、かあさんは りょうしになって、おまえを つりあげますよ」。ひどいはなしですよ。でも母親ってこんな仕事ですよ、ある意味で。でも子どもはまた逃げるのです。登山すると、お母さんは登山家になって追いかけてきます、どこまでも。これを象徴的に読むと非常に面白い話で、お母さんは本当にどこまでも追いかけて来ます。これ、すごいでしょう。

「かあさんが きになったら、ぼくは ちいさな ヨットになってにげるよ」と、こうさぎは いました。「おまえが ヨットになってにげるのなら、かあさんは かぜになって、わたしのすきなところへ ふいてつれていきますよ」

読んでるのが母親ですからひどいですね。終盤にある部屋の絵が、『おやすみなさいおつきさま』の寝室へと、つながりのような形で引き継いでいるわけです。連れ戻されて無事に終わったという話ですが、この話はよく出来ているなあ、と思います。子どもの持っている気持ちと親の気持ち両方描かれている。でも最後には、お母さんのもとに帰ります。「まて、まて」と追いかけるのが大好きな幼児が、逃げる面白さを堪能できる世界です。

このマーガレット・ワイズ・ブラウンは、ビアトリクス・ポターの『ピーターラビットのおはなし』(The Tale of Peter Rabbit, 1902)を非常に大事に考えていた人で、言ってみればこれも『ピーターラビットのおはなし』の系譜だと思のですが、いろいろ冒険して最後には親のもとに帰ってくる。そのバリエーションだと思ってみると面白いと思います。子どもの持っている普通の考え方を発展して行って、またもとに収めていく、という形の絵本、という文法がマーガレット・ワイズ・ブラウンによってできたと思います。この人は80冊くらいの絵本を作っていて、行って帰ってくるという形です。そこには、当時の幼児教育との密接なつながりが読み取れます。

バンクストリート教育大学でルーシー・ミッチェルという人が「子どもは自分の家庭環境と自分の語感によって現実世界をつかんでいる」という考え方をしています。「子どもに語りかける話も日常に根ざしたものでないといけない」という論を張っていました。それに共感したのがマーガレット・ワイズ・ブラウンです。このミッチェルは、父兄で実業家のスコットさんという人に言って、自分の考えに合った本屋さんまで作ってしまったのです。フェアリーテールなども子どものイマジネーションを刺激するとされているので

すが、「家庭環境で語感を働かせていろいろなものをキャッチして、そういうものに根ざさないといけない」という考え方のほうが、より幼児教育(early education)としてはふさわしいのではないかと、いうことをいろいろな形で実践した人なのですね。この本も、子どもが家にいて、外に出かけていっていろいろなことをして、また家に戻る、という形を取っています。

『おやすみなさいおつきさま』

『おやすみなさいおつきさま』という絵本は1947年に出ていますから、今年が出版60周年です。もちろんじんわりと読まれていたのですが、だんだんと人気が出てきてロングセラーになりました。いわば「おやすみなさいの絵本」の代表格になっています。「おやすみなさい、〇〇」といった絵本はたくさん出ていますが、その中の王座を占めている絵本で、いろいろな人に影響を与えています。たとえば最近では荒井良二さんがこの絵本を偶然見られて、この絵本の世界に共感されて、こういうことができるのなら絵本をやってもいいなと思った、ということをお話されました。『おやすみなさいおつきさま』は、「おおきな みどりのおへやのなかに でんわが ひとつ あかい ふうせん ひとつ えの がくが ふたつ—」(せたていじやく 評論社 1979)というふうに始まっています。まず「でんわが ひとつ」というのがねえ。この部屋を見て、私たちはすごく違和感がありますよね。子ども部屋のベッドに電話がある。風船は大丈夫ですが、暖炉に火が燃えている。絵がある。おかゆのボウルのようなものがあるそばにブラシと櫛がある。こんなのを一緒に置いて気持ち悪いですよね。実は、これは、英語で読むとよくわかる関係性があるのです。brush、mush、hushなどと韻を踏んでいるのです。電話というのは現実とつながっている世界ですし、風船は遊びとかおもちゃとか子どもの想像力とか。いろいろなものがこの緑の部屋に上手に集約されてきている。2枚の額は、お話の世界ですよ。人形の家があるし、手袋、洗濯物がぶらさがっていて、猫がいます。また、色彩の処理も、多色をつかっているにもかかわらず、すっきりと

美しく、とても巧みです。

「おやすみ おつきさま」「おやすみ おつきさまをとびこしているうしさん」「おやすみ あかりさん おやすみ あかいふうせん おやすみ くまさん おやすみ いすさん」と全部、「おやすみ」を言って、「おやすみ "しずかにおし"というおばあさん」「おやすみ ほしさん」「おやすみ よぞらさん」「おやすみ そこここできこえるおとたちも」。この本の持っている静けさは、50年代の絵本の代表的なものだと思います。にぎやかな誇張されたものから、静かな語りかけや、精神生活のようなものになっている。それまでは「おやすみ」というと、大きなもので守ってくださる神様が出てきましたが、ここでは神様が出てこない。それも一つ注目される時代性であると思います。

ガス・ウィリアムズ

ガス・ウィリアムズは、むしろ挿絵画家として有名だと思います。『大きな森の小さな家』(*Little House in the Big Woods*, 1953) とか、『シャーロットのおくりもの』(*Charlotte's Web*, 1952) など、たくさんの挿絵の仕事をしています。一番有名な絵本は、『しろいうさぎとくろいうさぎ』(*The Rabbits' Wedding*, 1958) と『おやすみなさいフランシス』(*Bedtime for Frances*, 1960) です。『しろいうさぎとくろいうさぎ』という題で訳されていますが、原題は「うさぎの結婚式」ですね。これは本当に美しい絵本です。この画家の持っている技—毛皮のふわふわ感のようなものの表現力はすばらしいです。本当に一緒にいたい人だから結婚する、というテーマのわかりやすさで、日本でもある時期、一世を風靡して、どこの結婚式に行っても誰かがこの絵本を読んでいた時代がありました。もしかして皆さん方も、これで結婚式を祝われた覚えがある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。白人と黒人の融和をテーマにしているという読み方ができるため、アメリカで検閲的な見方からその是非について論議が起こったこともありました。でもガス・ウィリアムズは、はっきりと違うということ言うために白と黒にしただけで、そういう意図は全然な

かった、と言っています。この絵本の持っている美しさとテーマ性は忘れられないものでした。

『おやすみなさいフランシス』は、「おやすみなさいの絵本」なのですが、これには続編があり、1冊目だけガス・ウィリアムズが描いています。後のものと比べたら、この作品がいかにもすぐれているかわかると思います。この毛皮のふわふわ感—ウサギを描いて成功している人はみなそうですが、さわったらふわっとするような感覚が、ある時期の子どもたちを強く惹きつけるのです。絵本の中でもそういうものはちょっと特異な位置にあると思いますが、安心感とか安定感とかがあると思います。この毛皮感、ウサギの人気、クマの人気、この種のものの人気の秘密であるかなと思います。

ガス・ウィリアムズはいろいろな絵本に挿絵をつけていますが、一つ一つの仕事が大変的確で、お話をこわすことなく、うまくお話に沿っているので、そのままの形で訳されている絵本は現代に残っていく可能性が高いものだと思います。

マリー・ホール・エッツ

もう一人、この時期のアメリカを代表する絵本画家として、マリー・ホール・エッツ (*Marie Hall Ets*) を選んでみました。マリー・ホール・エッツという人は、なんといっても静かな絵本の流れの中で考えられる人だと思います。『もりのなか』(*In the Forest*, 1944) は、森の中に入って行って行列を作って行進して遊ぶという話です。「行って帰る」というお話のパターンの代表的な作品です。この人は子ども時代、ウィスコンシン州の森の中で遊んだ経験というものが自分の幼児期を作ったとおっしゃっているのですが、『わたしとあそんで』(*Play with Me*, 1955) もそうですね。散歩に行つて、「遊ぼう」と言って寄つていったらみんな逃げられてしまう。「遊びましょう」と言つてもだれも遊んでくれません。

だあれも だあれも あそんでくれないので、わたしは、ちちくさを とつて、たねをぶつと ふきとばしました。

それから いけの そばの いしに こしか

けて、みずすましが みずに すじを ひくの
を みていました。

わたしが おとを たてずに こしかけてい
ると、ぼったがもどってきて、くさの はに
とまりました。(与田準一訳 福音館書店
1968)

というふうに、じいっと静かにしていると、さっ
き「遊ぼう」と追いかけていったときには逃げて
いった動物たちが少しずつ戻ってくる、という世界
を描いています。鹿がべろべろと主人公をなめ
るのですが、実際エッツが子ども時代遊んだ森に
は鹿がいたようで、子どものときの自分の感覚と
いうものをわかりやすい絵にしたと思います。

森の感じ—森の持っている、なんといいですか、
ちょっとどこか怖いところがあって、しかもその
中でいろいろな動物たちが生きていて、という象
徴的なものを非常に上手に描き出した画家です。
森の中に行くということは、内面的なものとは非
常に関係をしている。そういう目で見てみると、児
童文学にはグリムの時代から森がたくさん出てき
ますよね。「子どもの本と森」を考えてみるのも
一つの面白いテーマではないかなという気がしま
す。

『赤ちゃんのはなし』(*The Story of a Baby*,
1939)は長い時間をかけて描かれた本のように
思われます。非常に文字の要素が強いのですが、命
を考えるとよく引き合いに出される本です。こう
いうのも、エッツが開いた一つの世界です。命と
か生きるとか、呼吸とか、そういうことを絵本化
して見せてくれた人なのではないでしょうか。

マーシャ・ブラウン

ブラウン (Marcia Brown) は、エッツと並べ
て論じるとその時代性のよくわかる画家で、日本
では『三びきのやぎのがらがらどん』(*The
Three Billy Goats Gruff*, 1957) の作者としてよ
く知られている方です。ブラウンは、図書館司書
としての体験をもっており、ストーリーテリング
などを通じて、子どもに受容されるお話がよくわ
かっており、お話を絵本化する際の持論を確立
しました(『絵本を語る』(*Lotus Seeds*, 1986) が

参考になります。)。それは、それぞれの作品には、
その作品に適した手法があるということで、一作、
一作異なった絵の表現を使いました。『シンデレ
ラ』(*Cinderella*, 1954)、『むかし、ねずみが…』
(*Once a Mouse*, 1961)、『影ぼっこ』(*Shadow*,
1982) で、3回、コールデコット賞を受賞してい
るのも、その表現の多彩さと関係があるでしょう。
しかし、子どもに受容されているという点では、
『せかい1おいしいスープ』(*Stone Soup*, 1947)
や『ちいさなヒッポ』(*How Hippo!*, 1969) をあ
げざるべきかな、と思います。

『三びきのやぎのがらがらどん』は、北欧の昔
話ですが、これを、瀬田貞二さんが、日本語で語っ
ても違和感のない昔話の訳にされたことで、典型
的な「三」の繰り返しのよく効いたシンプルな物
語として、日本の読者に受け入れられました。ブ
ラウンは、子どもが怖いお話が大好きなことをよ
く知っていました。トロルの表現は、ぎりぎりま
で怖くしていますが、どこかユーモラスです。大
きいがらがらどんが最後にコテンパンにやっつけ
るのを楽しめるように作られているのです。繰り
返し、繰り返し、読まれる絵本です。

アメリカの絵本のなかの日本—八島太郎

それから最後に、アメリカにいろいろな才能が
外国からやってきた中の一人として八島太郎とい
う人がいるので、この人の絵本についてもちょっ
と触れておきたいな、と思います。八島太郎は、
来年が生誕100年で、受講生の方で鹿児島からい
らした方がいらっしゃいますが、鹿児島では生誕
100年を祝う準備を図書館やいろいろなところで
しておられると思います。戦時中の日本で、政治
的にいられなくなってアメリカに逃亡した方で
す。画家で、東京の美術専門学校(現在の東京芸
術大学)を中退しています。戦時体験をアメリカ
でしておられるのですね。戦後、絵本作家として
世に出るのですが、代表作は『からすたろう』
(*Crow Boy*, 1955) と、『あまがさ』(*Umbrella*,
1958) です。

鹿児島の自分の子ども時代の風景を、写生とい
うよりは、たぶんアメリカで作っておられたので、
時代のふるいにかけたようなものとして出てきて

いるのが、この人の描いた日本ではなかったかと思ひます。こういう場面で、このからすたろう—あとでからすたろうという名前がつくのですが、山奥から出てきているので、学校になじめません。そういう男の子が主人公の物語を描いたわけですが、これもどちらかというよりは内面を描いている絵本で、いじめというわけではないのですが、孤立している男の子の物語です。どうやってアメリカ文化のなかに溶け込んでいくかが自身のテーマですから、山奥からやってきた男の子がどうやって自分のアイデンティティを作っていくかということが何重かにだぶって、評判になったものです。確かに美しくできていますし、日本の古い生活ぶりもきちっと紹介されている。そして先生との出会いがこの子にとってとても大きい。詳しくは読んでもらうとして、からすの物真似が非常に上手で人々の拍手を得て、無事卒業し、そして働いていく、という話です。一人の男の子の成長物語としても読めますし、スケールの大きな本です。

『あまがさ』は、モモという娘が主人公の話です。日常生活を描いています。アメリカが背景になっていますが、この話もとても日本的な美意識が表現されています。たとえば、雨の描き方。雨を美しいと考え、そこに音楽を感じるのは、日本の浮世絵やそれ以降のものが非常に繊細にとらえてきた美だったと思うのです。日本人と傘という図のイメージは、明治以後ずっと描かれてきています。ほかにも10冊ばかりあるのかな、浦島太郎の物語を現代の視点から語ったものとか、非常に実験的な、美しい図像に満ちた本を作っていきます。

今日目から見ると、私はアメリカでこういうものを出したという意味のようなものを考えてしまうのです。というのは、日本人の目から見て、八島太郎の作った日本は、もちろんいっぱいフィルターがかかっているとはいえ、やはりちょっとアメリカ寄りのイメージだな、という気がしてしまいます。この『あまがさ』の女の子とか『からすたろう』とかを見ても、目が一重でつり上がっています。日本人を描くときには必ず出てくるのですが、ちょっと必要以上に、向こうの人に受け入れられる美意識に沿っているところがあ

るかな、と思います。

これはKazue Mizumuraという、やはりアメリカで同時代に活躍した絵本画家で、児童文学作家の松野正子さんが若いときにお書きになった『赤い下駄』(A Pair of Red Clogs, 1960 邦訳なし)という話ですが、(絵を見せて)確かにこう描くと日本人とわかるのですけれども。これはとても面白い問題で、たとえば、中国人だったら、どう描いたら中国人に見えるか、日本人だったら、どう描いたら日本人に見えるか、という問題だと思ひのですが、違っているけれども共有するものを考えたときに、非常に微妙な問題を生んでいくような気がしています。このことは私の今の課題として、なぜアメリカで出版された日本のものは、目をつりあげた日本人しか描けないのだろうか、それが一つの日本人の記号として今、通用しているということの意味を考えたいと思ひているので、取り上げてみました。

八島太郎さんやMizumuraさんが活躍するこの時代は、日本の美術に対するまなざしがすごく強かったのです。アメリカは戦勝国ですから、たくさんアメリカ人が日本に行って、日本の現実の美術品とか考え方とか、いろいろなものを持って帰ってきます。ジャポニズムは19世紀から20世紀にかけてでしたが、その遅い波が来ているというか、日本の美意識、生け花であるとか、そういうものに対する関心が強かった。また、日本画の描き方—マーシャ・ブラウンの絵にもたくさん出てきますが一などを学んでいく。特に省略した絵、余白の意味、といったことではおそらく大変大きな影響を与えたのではなかったか、と考えます。八島太郎さんがお描きになった日本というものを、お残しになった作品を通して考えたときに、戦前の日本人の暮らしがあつて、そういうものを持った八島太郎という人が日本に愛想をつかしてアメリカに行くのですが、その中で子どものためにどういふ日本を、自分のオリジンも含めて、自分の子どもたちにも伝えていくか、というときに出してきた図像の意味を考えてみたいものです。

なぜ、いま、1940—50年代の絵本なのか

「なぜ、いま、1940—50年代の絵本なのか」と

レジュメに書きましたが、やはりこの時代は、落ち着いた家庭像や安心感をいろいろなところから作り出そうとした時代のように思います。それが今、非常にごちゃごちゃとなった世界の中で、また求められているのではないかな、というのがおおよその私の考えです。

と、ここまで論を作ってきて、私は、はっとするわけです。「あれ、ディズニーがない」。ディズニーの影響はすごく大きかったのに、戦後の絵本史をディズニーなしで語れるのか。それから、ドクター・スースがない。この二つの点に私は気づきます。それからもう一つ、一般人にとってすごく影響のあった「ゴールデンブックス」についても述べていない。いわゆる good books を作り上げてきた人たちと同じアメリカという基盤の上で、これらをどう位置づけるか、ということが次の話題です。

取り上げるべき画家

今まで触れてこなかった人をちょっと挙げておきました。ロバート・ローソンは『はなのすきなうし』(*The Story of Ferdinand*, 1936) を描いた人ですが、この時代の中でも『ウサギが丘』(*Rabbit Hill*, 1944) などいろいろ出しています。マックロスキーは、この時代に『すばらしいとき』(*Time of Wonder*, 1957) という作品を出していますし、バージニア・リー・パートンはこの時代の人です。マーク・シーモントは、パリ生まれのスペイン人で、『木はいいなあ』(*A Tree Is Nice*, 1956) とか、『はなをくんくん』(*The Happy Day*, 1949) という絵本が、これもクマの持っている何ともいえない量感のようなものが出ていて面白いかな、と思います。

バーバラ・クーニー (Barbara Cooney) については言ってもよかったのではないかなと思いますが、『にぐるまひいて』(*Ox-Cart Man*) は1979年の作品でしたから。今も非常に息の長い作品を出している人ですが、『チャンティクリアときつね』(*Chanticleer and the Fox*, 1958) という絵本があります。後のバーバラ・クーニーとはちょっと違うのですが、チョーサーの原作でお描きになったもので、なかなか味のあるすばらしいもの

です。『にぐるまひいて』が有名だと思うのですが、こういう絵本もあります。

先ほどのコールデコット賞のリストに戻りたいと思います。このリストを見ますと、マーシャ・ブラウンは3回もコールデコット賞を受賞しています。3回というと、今年コールデコット賞に輝きましたデイビッド・ウィーズナーも3回受賞しているのですが、2回の人もかなりあって、つまりこういうところで認められやすい画家はだれか、ということがよくわかる表です。参考になるかと思います。先ほど言いましたように、ここに出ていない『ひとまねこざる』とか『はらべこあおむし』とか、ドクター・スースの絵本であるとかについては、ここで話したいと思いません。

ディズニーの絵本

ウォルト・ディズニーというと皆さんは百もご存知ですし、ディズニーランドで自分の作ったイメージを再創造していますし、1940年以降のアメリカの子ども文化の代表の中核をなすものを提供してきました。しかも世界戦略です。世界中でディズニーのものは受容されています。中国に行く仕事がありまして、中国の絵本界を見てびっくりしました。ディズニー風のものももうほとんど全部とっていいくらいで、どれだけ大きい影響をこの人が与えたのかと思いました。美術の歴史を持っている国なのに、自国のそういうものは影を潜めていまして、今の大騒ぎが過ぎて少し落ちついてくると、そういうものが見直されていくのだと思うのですが、もうディズニーばりだらけ。ある意味で戦後の日本もそうでした。私の母なども孫が生まれたときに、いそいそとディズニー絵本をかかえて、孫にプレゼントしていた姿を見て、「ディズニーってすごいな」と思いました。私がこんな仕事をしているのに、母はやっぱりディズニーが良いと思ってしまっている。ところが子どもに読むと矛盾があって、うまく子どもの中に入らないのですよね。おばちゃんあげたものの方が喜ぶので母は「負けた」と思いまして、それから絵本のことを勉強するようになっていったようでしたけれども。

ディズニー絵本というのは、ある意味でアメリカの良き文化であったと思います。1944年に、最後にお話しします「ゴールデンブックス」のなかで「ウォルト・ディズニー・リトル・ライブラリー」が出まして、彼のアニメーションから絵本化したものが出てくるのですね。そういうものから絵本としても広がっていく。べったりとした絵ですが。一方ではアメリカ・グラフィック・アート協会のような絵があって、そういうものが両立していった、ということを考えなくてはなりません。

ドクター・スース

その中であってドクター・スースは大変ユニークだと思います。1904年生まれで、1991年に亡くなっています。Horn Book Magazineとか、アメリカ・グラフィック・アート協会みたいなところでは、ドクター・スースの絵本はどちらかというところと否定的に取り上げられてきたと思います。ところが実際アメリカに行って、家庭で子どもたちと暮らしたりすると、ドクター・スースというのみならず狂喜しているのですよ。大人に「なぜ子どもはあれが好きなの」ときくと「私たちがさっぱりわからない。なぜか子どもが好きだ」と困惑しているような状況が、30年代から40年代にあったと思います。『キャットインザハット：ぼうしをかぶったへんなねこ』(The Cat in the Hat) は1957年に出て、出版50周年記念を2007年にしたものですから、これを出してきたのですけれども、無謀にも日本語に訳されているのですね。「無謀にも」と言いましたのは、The Cat in the Hat、catとhatで韻を踏んでいますから、日本語のタイトルも、「ぼうしをかぶったへんなねこ」をサブタイトルにしていますね。訳せないのですよ。読んでみて言葉がめちゃくちゃ面白い、というのがこの人の一番の特徴です。それと、金魚が出てきて話をして、“No! No!”と言って、大活躍します。こういう、とんでもなく、途方もないところがある。ほら話の系列の中で語られる人です。それに非常にナンセンスな意味も加わり、また、韻の踏み方も半端ではない。読んでみたらすぐわかると思うのですが、このページでいったら、

"Put me down!" said the fish.

"This is no fun at all!"

"Put me down!" said the fish.

"I do not wish to fall!"

all、fallと踏んでいますし、繰り返しになっていますよね。このように韻と繰り返しが面白くて、なんかわからないけれども面白いな、とどんどん進んでいく世界です。そしてものすごく上手に終わらせています。

大人は、韻とカリズムを感じ取れる能力が落ちていきますから、この人のものをそれほど面白く思わないのですけれども、非常に人気があるということで、「どうして」と考え始めるということがあった。それから60年代になりますと、ビートルズがアメリカの子どもたちの間で爆発的な人気となります。ビートルズの歌にも韻の面白さ、リズムの面白さがものすごくあった。そういうものに対する感度は子どもの方がすぐれています。

だんだんとこの人の人気上がるに従って、学校現場がこの人の作品に目をつけます。子どもがこれほど面白がっているものだから、この人のものをクラスで読もう、と。するとみんな乗ってくるのです。そして識字教育、読書教育と結びついていく。これがその印です。訳ではこれが「ビギナーブックシリーズ」とあって、「ひとりでもワクワク! みんなでもドキドキ!」というふうにちゃんと訳されていますが、これがそのサインです。“I can read it all by myself”、自分だけで読むことができますよ、と。つまり、使っているポキャブラリーを絞って、この本では220語しか使わなかった。それまでのビギナーズブックは、500語くらいでやると読書力のない子でもついていける、という常識があったときに、ドクター・スースはチャレンジャーですから、220語にした。でもたくさん文字があるでしょう。今の本にはないくらいにたくさん書いていますが、たった220語しか使ってないそうです。そしてこのI can read seriesというのが出てくるのです。いわゆる読んでもらう絵本から読書への足がかりと考えていく物語が、次の時代へと渡されていく。そういう中でのドクター・スースの仕事は群を抜いて

いました。

初めはわからなかったですね、ドクター・スースのすごさは。でも、ビートルズもそうですよね。ビートルズとドクター・スースを並行して考えてしまうのですが、ビートルズも始めは、「うるさい変なもの」という反応だったのが、年々大人にもわかっていって、今は一つの文化として受け入れられていると思います。ドクター・スースもそんなところがあって、ナショナル・ミュージアムがアメリカのどこかにできているはず。「へえ、ドクター・スースのミュージアム！」とびつくりするのですが、学校教育や識字教育と結びついて、その面白さで子どもをひきつける。それがいったい言語として何なのか、絵として何なのか。この得体の知れない、くしゃくしゃとした絵。これもマンガ、コミックですよ。「コミックみたいな絵」ということで考えていくといいでしょう。アートとして美しいものとまた違うところで面白さというものはあると思います。現在、ドクター・スースを研究している人は意外に多いのですが、教育畑の方が多くて、たくさんこの種の絵本を作っているのが、アメリカで育った人でドクター・スースを知らない人はいくらでもあります。私は大学でかつて教えていたのですが、アメリカ人の先生で「この大学に勤められて良かった、あなたが集めてくれた絵本を子どもたちに持って帰って読んでやるのが楽しみだった」とおっしゃっている方がいらっしやいました。それくらいアメリカ文化のなかに浸透していると思います。

ゴールデンブックス

最後に「ゴールデンブックス」についても言わないといけないかなと思い、絵本をちょっと持ってきています。(ABCや*Bedtime Stories*を画面に映して) こういうのをご覧になったことはありますか。こんな小さな本です。今だったら2.99ドルです。つまり普通の絵本だと5倍から10倍くらいするところを、非常に安く出ているのです。1942年に創刊されているのですが、25セントで出しています。現在までに全部で何十億冊出版された、と聞いています。42ページのうち14ページがカ

ラーで、きれいなカラーでしかもボール紙で硬い表紙で、そのわりに安っぽくない。一番の「ゴールデンブックス」の売りは、本屋で売ったのではなく、ドラッグストアとか、おかあさんが買い物に行くようなところに置いたことです。図書館に行かないような階層にもけっこう食い込むことができ、しかも絵がとてもわかりやすい。

The Little Poky, The Poky Little Puppy、小さな犬の本で、子犬が5匹いるのですが、そのうちの1匹がちょっとぐずでのろまです。失敗談もありますが、それがいろいろと発見して、というふうにつけこまうまくできています。Pokyなどたくさんキャラクターを、「ゴールデンブックス」は生み出していく。たとえばTootleって知っていますか。汽車です。Shy Little Cat、はずかしがりやの子猫ちゃんみたいなものとか、ゾウのSaggy Baggyとか、いろいろなキャラクターがこのなかから生まれてくる。何百種類も出るので。後になるともっと大型のものも出版されます。

先ほどのガス・ウィリアムズは、初期の頃、マーガレット・ワイズ・ブラウンと一緒に絵本を出したりもしています。ここから生み出されていった作家たちもかなり多かったと思います。ロジャンコフスキー、リチャード・スカリー、ガス・ウィリアムズ、それからマクダーモットもここで仕事をしています。たくさん出しますので、若い画家たちにとって仕事にありつける場でもあったのですね。1942年に10タイトル出たのですが、それがいまだに手に入ります。これはすごいことですよ。これは最近買ったものです、*Bedtime Stories*とか、*Babies Book*とか、ABCとか。このABCは、いわゆるgood qualityのもの—これはムナーリのものですが—との品質の違いがよくわかるのではないかと思います。「ゴールデンブックス」の方は、なにもかも描いてある。「これは何」、「これは何」とページのなかに全部放り込んであって、いわゆるgood qualityのものとは全然違うコンセプトですよ。でもわかりやすいし、けっこう楽しめる内容でもあります。

この「ゴールデンブックス」のシリーズを見てきて面白いと思うのは、戦略といいますか、安く

提供して、たくさんの人に買ってもらう、スーパーマーケットのコンセプトと同じです。スーパーマーケットによく置かれている本ですが、本屋や図書館で見るとは違うコンセプトのもので、しかも多数の人に安く提供していくという、一般の土台のようなところに、この「ゴールデンブックス」はあったかと思えます。アメリカでは何でもコレクションする人があるのですが、「ゴールデンブックス」のコレクターも多くて、いろいろ集めている人がいるらしいです。インターネットで調べてみますと、「ゴールデンブックス」でひっかかってくるのは「この本を持っていますが交換しませんか」とか、「この本は何年版のどれだ」とか、あるいは「ゴールデンブックス」を専門に扱ってインターネット上で販売している人とかです。

そういうものも含めて、アメリカの出版文化、広く流布している大衆的な文化を考える上で、この「ゴールデンブックス」の存在も欠かせないと思えます。これが日本に翻訳されているかどうか分からないのですけれども、あまり見たことがありません（注）。ですから、たぶんルートが違うのかもしれませんが。戦後すぐには翻訳されていたようなのですが…。日本も貪欲にいろいろなものを紹介していきますから、知らないだけで、今はあるのかもしれませんが。いわゆる質の高い、芸術的にすぐれた、しかも子どもに理解できるアメリ

カの絵本というものを提供する一方で、もっと幅広く、子どもの小遣いでも買えて、日常的にひよいかごに入れて持って帰って気軽に楽しめるようなものも豊かに提供していたかな、と思います。アメリカに初めて行ったときに、やはりあまりに良いものは高く買えなかったのですが、「ゴールデンブックス」だったら買える、そういう自分がいたような思い出もあります。

最後の方を急いでしまったのですが、12時が鳴ったので、シンデレラじゃないですが、ここでやめないとはいけませんね。アメリカの絵本はアメリカの文化とすごくくっついていて、戦後の日本の文化や子どもの本の歩みとも非常にくっついていて、皆さん方それぞれのなかで、またこういう絵本の思い出も持っていらっしゃると思うし、語るものがたくさんあるのではないかと思います。

ここで話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

（注）1970年代に「バンダイのゴールデンブック」というシリーズで翻訳されていることが判明した。

（みやけ おきこ 梅花女子大学大学院非常勤講師）

「発展期（第二次大戦後）」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	日本における子ども絵本成立史：「こどものとも」が果たした役割	三宅興子編著	ミネルヴァ書房 1997.3	UG71-G18 ※
2	Little blue and little yellow : a story for Pippo and Ann and other children	Leo Lionni 作・絵	I. Obolensky c1959	Y19-A680
	あおくとときいろちゃん	レオ・レオーニ作 藤田圭雄訳	至光社 1967	Y18-N04-H85
3	Alexander and the wind-up mouse	Leo Lionni 作・絵	Knopf c1969	Y17-A411
	アレクサンダとぜんまいねずみ	レオ・レオーニ作 谷川俊太郎訳	好学社 (1975)	Y17-4474
4	Swimmy	Leo Lionni 作・絵	Knopf c1991	Y17-A847
	スイミー	レオ＝レオーニ著 谷川俊太郎訳	日本パブリッシング 1969	Y7-1688
5	Inch by inch	Leo Lionni 作・絵	Mulberry Books c1960	Y17-A404
	ひとあしひとあし	レオ・レオーニ作 谷川俊太郎訳	好学社 (1975)	Y17-4473
6	Frederick	Leo Lionni 作・絵	Knopf ; Distributed by Random House, Inc. 1967, c1995	Y17-A405
	フレデリック	レオ・レオーニ作 谷川俊太郎訳	日本パブリッシング 1969	Y7-1689
7	Cricter	Tomi Ungerer 作・絵	HarperCollins c1986	Y17-A6308
	へびのクリクター	トミー・ウングレー作 中野完二訳	文化出版局 1974	Y17-4192
8	The three robbers	Tomi Ungerer 作・絵	Atheneum 1963	所蔵なし
	すてきな三にんぐみ	トミー・アングレーさく・え いまえよしともやく	偕成社 1969	Y17-621
9	No kiss for mother	Tomi Ungerer 作・絵	TomiCo c1998	Y17-A5298
	キスなんて大きらい	トミー・ウングレー作 矢川澄子訳	文化出版局 1974	Y17-4193

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
10	Allumette	Tomi Ungerer 作 [trad. par A. Chagot]	l'Ecole des loisirs c1997	Y17-A7668
	Allumette	Tomi Ungerer 作 [Deutsch von Anna von Cramer-Klett].	Diogenes-Verlag c1974	Y17-A7641
	マッチ売りの少女アルメット	トミー・アンゲラー文・絵 谷川俊太郎訳	集英社 1982.12	Y17-9118
11	Zeralda's ogre	Tomi Ungerer 作・絵	TomiCo c1999	Y17-A5293
	ゼラルダと人喰い鬼	トミー・ウングラー著 たむらりゅういち,あそくみやく	評論社 1977.9	Y17-5415
12	Moon Man	Tomi Ungerer 作・絵	Harper & Row 1975	Y17-A4306
	月おとこ	トミー・ウングラー著 たむらりゅういち,あそくみやく	評論社 1978.7	Y17-5925
13	メロップスのわくわく大冒険. 1	トミー・ウングラーえとぶん 麻生九美やく	評論社 1986.2	Y8-3990
14	メロップスのわくわく大冒険. 2	トミー・ウングラーえとぶん 麻生九美やく	評論社 1986.2	Y8-3990
15	Petunia	Roger Duvoisin 作・絵	A.A. Knopf c1977	Y17-A6331
	ペチューニア	ロジャー・デュボワザン作 まつおかきょうこ訳	日本パブリッシング 1970	Y7-2153
16	The happy lion	Louise Fatio 作 Roger Duvoisin 絵	Penguin Books 1955	Y17-B5013
	ごきげんならいおん	ルイズ・ファティオ文 ロジャー・デュボアザン絵 むらおかはなこ訳	福音館書店 1964	Y17-27
17	Veronica	Roger Duvoisin 作・絵	Knopf c1989	Y17-B5915
	ベロニカ	ロジャー・デュボアザンさく・え じんぐうてるおやく	日本パブリッシング 1970	Y7-2152
18	What is right for tulip--	Roger Duvoisin 作・絵	Knopf 1969	Y17-B5540
19	Wilson's world	Edith Thacher Hurd 作 Clement Hurd 絵	Happer & Row [1971]	所蔵なし
	ウィルキのちぎゅう	エディス・サッチャー・ハードさく クレメント・ハードえ みやけおきこやく	トモ企画 1984.1	Y17-9974

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
20	Goodnight moon	Margaret Wise Brown作 Clement Hurd絵	Harper Trophy [1982], c1975	Y17-A8042
	おやすみなさいおつきさま	マーガレット・ワイズ・ブラウンさく クレメント・ハードえ せたていじやく	評論社 1979.9	Y17-6637
21	The runaway bunny	Margaret Wise Brown作 Clement Hurd絵	Harper Collins 1991, c1972	Y17-A21
	ぼくにげちゃうよ	マーガレット・W.ブラウンぶん クレメント・ハードえ いわたみみやく	ほるぶ出版 1976.9	Y17-5236
22	Johnny Lion's book	Edith Thacher Hurd作 Clement Hurd絵	HarperCollins Publishers 2001, c2000	Y17-A7579
	ライオンのジョニーひとりでおるす ばん	イーディス・T.ハード作 クレメント・ハード絵 こだまともこ訳	佑学社 1984.11	Y18-548
23	Little house in the big woods	Laura Ingalls Wilder作 Garth Williams 絵	HarperCollins 1953, c1987	Y8-A219
	大きな森の小さな家	ローラ・インガルス・ワイルダ作 恩地三保子訳 ガース・ウィリアムズ画	福音館書店 1972	Y7-3246
24	Charlotte's web	E.B. White作 Garth Williams絵	Puffin Books 1963, c1952	Y8-A1255
	こぶたとくも	E.B.ホワイト著 鈴木哲子訳 G.ウイリアムズ絵	法政大学出版局 1953	児933-cW58kS
	シャーロットのおくりもの	E.B.ホワイト著 鈴木哲子訳 G.ウイリアムズさし絵	法政大学出版局 1973	Y7-3789
25	The rabbits' wedding	Garth Williams作・絵	Harper & Row c1958	Y19-A770
	しろいうさぎとくろいうさぎ	ガース・ウィリアムズ文・絵 まつおかきょうこ訳	福音館書店 1965	Y7-239
26	Bedtime for Frances	Russell Hoban作 Garth Williams絵	HarperCollins Publishers c1996	Y17-A323
	おやすみなさいフランシス	ラッセル・ホーバン文 ガース・ウィリアムズ絵 まつおかきょうこ訳	福音館書店 1966	Y17-116
27	In the forest : story and pictures	Marie Hall Ets作・絵	Puffin Books 1976, c1972	Y17-A2772
	もりのなか	マリー・ホール・エツ文・絵 まさきるりこ訳	福音館書店 1963	Y17-16

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
28	Play with me	Marie Hall Ets作・絵	Puffin Books 1976, c1955	Y17-A2773
	わたしとあそんで	マリー・ホール・エッツ文・絵 与田準一訳	福音館書店 1968	Y17-322
29	The story of a baby	Marie Hall Ets作・絵	Viking 1939	所蔵なし
	赤ちゃんのはなし	マリー・ホール・エッツぶん・え 坪井郁美やく	福音館書店 1982.6	Y11-1829
30	Nine days to Christmas	Marie Hall Ets, Aurora Labastida作 Marie Hall Ets絵	Viking Press 1959	Y19-A849
	クリスマスまであと九日：セシのボサダの日	マリー・ホール・エッツ, アウロラ・ラバスティダ作 マリー・ホール・エッツ画 たなべいすず訳	富山房 1974.12(第9刷:1999.10)	Y18-N04-H157
31	Gilberto and the wind	Marie Hall Ets作・絵	Viking Press [1963]	Y17-A468
	ジルベルトとかぜ	マリー・ホール・エッツ作 たなべいすずやく	富山房 1975	Y17-4575
32	絵本を語る	マーシャ・ブラウン著 上條由美子訳	ブック・グローブ社 1994.4	KC511-H61 ※
33	The three billy goats Gruff	G.W. Dasent 訳 Marcia Brown絵	Harcourt Brace Jovanovich [1991], c1985	Y17-A5695
	三びきのやぎのがらがらどん	マーシャ・ブラウン絵 瀬田貞二訳	福音館書店 1965	Y17-48
34	Cinderella, or, The little glass slipper	Charles Perrault 伝訳 Marcia Brown絵	Atheneum Books for Young Readers c1954	Y17-A442
	シンデレラ：ちいさいガラスのくつのはなし	マーシャ・ブラウンぶん・え まつのみさこやく	福音館書店 1969	Y7-1551
35	Stone soup : an old tale	Marcia Brown作・絵	Scribner c1947	Y17-A1859
	せかい おいしいスープ ：あるむかしばなし	マーシャ・ブラウンさいわ・え わたなべしげおやく	ペンギン社 1980.2	Y17-7394
36	How hippo!	Brown, Marcia	Scribner, 1969	所蔵なし
	ちいさなヒッポ	マーシャ=ブラウンさく うちだりさこやく	偕成社 1983.12	Y17-9899
37	Once a mouse ... : a fable cut in wood	Marcia Brown作・絵	Scribner c1961	Y19-A346
	むかし、ねずみが…：インドに 古くから伝わるおはなしより	マーシャ・ブラウンさく 晴海耕平やく	童話館 1994.8	Y18-9946
	あるひねずみが…：インドの むかしがたり	マーシャ・ブラウン作 やぎたよしこやく	富山房 1975	Y17-4518

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
38	Shadow/ from the French of Blaise Cendrars	Marcia Brown 絵	Scribner c1982	Y19-A842
	影ぼっこ	ブレーズ・サンドラールぶん マーシャ・ブラウンえ おのえたかこやく	ほるぶ出版 1983.12	Y17-9905
39	Dick Whittington and his cat	Marcia Brown 作・絵	Atheneum Books for Young Readers c1950	Y17-A2777
	ディック・ウィットントンとねこ： イギリスの昔話	マーシャ・ブラウンさいわ・え まつおかきょうこやく	アリス館 2007.6	Y18-N07-H265
40	Umbrella	Taro Yashima 作・絵	Puffin Books 1977, c1986	Y18-A61
	あまがさ	ヤシマタロウ文・絵	福音館書店 1963	Y17-2948
41	Crow boy	Taro Yashima 作・絵	Viking Press 1955, c1983	Y19-A715
	からすたろう	やしまたろうぶん・え	偕成社 1979.5	Y17-6445
42	モモの子ねこ	八島太郎作・絵	岩崎書店 1981.2	Y17-7573
43	Youngest one	Taro Yashima 作・絵	Viking Press 1962	Y18-B216
44	The story of Ferdinand	Munro Leaf 作 Robert Lawson 絵	Hamish Hamilton 1966	Y19-A356
	はなのすきなうし	マンロー・リーフ文 ロバート・ローソン絵 岩波書店訳編	岩波書店 昭和29	児726.7-cL43hl
45	Rabbit hill	Robert Lawson 作・絵	Viking Press 1944, c1972	Y8-A69
	ウサギが丘	ロバート・ローソン作・絵 松永富美子訳	学習研究社 昭和41	Y7-840
46	Time of wonder	Robert McCloskey 作・絵	Viking Press 1957, c1985	Y19-A839
	すばらしいとき	ロバート・マックロスキーぶんとえ わたなべしげおやく	福音館書店 1978.7	Y17-5919
47	A tree is nice	Janice May Urdy 作 Marc Simont 絵	HarperCollins c1984	Y19-A835
	木はいいなあ	ジャニス=メイ=ユードリイさく マーク=シーモントえ さいおんじさちこやく	偕成社 1976.4	Y17-4788

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
48	The happy day	Ruth Krauss作 Marc Simont絵	Harper & Row c1949	Y17-A3599
	はなをくんくん	ルース・クラウス文 マーク・サイモント絵	福音館書店 昭和42	Y17-248
49	Ox-cart man	Donald Hall作 Barbara Cooney絵	Viking Press 1979	Y19-A832
	にぐるまひいて	ドナルド・ホールぶん バーバラ・クーニーえ もきかずこやく	ほるぶ出版 1980.10	Y17-7275
50	Chanticleer and the fox	Geoffrey Chaucers原作 Barbara Cooney文・絵	Kestrel Books 1960, c1958	Y19-A848
	チャンティクリアときつね	ジェフリー・チョーサーげんさく バーバラ・クーニーぶん・え ひらのけいいちやく	ほるぶ出版 1976.3	Y17-5222
51	The cat in the hat	Dr. Seuss作・絵	Collins 1958, c1957	Y19-A331
	キャットインザハット：ぼうしをかぶったへんなねこ	ドクター・スースさく・え いとうひろみやく	河出書房新社 2001.1	Y18-N01-45
52	Laci es az orozslan	Marek Veronika.文・絵	Mora Ferenc	Y17-B5887
	ラチとらいおん	マレーク・ベロニカ文・絵 とくながやすもと訳	福音館書店 昭和40	Y17-47
53	Pierre : a cautionary tale in five chapters and a prologue	Maurice Sendak さく	HarperCollins c1990	Y17-A480
	ピエールとライオン	モーリス・センダックさく じんぐうてるおやく	富山房 1981.12	Y17-8275
54	A pair of red clogs	Masako Matsuno作 Kazue Mizumura絵	World Pub. Co. c1960	Y18-B275

レジュメ

Maurice Sendak (1928～) の作品年表

吉田 新一

センダックのこれまでの創作活動の全体を、絵本界に与えた衝撃（インパクト）を視野において、見渡してみます。

- 1947 *Atomics for the Millions* by M. C. Eidinoff and others
1951 *Good Shabbos, Everybody* by Robert Garvey
The Wonderful Farm by Marcel Ayme
1952 *A Hole Is to Dig* by Ruth Krauss
Maggie Rose: Her Birthday Christmas by Ruth Sawyer
1953 *The Giant Story* by Beatrice de Regnier
Hurry Home by Meindert DeJong
Shadrach by Meindert DeJong
A Very Special House by Ruth Krauss
1954 *I'll Be You and You Be Me* by Ruth Krauss
The Magic Pictures by Marcel Ayme
Mrs. Piggie-Wiggle's Farm by Betty MacDonald
The Tin Fiddle by Edward Tripp
The Wheel on the School by Meindert DeJong
1955 *Charlotte and the White Horse* by Ruth Krauss
Happy Hanukah, Everybody by Hyman and Alice Chanover
The Little Cow and the Turtle by Meindert DeJong
Seven Little Stories on Big Subjects by Gladys Baker Bond
What Can You Do with a Shoe? by Beatrice de Regnier
1956 *The Happy Rain* by Jack Sendak
The House of Sixty Fathers by Meindert DeJong
I Want to Paint My Bathroom Blue by Ruth Krauss
Kenny's Window by Maurice Sendak
1957 *The Birthday Party* by Ruth Krauss
Circus Girl by Jack Sendak
Little Bear by Else Holmelund Minarik
Very Far Away by Maurice Sendak
1958 *Along Came a Dog* by Meindert DeJong
No Fighting, No Biting! by Else Holmelund Minarik
Somebody Else's Nut Tree and Other Tales from Children by Ruth Krauss

- What Do You Say, Dear?* By Sesyle Joslin
- 1959 *The Acrobat* by Maurice Sendak
Father Bear Comes Home by Else Holmelund Minarik
The Moon Jumpers by Janice May Udry
Seven Tales by Hans Christian Andersen
- 1960 *Dwarf Long-Nose* by Wilhelm Hauff, translated by Doris Orgel
Little Bear's Friend by Else Holmelund Minarik
Open House for Butterflies by Ruth Krauss
The Sign on Rosie's Door by Maurice Sendak
- 1961 *Let's Be Enemies* by Janice May Udry
Little Bear's Visit by Else Holmelund Minarik
The Tale of Gockel, Hinkel and Gackeliah by Clement Brentano,
translated by Doris Orgel
What Do You Do, Dear? by Sesyle Joslin
- 1962 *The Big Green Book* by Robert Graves
Mr. Rabbit and the Lovely Present by Charlotte Zolotow
The Nutshell Library by Maurice Sendak
Chicken Soup with Rice, One Was Johnny, Alligators All Around, Pierre
Schoolmaster Whackwell's Wonderful Sons by Clement Brentano,
translated by Doris Orgel
The Singing Hill by Meindert DeJong
- 1963 *The Griffin and the Minor Canon* by Frank Stockton
How Little Lori Visited Times Square by Amos Vogel
Nikolenka's Childhood by Leo Tolstoy
Sarah's Room by Doris Orgel
She Loves Me, She Loves Me Not by Robert Keeshan
Where the Wild Things Are by Maurice Sendak
- 1964 *The Bat-Poet* by Randall Jarrell
The Bee-Man of Orn by Frank Stockton
Pleasant Fieldmouse by Jan Wahl
- 1965 *The Animal Family* by Randall Jarrell
Hector Protector and As I Went Over the Water by Maurice Sendak
Lullabies and Night Song edited by William Engvick, music by Alec Wilder
- 1966 *Zlateh the Goat and Other Stories* by Bashevis Singer,
translated by the author and Elizabeth Shub
- 1967 *The Golden Key* by George MacDonald
Higglety Pigglety Pop ! or There Must Be More to Life by Maurice Sendak
Poems from William Blake's "Songs of Innocence" privately issued
- 1968 *A Kiss For Little Bear* by Else Holmelund Minarik
- 1969 *The Light Princess* by George MacDonald
- 1970 *In the Night Kitchen* by Maurice Sendak
- 1971 *Fantasy Drawings* by Maurice Sendak

- The Magician: A Counting Book* by Maurice Sendak
Pictures by Maurice Sendak
- 1973 *The Juniper Tree and Other Tales from Grimm*,
translated by Lore Segal and Randall Jarrell
King Grisly-Beard: A Tale from the Brothers Grimm, translated by Edgar Taylor
- 1974 *Fortunia* by Mme D'Aulnay (Privately printed)
- 1975 *Really Rosie, starring the Nutshell Kids* scenario, lyrics and pictures by Maurice
Sendak, music by Carol King, design by Jane Byers Bierhorst
- 1976 *Fly by Night* by Randall Jarrell
Seven Little Monsters by Maurice Sendak
Some Swell Pup, or Are You Sure You Want a Dog? by Maurice Sendak and
Matthew Margolis
- 1981 *Outside Over There* by Maurice Sendak
- 1984 *Nutcracker* by E. T. A. Hoffmann
The Love for Three Oranges by Frank Corsaro
- 1985 *In Grandpa's House* by Philip Sendak
The Cunning Little Vixen by Rudolf Tesnohlidek
- 1986 *Posters* by Maurice Sendak
- 1988 *Dear Mili* by Wilhelm Grimm
Caldecott & Co. Notes on Books & Pictures by Maurice Sendak
- 1992 *I Saw Esau* edited by Iona and Peter Opie
- 1993 *We Are All in the Dumps With Jack and Guy* by Maurice Sendak
- 1995 *Pierre, or The Ambiguities* by Herman Melville
The Miami Giant by Arthur Yorinks
- 1997 *What Can You Do With a Shoe?* (new full-color edition) by Beatrice de Regnier
- 1998 *Penthesilea* by Heinrich von Kleist
Swine Lake by James Marshall
- 2003 *Brundibar* retold by Tony Kushner
- 2005 *Bears* by Ruth Kraus (1948)

モーリス・センダック (1928～) の作品から

- ☆『もしもまほうがつかえたら』(1962)
- ☆ジョージ・マクドナルド『黄金の鍵』、『かるい姫』(1867)
Arthur Hughes の挿絵
- ☆マインダート・ディヤング
『キャンディ いそいでお帰り』(1953)、『コウノトリと六人の子どもたち』(1954)
『六十人のおとうさんの家』(1956)
- ☆『あなはほるもの おっこちるところ』(1952) [ルース・クラウス]
- ☆『うちがいつけんあったとき』(1953) [ルース・クラウス]
- ☆『シャーロットとしろいうま』(1955) [ルース・クラウス]
- ☆『おふろばをそらいろにぬりたいな』(1956) [ルース・クラウス]

- ☆『月夜のこどもたち』(1959) [ジャニス・メイ・アドリー]
- ☆『ロージーちゃんのひみつ』(1960)
- ☆『うさぎさんてつだってほしいの』(1962) [シャーロット・ゾロトウ]
- ☆『サラーのおへや』(1963) [D. オーゲル]
- ☆『ヘクター・プロテクター と うみのうえをふねでいったら』(1965)
- ☆『わたしたちもジャックもガイもみんなホームレス』(1993)
- ☆『おいしそうなバレエ』(1998) [ジェイムズ・マーシャル]
- ☆『くまたち』(1948; 2005) [ルース・クラウス]

最盛期—モーリス・センダック

その1

吉田 新一



アメリカの絵本の発展を追っていくとセンダックという巨峰にいたります。1970年にハンス・クリスチャン・アンデルセン賞画家賞を受賞したモーリス・センダック (Maurice Sendak, 1928～) が、アメリカのみでなく世界の絵本界でも、もっとも評価の高い現代のイラストレーターで絵本作家であることは、ここに改めて申し上げるまでもないでしょう。お手元の作品年表をご覧になると、改めて作品の数の多さと、旺盛な創作活動に目を見張られることでしょう。そして、個々の作品をゆっくり味わうと、作品の多彩さと奥行きの高さに、また感嘆することでしょう。センダックの作品の多様さはもちろんなのですが、なんとと言っても、子どもについて、従来の一般的認識を大きく変えたことが、センダックの出現の大きな意義と言えましょう。従来の、子どもを無垢な存在と見てきた、ロマン派以来の認識を、180度転換させて、子どもは実は苦悩にみちた存在と見て、同時に、子どもは問題を自力で解決できる力も秘めている存在と見たことです。センダックはそのことをくりかえし、くりかえし、具体的に作品を通して実証して見せてきました。そのことがセンダック文学の現代におけるユニークで、貴重な貢献と言えるでしょう。

明日灰島かり先生が、センダックの重要な作品に焦点をあてて、詳しく語ってくださる予定ですので、私は今日は、その前座、露払いのつもりで、少し自由に、私なりのセンダック絵本の愉しみをお話ししてみたいと思います。

『もしもまほうがつかえたら』(The Big Green Book)

この作品を読んだ方はあまり多くはないようで

す。この作に触れた日本語の文章は、少なくとも私はまだ見ていません。原書のジャケットの見返しに、簡潔な内容紹介が載っているのので、訳してご披露しましょう。「昔、ジャックという少年が、屋根裏部屋の隅っこの古い袋の下に隠されていた〈大きな緑色の本〉を見付けました。お話の本かと思って読み始めると、なんと、もっと素晴らしい、魔法がいっぱいつまった本でした。ジャックはまずくおじいさん〉に変身して姿を隠しました。そして、ふたたび元のジャックにもどったときには、彼が世話になっていたしかつめらしいおばさんおじさんを、それまでよりずっと好ましい人物に変えてしまっていたのです。大人の融通のきかなさに対する少年の勝利を語った、このロバート・グレイブズの物語は、モーリス・センダックの滑稽で魅力的な絵によって、いっそうたのしいものになりました。本のサイズも、1962年初版の時の大きさが、1968年には小さくされましたが、(1985年に)また元の形にもどされました。これで、老若を問わず、存分にこの本を楽しむことができるようになりました。」

富山房から出ている訳本と、私が持っている原書と、大きさが違っていた理由が、これでわかりました。原書は 19.5×29.5センチですが、日本語版は 15.5×22 センチと小ぶりなのです。邦訳は 1968年版によっていたようです。ジャケットの色も原書はダークグリーンですが、邦訳版はライトグリーンで、見た目の印象も違います。

それはさておいて、この物語の作者は、イギリスの詩人・作家・批評家であるロバート・グレイブズ (Robert Graves, 1895～1985) です。日本では『ギリシア神話』が高杉一郎訳で紀伊国屋書店から紹介されています。また、昨年ここで取り

上げたエドワード・アーディゾーニも、グレイブズによる子どものための詩集2冊、*The Penny Fiddle* (1960) と *Ann at Highwood Hall* (1964) にイラストレーションをつけています。センダックによる挿絵は、黒インキのペン画ですが、視覚化によってテキストの滑稽味が増大されて、この作品の絵本化は見事に成功しています。

私がこれを真っ先に取り上げたのには、個人的な理由があります。1985年の夏、イギリスの友人ブライアン・オルダーソンさんに誘われて、私はイギリスの北ヨークシャー奥地リース (Reeth) という村で、ごく小人数を対象に開かれた、6日間に渡るディスカッション・セミナー “The Art of Maurice Sendak” に参加しました。その折、この作品が話題になり、私は、これはセンダックのビアトリクス・ポターへのオマージュに違いないと言って、みな賛同を得ました。そしてセミナーが終わって、8月5、6日には、南英はサセックスの有名なオペラハウス Glyndebourne で、センダックの『かいじゅうたちのいるところ』 (*Where the Wild Things Are*) と『ふふふんへへへんぽん』 (*Higglety Pigglety Pop!, or, There Must Be More to Life* 1967) による Double Bill (2本立てオペラ) の、最終リハーサルと初日があり、それを見ることになりました。リハーサルの昼食は、センダックも一緒に食堂でした。食堂中の人たち誰もが、センダックを意識していましたが、センダックが今日は緊張しているからと、みな遠慮していました。ところが、たまたまオルダーソン氏がトイレに行く途中、センダックから呼び止められて、話し始めました。しばらくすると私は、手招きされました。*The Big Green Book* とポターとの関係を、センダックが認めたと言うのです。紹介をされ、握手したセンダックの手は、がっしりと角張り、甲には黒い毛が生えていました。私は持参していたペーパーバック本『ねずの木そのまわりにもグリムのお話いろいろ』 (*The Juniper Tree and Other Tales from Grimm*) にサインを求めると、快く応じてくれました。後で食堂中の人たちから嫉妬と羨望の声を受けたのはもちろん当然でした。

さて、肝心のポターへのオマージュ、その証拠

ですが、邦訳版で49ページをご覧ください。イギリス湖水地方のニアソーリにあるポターの旧居ヒルトップは、ポター・ファンならよく知っている建物ですが、ジャックのおじさん、お婆さんの家が、それとそっくりです。これの前後17、48、51、52、54ページの庭木戸も、私の見るところ、生前ポターが使っていたヒルトップの通用木戸を写しています。それから、タイトルページと56ページの天蓋付きベッドは、ポターの祖母の住んでいた家<カムフィールド・プレイス>で、ポターが使っていたベッドです。L. リンダー編 *The Art of Beatrix Potter* (p.50) のポターのスケッチ画を見れば、センダックがそっくり写しているのがわかります。また、8、9、16ページのほの暗い階段や納屋内部の絵も、ポターのスケッチ画 (前掲書 pp.60、62、144) を彷彿とさせます。中でも極めつけは、おじさんお婆さんが建物の2階から木陰の<おじいさん>を見ている図 (19ページ) です。リンダー編の画集 (改訂版、1972年) には、祖母の家に近いハットフィールドにある建物<Bush Hall>のスケッチが5枚収められていますが、それはまさに19ページの絵のオリジンです。私も実際に Bush Hall へ行って写真もとってきましたが、建物は今もポターが描いたままの姿で残っていて、訪ねたときにはギリシア人が経営するホテルになっていました。以上のような物証と、センダックのポターに対する高い評価から、ビアトリクス・ポターへの敬愛の気持ちから、このイラストレーションをしたに違いないと推測し、センダック自身から見事にお墨付きを頂戴したというわけです。

センダックのバスターシ

いささか長く『もしもまほうがつかえたら』にこだわりましたが、センダックは過去の絵画、画家、イラストレーションを深く学んで、さまざまな技法を自家薬籠中の物として、彼独自の技法、画風を確立してきた人でした。『かいじゅうたちのいるところ』を出版したとき、「これで長い修業時代を終えた。これまでのあらゆる仕事は、この本のための念入りな準備だったように思う」とも語っていました。従って、さまざまな形でセン

ダックは、恩恵を受けた先輩画家たちへ、作品の中で敬意を表しています。美術用語に *pastiche* (パスティーシュ) というフランス語があって、語源は <パイ> からきているようで、こね合わせる、まぜ合わせる、が原義ですが、合成作品、混成作品といった意味で使われます。センダックはこのパスティーシュによって、独自の画風を練り上げてきた画家と言えます。『もしもまほうがつかえたら』のイラストレーションも、その一例と言えるでしょう。

George MacDonald (1824~1905) の『かるい姫』(*The Light Princess*) のイラストレーションも、別の一例に挙げられるでしょう。マクドナルドは『ナルニア国物語』(*The Chronicles of Narnia*) の C. S. ルイスに大きな影響を与えた19世紀のファンタジー作家で、『北風のうしろの国』(*At the Back of the North Wind*, 1871) が有名です。『かるい姫』が最初に出たときは、当時の著名なイラストレーター Arthur Hughes (1832~1915) が挿絵を描きました。物語は、誕生した姫の洗礼式に、招待もれの客が出てしまい、姫は呪われ、重力を奪われてしまいます。が、水の中では重力が保てました。すると魔女が水を奪おうと、姫の生活する湖の底に穴をあけます。が、献身的な王子が現れて、姫のために自らの体で湖底の穴を塞いでくれ、湖に再び水が満ち始めますが、王子は溺死の運命にさらされます。しかし、姫の献身的な愛の力によって、魔女の呪いは打破され、姫と王子はハッピーエンドを迎えるという物語です。センダックはこれに改めて10枚のペン画で銅版画的な挿絵を描きました。しかし、アーサー・ヒューズの優れたイラストレーションに敬意を払って、ヒューズと同じ箇所を挿絵に選び、ヒューズと同じ構図でもってイラストレーションを描きました。原書の101ページですが、姫が天蓋付き舟から、溺死寸前の王子を悲しげに見守る場面、ここでセンダックは天蓋の縁に A.H. とアーサー・ヒューズのイニシャルでクレジットを入れて、ヒューズの恩恵に感謝を表しています。画家のシンセリティです。

ロシア出身フランスの画家で、センダックと同じユダヤ人のマルク・シャガール (1887~1995)

にも、センダックは篤い親近感を抱いています。新潮社版『世界美術事典』から引用すると、「シャガールの主題は地上の重力の法則をこえた永遠の愛である。そこからシャガールにあっては人間や動物たち、なかでも恋人たちは自由に空をとぶ。この愛の神話を支えるものは、戦後いよいよ鮮烈さを増す色彩である」とあります。

センダックがルース・クラウス (Ruth Krauss, 1911~1993) とコラボレートした『うちがいつけんあったとき』(*A Very Special House*, 1953)、『シャーロットとしろいうま』(*Charlotte and The White Horse*, 1955)、『おふろばをそらいろにぬりたいな』(*I Want to Paint My Bathroom Blue*, 1956)、また、ジャニス・メイ・アドリー (Janice May Udry, 1928~) とコラボレートした『月夜のこどもたち』(*The Moon Jumpers*, 1959) などを見ると、人物が高揚し、浮遊する場面が、多く見られて、シャガールの影響、痕跡が顕著です。

The Moon Jumpers では、満月の夜に庭へ繰り出した子どもたちが “We all dance, barefooted.” “We jump and jump, over and over, and higher and higher.” と浮遊状態で踊り、舞っています。歓喜する子どもらの姿が、シャガールにそっくりな色彩と構図で描かれています。(ついでの話ですが、先のイギリスでのセミナーで、この絵本の日本語訳を紹介したとき、ここでは “jump” がテーマなのに、日本語タイトルに “jump” の意味が出ていないのはおかしい、と批判を受けました。)

『おふろばをそらいろにぬりたいな』でも、<ぼく>が家の内や外に絵を描き始めて、気分が高揚して、エスカレートしてくると、“doorknob” の唄がはじまるページで、<ぼく>は文字通り浮遊状態を演じています。(再びついでの話ですが、この本の終わり近くに<ぼく>が夢で見る家の話>があります。実は私も少年時代に、いつか同じように一私の場合は両親姉たち家族でしたが一四角い部屋の中にぎゅっとかたまって、どこか宙に浮かんでいるイメージを夢想して、子どもなりの至福の時を味わっていたことがありました。『おふろばをそらいろにぬりたいな』の似たくだりに

初めてであったとき、忘れていた少年時代の記憶がとつじょ蘇って、驚きました。)

『シャーロットとしろいうま』は、シャーロットという少女と、愛馬となる生まれたての Milky Way が一年仔に育つまでの、愛情物語ですが、語りの中で、春を迎えて人々が家々の窓から身をのりだし喜び合う場面や、秋の祭りで人々が踊っている場面など、シャガールを連想させずにはおかない画面でしょう。この絵本では、シャガールのみではなく、イギリス・ロマン派の天才詩人で銅版画家ウィリアム・ブレイク (1757~1827) による *Songs of Innocence and Experience* (1789, 1794) を踏まえた作品として見る必要もあるでしょう。ブレイクはヨーロッパ中世の僧院で発達した写本、すなわち彩飾写本 (Illuminated Manuscripts) をモデルに、印刷で同様な詩集を作ろうと、自ら彩飾本 (Illuminated Books) と称し、『無垢の唄』『経験の唄』の2冊の詩画集を生み出した。それは文字 (テキスト) と挿絵のデザインがページ内で融合一体化する構成でした。当時は至難とされた銅版レリーフ (浮き彫り) のエッチングで単色刷りを作り、それに手彩色を加えて彩色本とした優美な袖珍本でした。絵は中世写本の伝統を受けて、植物の伸び広がる姿を様式化したデザインで飾り、収めるテキストは筆記体の書き文字によりました。このブレイクの袖珍本を踏まえて、『シャーロット』も13.5×16.8センチの小型本で、表紙のタイトルも、本文の文字も、すべて書き文字で、見返しのデザインも (ウィリアム・モリスのそれにも似た) 植物模様、また、タイトルページ (内扉) では、例えば *Songs of Innocence* 中の “The Lamb” や “The Dream” の構成に似て、樹木の様式模様をページの枠とし、本文のページでは、“The Echoing Green” に似せて、ページ上段に絵、下段にテキスト、という配分でページのレイアウトを行っています。

この作品には、もう一つテキストの点で、注目すべきことがあります。仔馬のミルキー・ウェーが生まれて春が到来するくだりの、ルース・クラウスによるテキストを、少し読んで見ましょう。

— the winter is going, / the wind and the

rains are gone / the grass is coming out of the ground / the leaves are coming out of the trees / the people are coming out of doors / they are coming out of windows / they are coming out and planting radishes, / the worms are coming out of the old apples. / — the time of my singing is come. / Arise, my love, my fair one / my milk white Milky Way — / Come away, Pure White, / All White and Strong / — stronger than Hero the Great Dog / — sure, but he couldn't wag his tail like Hero — / At first he could not even stand. / But then he does. Oh yes, he did / — he is ready. / He looks around and sees a little girl smiling.

この英文と、次に挙げる『旧約聖書』(欽定訳聖書、1611年)の「雅歌」(II; 11~15)の英文とを、読み比べてみてください。

The voice of my beloved! behold, he cometh, / Leaping upon the mountains, skipping upon the hills. / My beloved is like a roe or a young hart; / Behold, he standeth behind our wall, / He looketh in at the windows, / He showeth himself through the lattice. / My beloved spoke, and said unto me, / "Rise up, my love, my fair one, and come away. / For, lo, the winter is past, / The rain is over and gone; / The flowers appear on the earth; / The time of the singing of birds is come, / And the voice of the turtle is heard in our land; / The fig tree ripeneth her green figs, / And the vines are in blossom, / They give forth their fragrance. / Arise, my love, my fair one, and come away."

(「わが愛する者の声が聞こえる。 / 見よ、彼は山をとび、丘をおどり越えて来る。 / わが愛する者はかもしかのごとく、 / 若い雄じかのようなです。 / 見よ、彼はわたしたちの壁のうしろに立ち、 / 窓からのぞき、格子からうかがって

る。/ わが愛する者はわたしに語って言う。/ 「わが愛する者よ。わが麗しき者よ、/ 立って、出てきなさい。/ 見よ、冬は過ぎ、/ 雨もやんで、すでに去り、/ もろもろの花は地にあらわれ、/ 鳥のさえずる時がきた。/ 山ぼとの声がわれわれの地に聞える。/ いちじくの木はその実を結び、/ ぶどうの木は花咲いて、かんばしいにおいを放つ。/ わが愛する者よ、わが麗しき者よ、/ 立って、出てきなさい。」)

いかがでしょう、このくだりは、テキストが「雅歌」の愛の歌をエコーしているのです。この典雅なテキストに、センダックはシャガールとブレイクでイラストレーションを試みたのです。

マザーグースの唄二つによる絵本『ヘクター・プロテクターとうみのうえをふねでいったら』(*Hector Protector and As I Went over the Water*) は、センダックが敬慕してやまないランドルフ・コールデコットの絵本作り技法を応用したパスティーシュであり、同時にコールデコットへのオマージュでもあります。二つの唄の前者「ヘクター・プロテクター」は、行数僅か5行ですが、19場面の絵とカット絵二つでイラストレートされています。絵は漫画風のスタイルで、内容はヘクター少年が緑の服を着せられて、無理やり女王さまへケーキをとどけに行かされますが、女王にも王にも嫌われて追い返される、という話です。『かいじゅうたちのいるところ』の2年後の出版なので、後半でイラストレーションが語る内容は、いわば「かいじゅうたちのいるところ」の再演といったところで、テキストに対し、センダックならではの後日譚です。ここでは、テキストでは全く言及されていない一羽のクロウタドリを登場させ、物語の進行役をになわせ、その活躍で内容にユーモアが付加されています。わらべ唄の絵本化におけるコールデコットの技を見事に応用した一例と言えるでしょう。

この絵本から28年後1993年に、再びマザーグースの唄二つで絵本が作られています。『わたしたちもジャックもガイもみんなホームレス』(*We Are All in the Dumps With Jack and Guy*) ですが、そこでもやはり全く別個な二つの唄を、巧

みにつなげて有機的統合をさせ、手の込んだ、しかし、緊密な一貫性のある物語絵本を生みだしています。センダックの円熟さを実感させられる作品ですが、重層性のあるその作品と比べると、『ヘクター・プロテクターとうみのうえをふねでいったら』の方は、単層的作品と言えます。従って、エンターテイメント絵本として、軽みとユーモアに富む作品で、これは私の好みの作品の一つです。

『ヘクター・プロテクターとうみのうえをふねでいったら』のように、テキストには全く登場していないキャラクターを、イラストレーションで登場させて、ナンセンスなテキストに、一貫したストーリーを付与したものを、もう一作挙げてみましょう、これも私の好みの作品です。

それは、ルース・クラウスのテキストによって、2005年に作られた『くまたち』(*Bears* 邦訳なし)です。これは1948年にPhyllis Rowandという画家のイラストで出たことがあるようですが、センダックが同じテキストを使って、新しく制作した絵本です。

テキストは、“Bears Bears Bears/ Bears Bears / On the stairs / Under chairs / Washing hairs / Giving stares / Collecting fares / Stepping in squares / Millionaires / Bears Bears Bears/ Bears Bears / Everywheres” と、僅か17 wordsで書かれた唄です。ご覧のように行末が、きれいに韻を踏んでいます。イラストレーションでは、『かいじゅうたちのいるところ』のマックスと同一人物と思われる、ぬいぐるみ着用の少年と、小犬一匹が登場します。すなわち、テキストにはない、センダックによるオリジナルなキャラクターです。

少年と犬は良好な関係で登場しますが、少年が犬ではなく子どもテディベアに愛着すると、犬は怒ってテディベアをくわえて走りだします。少年は追いますが、犬はテディベアをくわえたまま、大人テディベアたちのいる階段や、椅子の下や、バスタブや、彼らがにらめっこ中のところや、列車で検札中や、町の広場や、億万長者の車の下などを、くぐりぬけ、逃げつづけます。そして、やっと追いつき、子どもテディベアを取り返して、抱きかかえると、今度は大人テディベアたちが怒り

始めるので、少年は子どもテディベアをあきらめ、再び愛犬との良好な関係にもどる、そのようにイラストレーションが語ります。

テキストは、韻を踏むために選ばれた語でつづられて、同音の連続性がねらいどころです。すなわち、ナンセンスの唄です。そこでイラストレーターは、Bearをテディベアとし、これを子どもテディベアと大人テディベアに分けました。そして、〈犬の嫉妬〉をダイナモに、〈そしてそれから〉型のストーリーを展開したわけです。ここに、テキストとイラストレーションの見事なコラボレーションが実現したというわけです。

ここまで、センダックのパスティーシュとオマージュについて、その片鱗をお話ししてきましたが、このテーマについては、モーツァルトやマーラーといった作曲家や、ルンゲやフリードリヒといったドイツロマン派の画家たちについても、機会を改めて考えてみたいと思っています。

イメージのリレーを楽しむ

話題を変えてつづけますが、グリム童話の一つ『つぐみのひげの王さま』によるセンダックの絵本 *King Grisly-Beard* (1973) は趣向の変った絵本です。グリムのお話はそのままで、手を加えられていませんが、イラストレーションがアイデアに富んでいます。本を見ればひと目で明らかですが、本文の各ページの上半分にテキストが印刷され、下半分に四角い枠つきでイラストレーションが配されています。

趣向は、『つぐみのひげの王さま』の芝居を演じる子どもたちを追って展開する、というイラストレーションです。最初に、役者募集があり、それに応募した男の子と女の子が芝居を演じる、という構成です。本を開くと、タイトルページの前の遊び紙に、“Theatre Straight Ahead” という矢印の看板があって、きょうだいとおぼしき男女の子どもが、冬支度の服装で出てきます。二人が話すことばは、漫画のふきだしで記されています、次をめくると、見開きの右側が最初の内扉、表題がプリントされ、その下に「もとむ！グリム げんさく『つぐみのひげの王さま』のための しゅやくの男女 おのおの1めいりんじ さいよう く

わしくはなかで→」という看板を〈興行主〉が持って立ち、見開き左側では、それを見たいきょうだい二人が、「えっ やるの?」「そりゃそうよ」と話しています。次が正式のタイトルページで、興行主が「きみたち できるのかね?」と言い、子どもが「もち!」「あたりきよ!」と答えています。次はコピーライツのページ、その向かいでは、二人が鏡に向い、衣装をつけながら、「かっこいい!」「うっとり!」と喋っています。そして、いよいよ本体となり、芝居が始まります。芝居が終ると、最後の遊び紙に、興行主から“You're terrific!”と褒められたのに対して、子どもらは“True”と応え、最後のページの“We were TERRIFIC!” “What did you expect?”という二人の会話で終わります。

グリムの芝居を演じたこの二人の姿が、今度は『子いぬのかいかたしってるかい?』(*Some Swell Pup, or, Are You Sure You Want a Dog?* 1976) にまた登場です。こちらは完全に漫画仕立ての作りで、こま割りの絵で語られます。邦訳版ジャケットの見返しに話の内容が語られているので、引用しましょう。「子犬をほしいと思っていた男の子と女の子が、子犬をひろいます。ところが、その子犬のいたずらで、家の中はめっちゃめっちゃ。そこへ、ふしぎなひとがあらわれて、子犬のかいかたをおしえてくれるのですが…」とあります。センダックが飼っていた犬を訓練するため知己となった、犬の訓練協会の Matthew Margolis との共作の絵本です。絵はもちろんセンダックが描いています。これも先の『つぐみのひげの王さま』と全く同じ趣向で、本題が始まる前から、絵でストーリーが始まります。さいしょに擬人化された成犬〈ふしぎなひと〉が、ガウンをすっぽり着て、手提げに子犬を入れて登場します。ふきだして「あわれなワンちゃん おまえのおうちを さがしてやろうね」と言っています。次の見開きは、右ページにタイトルが書かれ、下で小さな家の二つの窓から、例の男女のきょうだいが半身を出して、「ああ 子いぬをかいたいわ」「ぼくも」と言っています。左ページでは前ページの〈ふしぎなひと〉が“HMM!”とつぶやいています。ページをめくると、見開き右ページでは

前ページの家の戸口に、〈ふしぎなひと〉の下げた子犬の入った手提げが置かれています。女の子は「まあみてよ！子いぬだわ！」と、男の子は「ゆめがほんとになっちゃった」と言っています。左ページでは、〈ふしぎなひと〉が木の陰で子どもらの方に背を向けて、「しめしめ」とつぶやいています。この後、いよいよ「子いぬの飼い方」のメインストーリーが始まるのですが、ストーリーが全部終わると、ここでも、立ち去る〈ふしぎなひと〉に、子ども二人が“Will you come back and help us with Him / HER”というのに対して、〈ふしぎなひと〉は、“Sure!”と答えながら、子どもらが“HIM! /HER!”とわめいているのに、“Hey! It's a GIRL!”と叫んでいます。にもかかわらず最後のページで子どもらは、子犬を抱きながら、一方は“Let's call him Florence”他方は“Let's call her Seymour”というので、〈ふしぎなひと〉は“Those kid are Bananas. Heh Heh”と言って立ち去って、幕となります。(banana は俗語で「おばかさん」の意です。)

この〈ふしぎなひと〉の姿が、こんどは〈擬人化の成犬〉ではなく、のっぺらぼうで真っ黒顔の〈ゴブリン〉で登場してくるのが、『まどのそとのそのまたむこう』(Outside Over There 1981)です。ゴブリン二人はガウンをすっぽりかぶった姿で、梯子を使って窓から侵入、Idaの妹babyを拉致していきます。Idaが妹を無事にとりかえしてもどってきたとき、迎えてくれたシェパード犬、これも『子いぬのかいかたしってるかい?』で、「おとこの子のゆめ」と「おんなの子のゆめ」にすでに登場しています。そして、このIdaですが、Wilhelm Grimmの遺作として新発見され、センダックがイラストレーションを描いた『ミリー：天使にであった女の子のお話』(Dear Mili 1988)の少女へとつながっていくことになります。

このように、センダックのイラストレーションには、イメージのリレー的な継続性に注目して楽しむ、楽しみ方もあるのです。

『ロージーちゃんのひみつ』The Sign on Rosie's Door

最初にお話しした、1985年のイギリスでのセミナー「センダックの世界 (The Art of Maurice Sendak)」で最後に、もしセンダックの作品から一冊、ベスト・ワンを選ぶとしたら、何だろうか、とディスカッションをしました。そして、選ばれたのが、*The Sign on Rosie's Door* (1960)でした。

これはニューヨークのブルックリンを舞台に、ひととき想像力豊かな少女ロージーを牽引役に、遊びほうける子どもたちの姿を描いた、明るく、ユーモアに富んだ作品です。退屈さを克服する子どもたちのすばらしい能力を描いた物語、と言ってよいでしょう。

ここにセンダックによる少年時代の回想文があります。「夏は恐怖でした。どこへもいかれなかったのです。1日の数時間をつぶしてくれる学校さえもです。子どもたちの大部分は、まるですることがありませんでした。子どもが退屈な時間をつぶす方法は、ゲーム遊びか、ごっこ遊びを発明することでした。*The Sign on Rosie's Door*の中では、ロージーは、遊び仲間が、彼女ほどおもしろい子どもたちではないのに、彼らでがまんします。そこで、彼女は遊び仲間を家来に変え、家来どもは家来どもで、彼女のファンタジーの中のちよい役を喜んでつとめます。これは健全なことです。おかげで午後がつぶせます。ロージーには、運よく遊び仲間がいるし、彼らにも運よくロージーがいるのです。子どもたちは、みんな想像力を駆使します。想像力とは子ども時代によくつかう筋力で、長じてからは、そんなにつかうことはありません。」

ロージーは、家の入り口の戸に、“If you want to know a secret, knock three times.”という札を下げます。真っ先にKathyがやってきてノックします。““Hello, Kathy." "Hello, Rosie. What's the secret?" "I'm not Rosie any more," said Rosie. "That's the secret." "Then who are you?" asked Kathy. " I'm Alinda, the lovely lady singer." "Oh," said Kathy.”

キャッシーはCha-Charooというアラビアの踊り子役をもらいます。そして、やって来た

Dolly、Pudgy、Salと言った子たちを観客に仕立てて、ロージーの家の裏庭で、二人は演芸会を始めます。が、玩具の消防夫の服を着た Lenny の闖入で中断され、やがてレニーに観客を奪われ、夕刻にもなって、ロージーは一人寂しく“On the Sunny Side of the Street”を歌って、その日を終えます。

翌日はまた退屈を晴らすために、ロージーは別の札を戸口にさげて、赤い毛布をかぶって裏庭の地下室の戸の上にすわります。一方、キャッシーも退屈で、ドリーや、パッジーや、サルを誘って、ロージーの家へやってきます。戸口に“If you are looking for me it won't be easy because I am wearing a disguise. Yours truly, Alinda”とある札を見付けて、裏庭へまわります。赤い毛布をかぶった人を見付けて、“Is that you, Rosie?” Dolly asked. There was no answer. “Please tell us who you are” “I'm Alinda the lost girl.” “Who lost you?” asked Pudgy. “I lost myself.” Answered Alinda. “Aren't you really Rosie though?” asked Pudgy. “I used to be Rosie,” Alinda said, “but not any more.” They all sat down on the cellar door. “Who is going to find you?” asked Sal. “Magic Man,” said Alinda. “Who's he?” “My best friend,” answered Alinda.” こうして子どもらは全員で、アリンダの親友 Magic Man の来るのを、アリンダのく無言での注意を守って待ちます。待つ待つうちに、また夕刻になって、みな家にひきあげます。

その翌日、ロージーは今日は独立記念日だから、花火を買ってとねだりますが、お母さんは許してくれず、ネコのButtermilkと遊びなさいと言います。ロージーはすねて家の戸の外にいます、キャッシー、ドリー、パッジー、サルたちがやってきます。一同、昨日の続きで Magic Man を待ちます。またレニーがやってきますが、面白そうと仲間に入って、一緒に待ちます。みな、ロージーに言われたとおりに、目をつぶり、無言で待ちます。その内に来た気配があり、アリンダが会話するのを聞きます。“Hello, Magic Man — Oh, how nice — thank you so much. Good-by, and please give my regards to your wife.” アリ

ンダの許しをえて、みんなは目を開けて、Magic Man がなんと言っていたのか、とききます。すると、もうおまえはアリンダではない、A big red firecracker だと言ったといいます。さあ、そこで一同みんな花火に変身して Boom! Crack-phizz-boom! Whizz-bam-boom! Whizzzz-boom! Boom-te-de-boom-boom とてんではじめ始めます。そして、はじけながらみなそれぞれの家へ帰ります。ロージーはお母さんに、素晴らしい独立記念日だったと言って、ネコのバタミルクを抱えて、寝室へ向います。しばらくしてお母さんが寝室を覗くと、バタミルクがロージーのベッドに寝て、ロージーがネコのふとんで寝ています。“Why are you on the floor, dear?” とときくと、ロージーは“Because I'm a sleepy cat.”と答えます。お母さんが「そうお、じゃおやすみ」と言うと、ロージーは“Meow”と応えるのでした。

この絵本の最初には、Remembering *Pearl Karchawer, all the Rosies, and Brooklyn* と献辞が載っています。これを読みとくために、いくつか解説をしてみましょう。

センダックの父フィリップは、ポーランドのワルシャワから、恋人を追ってニューヨークへきました。母セイディも父と死別後、ヨーロッパから一人で、貯えができたなら母親と兄弟を呼ぶつもりで、アメリカへきていました。二人が出会って、結婚して、やはり移民だった Charlie という友人が開いている Catshill 山地のホテルへ、ハネムーン旅行をしました。そのゆかりのホテルへ、センダック家は毎夏行って2週間を過ごしていました。モーリスが12歳のときでした、そのホテルに滞在中だった若い Pearl Karchawer と知り合い、ふたりは万国博の指輪を交換しました。しかし、交際は長く続きませんでした。1年後、パールは背骨の先天性欠陥を手術中に亡くなってしまったのです。この突然の死は、センダックの人生に大きな影響を残したと言われています。

Rosies については、セルマ・レイنزの『センダックの世界』（渡辺茂男訳）にさまざまなお話が記されているので、2、3のエピソードを拾っ

てみましょう。

少年時代、センダックの家族はニューヨークを転々と引っ越していました。7、8歳の頃住んだ家の近くで、ツイッピーという名の女の子と親しくなりました。「ツイッピーの姉ロージーは、小児麻痺にかかったことのある女の子でした。…彼女がわたしの人生で最初のロージーでした。私は、ツイッピーを主人公にして長編の物語を書いたことがあります、出版はしませんでした。」

「私は10代の半ば頃、何百時間もわが家の窓辺ですごし、近所の子どもたちの遊ぶ姿をスケッチしていました。私はスケッチをしては聞き耳を立てました。そうして出来たノートは、その後の私の制作の肥沃な畑となりました。これまでに書いた本、描いた絵で、何らかの形でそれらのノートに依存していないものはありません。」

第二次世界大戦の終了直後の頃も、センダックは無一文でした。気晴らしとなぐさみのために「窓の外」を真剣にスケッチし始めていました。今も「ブルックリンの子どもたち、1948年8月」という手作りのスケッチブックを大事にしているそうですが、その中にもロージーを描いた初期の絵が何枚か含まれているそうです。

「…私は実際のできごとから思いつきました。ロージーがその光景を演じるのを見ていたのでした。ロージーは空想力で遊び仲間の心をとらえたときだけ、彼らを御することができました。そうでないときは、彼らはロージーに対して、とても残酷でさえありました。ロージーが映画の話ができなかったり、何かのまねができない時は、遊び仲間はたちまちロージーを置きざりにしました。子どもたちはみんなそんなものです。あるいは、ロージーをからかいました。けれども、ひとたびロージーは劇化する何かを思いつくと、たちまち子どもたちをとらえました。」

「ある日のことでした——私は、それについて、すべてを書きとめておきました——子どもたちは、ポーチで座りこんで、にぎやかにおしゃべりをしていました。——ロージーだけは、ぽつんと離れて、階段の一番上に座っていました。

ロージーはみんなの注意をひこうとしていました。そして、魔法のことばを言いました。〈聞いた、誰が死んだか？〉私も含めて、そこにいるものみんなの心をとらえることばでした。私は顔をあげました。子どもたちは顔をあげて訊きました。〈誰が？〉すると、ロージーは言いました。〈あたしのおばあさんが、けさ早く死んだのよ。〉

私はロージーのおばあさんを知っていました。絨毯にブラシをあてたり、道路にいるロージーに向かってイタリア語で叫んでいるのを窓辺で見たこともありました。私はロージーのことばを信じました——私たちは、みんな信じました。それからロージーは、夜明けに何が起こったのかをパントマイムで演じ始めました。家具がたおれ、鏡のわれる音を聞いたようす。太ったおばあさんが喉をつまらせ、走り回るさま、みんなでおばあさんの頭を窓から突き出す、おばあさんの口に口をあてて人工呼吸、すべてが手後れ。〈おばあさんの死体は？〉と、子どもたちが訊きました。〈もうないよ、すぐにおまわりさんが来て、みんなすんじゃったの〉ロージーは震え声で語りました。

ところが、なんとこの物語のさいちゅうに、当のおばあさんが通りをこっちにやってくるではありませんか。大きな買い物袋を二つさげ、サンダルをばたつかせながら。そして、イタリア語で子どもたちをののしり、足で彼らをおしのけながら階段をのぼり、体をゆすりながら家の中へ入っていきました。子どもたちは、通り道をあけました。そして、〈ロージー、も一度話してよ〉と言いました。」

これらのロージーたちが集められて、献辞の“all the Rosies”になったのでした。

センダックは、自分は“in a land called Brooklyn”で生まれ育ったと言っているほどに、Brooklynを愛していました。これで献辞の内容の意味が理解できたでしょう。

それでは次にイラストレーションを見てまいりましょう。この作品はすべてのページに絵があって、絵がストーリーの進行とぴったりと呼吸が

合っています。ページをめくる〈冊子本〉でありながら、絵巻物の〈卷子本〉のように、絵の連続性、連動性、流動性が計算されています。読者はテキストのストーリーを読み終えたら、改めてイラストレーションのみを追って、読み直して見てください。すると、その連続性、ドラマ性が視覚的にひじょうに巧みに処理と展開を計られているのが認識できると思います。

また、小さなことなのですが、細部がこれまた慎重に、計算されて描かれていることに気づくと思います。本を開くと、タイトルページの見開きがあります。左端にネコのバタミルクがいて、右端にアリンダことロージーがいます。ページをめくって、バタミルクがどこにどのように登場しているか、丹念に追ってみてください。バタミルクは終始、ロージーとその仲間たちとつかずはなれずいて、ときに子どもたちの遊びのとぼちりを受けたり、ときに知らず仲間に加わったりしています。そして、最後のページに描かれているのが、バタミルクで、今度はバタミルク一人です。その姿を、タイトルページの絵と比べて見ると、ロージーがかぶっていた帽子を、最後はバタミルクがかぶっています。また、(前ページで)ロージーが〈眠たいネコ〉で寝ていたバタミルクの rug に、ちゃんと座っています。そこで、改めて表紙の絵を見なおすと、バタミルクはロージーの腰巾着のように、涼しい顔で、最初から登場しているではありませんか。そして、ジャケットの裏表紙の折り返し、ということは、本の一番最後のところに、バタミルクが描かれているのです。こうして見ると、センダックはイラストレーションでは、この絵本のタイトルを「ロージーとバタミルクのおはなし」と言っているのではないかと思いたくなります。ある意味で、バタミルクはサブストーリーを語っている、と言えるでしょう。

もっと小さなことですが、ジャケットの表紙側の折り返しに、小鳥が3羽描かれています。ページを順にめくって小鳥の出現に気をつけてみてください。ジャケットの裏表紙の折り返しまで、何箇所か確認できるでしょう。ページの進行を、ささやかでも視覚的に助けているアクセントです。

先ほども紹介しましたが、子どもたちのいきい

きした遊び姿は、彼のブルックリン・スケッチから誕生したものです。センダックは当初は専ら他の作家のものに、イラストレーションを描いて、パスティーシュを学んできました。『ロージーちゃんのひみつ』までに作・絵、すなわちストーリーもイラストレーションも自分一人で制作したものは、『ケニーのまど』(*Kenny's Window* 1956)と、『とおいところへいきたいな』(*Very Far Away*, 1957)の2作で、それぞれ後のセンダック作品の萌芽を見ることのできる興味ある作品ではありますが、作品としての完成度からは、初期の試作品と言わねばならないでしょう。それに対して『ロージーちゃんのひみつ』は格段に優れています。初期の傑作というばかりでなく、1950年代までのアメリカ絵本でもっとも優れた作品と言えるでしょう。絵本史に残る古典の一つといっても過言ではないでしょう。センダックはここに、ロージーというまぎれもない一つの個性 (character) を創造して、画文一致の見事な絵本を創りだしました。

In the Night Kitchen (『まよなかのだいどころ』)

センダックはイラストレーションの中にきわめて個人的な思い入れを挿入する絵本作家です。その具体例を *In the Night Kitchen* (1970) で見ることにしましょう。(なお、これから話す内容は、先ほど挙げたセルマ・レイنزの『センダックの世界』(邦訳、岩波書店)に記されていることをもとにしていることを、お断りしておきます。イギリスでのセミナーではセルマ・レイنزさんがお見えになって、直接お話が聞けるはずでしたが、あいにく健康を害され、渡英が中止となって、お会いできなかったのが残念です。)

まず『まよなかのだいどころ』のイラストレーションは漫画風な作りで、これは先に話したセンダックのパスティーシュとオマージュの絵本です。1966年にニューヨークの Metropolitan Museum of Art で、comic-strip artist, Winsor McCay (1867?~1934) の『夢の国のリトル・ニモ』*Little Nemo in Slumberland* 回顧展がありました。センダックはそれを見て、この作品のスタイルを決めたそうです。従ってこれはウィンザー・マッケイへのオマージュでパスティーシュです。

もう一つは、センダック自身が少年時代 Walt Disney (1901~66) に熱中していたことから、ここではディズニーへのオマージュも重ねられています。(ちなみに、Mickey Mouse はセンダックが生まれた1928年に *Steamboat Willie* で初登場し、ディズニーは37年(センダック9歳)に *Snow White and the Seven Dwarfs* を、40年に *Pinocchio* を、42年に *Bambi* を、とディズニーの全盛時代が、センダックの少年時代と重なっています。)

『夢の国のリトル・ニモ』は、1905年から11年へかけて、*New York Herald* 紙の日曜版に、まるごと1ページを使うカートゥーン(漫画)として連載されました。センダックのこぼれを借りると、「ニモは眠り、夢を見、最後のコマで目覚める。夢はほとんど悪夢で、ニモは悲鳴をあげて目を覚めますか、ベッドから落ちる結果になり、たまに穏やかな夢を見ているときには、叩き起こされてしまう」というパターンの作品でした。

『まよなかのだいどころ』は少年 Mickey が夢でパン作りに参加する話ですが、センダックは「子どもの頃、今も忘れられない広告があった。Sunshine Bakers の “We Bake While You Sleep!” (皆さんがおやすみ中に、パンを焼いておきます) という広告で、こんなひどい話はないと思った、起きていて、ぜったいパン焼きを見たかったから」と述懐しています。この作品で、センダックはついに少年時代からの悲願を達成したことになります。

それでは、手元に作品を置いて、ページを開きながら一緒に、センダックの private references を追ってみることにします。(私はペーパーバックの Picture Puffins 版で見えています。)

★5 ページ(献辞) — Sadie はセンダックの母の名、Philip は父の名。

★8~9 ページ — ノスタルジックな、1920年代のアールデコのシャンデリアと、30年代のコンソール型のラジオ。そして、美しいゴッサマーカーテン。

★10~11 ページ — 台所のカートンや瓶類は、少年時代にブルックリンの住まいから見ていたマンハッタンの高層ビル群。パン焼き職人は、

1920~50年にサイレント映画で活躍した喜劇役者 Oliver Hardy triplet がモデル。Kneitel's Fandango はミッキーマウスの人形を制作し販売した Kenny Kneitel。その商品はセンダックのお宝だったそうです。Woody's は Nostalgia Press の編集者で親友の Woody Gelman。

★12 ページ — 向かって左のパン職人が逆さにしている粉袋に愛犬だったシーリハムテリアの名 Jennie、その生まれ年1953と、死亡年、死亡地 1967 Bay Shore, LI が。握ね鉢台の下の粉袋には、Jennie の誕生地 Killingworth, Connecticut が記されています。

★14~15 ページ — Taylor's は、イギリスの Bodley Head 社の元編集者、現在は Beatrix Potter 研究第一人者の Judy Taylor。センダックがイギリスで心臓発作を起こしたときの命の恩人。(センダックはお礼に手描きの挿絵つき *Poems from William Blake's Songs of Innocence* をジュディ・テイラーへ贈りました。ボドレイヘッド社は、センダックの了解のもとに、1967年に、それを私家版として印刷し、社の貢献者たちへクリスマスプレゼントしています。) 牛乳のカートンに記された 1717 West 6th St. Brooklyn, N.Y. と 1756 58 ST. の文字は、引越しつつきだった子ども時代、ブルックリンで好きだった住まいの番地2つ。

★19 ページ — Eugene's は、愛犬ジェニーを安楽死のため、Bay Shore へつれていってくれた親友。Philip's best Tomatoes と Sadie's best は、それぞれ父と母の名が。

★20 ページ — June 10th 1928 は、センダック自身の生年月日。

★21 ページ — Safe と Yeast の文字には含まれた<日の出印>は Sunshine Bakers のマーク。

★27 ページ — 高架道路に Jennie Street の文字。

★28 ページ — Schickel はウォルト・ディズニー伝を書いた作家 Richard Schickel。

★34 ページ — Mama's Cream of Tartar は母への呼びかけ。

★37 ページ — Q. E. Gateshead は、イギリスで心臓発作を起こしたとき担ぎこまれたイングラ

ンド北部NewcastleのゲーツヘッドのQueen Elizabeth II病院。

★作品の最初と最後の牛乳瓶を持ったミッキーデザインは、ディズニーとサンシャインベーカーズを記念したオマージュ。ミッキーという名も、15ページのMickey Ovenも、“A delicious Mickey-cake”も、ミッキーマウスへのオマージュ。

★イラストレーションの中に、素裸のミッキーが出てくることから、出版当時、一部の図書館員たちが、絵の具でミッキーにくおむつをはかせた、というエピソードが伝えられています。

Nutshell Libraryの中のPierre

愛書家が好むひとつに〈豆本〉があります。私も小型本には愛着を持っていて、例えば、長野県岡谷市の「イルフ童画館」で、武井武雄の〈刊本作品〉を見るのが楽しみです。武井武雄の刊本豆本は〈本を素材とした美術の追究〉でした。センダックの豆本4冊セットの『ちいさなちいさなえほんばこ』(Nutshell Library, 1962)も、まさにセンダックによる〈本を素材とした美術品〉と言うべきものでしょう。センダックは、少年の頃、姉のナタリーから、造本が豪華で堅牢な(マーク・トウェーンの)『王子と乞食』を贈られて、もう嬉しくて中身を読む前に、本の匂いをかいだり、堅い表紙を指ではじいたり、噛んでみたり、ためつつがめつ眺めてみて、本によるよこびにひたつた、と思いを語り、そのときからブックメイキングに対する情熱が始まったと言っています。センダックの作る本は、それぞれ形や大きさが違って、本作りを愉しんでいるようすがよくうかがえます。そうした中でも、特に注目されるのが『ちいさなちいさなえほんばこ』でしょう。

*Alligators All Around, An Alphabet; ; One was Johnny, A Counting Book; Chicken Soup with Rice, A Book of Month; Pierre, a Cautionary Tale*の4冊セットは、アルファベット絵本、数かぞえの絵本、1年の月の名の絵本、そして、教訓話の絵本です。この4冊が、木箱に似せた本箱(ケース)に入っていて、箱の横3面に、4冊のお話が、舞台上で演じられている趣向で、

絵が描かれています。

4冊の内ではいちばんよくできている『ピエールとライオン』を、ここに取り上げてみましょう。本のサイズは9×6.7センチ、48ページです。タイトルの副題が、a cautionary taleとあり、つづけてin five chapters and a prologueと中の構成も説明されています。カットの装飾絵、口絵、タイトルページ、目次、プロローグにはheadpieceがあり、5章各章の扉にもそれぞれheadpieceがついています。ストーリーは見開きの左が文(韻を踏んだ唄形式)、右がイラストレーションで、絵は黒の輪郭線にブルーとイエローの2色が彩色されています。

Prologueには、“There once was a boy named Pierre / who only would say, 'I don't care!' / Read his story, my friend, / for you'll find at the end / that a suitable moral lies there.”とあり、ピエールはまず、朝「おはよう」の母親の呼びかけに、“I don't care”としか言いません。朝食も、椅子に後ろ向きで座り、頭へシロップをかける行儀の悪さ、注意されても“I don't care”。鍋と箸で道化を演じているので、母が町へ行こうと誘いますが、“I don't care”。母は怒ってピエールをおいて、町へ行ってしまう。椅子の上での逆立ちを、父親が叱ると、“I don't care”の返事。父も彼をおいて、母と出かけてしまいます。両親の留守中、お腹のすいたライオンが現れて、お前を食うぞと言いますが、相変わらず“I don't care”。ライオンはピエールを食べてしまいます。帰宅した両親はピエールが消えて、ライオンがベッドで寝ているので、ピエールはどこかと聞くと、ライオンのお腹から“I don't care”の音がきこえてきて、ピエールの所在がわかり、ライオンを医者へつれていきます。医者がライオンをさかさにふると、口からピエールが元気に飛び出してきます。父親が「大丈夫か？」ときくと、初めて“I am feeling fine, please take me home, it's half past nine.”と答えます。ライオンが、では“If you would care to climb on me, I'll take you there.”と言うと、ピエールは初めて“Yes, indeed I care!”と言って、両親ともども、ライオンに乗ってわが家へと帰り

ます。そして、最後に“The moral of Pierre is CARE!”と、モラルが示されています。

先のセルマ・レインズが、この話を「ものいう人間ぎらいの男の子が、空腹なライオンの腹のなかに健康的な滞在をした後、人間と仲よくなるという話」と、上手にテーマをまとめています。

これは子どもにたいへん人気のある絵本ですが、さもありませんと思えます。親から素直に「わかりました」と言いなさいと、しょっちゅう注意されていれば、子どもは意地でもそのことばを言いたくありません。「しーらない」を連発して、親が苛立つのをむしろ楽しむ、そういう子どもの思いにストーリーに訴える内容なのですから。ここにもセンダックの子ども観がよく出ています。ピエールを置いて、出て行ってしまおう親たち。子どもは親にたよらなければいけない存在ですが、ときに親に見離されます。子どもはそこで自力で解決をはからなければなりません。そのとき使うのがファンタジーだ、とセンダックは言うのです。先ほどの『ヘクター・プロテクターとうみのうえをふねでいったら』でも、女王さまのところへ無理やり行かされたヘクターは、ライオンに乗って、行って帰ってきます。子どもの怒り、不満、ストレスといった否定的感情に、ライオンが登場して、ライオンが浄化の働きをするのです。しかし、『ピエールとライオン』では、ピエールがライオンに食べられてしまうわけですから、これはファンタジーを乗り越えて、ノンセンスへ移行していると言えます。空想性よりは、非現実性のもたらす笑いへと転化して、それがまた子ども読者の心を新たにとらえることになるのでしょう。

ヴィルヘルム・ブッシュ (Wilhelm Busch) の『マックスとモーリッツ』(Max und Moritz) の衰えぬ人気と共通する点があるように思えます。作者は子どもの心、魂の奥へと入って行って、そこでさかんに燃えさかっているものを、積極的に取り出してきて、子どもと不満をともし、ときにそれをノンセンスへと昇華させていく。センダックの絵本が子どもたちをひきつける理由の一つが、その辺にもあると、私は見えています。

ところで、センダックが選んだ cautionary

tale という形式の作品ですが、これは19世紀の子どもの本にはしばしば登場した教訓本です。ドイツのハインリッヒ・ホフマン (Heinrich Hofmann) の『もじゃもじゃペーター』(Struwwelpeter) が有名な一例でしょう。床屋と爪切りが嫌いな子の姿、スープ嫌いな子の末路、指しゃぶりの子を襲う鉄男などなど、子どもは怖いもの見たさで、あの本が忘れられないのです。あの本を真面目に教訓本ととる人と、あれをノンセンス本と見る人と、必ずしも解釈は一つではありませんが、優れた教訓物語は、センスとノンセンスの境界に位置しているように思います。

イギリスに Hilaire Belloc (1870~1953) という有名な cautionary verses の書き手がいました。その *The Bad Child's Book of Beasts* (1896) の中に、<ライオンに食われてしまった Jim 少年のはなし> という唄物語があります。センダックの *Pierre* はどうやらそのパロディではないかと、私は勘ぐっています。

Jim というタイトルの次に、Who ran away from his Nurse, and was eaten by a Lion という説明がついています。ジム少年はみんなから愛されていて、美味しい食べ物、遊具などをもらい、お話を読んでもらい、ときには動物園などへも連れてってもらおうのですが…

But there it was the dreadful fate
Befell him, which I now relate.

You know — at least you ought to know,
For I have often told you so —
That children never are allowed
To leave their nurses in a crowd;
Now this was Jim's especial foible,
He ran away when he was able,
And on this inauspicious day
He slipped his hand and ran away!

ご覧のように、2行ずつ行末の音が韻を踏んだ唄物語です。(この唄、国書刊行会から出た横山茂雄訳『子供のための教訓詩集』に入っているので、上のつづきをその訳を少し引用してみました)

う。)

「でも、1ヤードもいかないうちに—どしん！
/ 顎を開いたライオンが / 飛びかかって、この
子をむしゃむしゃ / まずは足からね / どんな
気がするか考えてもごらんなさい」ライオンは、
爪先、踵、足首、脛、ふくらはぎ、膝と食べて
いきます。ジムが叫び声をあげると、飼育係り
がとんできて、「ポイント！」「放しなさい！」と
叫びます。ライオンはポイントという名でした。

しかし、「ライオンは頭までかぶりついていた
から / 哀れな子供はこときれていたの
です！」

When Nurse informed his parents, they
Were more concerned than I can say:—
His Mother, as she dried her eyes,
Said, 'Well—it gives me no surprise,
He would not do as he was told!'
His Father, who was self-controlled,
Bade all the children round attend
To James's miserable end,
And always keep a-hold of Nurse
For fear of finding something worse.

ここにはシニカルなユーモア、皮肉があふれて
います。ブラックユーモアも込められています。
それに対して、センダックのパロディはどうで
しょう、からっとした明るいユーモアですね。セ
ンダックの作品は、こういう諧謔が特徴だろうと
思います。『ピエールとライオン』の最初の口絵、
眉を吊り上げ、目をむいて、口をへの字に結び、
両手の指を堅く結んだピエールの姿と、最後にラ
イオンの頭の上に乗って家へ帰るピエールの屈託
のない笑顔とを比べると、改めてセンダックの絵
本がつねにハッピーエンドの物語であることに気
づかれるでしょう。浄化と希望が、つねに本を通
して子どもにおくっているセンダックのメッセー
ジなのです。

We Are All in the Dumps With Jack and Guy

これは『ヘクター・プロテクターとうみのうえ

をふねでいったら』と同じように、全く別個の、
いずれもノンセンシカルな、二つのナーサリーラ
イムを一つに融合させて、首尾一貫した物語を、
イラストレーションによって展開した絵本です。
邦訳の題は『わたしたちもジャックもガイもみん
なホームレス』、原作は1993年の刊です。二つの
ナーサリーライム（日本語はいずれも富山房版よ
り）の一つは—

わたしたち ぼくたち みんな ホームレス
We are all in the dumps,
ゲームはブリッジ、ダイヤがきりふだ。
For Diamond are trumps,
こねこは みんな わるものたちにつれさられ！
The kittens are gone to St. Paul's.
ちいさい おとこのこは かみつかれ、
The baby is bit,
つきは かーつと おこりだす。
The moon's in a fit,
できるのは かべのない いえだけです。
And the houses are built without walls.
そして、もう一つの唄は—
ジャックとガイのふたり
Jack and Guy
ライむぎばたけに まいおり、
Went out in the rye,
ちいさい おとこのこを みつけて、
And they found a little boy
かための くろあぎに ぎょつとして、
With one black eye.
なんだ こいつ、なぐつちまえと
Come, says Jack,
ジャックが いうと、
Let's knock him on the head.
やめろ と ガイは とめて、
No, says Guy,
このこに パンを かって やろうよ。
Let's buy him some bread;
きみ、ひとつ かってよ。
You buy one loaf
ぼくは ふたつ かうよ。
And I'll buy two,

そして ふたりで そだてようよ。
And we'll bring him up
なかまも みんな そうしているよ。
As other folks do.

センダックは前年の1992年に、Opie 夫妻の編んだナーサリーライム集『イーソーをみた：こどもたちのうた』(*I Saw Esau, The Schoolchild's Pocket Book* 1992) にイラストレーションをつけています(それもまた、ひじょうにたのしい挿絵です)が、伝承童謡にはなみなみならぬ強い関心を抱きつづけています。ここに選ばれた互いに無関係な二つの唄が、たまたまロスアンゼルスの中でホームレスの子ども集団に出会ったとき、衝撃を受け、突然一つにつながって、この絵本が誕生した、とセンダックは言っています。

まずは物語を、<絵>から読んでみましょう。物語は最初の見開き、内表紙からはじまります。ニューヨークを連想させる大都会の路地の片隅。ホームレスの子どもたちが捨てられたダンボールをねぐらに、野良の子ネコたちと暮らしています。子どもたちの中で大きな顔をしている二人の白人少年が、ジャックとガイです。対照的に白いぼろ布一枚を腰にまとった浅黒い肌の第三世界のひねこびた少年が、隅のほうから(吹き出し文字で)「助けてくれる?」と言っています。彼はジャックとガイに接近して、同じことばをくりかえしますが、ジャックとガイは「あっちへいけ!」と邪険に追い払います。

そこへ突然大ネズミが現れ、野良の子ネコたちを一網打尽、浅黒い肌の少年も拉致していきます。目撃した少年たちは、口々に非難の声をあげ、ジャックとガイは泥棒ネズミを追います。しかし、少年たちはネズミのトランプのペテンではぐらかされ、子ネコたちと浅黒い肌の少年は<セント・ポールズ製パン所兼孤児院>と書かれた車で、連れ去られてしまいます。一部始終を天から見て慨嘆していた月が「かーっとおこって」ジャックとガイをくわえて天にのぼり、二人を<セント・ポールズ製パン所兼孤児院>附近のライむぎ畑へおろします。そこに浅黒い肌の少年が片目にくるあざをつけて捨てられていました。ガイが彼を救いま

すが、月はふたたび大きな親ネコに変身して現れ、近くの煙突から黒煙を吐く<製パン所兼孤児院>に突入して、捕らえられていた子ネコたちを救出して、子ネコとジャックとガイと浅黒い肌の少年を乗せて天をわたり、子どもらは地にもどされ、ふたたびホームレス集団の古巣で、こんどは浅黒い肌の少年が、ジャックの胸にしっかりと抱かれて、一同安心して眠りこみます。(この結末にたいして、作者の姉は子どもたちが古巣へもどっただけではなんの解決にもならないと非難したところ、作者は、自分は手品を演じているのではない。現実はそのように突如バラ色に変わるわけではない。しかし、物語ではあんなに邪険だったジャックとガイがやさしく浅黒い肌の少年を抱きしめている。彼らの世界は幸せな状態に一変したのだ。物語はハッピーエンドである、と言っています。)

物語の中で、地上の悲惨を見て大泣きした月の涙が雨となって降るのを、ホームレスの少年たちは新聞紙を頭にかぶってしのぎます——「できるのは、かべのないいえ」です。その古新聞紙には、誇大不動産広告や失業や食糧飢饉やエイズなど、大人社会の現実を映す見出し文字が読めます。どれも、しかし、都会の隅に打ち捨てられているホームレスの少年たちには無縁です。ユダヤ人であるセンダックは絵の中に、アウシュビッツの強制収容所やガス室を連想させる建造物を配したり、十字架降下、ピエタ像などキリスト教的シンボルを挿入したりしています。

が、物語のメッセージをもっともよく訴えているのは絵本の表紙です。天から降りてきた月が、洞窟を連想させる大きな口をあけ、その奥から浅黒い肌の少年が、生命の象徴である麦穂の茎をにぎってのぼってくる情景です。ジャックとガイも麦穂の茎をもって少年を迎えています。かたわらの少年たちの身にまとう古新聞紙には、<子どもの勝利><子ども 大統領に選ばれる>の見出し文字が見えます。キリストの復活図が下敷きになっていることは明らかです。子どもは大人社会から捨てられましたが、不屈の生命力で21世紀には復活再生し、子どもの王国を実現させようと意気込んでいる図でしょう。1900年に出版されたエレン・ケイの名著『児童の世紀』は、人類がそれ

までの子どもと婦人の人権無視を改め、家庭教育の重視と個性尊重と、それにもとづく人間観で、新世紀の到来を予告するものでした。しかし、20世紀は戦争の世紀、急速な科学技術革新の世紀、宗教を基盤とする人間的モラル喪失の世紀でしたから、エレン・ケイの希望的予言とは裏腹な、大人による<子捨ての世紀>と化してしまいました。絵本の表紙のメッセージは、21世紀へ向けて、今度こそはというセンダックの悲願が込められていると読めます。

ところで、絵本の表紙は、タイトル(題)の書かれるところですが、この絵本はタイトルが裏表紙にあります。そのため、内表紙見開きの、中央より少し左にopen on this side onlyと書かれています。「開くのは、こちら側からのみ」との注意書きです。その次の見開き、中央に白ネコが乗っているダンボールにURSULAの文字がありますが、センダックを世に送り出したHarper & Rowの編集者Ursula Nordstromへの感謝です。次の見開き、右にあるダンボールの文字UNEEDA BISCUITはYou need a biscuit.と読めますから、上の吹き出しand the poor little kid!につづけて読める文です。次の見開きの<橋>は、ニューヨークでブルックリンとマンハッタン島を結ぶ吊橋Brooklyn Bridgeです。次の次の見開き、入り口にTowerと書いてあるビルは、マンハッタンの5th Avenue, 56th Streetにある黒いガラス張りの高層ビルTrump Tower(ビルのオーナーがDonald Trump)で、同ページの吹き出し文字trumped(切り札で取られた)が、背後のTOWERにつながりpunになっています。次の見開き、右ページの建物は、ナチによるアウシュヴィッツのユダヤ人強制収容所。それから3見開き目で、ジャックとガイが月にくわえられて空に上がっていくのを、見送っている右端の子の新聞に、OCT. 17, 1992とあり、下にJIM GOES HOME(ジム死す)と書かれています。センダックの無二の親友で作家のJames Marshall(1942~92)、彼が死亡したことへの哀悼です。そのすぐ下には、Mozart and Schubertとの呼びかけも

あります。二つ後の見開きで、天使(モーツァルト、と言われていますが)が見ている本『おかしなカバのジョージとマーサ』(George and Martha)はマーシャルの代表作で、先ほど触れたI Saw Esauでは献辞が、For James Marshall, friend and colleague / Maurice Sendakと、彼に捧げられています。また、マーシャルの遺稿『おいしそうなバレエ』(Swine Lake)にも、センダックはイラストレーションを描いています。

最終の見開きでは、ダンボールにMy Dear Ionaの文字が見えます。マザーグース研究者Iona Opieへのオマージュです。それからもう一つ、もどって最後から5つ目の見開き、You buy one loafと文があるページ。そこのパン屋のお知らせに、FREE BREAD TODAY!「今日は、パン無料!」とありますから、テキストの「きみ、ひとつかってよ」「ぼくはふたつかうよ」に対して、これはコミカルなジョークです。

この絵本では、すべてのページが見開きで展開されています。センダックの絵本では、これは唯一のケースでしょう。そのこともこの絵本の特徴の一つに数えられるでしょう。

時間不足で、最後があわただしい言及になりましたが、『わたしたちもジャックもガイもみんなホームレス』においても、作者のプライベートな思いが、絵の中に込められていました。ユダヤ人として、ナチのホロコーストへの忘れえぬ思いも見られました。しかし、この作品で注目すべき点は、センダックがこれまで一貫して、子どもの内面に、子どもの魂の深層に、関心を集中してきたのに対して、ここでは新たに現代社会の中における子どもの危機的な状況に目が注がれていることです。これは<子どもの今>に敏感に反応する現代作家としての作家的良心の現れであり、また、児童文学が<ソーシャルポインター>としての役割を担っていることの証しでもある、と言えましょう。

(よしだ しんいち 国立国会図書館客員調査員、立教大学名誉教授)

「最盛期（モーリス・センダック その1）」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	Atomics for the millions	Maxwell Leigh Eidinoff and Hyman Ruchlis 作 Maurice Sendak 絵	McGraw-Hill 1947	541.2-E34a (本館)
2	Good shabbos, Everybody	Robert Garvey 作 Maurice Sendak 絵	United Synagogue Commision on Jewish Education 1951	所蔵なし
3	The wonderful farm	Marcel Ayme 作 Maurice Sendak 絵 Norman Denny 訳	HarperCollins [1994], c1979	Y8-A5488
4	A hole is to dig : a first book of first definitions	Ruth Krauss 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins c1980	Y17-A451
	あなほほるものおこちるとこ : ち いちゃいこどもたちのせつめい	ルース・クラウス文 モーリス・センダック絵 わたなべしげお訳	岩波書店 1979.7	Y17-6529
5	Maggie Rose: her birthday christmas	Ruth Krauss 作 Maurice Sendak 絵	Harpper c1952	所蔵なし
6	The giant story	Beatrice de Regnier 作 Maurice Sendak 絵	Harper & Row 1953	所蔵なし
7	Hurry home, Candy	Meindert DeJong 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins c1953	Y8-A231
	キャンディいそいでお帰り	マインダート・ディヤング作 高杉一郎訳 モーリス・センダック絵	講談社 昭和44	Y7-1616
8	Shadrach	Meindert DeJong 作 Maurice Sendak 絵	HarperTrophy 1980, c1953	Y8-A5500
9	A very special house	Ruth Krauss 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins c1981	Y17-A482
	うちがいっけんあったとき	R.クラウス文 M.センダック絵 わたなべしげお訳	岩波書店 1978.11	Y17-6170
10	I'll be you and you be me	Ruth Krauss 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins c1982	Y17-A7629
11	The magic pictures	Marcel Ayme 作 Maurice Sendak 絵	Harper [1954]	所蔵なし
12	Mrs. Piggle-Wiggle's farm	Betty MacDonald 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins c1982	Y8-A5617
13	The tin fiddle	Edward Tripp 作 Maurice Sendak 絵	Oxford University Press 1954	所蔵なし
14	The wheel on the school	Meindert DeJong 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins c1954	Y8-A232
	コウノトリと六人の子どもたち	マインダート・ディヤング作 遠藤寿子訳 モーリス・センダック絵	岩波書店 昭和42	Y7-936
15	Charlotte and the white horse	Ruth Krauss 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins c1983	Y17-A7906
	シャーロットとしろいうま	ルース・クラウスぶん モーリス・センダックえ こだまともこやく	富山房 1978.11	Y17-6110

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
16	Happy Hanukah everybody	Hyman and Alice Chanover 作 Maurice Sendak 絵	United Synagogue Commision on Jewish Education [1954]	所蔵なし
17	The Little cow and the turtle	Meindert DeJong 作 Maurice Sendak 絵	Harper [1955]	所蔵なし
18	Seven little stories on big subjects	Gladys Baker Bond 作 Maurice Sendak 絵	Anti-Defamation League of B'nai B'rith [1955?]	所蔵なし
19	What can you do with a shoe?	Beatrice Schenk de Regniers 作 Maurice Sendak 絵	M.K. McElderry Books c1997	Y17-A454
	くつがあったらどうするの？	ビアトリス・シエンク・ドウ・レニエ 文,モーリス・センダック絵 わたなべしげお訳	好学社 1980	Y17-7104
20	The happy rain	Jack Sendak 作 Maurice Sendak 絵	Harper c1984	所蔵なし
21	The house of sixty fathers	Meindert DeJong 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins c1984	Y8-A276
	六十人のおとうさんの家	マインダート・ディヤング作 中村妙子訳 長尾みのる絵	講談社 昭和46	Y7-2722
22	I want to paint my bathroom blue	Ruth Krauss 作 Maurice Sendak 絵	Harper Collins Publishers c1984	Y17-B725
	おふるばをそらいろにぬりたいな	ルース・クラウス文 モーリス・センダック絵 大岡信訳	岩波書店 1979.9	Y17-6665
23	Kenny's window	Maurice Sendak 作・絵	Harper & Row c1956	Y17-A6546
	ケニーのまど	モーリス・センダック作・絵 じんぐうてるお訳	富山房 1975	Y7-5002
24	The birthday party	Ruth Krauss 作 Maurice Sendak 絵	Harper & Row c1957	所蔵なし
25	Circus girl	Jack Sendak 作 Maurice Sendak 絵	Harper c1957	所蔵なし
26	Little Bear	Else Holmelund Minarik 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins c1985	Y17-A524
27	Very far away	Maurice Sendak 作・絵	HarperCollins c1957	Y17-A888
	とおいところへいきたいな	モーリス・センダックさく じんぐうてるおやく	富山房 1978.11	Y17-6127
28	Along came a dog	Meindert DeJong 作 Maurice Sendak 絵	HarperTrophy c1986	Y8-A5507
	いぬがやってきた	マインダート・ディヤング作 白木茂訳 モーリス・センダック絵	講談社 昭和44	Y7-1409
29	No fighting, no biting!	Else Holmelund Minarik 作 Maurice Sendak 絵	HarperTrophy c1986	Y17-A452
	けんかしちゃだめ!かんじゃだめ!	エルサ・H.ミナリック作 モーリス・センダックえ やましたはるおやく	佑学社 1986.8	Y18-2062

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
30	Somebody else's nut tree and other tales from children	Ruth Krauss作 Maurice Sendak 絵	Linnet Books 1990, c1983	Y17-A1051
31	What do you say, dear?	Sesyle Joslin作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins c1986	Y17-A819
	そんなときなんていう?	セシル・ジョスリン文 モーリス・センダック絵 たにかわしゅんたるう訳	岩波書店 1979.11	Y17-6760
32	The acrobat	Maurice Sendak 作・絵	privately printed 1959	所蔵なし
33	Father Bear comes home	Else Holmelund Minarik 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins c1987	Y17-A916
	かえってきたおとうさん	E.H.ミナリックぶん まつおかきょうこやく モーリス・センダックえ	福音館書店 1972	Y7-3139
34	The moon jumpers	Janice May Udry 作 Maurice Sendak 絵	Bodley Head 1999, c1959	Y17-A5546
	月夜のこどもたち	ジャニス・メイ・アドリー文 岸田衞子訳 モーリス・センダック絵	講談社 1972	Y17-3808
35	Seven tales	Christian Andersen 作 Maurice Sendak 絵	Harper & Row 1959	所蔵なし
36	Dwarf long-nose	Wihelm Hauff 作 Maurice Sendak 絵 Doris Orgel 訳	Bodley Head 1979,c1960	所蔵なし
37	Little Bear's friend	Else Holmelund Minarik 作 Maurice Sendak 絵	Harper & Row c1960	Y17-A3576
	くまくんのおともだち	E.H.ミナリックぶん まつおかきょうこやく モーリス・センダックえ	福音館書店 1972	Y7-3138
38	Open house for butterflies	Ruth Krauss 作 Maurice Sendak 絵	Harper Collins Publishers c1988	Y17-A7997
39	The sign on Rosie's door	Maurice Sendak 作・絵	HarperCollins c1988	Y17-A836
	ロージーちゃんのみみつ	モーリス・センダック作・画 中村妙子訳	偕成社 昭和44	Y7-1602
40	Let's be enemies	Janice May Udry 作 Maurice Sendak 絵	HarperTrophy 1988, c1989	Y17-B733
	きみなんかだいきらいさ	ジャニス・メイ・アドリーぶん こだまともこやく モーリス・センダックえ	富山房 昭和50	Y17-4516
41	Little Bear's visit	Else Holmelund Minarik 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins c1989	Y17-A401
	おじいちゃんとおばあちゃん	E.H.ミナリックぶん モーリス・センダックえ 松岡享子やく	福音館書店 1986.6	Y18-2038
42	The tale of Gockel, Hinkel & Gackeliah.	Clement Brentano 作 Maurice Sendak 絵 Doris Orgel 訳	Random House [1961]	所蔵なし
43	What do you do, dear?	Sesyle Joslin 作 Maurice Sendak 絵	HarperTrophy c1961	Y17-A818

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
44	The big green book	Robert Graves作 Maurice Sendak 絵	Puffin Books 1978	所蔵なし
	もしもまほうがつかえたら	モーリス・センダック画 ロバート・グレイブズ文 原もと子訳	富山房 1984.4	Y18-248
45	Mr. Rabbit and the lovely present	Charlotte Zolotow作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins 1977, c1990	Y17-A589
	うさぎさんてつだってほしいの	シャーロット・ゾロトウぶん こだまともこやく モーリス・センダックえ	富山房 1974	Y17-4359
46	One was Johnny : a counting book (Nutshell library)	Maurice Sendak 作・絵	HarperCollins c1990	Y17-A895
	ジョニーのかぞえうた	モーリス・センダックさく じんぐうてるおやく	富山房 1981.12	Y17-8274
47	Chicken soup with rice : a book of months	Maurice Sendak 作・絵	HarperCollins c1990	Y17-A479
	チキンスープ・ライスいり	モーリス・センダックさく じんぐうてるおやく	講談社 1981.12	Y17-8276
48	Alligators all around : an alphabet	Maurice Sendak 作・絵	HarperCollins c1990	Y17-A481
	アメリカワニです、こんにちは : ABCのほん	モーリス・センダックさく じんぐうてるおやく	富山房 1981.12	Y17-8273
49	Pierre : a cautionary tale in five chapters and a prologue	Maurice Sendak 作・絵	HarperCollins c1990	Y17-A480
	ピエールとライオン : ためになるは なし はじまりのうたとつつのまき	モーリス・センダックさく じんぐうてるおやく	富山房 1981.12	Y17-8275
50	Schoolmaster Whackwell's wonderful sons	Clement Brentano作 Maurice Sendak 絵 Doris Orgel 訳	Random House [1962]	所蔵なし
51	The singing hill	Meindert de Jong 作 Maurice Sendak 絵	Harper & Row c1962	所蔵なし
	丘はうたう	マインダート・ディヤング作 モーリス・センダック絵 脇明子訳	福音館書店 1981.1	Y7-8651
52	The Griffin and the Minor Canon	Frank R. Stockton 作 Maurice Sendak 絵	Harper & Row 1986, c1963	Y17-A7378
53	How little Lori visited Times Square	Amos Vogel 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins, c1991	Y17-A7630
54	Nikolenka's childhood	Los Tolstoy 作 Maurice Sendak 絵	Pantheon Book [1963]	所蔵なし
55	Sarah's room	Doris Orgel 作 Maurice Sendak 絵	Harper & Row [1963]	所蔵なし
	サラーのおへや	D.オーゲル作 M.センダック画 藤沢房俊訳	小学館 1979.5	Y7-7356
56	She loves me — , she loves me not —	Robert Keeshan 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins Publishers c1991	Y17-B4244

最盛期—モーリス・センダック その1

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
57	Where the wild things are	Maurice Sendak 作・絵	HarperCollins c1963	Y17-A127
	いるいるおばけがすんでいる	モーリス・センダック原作・絵 ウエザヒル翻訳委員会訳	ウエザヒル出版社 昭和41	Y17-225
	かいじゅうたちのいるところ	モーリス・センダックさく じんぐうてるおやく	富山房 1975	Y17-4623
58	The bat-poet	Randall Jarrell 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins 1996, c1992	Y8-A490
	詩のすきなコウモリの話	ランダル・ジャレル作 モーリス・センダック絵 長田弘訳	岩波書店 1989.7	Y8-6506
59	The bee-man of Orn	Frank R. Stockton 作 Maurice Sendak 絵	Bodley Head, 1975, c1964	所蔵なし
	みつばちじいさんのたび	フランク・ストックトン作 光吉夏弥訳 モーリス・センダック絵	学習研究社 昭和44	Y7-1392
60	Pleasant fieldmouse	Jan Wahl 作 Maurice Sendak 絵	Harper & Row c1964	所蔵なし
	野ねずみハツラツは消防士	ジャン・ウォール作 モーリス・センダック画 山下明生訳	あかね書房 1978.4	Y7-6661
61	The animal family	Randall Jarrell 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins Publishers 1996	Y8-A102
	陸にあがった人魚のはなし	ランダル・ジャレル作 出口保夫訳 モーリス・センダックさし絵	評論社 1981.5	Y7-8908
62	Hector Protector ; and, As I went over the water	Maurice Sendak 作・絵	HarperCollins c1965	Y17-A3644
	ヘクター・プロテクターとうみのうえをふねでいったら：マザー・グースのえほん	モーリス・センダック作 じんぐうてるおやく	富山房 1978.12	Y17-6147
63	Lullabies and night song	William Engvick 編 Alec Wilder 音楽 Maurice Sendak 絵	Bodley Head 1965	所蔵なし
64	Zlateh the goat, and other stories	Isaac Bashevis Singer 作 Maurice Sendak 絵	HarperTrophy c1966	Y8-A1164
	やぎと少年	I.B. シンガー作 M. センダック絵 工藤幸雄訳	岩波書店 1979.11	Y7-7818
65	The golden key	George Macdonald 作 Maurice Sendak 絵	Bedley Head 1972, c1967	VZ1-688
	黄金の鍵	ジョージ・マクドナルド著 吉田新一訳	月刊ペン社 1977.7	KS164-119 (本館)
66	Higglety pigglety pop!, or, There must be more to life	Maurice Sendak 作・絵	HarperCollins 1979, c1967	Y17-A707
	ふふふんへへへんぼん! : もっといいこときつとある	モーリス・センダックさく じんぐうてるおやく	富山房 1987.12	Y8-4898
67	Poems from William Blake's "Song of innocence"	William Blake 作 Maurice Sendak 絵	Bodley Head 1967	所蔵なし

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
68	A kiss for Little Bear	Else Holmelund Minarik作 Maurice Sendak 絵	Harper & Row c1968	Y17-A3582
	だいじなとどけもの	E.H.ミナリックぶん まつおかきょうこやく モーリス・センダックえ	福音館書店 1972	Y7-3140
69	The light princess	George Macdonald作 Maurice Sendak 絵	Bodley Head 1972, c1969	VZ1-689
	かるいお姫さま	マクドナルド作 脇明子訳	岩波書店 1995.9	Y9-2023
70	In the night kitchen	Maurice Sendak 作・絵	HarperCollins c1970	Y17-A1428
	まよなかのだいどころ	モーリス・センダックさく じんぐうてるおやく	富山房 1982.9	Y17-8977
71	Fantasy drawings	Maurice Sendak 作・絵	1971	所蔵なし
72	The magician : a counting book	Maurice Sendak 作・絵	1971	所蔵なし
73	Pictures	Maurice Sendak 作・絵	Harper 1971	所蔵なし
74	The juniper tree, and other tales from Grimm	Lore Segal, Randall Jarrell 訳 Maurice Sendak 絵	Farrar, Straus and Giroux 1976, c1973	Y8-A1379
	ねずの木そのまわりにもグリムのお話いろいろ	グリム著 モーリス・センダック画 矢川澄子訳	福音館書店 1986.6	所蔵なし
75	King Grisly-Beard	Edgar Taylor 作 Maurice Sendak 絵	Farrar, Straus & Giroux 1987, c1973	Y17-A857
	つぐみのひげの王さま： グリム童話より	モーリス・センダックえ 矢川澄子やく	評論社 1978.11	Y17-6130
76	Fortunia	Mme D'Aulnoy 作 Maurice Sendak 絵	Frank Hallman 1974	所蔵なし
77	Maurice Sendak's Really Rosie : starring the Nutshell Kids	Maurice Sendak 脚本・絵	HarperTrophy c1975	Y17-A906
78	Fly by night	Randall Jarrell 作 Maurice Sendak 絵	Farrar, Straus & Giroux 1976	所蔵なし
	夜、空をとぶ	ランダル・ジャレル (著) モーリス・センダック絵 長田弘訳	みすず書房 2000.11	Y18-N00-481
79	Seven little monsters	Maurice Sendak 作・絵	HarperCollins c1977	Y17-A893
	7ひきのいたずらかいじゅう	モーリス・センダック作 なかがわけんぞう訳	好学社 1980	Y17-7207
80	Some swell pup, or, Are you sure you want a dog?	Maurice Sendak, Matthew Margolis 作 Maurice Sendak 絵	Farrar, Straus and Giroux 1989, c1976	Y16-A16
	子いぬのかいかたしてるかい?	モーリス=センダック, マシュー=マーゴリス作 モーリス=センダック絵 やましたはるお訳	偕成社 1980.11	Y17-7408

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
81	Outside over there	Maurice Sendak 作・絵	Harper & Row c1981	Y19-A342
	まどのそとのそのまたむこう	モーリス・センダックさく・え わきあきこやく	福音館書店 1983.4	Y17-9347
82	Nutcracker	E.T.A. Hoffmann 作 Maurice Sendak 絵 Ralph Manheim 訳	Crown c1984	Y17-A864
	くるみわり人形	E.T.A. ホフマン作 モーリス・センダック絵 渡辺茂男訳	ほるぶ出版 1985.1	Y6-911
83	The love for three oranges : the Glyndebourne version	Frank Corsaro 作 Maurice Sendak stage and costume designs	Farrar, Straus & Giroux 1984	Y6-A39
84	In grandpa's house	Philip Sendak 作 Seymour Barofsky 訳 Maurice Sendak 絵	Harper & Row c1985	Y8-A3596
85	The cunning little vixen	Rudolf Tesnohlidek 作 Maurice Sendak 絵	Bodley Head 1986,c1985	所蔵なし
86	Posters	Maurice Sendak 絵	Bodley Head c1986	所蔵なし
87	Dear Mili : an old tale	Wilhelm Grimm 作 Ralph Manheim 訳 Maurice Sendak 絵	Farrar, Straus and Giroux 1988	Y17-A1053
	ミリー：天使にであった女の子のお話 グリム童話	ヴィルヘルム・グリム原作 モーリス・センダック絵 ラルフ・マンハイム英語訳 神宮輝夫日本語訳	ほるぶ出版 1988.12	Y18-3797
88	Caldecott & Co. : notes on books and pictures	Maurice Sendak 作・絵	Farrar, Straus, and Giroux 1988	YZ53-A1
	センダックの絵本論	モーリス・センダック著 脇明子,島多代訳	岩波書店 1990.5	KC511-E35 ※
89	I saw Esau : the schoolchild's pocket book	Iona and Peter Opie 編 Maurice Sendak 絵	Candlewick Press 1992	Y17-A591
	イーソーをみた	アイオナ&ピーター・オーピー 編 モーリス・センダック絵	ほるぶ出版 1993.10-11	Y45-2450
90	We are all in the dumps with Jack and Guy : two nursery rhymes with pictures	Maurice Sendak 作・絵	HarperCollins 1993	Y17-A1198
	わたしたちもジャックもガイもみんな ホームレス：ふたつでひとつのマ ザーグースえほん	モーリス・センダック作 じんぐうてるお訳	富山房 1996.11	Y18-12286
91	Pierre, or, The ambiguities	Herman Melville 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins 1995	Y8-A489
92	The Miami giant	Arthur Yorinks 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins Publishers 1995	Y17-A460

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
93	What can you do with a shoe? (New full-color edition)	Beatrice Schenk de Regniers 作 Maurice Sendak 絵	M.K. McElderry Books c1997	Y17-A454
	くつがあったらなにをする？	ビアトリス・シェンク・ドゥ・レニエ ぶん モーリス・センダックえ いしづちひろやく	福音館書店 2001.10	Y18-N01-419
94	Penthesilea	Heinrich von Kleist 作 Maurice Sendak 絵	1998	所蔵なし
95	Swine lake	James Marshall 作 Maurice Sendak 絵	Harper Collins 1999	Y17-A4264
	おいしそうなバレエ	ジェイムズ・マーシャル文 モーリス・センダック絵 さくまゆみこ訳	徳間書店 2003.10	Y18-N03-H539
96	Brundibar	Tony Kushner 作 Maurice Sendak 絵	Hyperion Books for Children 2003	Y17-B2713
97	Bears	Ruth Krauss 作 Maurice Sendak 絵	HarperCollins c2005	Y17-B5919

レジュメ

センダックの天才にふれる

灰島 かり

モーリス・センダックの絵本は、魅力的な細部に満ちています。センダックの代表作の中から一冊を選んで、それをじっくりと見てみましょう。綿密に見るところから、構造や造形の妙に触れることができます。センダックの絵本がなぜ特別なのか、それを知る手がかりを探してみたいと思います。

モーリス・センダック（1928～）は、ポーランド系ユダヤ人の移民の子どもとして、ニューヨークのブルックリンに生まれた。ウィンドウ・ディスプレイの仕事をしながら絵の勉強をしているときに、有能な編集者であるアーシュラ・ノードストロムと出会い、子どもの本の挿絵の仕事をするようになった。『かいじゅうたちのいるところ』が1963年にアメリカで刊行されると、「子どもを脅えさせる」などの非難も出たが、当の子どもたち自身に支持され、コールデコット賞受賞に結びついた。現在では「天才」「20世紀最大の絵本作家」などと圧倒的な世評を得ている。とはいえ一方で「よくわからない」「感動できない」「『かいじゅうたちのいるところ』は子どもたちに人気があるが、他の作品は特別すばらしいとは思えない」という感想も聞こえてくる。

たしかに『ちいさいおうち』や『アンジュール』のように心に染み入る作品とは異なるだろうし、和ませてくれたり、温かい気持ちにしてくれる作品でもない。ではどこが優れているのだろうか？この講座では、センダックの代表作である3部作『かいじゅうたちのいるところ』『まよなかのだいどころ』『まどのそとのそのまたむこう』（どの作品もファンタジーの起こる場所を題名としている）のなかから、まず『かいじゅうたちのいるところ』をとりあげる。あまりにも知られた作品だが、この作品の構造を探ってみよう。子どもたちをひきつける特別な魅力がいったいどこから生まれるのか、その謎に迫りたいと思う。

つぎに「よくわからない」という非難を受けることが最も多い『まどのそとのそのまたむこう』を見てみよう。この作品は全体がモーツァルトへのオマージュとなっており、そのためモーツァルトの時代の画家、フリードリヒヤルングなどドイツロマン派の作品の引用が見られる。どんなふう引用されているのか、元の作品と絵本とを比べてみると、さまざまな発見があると思う。「引用(批評用語ではパスティーシュ)」することで、センダックは自分のこれまでの作品とは異なる味わいの絵本を生みだしている。ちなみにこの絵本は、センダックの最も気に入っている作品とのことだが、センダックの生い立ちが感じられるところも興味深い。様々な方向から、この作品を「わかる」努力をしてみたい。

またセンダックはモーツァルトに深くひかれるなど、音楽とのつながりが深く、オペラやバレエなどの舞台芸術にも傾倒している。『かいじゅうたちのいるところ』は自身が参加してオペラ化されているし、『くるみわり人形』のバレエでは、舞台美術を担当している。オペラとバレエを見ることで、作品の別の広がりにも触れてみたい。

いささか盛りだくさんの内容になるが、センダックのどこが、どう優れているのか、それを参加者の皆さん自身の目と耳で確かめてもらえたらと思っている。

最盛期—モーリス・センダック

その2

灰島 かり



ご紹介いただきました灰島です。「アメリカの絵本の展開」の講義3日間のなかで、昨日の午後と今日の午前中と2コマ、つまり全体の3分の1がセンダックに充てられています。ひとりの作家が3分の1をしめるのは、ずいぶん多いなあと感じる方がいらっしゃるかもしれませんね。でもセンダックは「絵本界のピカソ」と例えられることもあり、20世紀最大の絵本作家といえるでしょう。とはいえ評判に惑わされてはいけません。どうぞご自分の目で確かめてください。

センダック絵本の特長

批評家に大変高く評価されるセンダックですが、子どもたちが読んで、また皆さんが読んで、本当に心動かされるのでしょうか。センダックの作品には感動がない、と言う人もいます。児童文学作家の今江祥智さんがエッセイのなかで、批評家はみんなセンダックセンダックというけれど、評判倒れではないだろうか。『かいじゅうたちのいるところ』(Where the Wild Things Are, 1963) はいいとしても、これ以外には感動するような作品は見あたらない。本当にそれほど大した作家だろうか?と疑問を書いておいででした。私は今江さんのお書きになるものが大好きですが、ここでは意見を異にしております。私の友人にも、『ちいさいおうち』(The Little House, 1942) とか『アンジュール：ある犬の物語』(Un Jour, un Chien, 1982) には感動したけれど、センダックの絵本は別に心に迫ってこない、なぜあなたがそんなによいというのかわからない、という人がいました。そういう感想もあると思います。

たしかに『かいじゅうたちのいるところ』を読んで、人生の深みを感じるとか、心に迫る、別の

言葉で言うと情感に訴える、ということは、ないでしょう。しかしそれでも私は、この絵本は現代絵本の最高の1冊だと思うのです。では情感や情緒に訴える代わりに、この絵本には何があるのでしょうか。「官能的」または「エロスにあふれている」と言いたいのですが、言葉が強すぎますか? 感動にもいろいろありますが、普段は心の奥深くにしまっているものに触れるというか、心の深いところが喚起される、別の言葉で言うと深層心理的であること、この絵本にはそういう楽しさ、そういう感動があるように思います。

では私たちの心の奥には、いったい何があるのでしょうか。無意識とか深層心理とかいわれる、心の深い部分には、非常に性的なもの、セクシャルなものがあるというのがフロイトの考えです。私も、性的なものがあるように思います。とはいえ性的というのは、狭い意味のセックスではなくて、命の躍動といえますか、根源的な生命の力というか、言葉にするのが非常に難しいのですが、そういうものです。

『かいじゅうたちのいるところ』が私にもたらしてくれる陶醉感、それは命の躍動に触れる喜びなのかもしれません。きょうはその一端をみなさんにお伝えできたらと望んでいます。センダックを熟知しておいで吉田先生と三宅先生がおいでですから、とても緊張しています。みなさん、どうかサポートしてくださいね。

『かいじゅうたちのいるところ』の構造

では『かいじゅうたちのいるところ』をじっくり見ていきましょう。センダックの作品のなかで『かいじゅうたちのいるところ』、『まよなかのいどころ』(In the Night Kitchen, 1970) 『まど

のそとのそのまたむこう』(Outside Over There, 1981)の3作品は、3部作と呼ばれています。それぞれの作品の題名は、ファンタジーの起こる場所を示しています。『まよなかのだいどころ』では、真夜中の台所でファンタジーが起こります。「かいじゅうたちのいるところ」とは、つまりファンタジーが起こる場所なのです。

なかなか魅力的な表紙ですが、表紙は複雑なので後に残します。表紙をめくると、表紙と中味をくっつけている紙を見ることになります。これを「見返し」と呼びますが、『かいじゅうたちのいるところ』の見返しは、重なり合う葉っぱのようで、とても美しいものです。葉っぱが重なっていると、それをかき分けて、その奥に入っていきたいという感じがしませんか。この奥に何があるのだろう、そういう期待を抱かせるように思います。

それから扉ページがあって、さらにもう一枚扉ページがあります。この絵本はアメリカで初めて刊行されたときに、大変物議を醸しました。子どもを怯えさせるという意見がかなりあったのです。Publishers' Weeklyには「作者のグラフィックな才能は認めるが、混乱する物語がついているために、子どもを怯えさせる」という書評が出たほどです。しかし、当の子どもたちに熱烈に支持されて、やがてコールデコット賞に輝いたことは、みなさん、ご存知のとおりです。実はこの扉のページで、センダックは読者に「安心して読んで大丈夫だよ」とちゃんと伝えているのです。主人公のマックス少年がいて、こちらに一番人気のある怪物が二頭描かれています。この二頭は、夫婦かなと思わせるおじさん風とおばさん風の怪物ですが、これをマックスが脅かしていますよね。怪物たちは「おお怖い怖い」と言っているかのようです。子どもと一緒に読むときには、この扉ページをじっくり見てもらうことが大事ですね。「怖い怪物がでてくるけれど大丈夫だよ。ほら、マックスは怪物たちを怖がらせているよ。怪物たちのほうが怖がっているよ」。そんなことをこの扉のページはしっかりと語っています。

大学で絵本について教えますと、100人ほどの1クラスのなかに、必ず一人くらい、子どものころこの絵本がとても怖かったという生徒がいま

す。すごく怖くて見るのもいやで本箱の奥に隠していました、という話を聞きます。扉ページで安心させているとはいえ、恐怖心の琴線に触れてしまう子どもがいるのです。そういう子には、無理に見せる必要は無いし、無理に見せてはいけないと、センダック本人が語っています。

扉ページをめくると、いよいよ中味に入ります。ご存じのように、マックスが悪戯をしています。最初は小さいワクの中に描かれていますが、画面がだんだん大きくなっていきます。だんだんクレシェンドしていき、やがて文字のない見開きページになります。このクレシェンドを詳しく見てみましょう。(1)最初の3つ。マックスは大騒ぎをして、お母さんに叱られて、部屋に閉じ込められました。ここでちょっと区切りがあります。(2)この後、目をつぶると寝室が森に変わります。どんどん木が増えて、パーンと片ページ一杯になります。ここにも、区切りがあります。(3)この後、画面は左ページにはみ出してきます。波が打ち寄せてきて、水があらわれてマックスの舟があらわれます。マックスを舟に乗せて、かいじゅうたちのいるところに辿りつきます。3つ目で、画面は見開きの上部全面に広がりますが、下部には文字の入るスペースが残っています。かいじゅうたちのいるところに着いたのでここで区切りがあります。(4)この後は何が起こるだろうと思うと、マックスは静かにしろと言って、怪物ならしの魔法をかけます。残された白い部分はどんどん少なくなって、マックスは王様になって、見開きページ全面の絵が3つ続きます。これをリズムで言いますと(1)ダダダン、(2)ダダダン、(3)ダダダン、(4)ダダダ〜ン、ダ〜ン、ダ〜ン、と続くのです。この絵本の構造を説明しますと、3拍子が4回続いて、徐々に盛り上がっていきます。(1)123、(2)123、(3)123、(4)12333ですね。4回目の3拍目は、ダーン、ダーン、ダーンと3回続きます。まったく文字のない、非常に美しく迫力のある見開きの絵が3枚続くわけで、ここで物語は最高の盛り上がりを見せます。マックスが心を解き放ち、読者である子どもたちもカタルシスを得る、そういう見開きページであり、すばらしいクライマックスだと思

います。

このクライマックスの後、物語はきれいにデクレシェンドして、終焉を迎えます。3拍子が4回続いてクライマックスとなりましたが、それをなぞるようにみごとに4拍で戻ってきます。(1)もう沢山だ、やめ、とマックスは叫びます。(2)舟に乗って帰ることにして、見開き下部の白い部分が増えました。(3)帰りの航海は右側ページが左側に少しはみだしています、(4)そして自分の部屋に戻ってきますが、部屋の絵は右側のページだけにおさまっています。ほら、ダン ダン ダンとディクレシェンドしながら4拍で戻ってきたことがわかりますよね。これで終わってもいいのですが、文章が「へやには ゆうごはんが おいてあって」と途切れて、ページをめくることを促されます。最後のページには絵がなく、まっ白なページには「まだ ほかほかと あたたかかった」と文字だけが書かれています。思いきり開放されたものが、タン タン タンタンと4拍でデクレシェンドしていき、最後の白いページは、休拍となっています。タン、タン、タン、タン、ン(止め)というわけで、見事な終焉です。

もう一回繰り返しますと、ダダダン、ダダダン、ダダダン、ダダダ〜ン、ダ〜ン、ダ〜ン。これは、何のリズムに似ていると思われませんか。道路工事の人が機械で掘り返しているのが、大体、こういうリズムですね。工事現場で、耳を傾けてみてください。こういうリズムが感じられると思います。この3拍ずつクレシェンドしていくリズムというのは、つまり「穿つ」リズムなのです。でもってこの絵本では、何を穿っているかということ、心の奥へ奥へと入り込んでいくわけです。そして一番最後の、夕ご飯が置いてあって、白いページで「まだ ほかほかと あたたかかった」という部分は、読者の目を十分グラフィックで愉しませておいて、満足した読者は目を休ませるのです。最後にほっと息抜きをさせて、そして現実の世界に戻ってこなければいけません。見返しを見て、ファンタジーの世界がこの葉っぱの影にあるのだな、と思って本を閉じる、というわけです。

言葉のリズム

センダックはいつもすみずみまで神経を使って、1冊の本を作ります。それにしても『かいじゅうたちのいるところ』は、奇跡としか言いようがないくらいうまくできていると思います。おそらくセンダックは鋭いカンに従って、絵を描いているうちに、心の奥へ奥へと入っていくリズムに行き着いたのではないのでしょうか。3拍が4回くり返されましたが、3拍というのは、動きのあるリズムです。西洋のダンスは、3拍子から始まったといわれています。ズンチャッチャ、ズンチャッチャ、ズンチャッチャというふうに、3拍子はワクワクさせ、期待させる拍子なのです。3という数字は動いている数です。形も三角形というのは動きがありますよね。もうひとつ4というのは起承転結といいますが、大変安定しています。絵本というか、本というのはほとんど四角形ということからも、安定ぶりがうかがえると思います。『かいじゅうたちのいるところ』は3拍子を4回くりかえし、盛り上げきったところで4拍で戻ってくる。期待感と安定感、両方をそなえた美しいリズムで、私たちを陶醉に導き、満足させる。そういう気がします。

余談になりますが、西洋のダンスは3拍子が基本ですが、日本の踊りは8拍子が基本というのをご存じですか。日本の民族舞踊、古くから伝わっている盆踊りなど、西洋音階の影響を受ける以前の曲は、たいてい8拍子です。このこととおそらくつながっているのだと思いますが、日本語のリズムもまた8拍子が基本とされています。日本語のリズムというと、七五調と言われますよね。俳句は、もちろん五、七、五ですが、これは実は8拍だということをご存知ですか。

「古池や」た た た
「蛙飛びこむ」た た
「水のおと」た た た

五、七、五といいますが、日本の文化は間を大事にする文化ですから、「古池や」と言った後に、必ず3拍のタタタという休みが入るのですね。

「夏草や」た た た
「兵(つわもの) どもが」た た
「夢の跡」た た た

とやはり8拍子です。翻訳するとき、リズムカルにしようと思うと七五調に頼らざるをえないのですが、西洋の3拍子と日本の8拍子、身体の動きからして違うので、翻訳はまことにやっかいな仕事です。

『かいじゅうたちのいるところ』の表紙について—“牛怪獣”とは何か—

さて『かいじゅうたちのいるところ』の表紙にもどりましょう。この表紙について私は『絵本をひらく:現代絵本の研究』(人文書院刊)の中にエッセイを書いていますので、興味のある方はこちらをご覧ください。『かいじゅうたちのいるところ』の表紙は、とても風変わりな表紙です。『まどのそとのそのまたむこう』を見ても、『アンジュール:ある犬の物語』を見ても、マリー・ホール・エッツの『もりのなか』(*In the Forest*, 1944)を見ても、表紙には主人公が描かれています。絵本は短いページ数で終わりますから、表紙の伝える情報はとても重要です。表紙でもってあらかじめ「この子が主人公ですよ」と伝えておいたほうが、その後の展開がずっとスムーズです。ところが、ほら、『かいじゅうたちのいるところ』の表紙には、主人公のマックスの姿はありません。ここに描かれているのはこの怪獣です。

この怪獣は、角が牛に似ているので、ここでは勝手に「牛怪獣」と呼ばせてもらいます。表紙に主人公が描かれず、牛怪獣がでている。いったいなぜでしょうか。なぜ主人公のマックスがいないのでしょうか。『かいじゅうたちのいるところ』はマックスの心の中を描いているので、表紙に描かれた風景は、マックスの心の中なのかもしれません。風景全体がマックスの心の中なので、マックスが見えないのだと理屈をつけることも可能ですが、普通は自分の心の中を旅するときでも、そこを旅する自分というものをイメージするものなのです。ところがここにはマックスがいない。ではこの牛怪獣は、一体誰なのでしょう。

牛怪獣をちょっと脇に置いておいて、みなさん、こちらの怪獣を見てください。扉で「おー、怖い怖い」とやっている、ノリのいいおじさんのような怪獣です。これが一番人気のある怪獣で、ぬい

ぐるみなどになっていますよね。あとでお見せしますが、この絵本を元にしたオペラが作られていて、センダックはオペラ化に協力しています。オペラ化にあたって、登場人物に名前がないと不便なので、センダックはそれぞれの怪獣に名前をつけました。この怪獣には「モイシュ」という、センダック自身のニックネームを付けていますから、ご本人もこの怪獣がお好きなのだと思います。

話を牛怪獣にもどすと、牛怪獣はマックスが上陸してもすぐには登場せず、3つめの場面で初めて顔を出します。マックスが王様になったこの場面では、モイシュ怪獣はノリがいいですから、一番最初に家来になっています。牛怪獣は後ろのほうに、控えています。牛怪獣は大変重要な働きをするのですが、それがどこでかということ、クライマックスの3つ目の見開きです。見てください、ここでマックスを肩車しています。肩車というのは絵本の中でとても重要なモチーフです。なぜなら、子どもは小さいですよね。小さい人にとって、大人というのはとってとても大きく見えるものなのです。肩車はその大人より大きくなるわけですから、子どもは大人を凌駕するような興奮を覚えるのだと思います。王様として得意満面なマックスは、大きな怪獣を膝下に従えて、自らのパワーを感じて、悦に入っているのではないのでしょうか。だからこそクライマックスというわけです。

では子どもを肩車するのは誰か。最初から答えを申し上げてしまいますと、父親的な人物、つまり子どもの成長を見守る人が多いです。絵本の中には、たくさん肩車が登場しますので、ぜひ探してみてください。有名どころでは『もりのなか』で、主人公の少年がお父さんの肩車に乗って帰ります。これはファンタジーの世界でたっぷり遊んで、しかもその世界をお父さんに認めてもらって本当に満足した男の子の気持ち、この肩車によってよく表れていると思います。

もうひとつ肩車をお見せしますと、拙訳の絵本『大森林の少年』(*Marven of the Great North Woods*, 1997)のなかに、大変印象的な場面があります。マーベンというユダヤ系の男の子が、インフルエンザに汚染された町から逃れるために、たった一人でカナダとの国境に近い森林伐採場に

行かされるのです。ここで男の子は、大男のきこりと友だちになります。厳しい時代ですから、少年といえども、ただ飯を^{めし}く^くわせるわけにはいかない。それで、会計係としてちゃんと働くのです。春が来て家に帰るときに、仲良しになったきこりのおじさんから、斧をもらいます。斧はきこりにとっては武器のようなものです。古代の少年は一人前の戦士になったあかつきには、武器を授かるのですが、この場面はそんな古代のイニシエーションの儀式を彷彿とさせます。男の子はいよいよ帰る時に、大男のきこりのおじさんに肩車をしてもらって駅に向かいます。見てください。肩車された少年は「少年王」と言いたいくらい誇らしげで、生きる力に溢れています。大人より大きくなるというのは、成長の途上にある子どもにとって、モニュメンタルな出来事であることをご理解いただけただけのことと思います。その肩車してくれる人は、少年の成長を見守り、認めてくれる人で父親的な存在です。

この牛怪獣も父親的な役割を果たしております。そう言われてみると、牛怪獣はお父さんばい表情をしていると思いませんか？センダックはニューヨークのブルックリンに生まれましたが、両親はポーランドから移民してきたユダヤ人でした。ユダヤ人は一族の団結が固いので、毎週日曜日になると、センダックの家には親類のおじさんやおばさんが大勢集まってきたそうです。センダック本人が、子どものころの印象に残っている親類の姿をモデルにして怪獣を描いたということを語っています。そういえばよく見てみると、怪獣たちはそれぞれに人間らしさをそなえています。もしかしたら子どもの目には、私たち大人はこういう怪獣のように映っているのかもしれないね。

マックスが怪獣ならしの魔法を使っている場面ですが、木の陰から顔をのぞかせた牛怪獣は、「大丈夫かなあ」と心配しているお父さんのように見えませんか？ほら、牛怪獣はなんだか申し訳なきそうに見えますよ。「すいませんねえ。うちの子がいろいろやっておりますが、お付き合いいただいて、いやあ、すまんこって」というつぶやきが聞こえそうな気がするのは、牛怪獣のこのもみ手

のせいかもしれません。次の場面では、一步後ろに下がっていて、「うちの子は、いやはや、どうにもしょうがないガキでして」とか何とか言っているようです。

そして何よりも違うのは、牛怪獣の足です。他の怪獣はカギ爪があったり、ウロコがあったりしますが、牛怪獣だけは人間の足をしています。顔は人間らしくはないのですが、足は人間で、他の怪獣とは違うのです。クライマックスの肩車の場面ですが、他の怪獣たちは王様になって大得意のマックスを見ているのですが、牛怪獣だけは目つきがきついです。「おい、いい気になるなよ」という声が聞こえてきそうです。ある研究会で、吉田先生が牛怪獣の表情を解説してくださったのを聞いて、私は絵が語るものを読み取る面白さに目覚めました。私にとっては記念の一冊です。同時に様々な読み取りを可能にしているセンダックの技術の凄さにも、思いが到ります。

牛怪獣は、マックスの一番得意満面な姿を下から支えている、成長を見守っているというお父さん風なところがあるわけですが、もう一つ重要な場面があります。このあとマックスは疲れて、祭りのあとの寂しさのようなものを感じます。この場面では、疲れたマックスと牛怪獣とはシンメトリーに、鏡に映った像のように描かれています。ほお杖をついた手も、膝に置いたもう一方の手も、ほぼ同じ形をしています。ただし大きな違いがあって、マックスは目を開けていますが、牛怪獣は目を閉じています。マックスはワッとカタルシスを感じて自分を解放したあと、その反動で自分を取り戻しているわけです。マックスが自分を取り戻す、つまり意識を取り戻したときに、スッと目を閉じているマックスの鏡に映った姿。牛怪獣はそんな風です。そうすると、これはマックスのもう一つの人格と言ってもいいかもしれません。ユングのタームを借りますと「シャドウ(影)」ですね。牛怪獣はもしかしたらマックスのもう一つの人格かもしれない、とそういう面を感じさせます。

ここまでくると、表紙にこの怪獣がでてくるのも、納得いただけるのではないのでしょうか。牛怪獣はマックスの父親らしくもあり、また彼のもう

ひとつの人格でもあるのですから。マックスはかいじゅうたちのいるところという異世界にやっけてきて、成長して帰還します。少年は成長してやがて父になるのですから、牛怪獣はマックスの父であると同時に、マックスの未来の姿でもあるわけです。

見事な終わり方

もうひとつ、牛怪獣はファンタジーの世界の生き物ですから、マックスの心を開放してくれる役割も持っています。そうしますと父と子とファンタジーの精霊の三位一体という言い方をしたくなりますが、いかがでしょうか。昨日、三宅先生から、子どもは森に行ってそこで冒険をして帰ってくるというお話がありました。私もそうだと思います。マックスもこの例に洩れません。マックスは森（=かいじゅうたちのいるところ）に行って成長して帰ってきたのです。

しかし、少女はどうでしょうか。少女はもっと複雑です。少女についてはあとで『まどのそとのそのまたむこう』についてお話するときに、くわしく述べますが、森に行った少女というすぐに頭に思い浮かぶのは、赤頭巾ではないでしょうか。ただし、赤頭巾は森に冒険に行ったわけではありません。お使いに行ったのです。私の持論では「少年は森に行く」に対して、「少女はお使いに行く」のです。なぜなら女の子は生まれながらに「小さい母」という面を持っているからです。この点を『まどのそとのそのまたむこう』は、とてもよく描いています。

さて『かいじゅうたちのいるところ』は美しい構造をしていることをお話ししましたが、非常に美しく閉じられていることにも注目してください。最初にマックスが閉じ込められたマックスの部屋と、帰ってきた部屋、もちろん同じ部屋なのですが、ちょっと比べてみてくださいね。帰ってきた部屋は、出かける前の部屋に比べて、少しだけ大きく描かれています。色彩も微妙に変わっていて、寒色から暖色になっています。帰ってきたマックスは、ここで初めて狼のぬいぐるみを頭から外して、自分の頭を見せています。ここまでずっとマックスは、狼のぬいぐるみを着ていました。

狼とは、マックスが自分でコントロールできない心の暗部を象徴するものだったのかもしれませんが。

また窓の外の月が三日月から満月が変わっています。いつ満月になったのかといいますと、クライマックスの見開き場面でした。帰ってきたのですから、元の三日月にもどってもいいはずですが、センダックはそうはしていません。部屋の窓の向こうにある満月は、もしかしたらファンタジーの旅をしたマックスの満足感の表れかもしれませんね。もうひとつ、この窓枠ですが、行く前の部屋に比べると、その黄色がずっと濃くなっています。センダックの研究者であり、センダックについて大部の本を書いたジョン・セック (John Cech) という人が、この窓枠は、満月がこの部屋に侵入しないように、しっかりと外を外に閉じこめているのだと解釈しています。満月はファンタジーの世界に属しているものであって、現実の世界に入ってきては困るのだと。私も、ジョン・セックの説に賛成です。マックスはファンタジーの世界に行って十分に心を開放してカタルシスを得たわけですが、この経験はきちんと終わらなくては行けないのです。ファンタジーが現実に入ってくると、現実とファンタジーとの境目がぼけてしまいます。それはつまり、マックスが狂気に陥ることにもなりかねません。それを避けるために窓枠は、満月の部屋への侵入を拒むものでなくてはならず、そのために色も濃くなり存在感を増したというわけです。

部屋には夕食が置いてあって、それが温かったということは、マックスが許され、またマックスもお母さんを許した、そういうことではないでしょうか。そもそもマックスはいたずらをしてお母さんに叱られたのですが、心の中に鬱憤があるからこそ、狼のぬいぐるみを着て暴れていたのです。それをお母さんに叱られて、夕ご飯抜きで部屋に閉じこめられたために、マックスはいっそう怒りを募らせていました。その怒りを、マックスはファンタジーの世界に行って、自分を解放することによって解消し、満足して帰ってきたのです。自分もお母さんを許しましたが、帰ってきてみたら、お母さんからも許されていた。この絵本はそ

ういう話であることが分かります。

オペラ『かいじゅうたちのいるところ』

ここでみなさんに『かいじゅうたちのいるところ』のオペラを観ていただきたいと思います。ベルギーの首都ブリュッセルに、モネ劇場という有名な劇場があります。由緒あるベルギーの国立劇場ですが、バレエに詳しい人だと、モーリス・ベジャールが長いこと活躍していた劇場だということをご存じかもしれません。1975年にこの劇場からセンダックに『かいじゅうたちのいるところ』をオペラ化したいという申し出がありました。作曲はオリヴァー・ナッセンというイギリス出身の作曲家が予定されておりました。ナッセンとセンダックは会ったところすっかり意気投合し、オペラ化が具体的なものとなりました。1980年に初演が行われます。ところがこのときナッセンは全曲を完成してはおらず、後になって書き足しました。結局1983年に、グラインドポーン音楽祭というイギリスの有名な音楽祭で完成版が上演されました。これからお見せするビデオは、オリヴァー・ナッセンが指揮しています。そういえば現在、オリヴァー・ナッセンは来日中で、明日大阪フィルハーモニーを率いて演奏会があるそうです。写真で見ると、大変大きな面白そうな人でした。

オペラのなかでは、ある歌詞がくり返しくり返し聞こえてきます。“Vil-da-chai-ah-mi-ma mee-oh”という言葉ですが、これが何度も出てきます。これはセンダックの両親の母国語であるイディッシュ語だそうで、戦士の雄叫びおたけの声とのことです。意味は不鮮明なのですがビルダハイ (Vil-da-chai) というイディッシュ語はwild animalという意味とのことなので、「ママ、ぼくは野獣だぞ」と言っているのではないのでしょうか。

最初のほうで、お母さんが登場するのですが、センダックは、お手元のレジユメにあるようなお母さんの姿を考えていたようです。まるで怪獣のようで、こんなオペラ歌手はいませんよね。どんなお母さんが出てくるか楽しみにご覧になってください。60年代らしい古めかしい掃除機を持って出てくるのが、お母さんです。閉じ込められた部屋が森に変わる場面は、どうしても絵本のように

はなめらかでなくて、パタン パタン パタンと書割かきわりが変化して、ベッドや壁が森の絵に変わります。(ビデオ上映)

さっきの場面で、いたずらをしているマックスが人形の頭をポーン、ポーンとすつ飛ばしたところを覚えておいてください。これは伏線になっているのです。先に謎解きのようなことをしてしまい申し訳ないのですが、お母さんを演じた歌手は、後で女性怪獣として再び登場します。マックスがイライラして大暴れをしていたときに、お母さんは共感してくれず、マックスを叱る。そういう大人とマックスは戦ったのだということが、オペラでは非常にわかりやすく描かれています。問題は、絵本のクライマックス、3つの輝かしい見開きページをどう舞台化するかですね。オペラでは歌手が着ぐるみに入って怪獣になっていますから、どうしても制限があって、絵本ほどは盛り上がりません。それを補うために、ちょっとしたドラマを仕込んでありますので、後半の怪獣の姿をご覧ください。(ビデオ上映)

マックスは女性怪獣に踏まれましたが、その怪獣の首をストーンと落として、復讐しました。人形の頭を落としたというさっきの伏線は、この場面に繋がっています。この女性怪獣は、一幕でお母さんを演じた歌手がやっていますから、マックスがお母さんの首をちょん切ったようにも思えます。でもマックスはストップと言って、首を袖に持っていきました。女性怪獣は首のある姿で再び登場しますから、大丈夫だったようです。母殺しにならなくて、私もホッとしました。オペラでは、絵本にはない女性怪獣の首落とし事件が盛り込まれていますが、それでも絵本ほどの盛り上がりには欠けるように感じましたが、皆さんいかがでしたでしょうか。

センダックのバレエ『くるみ割り人形』

センダックは、オペラとかバレエの愛好家で、劇場が大好きなのですね。『かいじゅうたちのいるところ』のオペラ化では、自分で台本も書き、衣装や舞台装置まで全部をデザインしました。

オペラを観ていただいたので、今度はバレエ『くるみ割り人形』をご覧ください。

のバレエはセンダックの原作ではありませんが、センダックは後に『くるみわり人形』(Nutcracker)という絵本を作りました。バレエの舞台装置と衣装のデザインを依頼してきたのは、シアトルのパシフィック・ノースウエスト・バレエ団というところでした。すごく有名なバレエ団かというところ、まあ、それほどではありません。アメリカでは中ぐらいのところでしょうか。ケント・ストーウェルという芸術監督がセンダックの絵が非常に好きだったために、舞台デザインをセンダックに頼もうと思ったのです。

80年代は、センダックが沢山のオペラの衣装をデザインした時代です。センダックの最愛の作曲家モーツァルトのオペラ『魔笛』の衣装もやりました。しかし最初に『くるみ割り人形』の話が来たときは、センダックは乗り気ではありませんでした。なぜなら『くるみ割り人形』は最も甘口のバレエだと思ったから、とセンダック自身が答えています。しかし結果は、センダックの意見が強く反映されて、ユニークですばらしい「センダック版」といってよいバレエが出来上がりました。

クリスマスになると『くるみ割り人形』がよく上演されますよね。クララという女の子が出てきて、ドロッセルマイヤーという人形使いというか魔術師のおじさんが出てきます。クララはドロッセルマイヤーから、不細工な顔のくるみ割り人形をプレゼントしてもらい、これがとても気に入ります。センダックのデザインした人形が、これです。確かに、あまり少女が好きになりそうな人形には見えませんね。一般的な『くるみ割り人形』では、夜になるとねずみの大群が押し寄せてきて、くるみ割り人形率いる兵隊人形と戦争になります。結局くるみ割り人形側が勝って、くるみ割り人形は王子となり、王子とクララはおとぎの国というかお菓子の国へ行く。そこで金平糖の踊りとかアラビア人の踊り、中国人の踊りなどさまざまな踊りが繰り広げられますが、話の筋はあまり明確ではありません。

これをセンダックは元々のドイツロマン派作家のE.T.A.ホフマンの原作に近づけて、原作の持っていた暗い要素を復活させました。ドロッセルマイヤーという人形使いは、怪しげな人間として出

てきます。クララを誘惑しているようにも見えるし、守っているようにも見えます。クララは12歳と書いてあるのですが、別のところではセンダックは14歳とも書いてあるので、大人でもなければ子どもでもない。性の目覚めの時期にかかるかかからないかという少女ですね。この少女が、とても醜い男の人形を気に入ったのです。

センダック版ではねずみとの戦争で、少女が自分の靴をねずみの王様に投げつけたおかげで勝利を得ます。この部分は、ホフマンの原作どおりに戻されました。醜い人形がりりしい王子に変わり、クララはただおとぎの国に行くのではなく、大人の女性へと成長します。センダック版では、おとぎの国でなく、大人の国へ行くのです。靴を投げたときにバレリーナが交代します。少女っぽいバレリーナはねずみの王様の衣装の中に入って退場し、舞台に戻ってきたときには別の大人のバレリーナになっています。

みなさんの中に漫画読みの方がいらっしゃいますか。今年手塚治虫賞に輝いたのは山岸涼子作の『テレプシコーラ』なのですが、この『テレプシコーラ』の主役の少女、^{ちか}千花ちゃんが演じたのがクララ役でした。たいてい子どもが演じるものなので、少女たちの間で熾烈な主役争いが巻き起こります。そんなわけでバレエを扱った少女小説やマンガのなかではこのくるみ割り人形のクララという役がよく出てきます。ではセンダックの装置がとても美しいので、『くるみ割り人形』を少しご覧ください。(ビデオ上映)

センダックは、このくるみ割り人形のクララは『まどそのそのまたむこう』のアイダと双子のような気がするといっています。マックスはダダダン、ダダダン、ダダダンと進んでいきましたが、アイダをはじめ少女たちはそんなにストレートにはいかないのです。それをお話する前に、もう一箇所だけ、非常に美しいバレエのシーンがありますのでお見せします。

一般的な『くるみ割り人形』の「アラビアの踊り」なのですが、ふつうこれは、ハーレム調の衣装で、アラビア風のバレエを踊ります。ところがセンダック版では、これが孔雀の踊りになっています。センダックのデザインした衣装は、とても

美しいものばかりです。先ほど観ていただいたねずみたちも、一匹一匹衣装が違ってなかなか凝っています。孔雀の踊りは衣装も踊りも本当に美しいのでほんの一瞬ですがお見せいたします。孔雀は女性ダンサーが踊っていますが、両性具有的な、男性とも女性とも区別が付かない姿です。後で思い出していただきたいので、覚えておいてくださいね。(ビデオ上映)

一般的な『くるみ割り人形』では、ドロツセルマイヤーは最初の場面に登場するだけです。しかしセンダック版では、おとぎの国でも登場して、王子とクララを張り合っているように見えます。おじさんとして、少女のクララを愛していたドロツセルマイヤーは、クララが大人の女性になっていくのが苦しいのでしょうか。あるいは大人になったクララに惹かれているのでしょうか。王子と張り合う姿は、ちょっと怪しげです。

これに続く「中国の踊り」では、ふつうはチャイニーズスタイルの衣装で、数名の若いバレリーナが踊ります。ところがセンダック版では、怪物がでてきます。この場面は、絵本ではジャパニーズスタイルになっていて、怪物は山伏のかっこうをしています。舞台ではチャイニーズスタイルですが、怪物の衣装は山伏そのものとは異なりますが、やはり山伏からヒントを得たようです。

クララの衣装を見てみると、これはケイト・グリーンナウェイの描く少女のファッションですね。センダックはコールデコットを尊敬していることが有名ですが、コールデコットと同時代に活躍したケイト・グリーンナウェイに対するちょっとしたオマージュかもしれません。グリーンナウェイは19世紀の人ですけれども、彼女の描いた少女たちの衣装は彼女の時代の衣装ではありません。もう少し前の19世紀初頭のファッションです。帝政ナポレオンの時代、ギリシャへの憧れが強かった時代の服装で、ギリシャ風です。

『めっきらもっきらどおんどん』の作者の長谷川摂子さんは、私の大好きな作家ですが、グリーンナウェイの絵本を好まないことをエッセイに書いていました。「でこでこした衣装を着ていて、少女たちが生きていない」とありましたが、これについては私は意見が異なります。グリーンナウェイ

が描いたのは、でこでこした装飾過剰の服ではなく、どちらかというとシンプルな服です。ビクトリア時代のいろんなところにボタンが付いていて召使に着せてもらわないと着られない服に比べると、どこも締め付けていないストンとしたギリシャ風の服ですから。

『くるみ割り人形』はもちろんチャイコフスキーの作曲です。チャイコフスキーの手になる3大バレエ曲『白鳥の湖』『眠れる森の美女』『くるみ割り人形』の中でも、これが最も音楽の完成度が高いといわれています。センダック版のバレエでは、ホフマンの話に近づけるために新しい場面を作っており、この場面のために、本来なかった音楽を挿入しています。挿入されているのは、モーツァルトの曲です。センダックは熱烈なモーツァルトのファンで、舞台で使われている胸像もモーツァルトですね。ただセンダックだけでなく、チャイコフスキー自身もモーツァルトを敬愛していました。『スペードの女王』というオペラでは、モーツァルトのセレナーデを挿入していますが、『くるみ割り人形』に挿入されたのも、これと同じ曲です。チャイコフスキー自身が選んで、自分のオペラに挿入したものなので、順当な選択と言えるでしょう。さらに原作者のホフマンも、大のモーツァルトファンでした。E.T.A.ホフマンのミドルネームのAはAmadeusですが、これはモーツァルトのミドルネームをもらったものです。チャイコフスキーとホフマンとセンダックと、奇しくも同じモーツァルト好きの3人組というわけです。

『まどのそとのそのまたむこう』の主人公アイダ

ご覧いただいたバレエは『まどのそとのそのまたむこう』と関連があります。センダック自身が、『まどのそとのそのまたむこう』の主人公アイダとクララは双子のようだと語っています。『まどのそとのそのまたむこう』はセンダックの3部作の三つ目ですが、読者のあいだでは、一番人気がないことと思います。一番人気があるのは、もちろん『かいじゅうたちのいるところ』です。『まどのそとのそのまたむこう』はおどろおどろしい雰囲気があって、なにか重大なことが起こっているさうだけれど、何が起こったのか、よくわからな

いという人が、批評家のあいだでも結構いるのです。アイダとクララとの間に共通点があるようですが、それは何でしょうか。

実は先ほど鳥の踊りを見てもらいましたが、こちらの写真をご覧ください。20世紀初めに一世を風靡したロシアバレエ団の演目だった『薔薇の精』の写真です。薔薇の精の衣装と、『くるみ割り人形』のなかの孔雀の衣装が、非常に似ていることに気がつくでしょう。薔薇の精に扮しているのは天才バレエダンサーのニジンスキーですが、男とも女とも区別がつかない怪しい雰囲気のパレエを踊って、観客を陶酔させました。映像はなく写真しか残っていませんが、写真を見ただけでも胸がざわめくような妖しく美しい雰囲気が感じられます。少女役はカルサビーナというバレリーナでした。少女が舞踏会に行き帰ってきて、薔薇の匂いにうっとりしていると、夢のなかにこの薔薇の精が出てきて、少女と薔薇の精はパ・ドウ・ドウ (pas de deux) を踊ります。

『くるみ割り人形』もそうですが、主人公はまだ性に目覚めておらず、しかしやがて自分の女性性が開花することを予感しているような、そういう少女です。カルサビーナの持っているこのポーズを見てください。そして『まどのおとこのそのまたむこう』の表紙のアイダのポーズを見てください。よく似ていると思いませんか。二人とも片膝に手をついて、もう片方の手を伸ばして、身体をギュッとひねっています。

『まどのおとこのそのまたむこう』は、アイダという少女が赤ん坊の妹の面倒をみていますが、妹に対する相反した思いがあるようです。『かいじゅうたちのいるところ』では「ダダダン」というリズムがくり返されていることとお話ししましたが、『まどのおとこのそのまたむこう』では、渦巻き (=スパイラル) がくり返しくり返し表現されています。表紙のように、身体をひねるのも、スパイラルの運動の一環です。センダックはまずは表紙から、このスパイラルの運動を見せています。

少し駆け足になりますが、この絵本を見てみましょう。扉のページから、ゴブリンが妖しい姿を見せています。ゴブリンに囲まれて、アイダは怯えているような困惑したような顔をしています。

もう一枚扉ページがあって、赤ん坊の妹がこちらを見ています。これをめくると、「パパは うみへ おでかけ」という最初の見開きページになります。

アイダは妹のお守りをしていたのですが、ちょっとホルンを吹いているすきに、妹がゴブリンにさらわれてしまいます。この絵本がわかりにくいのは、ここでアイダが何を考えているのか鮮明ではないからです。アイダが何か困っているらしいことはわかりますが、アイダの気持ちは伝わってきません。こんなにボーッとしては、赤ん坊がさらわれても気づかないのは無理ありません。ゴブリンが置いていった大変醜いチェンジリング (とりかえっこ) の氷の人形を妹だと信じて「大好きよ」と抱きしめます。

センダックは『まどのおとこのそのまたむこう』を作ってから、バレエの『くるみ割り人形』に関わりました。実はホフマンの原作では、この話の前半はとりかえっこの話なのです。お姫さまが大変醜い姿に変えられてしまう。そこで若い王子が助けるのですが、今度は王子が醜いくるみ割り人形に変えられてしまう。でもクララの勇気のおかげでくるみ割り人形は、美しい王子に再び戻る、そういう話です。『まどのおとこのそのまたむこう』もとりかえっこの話ですから、あるいはセンダックは何か因縁めいたものを感じて、ホフマンの原作のこの部分を復活させたのかもしれない。

さてアイダが自分が抱いているのは妹ではなく、醜い氷の人形だと気づいた場面、ここで初めてアイダの感情が伝わってきます。アイダはカンカンに怒っていることがよくわかります。このページの文章は「ゴブリンたちが ぬすんだんだわ！」と、盗まれたことを怒っているように書いてあります。しかし絵を見てください。アイダは、氷の人形に向かって、怒りを爆発させているように見えませんか。実は私はこの絵本を最初に見たときに、この絵のアイダにとっても共感しました。私自身が初めて赤ん坊を持った母親だったために、日夜赤ん坊と格闘するようにして子育てをしている最中でした。赤ん坊というのは、よだれ、おっぱい、おしっこやうんちで、始終ビショビショベタベタとぬれているものです。このページを見

たときに、溶けかかっている氷の人形はうちの赤ん坊にそっくりだと思いました。カンカンに怒って手を振り上げているアイダの姿は、赤ん坊を怒っている私自身にそっくりだと思いました。

赤ん坊は非常に無力ですから、赤ん坊に対して怒りを向けることは許されません。親は苛立つことがあっても、その苛立ちを赤ん坊にぶつけるわけにはいきません。氷の人形は溶けかかっているのに、手だけは残っていて、なんだか異様な力を感じます。赤ん坊は何をしてあげても、機嫌の悪い時は頑固に泣き続けて、母親は自分の力が及ばないことを感じます。未熟な母親は赤ん坊にふりまわされて、何をどうすればいいのかわからなくなることが、ままあります。

私は母親になる前には仕事をしていましたから、何か目標を設定してそれに向かって努力するという生き方をしていたのです。ところが赤ん坊の世話というのは、目標を設定しようがありませんでした。朝から晩まで24時間、何をどう感じているのかわからない者を相手にするのは、仕事とはまったく違った神経とエネルギーを必要とすることでした。未熟な母親だった私は、当惑することが多かったのです。そんなわけで、無力なものに対して怒るといのは我ながら酷いと思ながらも、拳を振り上げたアイダのような姿を見せていたと思います。

しかし絵本の終わりのほう、妹を取り戻したアイダを描いたページを見てください。ここでアイダは赤ん坊に向かって両腕を広げて、受け入れています。アイダの顔は、限りなく優しく、静謐な美しさに満ちています。この絵は、聖母子像に似ていますよね。この絵を見たときも、ここに描かれたアイダと赤ん坊は、私とうちの赤ん坊にそっくりだと思いました（ちょっとずうずうしいですね）。でも赤ん坊はかわいいときは本当にかわいいのです。また私自身が、それまで知らなかった献身的な愛情というものを初めて知り、それは自分のなかにあった最良のものだと感じました。そういうわけで、ここに描かれたアイダにも強く共感したというわけです。

物語の始まりと終わりに共感することができたとき、私にとってこの物語は大変わかりやすいも

のとなりました。怒りにあふれたアイダが愛を取り戻す、そういう物語なのだと得心したのです。センダックの作品は深みがあるために、様々な読み方が可能です。私は自分の経験に少々引っぱりすぎているかもしれませんが、でもこういう読み方も可能なのだとおわかりいただくと幸いです。

さて少し先に進みすぎました。アイダは氷の人形を怒った次のページで「ゴブリンたちがぬすんだんだわ！およめさんにしようと おもってるのね！」と勇ましい格好をしています。しかし私は、これはポーズだと思いました。バレエに「怒りのポーズ」というものがありますが、これにそっくりです。ポーズを決めすぎているのと裏腹に、ほら、見てください。アイダの顔の表情はうつろです。たぶんここでは、本当に気持ちが入ってはいないのでしょう。おそらくアイダは、本当は赤ん坊を助けになんか行きたくなかったのではないのでしょうか。でも行かないわけには、いかない。そこでアイダはママのレインコートを着て、ホルンを持って出かけます。母親と父親の助けが両方必要だったのかもしれませんがね。

ママのレインコートは黄色ですが、アイダが元々着ている洋服はブルーです。マリア像を見ると必ずブルーのガウンを着ているのを、ご存じですか。もうひとりブルーの服を着た力強い少女がいますよ。『風の谷のナウシカ』です。ナウシカがブルーの服を着ているというのは、物語のなかで非常に重要な要素になっています。ナウシカのいた世界には、青い衣を着た者がやって来て世界を救ってくれるという伝説がありました。ナウシカは伝説通りに青い衣を着ていて、やがて世界を滅びから救います。キリスト教の図像学でいきますと、青い服は聖母マリアの象徴です。作者の宮崎駿さんが、どうしてナウシカにブルーの服を着せたいと思ったのかはわかりませんが、もしかしたら聖母マリアの青い服が影響しているのかもしれませんが。一方のセンダックはユダヤ人ですが、キリスト教圏に育っていますから、心のどこかにマリア像が刻みこまれていたのかもしれませんが。

さてアイダはブルーの服を着て、そのうえにママの黄色いレインコートをまといまいます。黄色は前

進を表す色で、青は後退を表す色、この2色は補色どうしです。アイダはたぶん青い服のままでは、遠い世界に旅立てないのでしょうか。自分に無い色彩を補って、前進と後退の両方を自分のものにする必要があったのでしょうか。前進と後退、これはスパイラルの動きになります。また手に持っているのはホルンで、これはもうスパイラルの形そのものです。

ここで後ろ向きで、窓の外へと出て行くのですが、これが失敗だったとありますよね。でもなぜ後ろ向きが失敗だったのか、センダックは説明をしていません。こういうところがとてもわかりにくいために、この作品は嫌だという人も多いのだと思います。何はともあれ、そこにパパの声が聞こえてきます。「うしろむきでは なんにもならぬ くるり まわって ホルンをおふき」。くるり回る。ほら、ここでもまた、スパイラルです。回らなければ、つまりスパイラルの動きをしなければ、その地には着けないのです。私は後ろ向きとは、アイダの気持ちが後ろ向きだったこと。そういう後ろ向きの気持ちでは、妹を助けには行けない、だからその気持ちを切り替える必要があったのだ、と解釈しました。

そうしてくると回ったアイダの絵を見てください。この空中に浮かんだ絵です。この絵のアイダは、上半身と下半身が別々のものに思えるほど、強いひねりが加わっています。上半身は横向きですが、下半身は完全に正面向きですから。アイダがファンタジーの国へ行くためには、身がちぎれるほど強いスパイラルの動きが必要なのだと、そうセンダックが語っているように、私には思えてなりません。ファンタジーの国に到着すると、顔が見えなかったゴブリンたちは赤ん坊の姿をしてギャーギャー泣いています。真ん中の一番目立つ赤ん坊が、身体を強くひねって、スパイラルの動きをしているのに注目してください。ここでアイダがホルンを吹き鳴らすと、ゴブリンたちは踊りだし、やがてその踊りが止まらなくなり、ついに溶けていきます。

この場面でのアイダの姿は、表紙とよく似ています。身体をひねる途中の姿で、このかっこうからちょっと顔を上げると、表紙の姿になります。

ここまでスパイラル、スパイラル、スパイラルでしたよね。そしてゴブリンがすっかり溶けてしまうと、その後に可愛い姿の妹がもどってきます。こうして通して見てみても、この絵本の筋はやっぱりわかりにくいですよ。なぜゴブリンが溶けたのかは、説明がありません。アイダが妹を救ったことはわかりますが、アイダの冒険の内容について、センダックはあまり具体的な説明をしていません。どこかでアイダに共感した読者（私はその一人でした）は、自分の感情で物語を補って読んでいきますが、共感しそびれた読者は、取り残されてしまうでしょう。

しかし女の子が赤ん坊をかわいくないと思ったところから、かわいいと思えるようになるまでの心の動きが描かれていると考えるとどうでしょうか。絵本のなかで、アイダの気持ちが大きく動いたということはわかりますよね。拳を振り上げるほど怒った後で、赤ん坊を受け入れる、本当にかわいいと思う、そんなふうにな人の気持ちは揺れ動くものです。めんどろを見なくてはいけない妹を、一瞬憎む。まだ遊びたいさかりの少女にとってみれば、どうして私ばかりこんな赤ん坊の面倒をみなくてはいけないの？とか、妹に対する嫉妬とか、そういうネガティブな気持ちがあっても当然です。でもかわいがってあげたい、かわいがらなくてはいけない、という気持ちもある。そんな激しい葛藤を、少女は心のなかでファンタジーの旅をすることで解決したのではないのでしょうか。解決するには、気持ちの回転、つまりスパイラルが必要なのです。「気持ちが変わりました」というのは、あまりドラマチックなことには思えませんが、実はこれは大変なことです。王子が龍退治に行って龍を退治したというドラマと同じぐらい、強烈なドラマかもしれません。センダックはアイダの心の動きをファンタジーにしたのだと、私はそんなふうには思っています。絵本のなかの時間は、現実での時間にすると一瞬なのかもしれませんが、それでも龍退治に匹敵するような、大きな心のドラマが起きたのでしょう。

妹を取り戻したアイダは、モーツァルトがピアノをひいているわきを通して、現実の世界にもどってきます。母親のもとに帰ってくると、お父

さんからの手紙が待っていました。センダックの他の作品と同じように、この絵本も見事に閉じられています。後ろ扉のアイダですが、このアイダは前扉のアイダに比べて、少しだけ(およそ20パーセントほど)大きく描かれています。前扉では、大きな赤ん坊を抱えてとまどっているアイダの気持ちを象徴するかのよう、顔を見せないゴブリンが近くにいて、暗いものを感じさせました。しかし後ろ扉では、暗いものはすっかり姿を消して、アイダは安定した姿で妹と遊んでいます。そう、アイダは心の内の長い旅を経て、心の安定をとりもどしたのです。

最後にスパイラルとは、ユングの考えた「太母」を象徴する図形として、あらゆるものを生みだし、また破壊する母性の象徴であることをつけ加えておきたいと思います。

センダックのパスティーシュ

3部作のなかで、この絵本だけが絵の雰囲気が変わっています。『かいじゅうたちのいるところ』と『まよなかのだいどころ』はグラフィックな絵ですが、この作品は細部まで細かく描かれていて一枚一枚が絵画のようです。この絵本はモーツァルトへのオマージュだとセンダックが語っていますが、そのために全体をモーツァルトの時代に設定しています。そして同時代のドイツロマン派の絵画からのパスティーシュ(pastiche=引用)が、数多く見られます。ドイツロマン派の代表的な画家には、フリードリヒやルンゲがいます。最初の見開きに描かれた山は、フリードリヒが描いた「バートラフ山」にそっくりです。表紙の絵はルンゲの描いた「ヒルデンベックの子どもたち」という絵に、柵や赤ん坊、子どもの衣装などがよく似ています。ルンゲには代表作として「朝」という作品があります。幼子イエスが地面に裸で転がっているために奇妙な感じがする絵ですが、センダックが赤ん坊を不気味に描いたところは、この作品からの影響もあるように思います。またアイダのお母さんの後ろ姿は、フリードリヒの描いた「窓」という絵に描かれた女性の後ろ姿とよく似ています。ウエストより高いところをしぼった形のドレスもそっくりです。

ではセンダックはなぜドイツロマン派の絵をパスティーシュしたのでしょうか。モーツァルトの時代に合わせるという目的もあったでしょう。また画家は他人の絵を取り入れることによって、自分を超えるというか、自分の範疇を越える、そういう作用もあるようです。私は今年の夏、ピカソについて勉強したのですが、ピカソは自分のことをパスティーシュの天才と言っています。ピカソといえば天才の代名詞の存在ですが、そのピカソが自分の才能とは色々な人から、色々な要素を取り入れることができることだと語っていて、これには驚きました。

センダックも「自分は新しいものは何ひとつ見出してない。全部よそから借りてきた」とインタビューで語っています。私たちの目からみると、ピカソにしるセンダックにしる、今世紀最大のクリエイティビティを発揮した天才ですが、期せずしてこのふたりが、自分がしたことはパスティーシュだと言っているのです。もしかしたら天の下に、新しいものは何一つ無いのかもしれませんが、そんなことを思わせるエピソードです。センダックは新しい作品に挑戦するために、これまで自分が持っていた技術や様式から離れたと思ったときに、自分が惹かれたモーツァルトと同時代のドイツロマン派の絵を引用し、真似することによって、そして真似しながら自分の世界に取りこむことによって、これまでよりひとつ内容の深い絵本を創り出したのかもしれませんが。

男の子と女の子の冒険

センダックは自分の作品のなかで『まどのそとのそのまたむこう』がいちばん気に入っているそうです。確かに不思議な深みを持ったファンタジーだと思います。この作品について私は『英米児童文学の宇宙』(本田英明編著 ミネルヴァ書房 2002)のなかに、評論を書いていますので、興味のある方はご覧ください。アイダにしてもクララにしても、女の子の冒険というのは、心の冒険であることが多いのです。そして心の冒険というのは、どうしてもわかりにくい面を持ちます。

『かいじゅうたちのいるところ』のマックス少年は冒険をして帰還し、成長しました。やがてもっ

と成長したあかつきにはお父さんになるでしょう。それに反して少女たちは小さいときから、小さい母であることを引き受ける、あるいは引き受けさせられてしまうところがあるようです。ナウシカも「小さき母」と呼ばれました。センダックのお母さんの名前はセイディ (Sadie) なのですが、この名前の真ん中の文字のadiをひっくり返すと、アイダ (Ida) という文字になります。センダックにとって、アイダはお母さんでもあり、また自分を大切に育ててくれたお姉さんでもあった。アイダとはまさしく育てる者を象徴しているのではないのでしょうか。

アイダが小さい母であるというのをもう少しだけ説明すると、アイダのお母さんを見てください。このお母さんは終始ぼんやりとした表情をしていて、何を考えているのか不明です。アイダが娘であるなら、お母さんはしっかり見守って、サポートしてくれるはずです。ところがこのお母さんは、まるで母であることを放棄したかのようなうつろな顔をしています。しかもお母さんの手も足も、

異常なほど小さく描かれていて、萎縮しているように見えます。それに比べてアイダの足は、異常に大きく描かれています。地に足を着けたしっかり冒険する少女を描こうと思うと、自然に大きくなってしまったのかもしれませんが。デッサンが狂っていると思うくらい、大きいですね。でも私は、アイダの大きい足がときどき無性に見たくなります。アイダは足が大きくなるほど、重い責任を請け負わせられているように思えて、やはりアイダは母=育てる者を象徴しているように思わないではいられません。

きょうは『かいじゅうたちのいるところ』で男の子の冒険、『まどのそとのそのまたむこう』で女の子の心の冒険の両方をみていただきました。センダックという絵本作家の凄さ、面白さ、深さを少しでも皆さんにお伝えすることができたなら、うれしく思います。

(はいじま かり 翻訳家)

「最盛期（モーリス・センダック その2）」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	Where the wild things are	Maurice Sendak 作・絵	HarperCollins c1963	Y17-A127
	いるいるおばけがすんでいる	モーリス・センダック原作・絵 ウエザヒル翻訳委員会訳	ウエザヒル出版社 昭和41	Y17-225
	かいじゅうたちのいるところ	モーリス・センダックさく じんぐうてるおやく	富山房 1975	Y17-4623
2	Outside over there	Maurice Sendak 作・絵	Harper & Row c1981	Y19-A342
	まどのそとのそのまたむこう	モーリス・センダックさく・え わきあきこやく	福音館書店 1983.4	Y17-9347
3	英米児童文学の宇宙： 子どもの本への道しるべ	本多英明編著	ミネルヴァ書房 2002.4	KS74-G222 ※
4	絵本をひらく：現代絵本の研究	谷本誠剛, 灰島かり編	人文書院 2006.2	UG71-H91 ※
5	The art of Maurice Sendak	Selma G. Lanes 作	Bodley Head 1981, c1980	YZ57-A41
	センダックの世界	セルマ・G.レインズ著 渡辺茂男訳	岩波書店 1982.1	YQ11-337
6	Caldecott & Co.: notes on books and pictures	Maurice Sendak 作・絵	Farrar, Straus, and Giroux 1988	YZ53-A1
	センダックの絵本論	モーリス・センダック著 脇明子, 島多代訳	岩波書店 1990.5	KC511-E35 ※
7	Pipers at the gates of dawn	Jonathan Cott 作	Viking (Penguin Book) 1984	所蔵なし
	子どもの本の8人： 夜明けの笛吹きたち	ジョナサン・コット著 鈴木晶訳	晶文社 1988.12	KE177-E6 ※
8	取り替え子	大江健三郎著	講談社 2000.12	KH449-G14 (本館)
9	Marven of the Great North Woods	Kathryn Lasky 作 Kevin Hawkes 絵	Harcourt Brace c1997	Y17-A5810
	大森林の少年	キャスリン・ラスキー作 ケビン・ホークス絵 灰島かり訳	あすなる書房 1999.11	Y18-M99-532
10	Nutcracker	E.T.A. Hoffmann 作 Maurice Sendak 絵	Bodley Head 1984	Y19-A613
	くるみわり人形	E.T.A. ホフマン作 モーリス・センダック絵 渡辺茂男訳	ほるぷ出版 1993.5	Y6-1441
11	Un jour, un chien	Gabrielle Vincent	Casterman c1999	Y17-A8047
	アンジュール：ある犬の物語	ガブリエル・バンサン作	ブックローン出版 1986.12	Y18-2368

レジュメ

非日常の世界—物語る手法のからくり

藤本 朝巳

アメリカの絵本作家エド・ヤング、D. ウィーズナー、クリス・V. オールズバーグ、デイビッド・スモールなどの作品を用い、その物語る手法、隠し絵、騙し絵などを通し、現代絵本の不思議な魅力について、またエリック・カール、レオ・レオニらのしかけ絵本のおもしろさについて解き明かします。

はじめに

非日常を楽しむ！

絵本の語法

絵本の語り口について

絵の働き／ことばの働き

絵の働き 日本の 絵巻 による物語の展開手法

西洋の 宗教画 に見る視線の動かし方

レンブラント作 『壁に字を書く指の幻』

1. 〈文字なし絵本〉の世界—そのおもしろさ と 手法

2人のデイビッド

■デヴィッド（デイヴィッド）・ウィーズナー

■デイビッド・スモール

The Huckabuck Family

2. 〈隠し絵〉絵本の世界—その迫力 と 手法

■エド・ヤング

3. 〈騙し絵〉絵本の世界—その不可解さ と 魔力

■クリス・ヴァン・オールズバーグ

4. 〈しかけ〉絵本の世界—そのおもしろさ と 匠

■レオ・レオニ

デザイナーとしての配置の巧さ

■エリック・カール

発想の奇抜さ と 材料作りの達人

まとめ

絵本の芸術性...

〔質疑応答〕

〔参考文献〕

- ・藤本朝巳、『絵本のしくみを考える』（日本エディタースクール出版部）、2007年
- ・藤本朝巳、『ぞうくんはどっちを向いている？ 楽しい絵本学』（フェリス・ブックス1）、フェリス女学院大学、2001年
- ・Lacy, Lyn Ellen, *Art and Design in Children's Picture Books*, Chicago: American Library Association, 1986.

非日常の世界

—物語る手法のからくり

藤本 朝巳



はじめに

みなさん、こんにちは。どうぞよろしくお願ひいたします。

さて、今回は「非日常の世界—物語る手法のからくり」と題しまして、お話しさせていただきます。

「非日常」とは「非現実」、通常とは異なる世界（時空間）という意味で用いています。ですから、今回扱う作家の作品は、多くが非現実の不可思議な世界を表現しています。また、「からくり」とは「しかけ」「装置」、演劇でいえば、「舞台裏」といったところでしょうか。本日は、人の身体を例にしていえば、解剖学の専門医が人体を解き開き、人体の構造と機能を明らかにするように、今回のテーマに関係する絵本を解剖して、その組織と働きを説明すると思ってください。

ところで絵本とは「ことば（文章）」と「絵」を用いて物語るのですが、本日は、現代アメリカの絵本作家たちの絵の手法を解き明かしてみたいと思います。今回はアメリカの絵本と絵本作家がテーマですが、第二次世界大戦の戦前、戦中、戦後と申しまして、絵本作品としては、すでに古典といわれているような作家、作品につきましては、すでに吉田先生、三宅先生、灰島さんが講演なさったと思いますので、私は、それらの作家以降に活躍している作家たち、すなわち、現代アメリカの現役の作家とその作品を中心にお話しさせていただきます。ただし、2時間のみの講座ですので、主にデイビッド・スモール、エド・ヤングを中心にお話ししたいと思います。

しかしエド・ヤングについては、私はすでに様々なところで発表していますので、この作家については、その本質的なことのみを申し上げます。現

代作家と申しましたが、レオ・レオニはすでに他界していますし、また今回は三宅先生が紹介されましたので、レオニについても簡潔に、またエリック・カールは、今回の私のテーマからいいますと、幾分、趣向の異なる作家ですので、カールについても、作品制作の裏側を簡単に紹介するのみにさせていただきます。その際、彼のホームページを紹介し、みなさんが自宅にいながら、サイトを通じて、世界の絵本を楽しむことができるということもご紹介させていただきます。

本日紹介する、現代アメリカの絵本作家（画家）は以下の芸術家たちです。

1. デヴィッド・ウィーズナー (David Wiesner)
2. デイビッド・スモール (David Small)
3. エド・ヤング (Ed Young)
4. クリス・ヴァン・オールズバーグ (Chris Van Allsburg)
5. レオ・レオニ (Leo Lionni)
6. エリック・カール (Eric Carle)

彼らの絵本の中には、不可思議な非日常世界が描かれています。そして、そこで起こる奇妙な出来事が、作品を面白くしているのです。では、現代アメリカの絵本作家の、不思議な魅力、というより、魔力といった方がいいかもしれませんが、彼らの物語る手法、隠し絵、騙し絵の世界、そしてしかけ絵本のからくりを、わかりやすく解き明かしていきます。どうぞ「非日常」の世界を愉しんでください。

しかしその前に、絵本の基本的な話を少しだけさせていただきます。そもそも絵本は、絵とテキストで構成されているわけですが、今回はその〈語り口〉について、普通とは異なる視点から、解き明

かしてみようと思います。日本では、まだ定着していないかもしれませんが、「絵本の伝達上のきまり」のことを、私どもは「絵本の語法」と呼んでいます。そして私は、絵本で物語る手法を「絵本の語り口」と称しています。絵本の絵とことばには、それぞれ働きがあるのです。そのことを、まずは日本の「絵巻による物語の展開の仕方」を参考に確認してみましょう。本日の講座は、アメリカの絵本の講座であるはずなのに、なぜ日本の古い絵巻について説明するのだろうか、と思われる方もおられると思いますが、日本の絵巻は、絵本の表現形式ときわめて近い表現をするものですので、ここでは、ご了承ください。

絵巻について

日本人は古い時代から、「物語」という時間芸術を、「絵画」という空間芸術の形式を借りて表現してきました。絵巻はその代表的表現形式といえます。ここで話題にする日本の絵巻は10世紀の終わりころには完成の域に達していたといわれています。

ところで、京都国立博物館京都文化資料研究センターの若杉準治氏は「絵巻」の条件として次の二つをあげています。注¹

- 1 その形が「卷子」であること。
- 2 内容（主題）として、あくまで「物語」（時間的経過のあるストーリー）を絵画化していること。

「卷子（かんす）」とは、一般的に、文章や絵を横に継ぎ合わせ、巻物状にしたものの総称ですが、その形体から収納しやすく、また携帯にも便利です。鑑賞するという点からいうと、絵に連続性があることに特徴があります。「絵巻」は、日本絵画の中で、「卷子」の形式に、「物語」を絵画化したものです。

絵巻は、日本特有の物語絵画であり、詞（ことば）と絵によって物語を語り、その物語を巻物に仕立てています。この形式は、形体こそ異なるものの、表現形式としては、絵本ときわめて近いものといえます。違うところは、絵巻が卷子であるのに対し、絵本は本（冊子）の形をしているということです。また絵巻は、横に展開する絵を繰り

広げていきながら鑑賞するのに対し、絵本は、ページをめくって楽しむものです。

絵巻の絵の伝達手法

絵巻の一般的な構成は、詞を置き、これに続けてその詞の内容を表した絵を続けるというものです。もちろん中には絵が始めにあるものもありますし、詞が絵の中に入り込んだものもあります。注²このような表現の仕方でも絵本の表現にきわめて近いものといえます。

さて、代表的な絵巻の表現を紹介します。平安時代中期の絵巻物『信貴山縁起（しぎさんえんぎ）』は、日本の絵巻物の最高傑作ですが、この作品は、信貴山で毘沙門天を祀り、不思議な法力で朝護孫子寺を中興した僧、命蓮（みょうれん）の事績を物語風に描いています。その内容は命蓮上人にまつわる説話を主題にしており、「飛倉ノ巻」「延喜加持ノ巻」「尼公ノ巻」の3巻からなっています。この作品は、日本上代世俗画の到達点ともいわれています。ここでは、その第1巻「飛倉ノ巻」（山崎長者の巻）を紹介します。

若杉氏は、「飛倉ノ巻」のあらすじを以下のように説明しています。「…長年の修行で鉢を飛ばす法力を得た命蓮が、飛鉢で日々の托鉢（たくはつ）をしていたが、山崎に住む長者が飛んできた鉢を倉の中に放置したために、鉢は倉ごと信貴山に運ばれてしまう。長者は慌てて山まで追いかけて倉の返還を申し出る。けれども命蓮が倉は山に留置くことにし、鉢に米俵一俵を載せて飛ばすと、他の米俵が雁のように連なって山崎に帰っていった、という話を描いている。」注³ 図（省略）は、倉に放置してあった鉢が、突然、倉から飛び出し、また倉が揺るぎだしたところを描いています。絵は右から左へと見ていくわけですが、図の右側には、家人が慌てて鉢を追いかけている様子が描いてあり、中央には、長者が馬に乗って追いかけてようとしている姿が描いてあります。また、図の左上には空に舞い上がった鉢に倉が支えられ、鉢と倉が空を飛ぶように運ばれている様子が描いてあり、一方、左下では人々はそれを見上げて両手を振り上げています。どことなく滑稽さも感じさせる表現です。このように絵巻は右から左に物語が

進んでいきます。

平安時代後期の説話絵巻では、ある場面（空間）と次の場面（空間）の間に霞を配して、合理的に連続しない空間を違和感なく接続させるという手法を取ります。この図（省略）は、前の図（省略）の後の場面ですが、この図でも、右の部分は漂う霞を用いて、これより以前の場面と以後の場面が隔てられています。この霞が前から後へ場面を円滑に移行させるのです。絵を見ると、中央の長者とお付きの者たちは、左前方上の鉢と倉を見上げながら追いかけています。その中央少し右には従者の一人が草鞋の紐を結び直しています。（このように主なる話の流れの中に、ちょっと脇役や端役が登場するのも、絵本の表現に似ています。）

その後、長者は信貴山に登って、命蓮に倉を返してもらおうと、懇願します。ところが命蓮は、倉は返さないが、蔵の中にある米俵は返すと約束し、長者の従者に俵を一つ鉢に乗せるように指示します。すると、俵に乗せた鉢がたくさん米俵を従えて飛行し、長者宅に帰り着きます（絵巻には、雁が群れをなして飛んで行くように、俵が逆方向（左から右）に進んで行く場面が描かれています。絵巻の右下には、秋の野に遊ぶ鹿たちが、その異様な情景を見上げています）。

この図（省略）は、長者の館の、倉のあった元の場所に、鉢に導かれてきた俵が落下する場面です。家人たちが、そのありさまを見て驚いています。この図の建物を見ると、瓦葺きや校倉造りの立派な倉など、当時の長者階級（油商人）の生活実体が丁寧に描いてあるのがわかります。

このように第1巻「飛倉ノ巻」は、初めに鉢が飛び出し、倉が揺るぎ出すところから始まり、最後に、たくさんの俵が倉の建っていた、元の場所に落ちて来るまでの一連の物語を、間に詞書をはさまず、絵のみで一気に表現しているのです。

この寺のある平群（へぐり）町の公式ホームページは、国宝に指定されている『信貴山縁起』について、以下のように解説しています。注⁴

自然風景の描写だけでなく、すべてに写実的に描かれ、建築史・風俗史の研究資料としての価値も高く評価されている。「延喜加持ノ巻」

と「尼公ノ巻」には、絵巻の途中で2段の詞書（ことばがき）があり、描かれた内容を理解することができる。

「飛倉ノ巻」は、この詞書を欠くが、『宇治拾遺物語』に同じ内容の記載があり、詞書の内容を確認することができる。鳥羽僧正覚猷（かくゆう）の執筆ともいわれるが作者は未詳で、平安後期（12世紀後半）に描かれたと考えられている。

この『信貴山縁起』は上記の説明にもあるように、全3巻のうち、残存する第1巻「飛倉ノ巻」には詞書がありません。しかし研究者は「第一段が詞を持たない形式というのは考えにくく」、『宇治拾遺物語』には第一段に当たる部分に詞書の記載があることから、おそらく巻首に欠失があり、破損紛失した可能性があるとして説明しています。注⁵

西洋の宗教画に見る視線の動かし方

続いて、絵本の絵の働き（動かし方）について理解していただくために、西洋の宗教画について考えてみましょう。

この図（省略）はオランダのレンブラントの『ベルシャツアルの饗宴』という作品です。この絵は、旧約聖書の「ダニエル書」の第5章、「壁に字を書く指の幻」という記事をテーマにしています（物語の内容については、ここでは割愛します）。

この絵を鑑賞する人の目の動きについて考えてみましょう。おそらく、多くの人の視線は、画面左側から中央の主人公ダニエルへと誘われ、両手の対角線上を動いて、画面右上、壁の光る部分に目が動いていくと思います。また、左側の女性の後ろ姿も、視線は見えませんが、その視線は自然に後ろの壁に吸いこまれていくようです。このように、この絵の中には、見る人の視線を左から右へ誘っていく動きがあるようです。このように画家は、見る人の視線の誘導を考えて画面を構成し、描くものなのです。

さて、この絵（省略）は、英国の絵本作家ジャン・オームラッドの『月あかり』（Moonlight）注⁶という作品の、連続する2見開きページです。

この作品の特徴は文字を一つも使わず、絵のみで展開している点であり、しかも絵の表現に様々な工夫がされている点です。つまり、この絵本は、絵で語っている作品、絵のみで展開している視覚絵本なのです。

日本の絵巻が右から左に展開するのに対して、欧米の絵本は文字の流れに準じて、左から右に展開するのがふつうです。この見開きページ(省略)では、1は枠なし、2では絵が枠に入り、3では枠があって、しかも画面が2分割され、4では3分割されてと、1枚の絵の大きさが徐々に小さくなっていく手法が用いられています。それぞれの絵の大きさを変えていくことによって、読者の見る速度が速まっていくのです。ゆっくり始まった物語が、自然に無理なく速度を増していきます。

また、絵巻の鑑賞は右から左に進んでいきますが、絵本は通常、右から左にページをめくり、物語は左から右へと進行します。図-2の1(省略)で娘は左を向っていますが、図-2の2(省略)では正面を向き、図-3(省略)では少しずつ頭を右へ回転させて、読者の目を左から右へと導いています。

また、各ページに描いてある赤いナプキンが目立つ色ですが、この小道具も、大切な役割を果たしています。もちろん、赤色はアクセントとして読者の目を強く引きつけるのですが、このナプキンは娘の食べたグレープフルーツと共に帆掛け船に変化します。ここには本筋(幼い子どものいる家庭の、夜の決まりきった出来事の経緯)とは別のサイドストーリー(別の話の流れ)が示されており、絵だけで展開する物語が単調にならないように小道具を補っているのです。しかも、赤いナプキンが図-3の3(省略)で枠と枠の間に置かれ、この境の位置に目につく事物を置くことで、自然に目が枠を越境していくのです、その手法は図-3の4(省略)でも同様に用いられています。しかもこのページでは楊子立てが右に倒れることによって、目を自然に左から右へ移動させます。巧い動かし方です。

このように絵巻では見る者の目を右から左へと動かし、右から左に開ける。一方、いわゆる西洋式の絵本では、読者の視線を左から右に動かして

いくのです。以上で絵本の視線の動かし方についての説明を終わります。

デヴィッド・ウィーズナーの場合

前置きが長くなってしまいましたが、それでは、本日のテーマである、アメリカの絵本作家たちの作品についてお話をさせていただきます。最初は、デヴィッド・ウィーズナー 注⁷です。ご覧の絵は、彼の代表作、『かようびのよる』(Tuesday) 注⁸の表紙です。この絵本はファンタジーしかけの絵本で、文字をほとんど使用していない絵本として知られています。



『かようびのよる』

デヴィッド・ウィーズナー作・絵 徳間書店, 2000

この絵は最初の扉の絵(省略)です。ご覧のように、カエルが宙に浮いて飛んでいくのですが、この場合は、横のコマで変化が起きています。時間と空間の移動が、3つのコマで表現されているのです。「横コマを用いた、時空間の変化」です。

次の絵(省略)は、前の絵をめくった後に出てくる絵ですが、今度は縦割りのコマ絵です。ここでは、上から下に向かって時間が経過しています。絵は、カメラでとらえたように、だんだんズームアップしています。色彩を見ると、空の色の変化でも、時間の経過がわかります。「縦コマを用いた、時空間の変化」です。

次の絵(省略)でも、おかしなことが起こっていますが、カエルたちの空間遊泳が始まっていることを示しています。「横コマ、縦コマの合成による見開き」で展開しています。

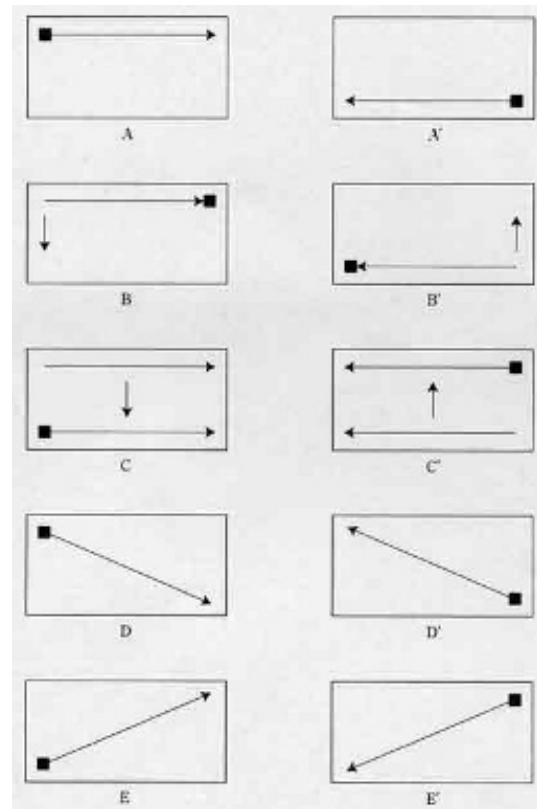
次の絵（省略）では、全体を見せる背景の空と、その中に3つのコマ絵を用いて、カエルが空を飛ぶ様子が、実に巧みに描いてあります。コマ（枠）を用いて変化を出し、全体象を背景に、コマ内で前方下部、後方上部から見せる背景と細部を合成し、揺さぶりをかけ、次ページに送るというように、「コマ合成による表現」をしています。

この絵（省略）は、いよいよ物語の終焉を迎える場面です。やはりコマを3つ使い、カエルが飛ぶ力を失ってきて、やがて着陸し、池に戻るまでの様子が、同様にコマ、あるいは枠といった方がふさわしいかもしれませんが、その枠が効果的に使用されているのです（コマ〔枠〕を用いて、経過を示す手法）。コマ内で着地（着水）させ、背景の全体画面で移動させ、次ページに送って、終わらせているのです。やはり、「コマ合成による表現」をしています。

以上、述べましたように、ウィーズナーの典型的な手法はコマや枠を用いて、見る人の視線を動かしていく方法です。絵巻では紙面内に枠がありませんが、ウィーズナーは紙面内に、さらに別の時空間を作り出してしまうという点が面白いと思います。

絵本の進行方向

ここで、他の作家の絵本の動きを知るために、先に、絵本の進行方向について考えてみましょう。次の図（図-1）は、絵本の紙面の中での、事物の進行方向を示したものです。絵本では、ページをめくると、絵が文章とともに読者（の目）を導いていきます。その流れは、横書きの文字の流れが基本になっています。つまり、左から右へ、上から下へという流れです。そして、その流れは統合すると、左上から右下へという方向性をもっています。ただし、絵の動きについて論じる際、注意しておくべきことは、動きのポイントは一つの絵の位置そのもので見るのではなく、複数の絵と絵の位置関係から考察するということです。ここでは絵の動きは複数の絵が関係して産み出すものと考えています。ですから、絵と絵が関連し合っ読者の視線をどう動かすかという点で見に行くことにします。絵本の絵の動きは、図のように5



（図-1）

つ（A～E）を基本と考えます。そして、その逆の流れも5つ（A'～E'）と分類しておきます。

このような基本の流れ（A、B、C、D、E）は私たちの生活と密接に関係しています。なぜなら、生活の中の多くの文字が横書きになっているからです。人は幼いときから、このような文字の流れを追ひ（読み）、すなわち、このような方向性に導かれて情報（記号）を読んで暮らしているのです。ですから、私たちが絵本を読む際も、意識してもしなくても、左から右へ、上から下へ、左上から右下へ目が動いていることが多いのです。

登場者の向きと動きの基本は次ページの（図-2）のように考えることができます。基本パターン（順）は左→右で、その逆は左←右です。同じく、上→下が順の動きで、下→上は逆の動きです。このように左部分は順の動き、右部分は逆の動きです。そして、順の方向の動きの時は、物語でも正常、安全、安心な状態で、逆の方向の動きの時は、異常、危険、不安などを表わす状態と考えます。それぞれをプラスコード、マイナスコードと呼んでいます。以上のことを具体的にデイビッド・

スモール注⁹の絵本を用いて例示します。

絵本の進行方向	
基本(順)	基本(逆)
左 → 右	左 ← 右
上 → 下	上 ← 下
左上→右下	左上←右下
左下→右上	左下←右上
正常	異常
安全	危険
安心	不安
プラスコード	マイナスコード

(図-2)

デイビッド・スモールの場合

ここでは「絵本の語法」として、左開き絵本の進行方向と絵本の中の事物の位置関係、視線の動きなどについてお話しします。ご覧の絵(省略)は彼の作品『ハッカバック一家の物語』(The Huckabuck Family, 邦訳なし)注¹⁰の表紙です。

ご覧のように、トウモロコシ畑を背景に、両親が正面を見て立っており、娘はこれから出かけるというポーズで、横向きです。タイトルはトウモロコシの形に埋め込まれています。

次の〈見返し〉、〈タイトルページ(扉)〉、〈扉裏ページ〉、〈1-2ページ〉は基本(順)で、左→右、上→下ですから、特に心配なこともない順調な滑り出しといえます(以降、絵は省略)。

ところが、〈3-4ページ〉と〈5-6ページ〉をご覧ください。〈3-4ページ〉は左下→右上を見上げるポーズですから基本(順・プラス)ですが、〈5-6ページ〉は左上←右下を見上げるポーズですから(逆・マイナスです)。実は〈5-6ページ〉は、農家であるハッカバックさんの一家で困ったことが起こる場面なのです。一家はトウモロコシを作って生活しているのですが、ある年、トウモロコシが獲れ過ぎて困ってしまうのです。ご覧のとおり、収穫した作物を置く場所もないほど、あふれています。

続いて〈7-8ページ〉、〈23-24ページ〉を見比べてください。この〈7-8ページ〉の場面は、一家に不吉なことが起こる前の場面です。ですか

ら娘は左向き、(マイナス)で描いてあり、〈23-24ページ〉の場面は、一家に幸運なことが起こる前の場面です。ですから娘は右向き、(プラス)で描いてあります。

次の〈9-10ページ〉、〈11-12ページ〉、〈13-14ページ〉をご覧ください。〈9-10ページ〉は、娘が不幸の前触れを知り、娘は納屋で仕事をしてきた両親のもとに走って行って、バックル[不幸を暗示する品物]を見せる場面です。この後に一家は火事に遭ってしまうのでした。

この場面では、先に父親に見せ、次いで移動して同じせりふをいって、母親に見せます。ですから話の順番からいうと、父親のところから母親のところへ移動します。すなわち、左ページの下部にいる父親に見せ、それから娘は納屋の上に乗って来て、母親に見せるのです。娘は左下から右上に移動するのですから、左下→右上(パターンE)です。しかし実際には、このページを開けたとたん目に飛び込んでくるのは、娘の手の部分、左手に輝く銀のバックルでしょう。そして、読者はそれを見ている娘とそれを見る母親に目が移り、それから読者の視線は左下の父さんや納屋の入り口(外が明るく描いてあります)へ動きます。ですから、読者の目は右上から左下へ動くといってよいと思います(パターンE')この視線の流れは特殊です。そして、やはりマイナスな状況を描いているといえます。今後、困った状況が起こるかもしれないとほのめかしているのです。そして、ページをめくると火事が起こった場面です。実に上手な視線の動かし方をした表現です。

さらに〈13-14ページ〉を見てみましょう。この場面には、「朝、母屋と納屋のあたりの大地は、どこもかしこも、はじけた白いポップコーンで埋め尽くされ、まるで雪が深く積もったようでした。次の日も、火は燃え続け、とうもろこしは、ポニー・ポニーの肩の高さまで積もりました。ポニー・ポニーは家から納屋まで、ポップコーンを押し分けて進まねばなりませんでした。」というテキストが添えられています。物語では、獲れ過ぎたポップコーンが納屋や家じゅうにあるのですが、不幸なことに、この農家で夜中に火事が発生し、ポッ

ブコーンが次から次に弾けていくのです。そして、どうしようもなくなったポップコーンがあふれてしまいます。その場面なのですが、次の朝、ヨナナス・ヨナナス・ハッカバック父さんが二階の窓から見下ろすと、はじけたポップコーンが、まだまだどんどん高く積もっていきます。ポップコーンは、まもなく、窓に届きそうでした。

父さんは右上から左下にいる娘の方を見えています。この構図も明らかに、困った状況表現しているのです。左向きはマイナスコードですが、さらに左下に視線を向けることで、困った状況をもっと強調しているのです。このように、右下から左上へ(パターンD')、また右上から左下へ(パターンE')の構図は、絵本では通常ならざることを示す構図として用いています。

前後しますが、前の〈11-12ページ〉をご覧ください。この場面は、一番困ったことが起こった場面です。それは、もちろん、火事が起こった場面です。この絵の焦点は、出火したランプです。テキストは以下のように語っています。「その晩、納屋で火事が起きました。火は、とうもろこしがしまっていた家畜小屋、道具置き場、車庫、農場のすみからすみまで燃え広がりました。一晩中、とうもろこしがはじけました」テキストの通り、弾けたポップコーンは四方八方に飛び散っています。そして、面白いことには、納屋中に家畜がいて、左ページ上のオンドリ、その横、ちょうどページの中央に白猫と黒猫、そして右ページの上部には鳩のつがい、右ページの下部には2匹の豚、2羽のあひる、ドアの入り口には牛がいて、これらの動物がランプを不安そうに見つめているのです。ランプの火にはじまった視線は、家畜を時計回りにぐるりと回って、元の火に円弧を描いてもどるのです。しかもどの視線もランプに収斂されます。まことに面白い構図といえます。もちろん、これは困った状況の、もっとも困った場面です。そして、パターンのどの型にも当てはまらない、きわめて複雑な構図といえましょう。

これらの絵は、困った一家が農場を捨てて、出ていく場面、〈出発〉(右向き)と、何年か後に帰って来る場面、〈帰還〉(左向き)です。どちらも車は右ページに配置してあります。〈出発〉〈15-16

ページ〉は(右向き)に出て行き、〈帰還〉〈25-26ページ〉は(左向き)に帰ってきます。わかりやすい配置・向きです。

この場面も複雑な配置をしています。これは、家を出た一家が、農業をやめて、違う土地で暮らしている場面です。ここで、「娘と母さんは、父さんが、ゴム長ぐつをはき、みぞに入って、シャベルで、みぞから黄色い粘土や黒い土を掘りかえし、肩の上まで高く、高く放りあげるのを見ました」と、語っています。前のページからページをめくると、父さんの姿が大きく描いてありますし、色合いも濃い色で描いてあるので、どうしても父さんが先に目に入ってきます。しかし、テキストは、右上の娘の視線で描いています。ですから、読者の視線も、テキストを読むと、右上の娘と母さんに動きます。そして、もう一度父さんにもどるでしょう。つまり、左下から右上、右上から左下と行ったり来たりするのではないのでしょうか。これも複雑な配置の仕方です。そして、この場面は本来、田舎でお百姓をしたい一家が、別の土地で仕方なく生きのびていく場面ですから、決して前向きの順風満帆の場面ではありません。このような特殊で複雑な構図(基本(順)→(逆)、つまり左下→右上、そして左下←右上(弱マイナス)は、この場面にあふさわしいと思われま

最後は、物語の終結(幸せな結末)を表わす場面ですが、一家は家に戻り、すべては解決し、安定した構図(三角構図・下部に配置)で描いてあります。

以上、デイビッド・スモールの『ハッカバック一家の物語』の数場面を紹介し、絵本の進行方向には基本(順)と(逆)があること、また、事物の位置関係(配置)には、プラスとマイナスのコードがあり、たとえば、正常、安全、安心、逆に、異常、危険、不安などを表わすことができることを紹介しました。

キャプション絵本(文字なし?絵本)

次に紹介するのは、同じく、デイビッド・スモールの文字なし?絵本です。文字なしといっても、少し文字〔文章〕があります。そして、大変特殊な展開をする絵本ですので、仮にここでは「キャ

プシオン絵本」と呼んでおきます。

タイトルは*Once upon a banana*、「ある日バナナが…」注¹¹という絵本です。読者対象はReading level: Baby-Preschool と書いてありますので、赤ちゃんから就学以前くらいの幼児向けです。物語の内容は、ある日ある時、ある大道芸人のサルが逃げ出し、バナナを盗って逃走し、大騒動が起こります。逃げる者、追う者の様子をユーモアたっぷりに描いています。また、起こっている事柄は深刻ですが、その深刻さはなく、面白く見ることができる絵本です。

表紙です。ここに、主人公の大道芸人とそのサルが描いてあります。タイトルは看板の中に書いてあります。一方、裏表紙には、看板を掛ける作業をしている作業員の様子が描いてあります。この看板という道具が、後で説明しますが、この絵本の重要な表示道具になっています。

見返し(1)です。この絵本は、ほとんど文字のない絵本で、しかけは、絵と、警告文や注意文によって、読者の視線を導いていくという、めずらしい手法で描かれています。その警告文や注意文の流れに沿って、読者は出来事を追い、楽しむようになっているのです。ここで、サルが逃げ出します。

見返し(2)です。サルが左から右に向かって逃げ、大道芸人が、そのサルを追いかけます。

タイトルページです。ここで、サルが露天商からバナナに飛びつきます。店主がそれを睨んでいます。

扉(タイトルページ)の裏です。サルはバナナを一本失敬し、さらに逃げます。店主が怒っています。

さて、次の見開きページ、ここからこの絵本の面白い展開が始まるのです。ここが、いわゆる、本文の始まりといえると思いますが、初めて短い文章があらわれます。もう一度いいますと、この絵本は、ほとんど文字のない絵本で、しかけは、絵と、警告文や注意文によって、読者の視線を導いていくという、めずらしい手法で描かれています。その警告文や注意文の流れに沿って、読者は出来事を追い、楽しむようになっているのです。

この場面では、PLEASE PUT LITTER IN ITS

PLACEという表示文が見えます。通常、絵や写真には、説明の文章をつけたり、内部に書いてあったりする場合がありますが、いわゆるキャプションという説明文です。この紙面の場合、(掲示ゴミはゴミ箱へ)、そして、PLACEの最後のACEと、次の見開きページのキャプション、NO PARKING IN THIS SPACEのSPACEのACE(交通標識 ここでは駐車禁止)がそれぞれ脚韻を踏んでいるのです。ですから、ネイティブの子どもは、きっとページをめくって新しいことばが出てくると、読んでもらう場合は、耳でその類似した音を楽しみ、見る場合も、目でその単語の同じつづりの形の面白さを味わうことができるのです。これは一種の交通標識でしょう。絵は、前のページでサルがバナナを食べて、その皮を投げ捨てています。次のページには、サルは車を超えて、さらに逃げていきます。中年のオートバイのライダーが二人乗りで停車しています。

次のページをめくると、文章はCAUTION! WET PAINT(注意書 ペンキ塗り立て)とあり、前のページにいた中年のオートバイのライダーの一人が、その皮を踏んで転んでしまいます。

その次のページには、事務所の看板でしょうか。OFFICE of COMPLAINT(看板 苦情受付所)と表記してあります。前のページのPAINTと、このページのCOMPLAINTが、それぞれ脚韻を踏んでいます。絵は梯子の上でペンキを塗っていた職人さんが足を踏み外して落ちるところが描いてあります。

次のページでは、4-WAY STOP(交通標識 止まれ、一時停止)の交通標識ですね。

そして、次のページではBARBER SHOP(看板 理髪店)の看板が出ています。絵は、前のページでは、梯子から落ちた人が、通行人の手押し車に落ち込んでしまい、次のページでは、交差点の大混雑が描いてあります。

次のページではONE-WAY STREET(交通標識 一方通行)、次のページでは、NO BARE FEET(表示板 素足の方、お断り)と書いてあります。絵は、前のページでは、一方通行を反対方向に走りこんで行く犬たち、次のページでは、そのため、衝突した勢いで、裸足の自転車ライダー

が市役所の中へすっとなでいく様子が描いてあります。また、市のお偉いさんらしき人が少年のスケートボードに足を乗せてしまおうとしています。次のページでは、CITY HALL (看板 市役所)、次のページでは、Shopping Mall (表示板 ショッピングモール)と書いてあります。絵は、前のページでは市のお偉いさんがスケートボードに足を乗せてしまい、次のページでは、そのまま走り出してしまう様子が描いてあります。

次のページでは、UNDER PASS (表示板 ぐり抜け道路)、次のページでは、KEEP OFF the GRASS! (警告看板 芝生に入るべからず)と書いてあります。絵は、前のページでは高架線の下をスケートボードで駆け抜け、次のページでは、お偉いさんが滑りこけ、乳母車のみが芝生の方に走り去っていきます。

次のページでは、SPEED BUMP (表示板 スピード防止帯)、次のページでは、TO THE DUMP (表示板 ゴミ捨て場)と書いてあります。絵は、前のページでは乳母車が芝生を駆け抜け、道路に飛び出します。次のページでは、乳母車が防止帯に衝突し、乳母車も乗っていた赤ちゃんも吹っ飛んでしまいます。

次のページでは、PUBLIC PHONE (表示板 公衆電話)、次のページでは、LOADING ZONE (表示板 タクシー乗り場あるいは荷物積み降ろし場)と書いてあります。絵は、前のページでは、公衆電話のところにいた大道芸人が飛んで来る赤ちゃんを待ち受け、次のページでは、その赤ちゃんを無事、受け取る様子が描いてあります。

次のページでは、LOOK BOTH WAYS (交通標識 注意 双方向通行)、次のページでは、HAVE A NICE DAY! (ごきげんよう。良い1日でありますように!)と書いてあります。絵は、前のページでは、バナナを降ろしていた作業場に突っ込み、バナナが飛散するところが、次のページでは、散らかったバナナはごみ収集車に片付けられ、大道芸人がバナナを使って曲芸をしています。車に書かれた挨拶文 (HAVE A NICE DAY!)「ごきげんよう」という文章が効いています。

そして、最後に、後ろの見開きページに、この街、通りの全体図が表示してあり、読者は、ここ

でこんなことが起こったんだな、ここでは、ああ、そうそう、なるほど、と確認して楽しむことができます。

以上、デイビッド・スモールのキャプション絵本*Once upon a banana* (「ある日バナナが…」)を使い、絵本でキャプションと絵だけで展開する珍しい作品を紹介しました。このように、絵本は文字と絵で物語を展開していくものなのです。デイビッド・スモールは、このような新しい試みを次から次に行っている面白い作家です。ちなみに、彼の奥さんはサラ・スチュワート (Sarah Stewart) という絵本作家です。この人も野心的な興味深い物語をたくさん書いています。

エド・ヤングの場合

次に紹介するのは、エド・ヤング (Ed Young) 注¹²の作品です。エド・ヤングは中国生まれ育ち、現在はアメリカで活躍している画家ですが、彼は伝承文学 (たとえば、昔話など) の絵本化 (視覚化)、またしかけ絵本 (たとえば、コラージュ絵本、紙細工絵本) などを制作するなど、テーマは豊か、手法は多彩、様々な才能をもつ作家 (画家) ですが、本日は彼の〈隠し絵〉絵本の世界を紹介します。その表現は迫力のあるものですが、その迫力を生み出す手法は非常に興味深いものです。

さて、この表紙絵には、Yeh-Shen 注¹³と書いてあります。中国語で「葉限」と表記するようですが、この物語は西洋の「シンデレラ」物語の中国版です。みなさんは、すでにもうご存じだと思いますが、これが世界最古の「シンデレラ」で、「シンデレラ」の元話といわれています。この物語こそ、9世紀にさかのぼるシンデレラのルーツなのです。本日はその話はしませんが、彼がこの絵本で、どのように〈隠し絵〉を用いているかを紹介します。たとえば、この表紙には美しい女性 (葉限) が描かれていますが、彼女の頭部に魚が重なるように描いてあります。彼女の両肩のあたりから、ちょうどショールが風にたなびいているように描いてありますが、ここにも魚の胴体が描いてあるのがおわかりになりますか。よく見ると、彼女の両側にヒレが描いてあります。グリム版では確か援助するのは白い鳥です。ペロー版では代母

(魔法を使う女性)ですが、実は、中国のシンデレラで主人公を援助するのは魚なのです。ですから、この絵本では随所に魚が描いてあるのです。

次の絵でも、人物の背後や脇に魚がさりげなくデザインされています。このようにして、ヤングは物語に隠し絵を潜ませるのです。

さて、ヤングの隠し絵を効果的に演出しているのは、彼の色の用い方なのです。美術の時間に、みなさんは色について学習されたことがおありだと思います。色には3種類の概念があります。いわゆる、色の性質を示す3属性です。「色相」、赤や青や黄などの色味を表わすもの、「明度」、色の明るさの度合を示すもの、そして、「彩度」、色の鮮やかさの度合を示すものです。この図をご覧になると明瞭ですが、明度と彩度は、たとえば、縦横に並べて配置すると、複雑に微妙にその効果を出すことができることが分かります。

この絵本は彼のコールデコット受賞作『ロンポポ：オオカミと三にんのむすめ』注¹⁴の表紙とその中の一場面です。この絵は出版社がサイト上に出しているものですが、◀ Click というところをクリックしていきますと、この絵本の全紙面を見ることができます。この絵は扉絵です。「ロンポポ」の「ロン」はオオカミを表わし、「ポポ」は「おばあさん」を表わすことばです。この物語ではオオカミがおばあさんに化けて、留守番をしている子どもたちのところへやって来るのですが、ご覧のように背の曲がったおばあさんとオオカミが重ねて描いてあります。この物語は、グリム童話の「おおかみと七匹の子山羊」と「あかずきん」を混ぜ合わせたような物語です。おかあさんがおばあさんをお見舞いに行っている隙に、オオカミがおばあさんに化けて、子どもたちを食べにやってくるのですが、三人の姉妹は知恵を用いて、おおかみをだまして逆に殺害してしまいます。

さて、子どもたちはオオカミをだまして逃走し、銀杏の木の上に一時的に退避し、続いてオオカミを持ち上げて、それから落してやっつけるのですが、この場面では木の部分にオオカミの鼻筋、枝の部分に両目が潜ませてあります。この場面では、吊るしてある籠にオオカミが乗っていますが、よくみると、木の部分と籠の下部を見ていると、オ

オカミの顔が浮かび上がってくるのがおわかりですか。他にもたくさんの隠し絵などが潜ませてあるのですが、最後の場面では、オオカミは死んだはずなのに、よく見ると、大地のところにオオカミの大きな顔が横たわっていて、不気味です。このようにして、エド・ヤングは隠し絵を用いて、彼の絵本に不思議な迫力を醸し出しているのです。

色彩配合・コラージュ

続いて、ヤングの別の作品、これはコールデコット・オーナー賞(次点)を受賞した作品『七ひきのねずみ』注¹⁵です。同じように絵本表現の面白さを、表現技法の面から紹介します。ここではこの作品そのものの面白さとコラージュという表現技法について説明します。

この絵本の物語は中国に古くから伝わる故事に基づいて作られています。その故事とは、「群盲象を撫ず(群盲撫象)」というものです。一あるところに、三人の目の不自由な人がいて、それぞれの人が象の身体の一部をさわってみます。そして一人は象の耳に触れ、「象は大きな団扇のようなものだ」といい、一人は象の足を触り、「象は太丸太のようなものだ」といい、別の一人は象の尻尾をつかんで、「象はひものように細くて長いものだ」と評したというのです。いずれの人のことばも事実の一部ではありますが、全体像を正確に把握しておらず、大きな間違いをしてしまう危険性があるということを戒めたたとえ話です。なかなかうまいたとえで、この故事はいろんな場面で重宝に使われています。

この絵本で、エド・ヤングは元の話をつくらませています。登場者はねずみで、その数も7匹になり、ユーモアたっぷりに語っています。文章だけを読んでも、とても愉快な話であることがわかりますが、これにどんなイラストレーションをつけて、ヤングは描いたのでしょうか。すぐに、絵を見たいところですが、絵を見る前にもう少し文章についての工夫を説明します。

さて、この文章を読んでいくと、様々な工夫がしてあることがわかります。まず7匹と1週間が重ね合わせてあり、幼い子どもに1から7という

数字とその数え方がわかるようになっていきます。また曜日も同様で、月曜日から日曜日まで、何度も読んでもらううちに、耳から自然と曜日を覚えるように配慮してあります。

さらに色の出てくる順番を見ていくと、赤ではじまり、緑、黄、紫、オレンジ、青、そして最後に白が出てきます。そして、出てくる色の隣り合わせの色は、赤と緑、黄と紫、オレンジと青とこれら3組が補色関係であることがわかります。きちんと計画して順々に色を提示しているのです。なぜ補色同士を続けて出したのかは、ほんとうのところ、ヤング本人に聞いてみないとわからないのですが、ともかく補色で出されると自然に美しい関係が感じ取れるようになっていきます。また補色を並べると、とても目立つ配色になります。

補色といえば、「残像」ということがよく話題にされます。残像ということばをご存じだと思います。何かをじっと見ていて、ふと目を別のところへそらすと、先に見ていた形態や（別の）色がまだ網膜に残っているような感覚です。たとえば、赤色の形のものをじっと見つめていて、それから白い壁面などに目を移すと、緑色をした同じ形のものが目に浮かんでくる現象です。色彩学の専門家によると、残像は常に補色になるのだそうです。とすれば、ヤングが赤色の次に緑色を、黄色の次に紫色を、オレンジ色の次に青色を置いている意味が、わかる気がします。図（口絵参照）はそれぞれ色環と明度と彩度の組み合わせの感じを表わしたものです。

もう少し、色のことをいいますと、最後に出てくる色は白です。この絵本は背景が黒一色に塗り込んである、絵本ではめずらしい配色です。見てすぐわかるように、黒地に白色は色彩の組み合わせの中でも目立つ配色の一つです。以上のように見てみますと、出てくる色の順番がよく考えてあるのがわかります。ヤングはきっとこれらの順番を絵描きとしての感性から決めたのでしょうか、この順番は理にかなっているといえます。ヤングは彩度もよく考えて着色していることがわかります。注¹⁶

続いて、絵本のイラストレーションを見ていきましょう。見返し部分の素材は紙か革のようです

が、ぞうの地肌を感じさせるような模様です。そして2ページ後の見開きのタイトル（題字）ページの前に、もう1枚黒いページがあります。ここに赤色の尻尾が1本、下部の中央から元気よく伸びています。赤色は最初に探索に出かけるねずみの色です。

タイトルページには、題字と作者名（翻訳者名）、出版社名が書いてあります。見開きページの下の部分に、7本の尻尾が上向きに伸びています。この色の並びは、左から順に青、赤、白、オレンジ、紫、黄、緑です。ページをめくると、この色が反対の順番で、緑、黄、紫、オレンジ、白、赤、青と並んでいます。ヤングはこのように色の配合に配慮しています。

次のページには、「げつようび 一ばんめ あかねずみが しらべに いきました」と書いてあり、赤ねずみは大きなぞうの前足の爪のところにいます。赤ねずみは「ふしぎなもの」の正体を調べているのですが、他の6匹のねずみは肩車するように、重なり合っています。上から緑、黄、紫、オレンジ、青、白となっています。この順番は、調べに行く順番なのです。彼らは赤ねずみが調べに行くのを心配し、また興味深げに見ているのです。

ページをめくると、調べに行った赤ねずみが帰ってきて、他のねずみに報告しています。このときには、他のねずみも同じ地面に立っています。赤ねずみに近いところから、緑、黄、紫、オレンジ、青、白となっています。赤ねずみは「It's a pillar,」「あれは がっしりはしらだよ」と報告しますが、「No one believed him.」「でも ほかの ねずみは しんじてくれません。」そこで、次に緑ねずみが飛び出していきます。すると、他のねずみは、最初と同じように、重なり合って、上から黄、紫、オレンジ、青、白、赤となっています。調べに行ってきたねずみは、一番下に入ります。この並びの順番は、最後まで、ずっと統一されていて、きちんと順番通りに並んでいます。

さて、3番目の黄色ねずみが帰ってきて報告する場面です。このとき、赤と緑ねずみは、他の4匹と、離れて立っています。赤ねずみと緑ねずみは、すでに見てきていますので、違う意見をもつ

ています。これら2匹だけは、グループを別にして、調べてきたもの同士の意見を述べ合っているわけです。

次の絵は、6番目の青ねずみが帰ってきて報告する場面ですが、このときは、まだ調べに行っていない、白ねずみだけが聞いていて、他の5匹はそれぞれ向き合って意見を述べ合っています。

次のページで、とうとう言い合いが始まります。「でもほかのねずみはさんせいしません。ねずみたちのいいあいがはじまりました。」「がっしりはしら!」「くねくねへび!」「とがったやり!」「おおきないわ!」「ひらひらせんす!」「ふさふさのなわ!」

この場面では、補色同士のものが、青とオレンジ、紫と黄、緑と赤と一応ペアになっていますが、青とオレンジ、紫と黄は反目し合って、互いに背を向けています。しかし尻尾は図のように絡み合って描いてあり、リズム感のある模様になっています。そして、「とうとうにちようび七ばんめにしろねずみがたしかめにいきました。」「しろねずみはふしぎなものにちかづくところからかけあがりてっぺんをこえあつちにかけおりてはしからはしまでかけまわりました。」そして、正体をつかみます。

次の絵で、彼らは自分が調べに行った場所（自分の意見の根拠になる、自分がこだわった部分）に行き、再度、自分が見たものが何だったか、確認しています。次の絵を見ると、7ひきはぞうの額の部分に並んでいます。ここでも、きちんと上から赤、緑→白と順番に並んでいます。

最後に表紙と裏表紙を見開いて見てみましょう。おそらくこの部分は裏表紙が先の場面で、ここで白ねずみが、「あれはぞうというどうぶつなんだよ。」と教えているところだと思われます。そして、そのことを聞いた6匹が、「ほんとか?」「ほんとに?」と確かめにすっ飛んで行くところでしょう。以上、エド・ヤングの絵の構成を簡単に説明しました。

さて次に、ヤングの用いた絵本表現法について短くふれておきます。ヤングは表現方法の多彩な画家ですが、この絵本では、コラージュという手法を用いています。コラージュとは、貼りつける

手法ですが、絵本では、多くの画家がこの手法を用いています。たとえば、レオ・レオニ (Leo Lionni) の『ひとあし ひとあし』注¹⁷やエリック・カール (Eric Carle) の『はらぺこあおむし』注¹⁸などが、作品に、様々なコラージュを用いています。

もう一度、先ほどの場面を見てみましょう。ここでは黒い台紙の上に、革か木材のパイプ板を薄くスライスしたような材質紙を用いて、ぞうの足を表現しています。そしてその上にさらに薄い紙を貼りつけているようです。全体的に、ぞうの肌はこの手法を用いています。

この絵はへびを表現していますが、ここでは緋(かすり)模様のような布か紙を用いて、その材質布(紙)をへびの形にかたどって、黒い台紙の上に貼りつけています。

このようにして、ヤングは、この絵本で、ものの質感まで感じられるように仕上げているのです。コラージュの利点は、手で触れるように、その肌触りのすべすべした感じ、ざらざらした感じ、さらには温感、冷感などまで感じさせる点です。

もう一つ、この絵本のすぐれた点は、背景に黒が用いられていることです。黒の背景に白抜きで文字という組み合わせは、この絵本の伝えようとしているメッセージ(内容)を効果的に伝達しているのです。この色の配合とヤングのメッセージとの間には深い関係がありそうです。

「群盲象を撫ず」という故事は、「見えないこと」が「見えること」より劣っていると理解されがちで、少々、差別的な響きがあります。しかし、にもかかわらず、この故事は、現代でも実に多くの場面で用いられています。この故事はいったい何を伝えようとしているのでしょうか。

この故事の表す大切なメッセージを理解するために、この絵本の最後に、ヤングの記した「ねずみのおしえ:(The Mouse Moral:)」について考えてみましょう。原文は以下の文章です。

Knowing in part may make a fine tale, but wisdom comes from seeing the whole.

(部分を知ること、結構な話を作ることができる。しかし全体を知る(見る)ことから知恵

は生じる。)

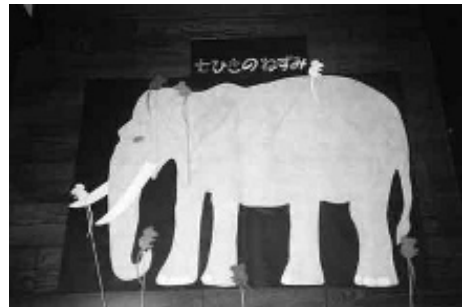
この教えは、「見えないこと」を劣ったものといっているのではないようです。この物語を表面的に見ると、最初の6匹はそれぞれ部分しか見なかったのが、全体像を把握できなかったわけですが、ヤングは、最初の6匹のねずみたちの、不十分な見方を愚かな見方であったと語っているのでしょうか？私たちは生きていくうちに、様々な考えや行動を通して、またときには失敗を通して、経験に経験を重ね、少しずつ人生の真実を知ようになります。人は人生の場面場面で、いつも正しい判断をするとは限らず、むしろ反対に、間違っただ判断をしてしまうこともたびたびあります。ところが、間違っただ判断をして間違っただキイを押してしまうことは必ずしも悪いわけではなく、その間違いを通して、私たちは少しずつ真実に近づいていくのです。失敗をくり返しながら、私たちに正しいことが少しずつ見えてくるのです。そう考えれば、ここに出てくるねずみたちは、まったく間違っただというのではなく、それぞれがぞうという動物の一部を見出しているのです。そして互いに違う意見を持ち寄りながら、意見をかわし、衝突をしながらも少しずつ正しい認識に近づいているのです。

間違っただことは全てがマイナスではなく、そのマイナスを通して、少しずつ正しい認識に近づいていくようになるのです。別の言い方をすれば、様々な意見、見方が統合されて、ほんとうの実体が把握されるのです。ヤングがこの絵本で伝えたかったことは、きっと「人は失敗を重ねながら真理に到達できる」ということではないでしょうか。そのように解釈して、私は先の原文を、「すこしみて わかっただつもりは まちがいのもと すみから すみまで ぜんぶ みて ほんとうのことが わかるのです」という訳にしました。

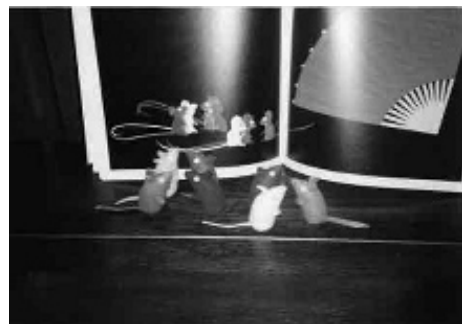
一冊の絵本は様々な楽しみ方をされますが、たとえば、幼稚園などで、名作『おおきなかぶ』注¹⁹を読んでもらっただ後、子どもたちがおおきなかぶを実際につ作って、みんなで引っ張って楽しく遊んだりします。また『三びきのやぎのがらがらどん』注²⁰を読んでもらっただ後に、子どもたちは

3匹のやぎ役、トロール役になって、橋を渡る遊びをしたりします。

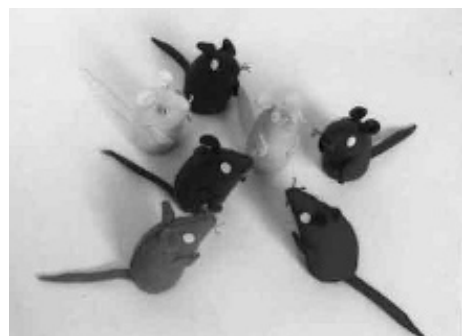
『七ひきのねずみ』も絵本から発展して、面白い遊び方をされています。たとえば、絵本を大きく拡大して大勢の前で読んだり、ペープサートにして、絵本の物語にそって、ねずみの目の高さになって、ぞうを部分的に体験する遊びがなされたりしています。次の写真は我が家で作っただ拡大しただぞう（写真-1）です。



(写真-1)



(写真-2)



(写真-3)

また、全国の図書館など、あちこちで、ねずみの切り抜きとぞうの型紙片をつ作って壁に貼って『七ひきのねずみ』遊びをしたり、7匹のねずみ

人形を作って楽しんだりしている方もいます。写真は私の家で作った7匹のねずみ人形(写真-2)と、この絵本のファンの方からいただいた7匹のねずみ人形です(写真-3)。1冊の絵本が、このように、いろんな場所で、様々な遊びに発展していることは、面白い興味深いことですので、参考のために紹介いたしました。

『七ひきのねずみ』についての情報はネット上で、古今社ホームページ 注²¹を参照してください。

クリス・ヴァン・オールズバーグの場合

続いて紹介するのは、クリス・ヴァン・オールズバーグ(Chris Van Allsburg)の作品です。オールズバーグはアメリカ、ミシガン州グランドラピッズ市生まれの画家で、本職は彫刻家ですが、現在もアメリカで活躍している画家 注²²です。

さて、彼の絵本は不思議な世界を描いています。本日は彼の〈騙し絵〉の世界を、その手法から解説してみたいと思います。「騙し」ということばは響きの悪い表現ですが、もともとは「トロンプールイユ」というフランス語から来た語と思われる。その意味は、「実物そっくりに描き、目の前に実在するかのような錯覚を与える絵画」のことです。たとえば、現代アメリカのスーパー・リアリズムといわれる作品などに見られる手法です。ここでは、その意味を少し違う意味で使っていますが、「騙し」とは人を計略にかけること、工夫し、策略をめぐらして、人を欺くことです。

彼の手法は、まさに見る人を騙してしまい、様々な感覚を与えることによって楽しませる絵本です。

まず、次の図柄(省略)を見てください。ここに描かれている図柄は何を表わしていると思いますか。灰色の部分だけを見ていると、何が描いてあるのか、わかりません。そこで、灰色の部分と青い地の部分を反転してみてください。何か見えてきましたか。青色の背景の中に英語の単語「LIFE」(生命)と書いてあるのです。見方を変えると見えてくるのです。ここには、そのようなトリックがしかけてあります。

次の絵も有名な絵ですが、この絵には、実は二

人の女性がいるのです。一人は、斜め後ろを向いている若い女性。美しい娘さんです。もう一人は、右を向いている年老いた女性の横顔です。醜悪な老婆です。この元の絵は「嫁と義母」というタイトルで1930年に発表されたそうです。ある人には若い女性が見えてきます。また、ある人には年老いた女性が見えてきます。交互に両者を見ることのできる人もいます。でも、私たちは、両者を同時に見ることはできません。このような図を「多義図形」というそうです。

ところで、オールズバーグの絵にも、このような錯覚を利用した模様や複雑なしかけのある構図などが用いられているのです。この絵は代表作『ジュマンジ』注²³の一場面です。部屋(リビング)の中ですが、暖炉の上に大蛇がとぐろを巻いています。とても不気味ですが、よく見ると、部屋のソファにも、同じような模様が見えます。花瓶の図柄や右下の観葉植物の格好にも、どこかしら同じようなデザインを感じてしまいます。こうしてオールズバーグは、1枚の絵の中に不気味さという〈非日常性〉と平凡という〈日常性〉を同時に存在させているのです。

次の絵は、『名前のない人』注²⁴の一場面です。先ほど、彼の本職は彫刻家であると申しましたが、彼の描く絵は、彫刻家としての描写法に特徴があります。画家と彫刻家のそれぞれのデッサンを比較して見ますと、一般的に、画家はものを「形体・色彩」から捉えて、その姿や表情などを描く傾向があるのに対し、彫刻家はものを「塊」として捉え、立体的に表現する傾向があります。また画家が形の正確さや質感を大切にするのに対し、彫刻家はむしろ動きの特徴を記録するように紙面に描き込みます。彫刻家である彼の絵には、まさに彫刻家の描写法が特徴的に表れています。

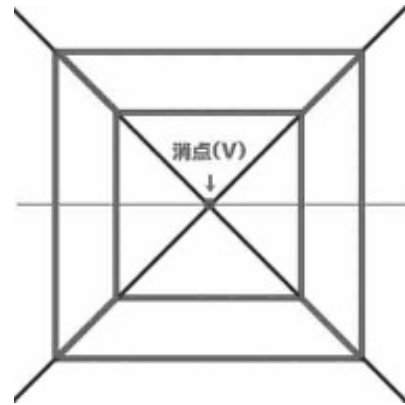
この場面は取り入れの場面ですが、前面には枯れた草を束ねた塊が描いてあります。この塊や紙面下部の、秋の光りに照らされた草の部分を見ると、輪郭を鋭く際立たせ、明と暗をはっきりと描き、中間色は控えめに描いてあります。馬車の車輪の部分も同じように描写され、ものが塊として立体的に描いてあります。しかも全体的には前景をはっきり、中間をやや弱く、背景はぼんやりと

描く空気遠近法を用いることによって距離感を出しています。このような描写をすることによって、彼は読者に、あたかもその場にいるような臨場感を与えています。ところが、同時に、読者は彫刻的な、現実とは異なる空間を見せられて、不可解さを覚えてしまうのです。

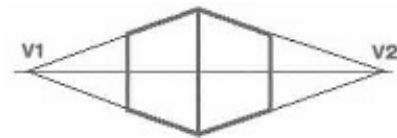
この絵本の他の面白さは、絵にさりげなく細かなしなかけがしてあることです。たとえば、名前のない人が自然人であることは絵で示してあります。彼は複数場面（ダンスをする場面など）で靴ひもを締めていません。また読後に、この人は人間ではなく、本当は動物か不思議な生きものではないかと思わせてしまうのですが、その思いは最後のページにリス（本当はリスだったのかな？）を描くことによって助長させられます。しかし、タイトルページには粹絵があり、車にはねられる前にも彼が歩いている姿が小さく描いてあります。とすると、彼は人間であり、テキストに書いてある通り、hermit（隠者みたいな人）であることは明らかです。このように、彼の絵本の絵も文章も、アンビバレント（相反する意見〔感情〕をもつ）な解釈を可能にするところは、先の錯覚の「多義図形」の手法に似ています。

次の作品の絵を解説する前に、「遠近法」について短くお話しします。「遠近法」には「一点透視法」（図-A）、「二点透視法」（図-B）、「三点透視法」（図-C）、「空気遠近法」など、いろいろあります。図-Aはご覧の通り、遠くにいくほど小さく見えます。手前から奥へ行くほど、それぞれの縦線の幅が狭く描いてあるからです。一番奥の点を「消失点」といいますが、あたかも一番奥で見えなくなるように描いてあります。人の目は、このような図を見ると、小さく描いてあるものが奥にあるように見えてしまうのです。これは私たちの生活上の経験からくる、一種の錯覚です。このようにして、本来「3次元のものを、2次元の空間に描く手法」を「遠近法」といいます。「二点透視法」は消失点が二か所あり、「三点透視法」消失点が三か所ある描き方です。

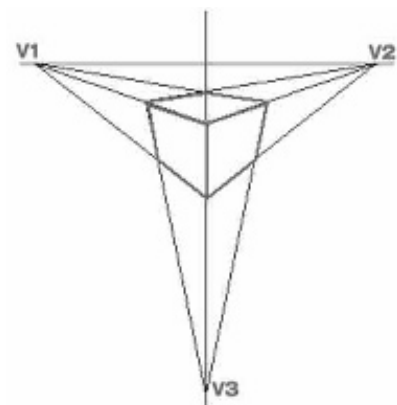
次の絵はオールズバーグの『ジュマンジ』の始めの方の一コマです。ご覧のように、下方から上を見上げるような構図で描いてあります。地上か



(図-A 一点透視法)



(図-B 二点透視法)



(図-C 三点透視法)

ら上方を見上げる構図なので、このような遠近法を俯瞰図、虫の目の位置から見るといいます。この絵では、さらに手前にボールを置いて、より見上げる感覚が生じるように意図的に作図してあります。これで不思議な感覚が生まれるのです。

次の絵も『ジュマンジ』の終わりの方の一コマです。ご覧のように、今度は上方から下を見下げるような構図で描いてあります。上空から下方を見下げる構図なので、このような遠近法を鳥瞰図、鳥の目の位置から見るといいます。この絵では、さらに大木の間少年を配置して、より見下げる感覚が生じるように意図的に作図してあります。こうして不思議な感覚が生まれるのです。

次の絵は、クリス・ヴァン・オールズバーグ作、『ベンを見た夢』注²⁵という作品の一コマです。この絵は今の『ジュマンジ』の絵より、もっと極端な遠近法が用いてあります。この塔は、おそらくロンドンのビッグ・ベンという時計台でしょうが、ご覧の通り、鋭角な角度で上から見ています。そして、その上、先端部分を裁ち落とし、地上部分も土台部分が裁ち落してありますので、この塔は紙面の外側に飛び出してしまうような勢いを感じさせるのです。さらに見開きページの左部分にのみ塔が配置してあり、右ページの普通の家は低い家ですから、読者が極端な高低を感じてしまう、まことに不思議な感覚を醸し出しています。

以上、オールズバーグのしかけについて簡単に説明いたしました。彼の絵本の世界、その不可解さの原因は遠近法を使った魔力であり、その手法からくる錯覚や不可解さを用いているといえます。

レオ・レオニの場合

続いて、レオ・レオニ 注²⁶の絵本の世界を、彼のグラフィック・デザイナーとしてデザインの使い方から説明いたします。レオニはオランダ生まれの芸術家ですが、数奇な人生経験をしている人です。生まれがオランダですから、母語はオランダ語ですが、若い時分はイタリアで経済学の博士号を取得した人ですから、当然イタリア語を自由に話しますし、その後、自身がユダヤ人ですので、迫害を逃れて、アメリカに移住します。そして、英語を用いて生きた人です。

絵本作品の話をする前に、少し、彼の他の仕事について紹介します。ご覧の絵は、彼の絵画制作時、彫刻制作時の様子と、それぞれの作品です。このように、彼は彫刻、絵画も数多く制作しています。デザインの部分の左上の作品は1954年のオリヴェッティ社のレイッテラ22というタイプライターの宣伝用デザインポスターです。こちら右上のポスターには、「ガンは、早期治療すれば、完治できます」と書いてあり、胃腸の部分には、「腸の調子に、何か変なところがあると、ガンかもしれません」という警告文のような文章があります。これは1950年のアメリカ癌センターの医学用のポ

スターです。レオニは、このように多種多様な作品を描いた、才能豊かな芸術家でした。

さて、この絵はレオニの興味深い絵本『さかなはさかな』注²⁷という作品の表紙です。彼はデザイナーですから、絵本の内部に、事物を計画的に配置しています。この作品はそれがよくわかる、大変配慮の行き届いた作品です。物語はさかなとかえるの交流を描いたものです。先にあらすじをいいますと、一ある池にオタマジャクシと小ざかなが住んでいて、2匹は仲良しでした。ところが、ある朝、オタマジャクシに異変が起きます。後ろ足、前足が生えてきて、尻尾が短くなるのです。2匹は仲間だと思っていたのに、違う形になってしまい、オタマジャクシは、とうとうかえるになってしまいます。そうすると、かえるは自慢げに「かえるは かえる、さかなは さかな そういうことさ！」と主張します。その後、かえるは水から上がり、地上で暮らすようになります。

小ざかなも大きくなりますが、さびしくて仕方ありません。そんなさかなのもとに、ある日、かえるが戻ってきて、地上の生活について話してきかせます。さかなは、鳥、牝牛、人間などのことを聞き、すっかり興奮してしまいます。かえるが地上に戻ってしまうと、さかなは自分も世の中を見たくなくて、地上に飛び出してしまうのです。しかし、エラ呼吸のさかなが地上で生きていくことはできません。息も絶え絶えでうめいていると、運よく、かえるが見つかり、さかなを水に戻してくれます。もう少しで命を失うところだったさかなは、なんとか回復し、二匹は最後に、「さかなはさかなさ」「かえるは かえるさ」と、お互いの違いを認め合うところで、物語は終わります—この物語はユダヤ人であったレオニが、自己のアイデンティティを語ったものと思われます。人はそれぞれの違いを知り、それを認めて共に生きていくべきと語っているようです。

さて、レオニは、この物語の登場者たちを、絵本紙面の中に描くに際し、それぞれの立ち位置などを工夫して描いています。つまり、登場者のいる位置の高低、向き、また中央に置くか端に置くかなど、心理的な効果を考えて配置しているのです。

この絵は、物語の最初の場面です。ご覧のように、両者はほぼ同じ高さ、同じくらい中央寄りに描かれています。ここでは、まだオタマジャクシは変態する前ですから、2匹は同等で仲間なのです。

しかし、次の場面では、2匹のいる位置に変化が見られます。小さい足の生えたオタマジャクシは自慢げに話し、自分はずっとのままのさかなは劣性な立場ですので、下の方に配置されています。次の場面では、両者はほぼ同じ高さに位置していますが、かえるに変身したかえるは少し中央寄りに描かれています。1歩先にいるのです。さかなの目も、前は丸く描いてあったのに、ここでは角ばっています。

さて、次はかえるが地上に出ていく場面ですが、ご覧のように、右ページの上から這い上がっています。これは絵本でよく使う手法ですが、登場者を右ページの端っこに描くことによって、読者は、次を見たくなり、ページをめくるのです。自然な展開です。一方、さかなは中央にいますが、下の方に描いてあります。仲間がいなくなるので、気持ちが沈んでいますから、下部に描いてあるのです。

次も同様に、一人ぼっちになったさかなの寂しさを象徴的に描いています。左ページの下の方に、悲しそうにひっそりと描いてあります。

少しページを飛ばしますが、この場面は、地上から水に戻ってきたかえるが、さかなに地上の様子を語っている場面です。さかなは左ページに右向き、かえるは戻ってきたということが一目でわかるように、右ページにさかなに向かって左向きに描いてあります。両者は互いに向かい合って話しています。2匹の立ち位置をよく見ると、さかなは地に足を付けているように安定した姿勢ですが、地上の華やかさを語るかえるは小石の上に不安定に座しています。やや落ち着かない様子が見てとれます。中央の絵は、見たこともない牝牛を、さかなが想像している絵です。「あしが 四ほん と つのが あって、くさを たべ、ピンクの ミルクの ふくろを もってるんだ。」

この場面は、さかなが地上に飛び出す場面ですが、先ほどと同じように、右ページの上部に描い

てあります。かえるはよじ登って出て行きましたが、さかなは興奮していますから、飛び跳ねています。

次は息も絶え絶えのさかなの様子です。動くこともできずに喘いでいるのですが、このように、後ろ向きに描いてあります。絵本では右ではなく、左向きに描くとき、登場者がマイナスの様子を象徴するのですが、まさにマイナスコードです。しかも仰向けに非常に変わった姿勢で、この苦難を容易に読み取れるようになっています。目の描き方も上手です。

さて、しかし、さかなはかえるの援助で、水に戻ります。中央から下向き、左向きに戻っていきます。自然にその様子を読み取れます。

そして、最後は両者が互いの違いを認め合います。「さかなは さかなさ」という表現が、自分のいるべき位置を自覚している意味合いを的確に表現しています。またここでかえるが右向き、さかなが左むきに描いてあります。これはマイナスを意味するのではなく、物語の終結を示すので、左向きでいいのです。そして、両者は地上と水の中という違う空間にいますし、かえるも水草の上に安定して座しています。

以上、紹介しましたように、レオ・レオニの特徴は、絵本の紙面の中に、事物を的確に配置し、読者に物語の各場面の状況がよくわかるように描いてあるという点です。デザイナーとしての事物の配置は、長年の彼の経験と知識から身に付けたものでしょうが、これは最初の絵本、『あおくんときいろちゃん』注²⁸で、すでに行われていますので、このような視点で、あの作品を読むと、また楽しみが倍増されます。

エリック・カールの場合

最後に、エリック・カール 注²⁹について短くお話しします。彼の作品はご存じのように、一種のしかけ絵本です。彼の芸術家としての特徴は、その奇抜さと材料作りの巧みさにあるといえるでしょう。彼はコラージュという貼り絵の手法を用い、絵とことばを見事に調和させ、美しい絵本作品を多数作っています。これらの作品は、楽しく、またユーモアにあふれ、大人の私たちでも読んで

わくわくします。

さて、カールは、薄葉紙 (tissue paper) にいろいろな色で彩色し、その紙を様々な大きさや形に切り取り、ボードに貼り合わせながら絵を制作しています。中でも最も人気のある作品『はらぺこあおむし』はコラージュを用い、各ページの幅を変え、しかも重ねて見せるという奇抜な着想で展開しています。さらに絵本の紙面に穴を開けるというユニークなしかけで人々を驚かせましたが、今なお、大人にも子どもにも親しまれています。また、カールは音の出る絵本、点滅し、光る絵本なども手がけています。

本日は、もう時間もありませんので、詳しくは紹介できませんが、彼がいかにして材料を作り、そして、実際にコラージュ作品を作っているのかを、この場で、彼のホームページに一緒に入って見てみましょう。

エリック・カールホームページに入る。→ Welcome to The Official Eric Carle Web Site 注³⁰このオフィシャルサイトは誰でも簡単に入れますので、みなさん、ご自宅どうぞ楽しんでください。(なお、この講座のころと違って、このホームページは充実した内容に変更されています。現在でも、この中のPhoto and Video Galleryを開くと、カールの制作の様子を見ることができます。この記録には、講座当日の内容は省きますので、関心のある方は、実際にウェブサイトからご覧ください。)

なお、本日は以前販売されていた、めずらしい本を持参しましたので、これを用いて、彼の絵本の作り方を説明します。この絵はその教材を示したものです。タイトルは *You can make a collage: A Very Simple How-to Book by Eric Carle* (あなたもコラージュを作ることができますよ。エリック・カールによる、とても簡単な手引き) です。

一部を紹介します。

「鳥を作りたいなら」

「はじめに、一枚の白い紙の上に、鉛筆かクレヨンで、さっと輪郭を書きます。この線が、切り抜く紙の目安になるのです」

(ヒント：簡単なものから始めるほうがいいで

しょう。慣れたら、もっと複雑なものを作ってみてください)

「次に、(あらかじめ) 色をつけた薄葉紙 (tissue paper) から形を切り抜きます。こんなふうに、大まかに。間違っただと思っても、気にしない。実際、うまくいかないことが、しばしば、味わいのあるものになることがあるのです」

「私は、たいていの場合、最初に、絵の中の、大きな中心になる部分を貼り付けます」

「それから、目、足、ここには、クレヨンを使います」

「ほら、もう、鳥の作り方がおわかりになったでしょう」

「花はどう作るか？」

「最初に、花になる部分を、このように、みんな切り取ります」

「私がよくやるやり方は、切って、貼る、です (cut and paste)。初めに茎、続いて葉っぱ、花、こうやって最後にあおむしを描いて、どんなやり方でも構いません。あなたがやりやすいように、で構いません」

(ヒント：私は目、足、触覚、背中の羽毛を描くのに、よく鉛筆を使います 筆者訳)

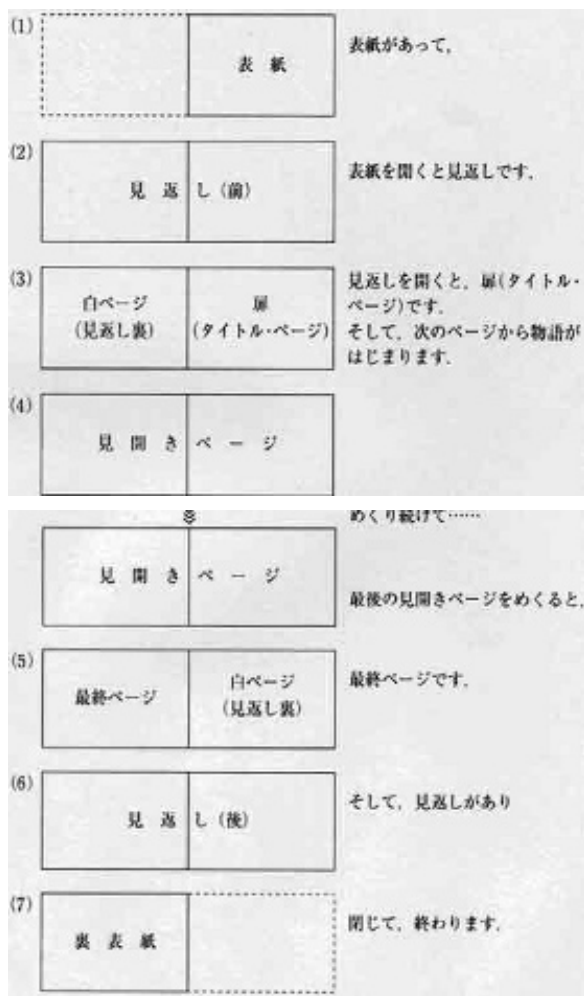
実に簡単ですが、以上で、エリック・カールについての紹介を終わります。

本日は、現代アメリカの代表的な絵本作家 (画家) と、その作品について紹介いたしました。冒頭に申しましたように、彼らの絵本の中には、不可思議な非日常世界が描かれています。そこで起こる奇妙な出来事、そして、彼らの魔力—物語る手法、隠し絵、騙し絵の世界、そしてしかけ絵本のからくりを、解き明かしたつもりです。

最後に、本日、紹介した芸術家に共通することを申しますと、彼らは、絵本作家ですが、同時に、他のジャンルの仕事もたくさん行っているということです。たとえば、デザイナー、画家、彫刻家、壁画作家などとして多方面で活躍しています。さらに彼らに共通することは、国際的な活躍をしているということです。それは、現代が異文化・多文化の時代であるということとも大いに関係のあることだと思います。

最後に、絵本の作りとしての構造を示します。

どんな絵本でも、たいていは、この構造（下図）の中で展開されているのです。ですから、絵本を読むときは、常に、このような構造の中で物語やしかけが表現されているということを自覚してお読みになるとわかりやすいと思います。そして、「現代アメリカの絵本の非日常」の世界を愉しんでください。ご静聴、ありがとうございました。



注¹ 若杉準治編、『絵巻物の鑑賞基礎知識』、至文堂、1995年、29ページ。

注² 若杉氏は、絵巻の見方を以下のようにわかりやすく解説しています。

「絵巻は横に長いものですから、全部を同時に見ることはできません。右から左へと巻きながら見ます。するといちどに目にはいる部分といえば、だいたい左右が五〇センチくらいの画

面です。ところで絵巻は必ず詞書から始まります。そして次に絵があり、また詞書があって次に絵がある、という構造になっています。(中略) 絵巻を見るのは詞書を読んで物語を知り、次に絵を見てさらに想像をふくらませることの繰り返しで、本当に楽しいものです。絵には緻密に描きこまれた部分と、霞などが描かれているだけのまばらな部分とがあるのですが、このように長い画面の中に起伏があることで、次にどんな場面が来るのかもっと見たい、という気持ちがかき立てられるように思います。」(若杉準治著、『絵巻を読み解く』(新潮社 1998、170-171ページ。)

注³ 前掲、『絵巻を読み解く』11-12ページ。

注⁴ 平群町公式ホームページ、2007年4月3日
 〈http://www.town.heguri.nara.jp/manabu/bunkazai/bunkazai04_1.html〉。

「飛倉ノ巻」は、縦三一・五センチメートル、長さ八二七センチメートルです。参考のために、ホームページに書かれているあらすじも引用しておきます。

「信濃の国より奈良に来て東大寺で授戒した法師(命蓮)が、帰郷を思いとどまり大仏の前であちこち見ていると坤(未申(ひつじさる)…南西)の方向にかすかに信貴山が見えた。そこで修行する内に小さな厨子に入った毘沙門天を得、ささやかなお堂を建てて一心に修行を行った。

山の麓に長者が居り、その元に命蓮上人が托鉢(たくはつ)のために飛ばした鉢が飛来するが、長者は度重なる托鉢を嫌って瓦葺きの米倉に鉢を閉じこめてしまう。

絵巻はこの場面から始まっており、倉から鉢が飛び出し、蔵を乗せて信貴山へ飛んで帰ってしまう。長者は馬に乗り、あわてて従者とともに後を追ひ、信貴山に登って命蓮に倉を返すように懇願する。命蓮は倉は返さないが、蔵の中にある米俵は返すと約束し、長者の従者に俵を一つ鉢に乗せるように指示する。すると、俵に乗せた鉢が米俵を従えて飛行し、長者宅に帰り着き、下女達が驚き喜ぶ様子で締めくくられる。」

注⁵ 前掲『絵巻物の鑑賞基礎知識』30ページ。

注⁶ Jan Ormerod, *Moonlight*, Frances Lincoln

Children's Books, London: 2004.

注⁷ David Wiesner (1956 -) アメリカ、ニュージャージー州生まれ。ロードアイランド美術学校卒業後、子どもの本の仕事を始める、1989年に初めての自作の絵本『フリーフォール』で、コールデコット賞に推薦され、1992年に『かようびのよる』でコールデコット賞受賞。

注⁸ デヴィッド ウィーズナー作・絵、当麻ゆか訳『かようびのよる』(徳間書店 2000)。

注⁹ David Small (1945-) アメリカの絵本作家。デトロイト生まれ育ち。2000年、ジュディス・セントジョージ (Judith St. George) の書いた *So You Want to Be President?* でコールデコット賞受賞。1997年、『リディアのガーデニング』(アスラン書房 1999) で、コールデコット・オーナー賞を受賞。妻は作家のサラ・シュワート。日本では、以下の絵本翻訳出版されている。『エリザベスは本の虫』(アスラン書房 2003)。『ベルのともだち』(アスラン書房 2006)。『まあ、なんてこと!』(平凡社 2008) その他、『ペーパー・ジョン』、『ジョージ・ワシントンの牛』、など多数の作品がある。

注¹⁰ Text by Carl Sanburg, pictures by David Small, *The Huckabuck Family and How They Raised Popcorn in Nebraska and Quit and Came Back*, Farrar Straus Giroux, New York, 1999

『ハッカバック一家と一家はネブラスカで、どのようにともろこしを育て、その仕事をやめ、そして、また帰ってきたか』、カール・サンバーグ作、デイビット・スモール 絵 (邦訳なし)

注¹¹ Jennifer Armstrong, illustrated by David Small, *Once Upon a Banana*, Simon & Schuster for Young Readers: New York, 2006.

注¹² 中国、天津生まれ、上海育ち。19歳のとき、建築家を志し、渡米。その後、ロサンゼルス・アート・センター大学、ニューヨークのプラット研究所などで学ぶ。1990年『ロンポポ』で、コールデコット賞受賞。1992年『七ひきのねずみ』でコールデコット・オーナー賞受賞。

注¹³ Ai-Ling Louie, Illustrated by Ed Young, *Yeh-Shen: A Cinderella Story from China*,

Puffin; Reissue, 1996.

注¹⁴ エド・ヤング作・絵、藤本朝巳訳『ロンポポ オオカミと三人のむすめ』(古今社 1999)。

注¹⁵ エド・ヤング作・絵、藤本朝巳訳『七ひきのねずみ』(古今社 1999)。

注¹⁶ たとえば、私たちが日常見ている色で、色環にある色を「有彩色」といいます。一方、白やグレー、黒を「無彩色」というのですが、この無彩色には色味がありません。無彩色にあるのは明るさ、暗さを表わす「明度」です。明度では、白が一番明度の高い色、黒が一番低い色です。また、色の鮮やかさの度合いを表わすのが「彩度」です。一般的に、彩度が高いほど、澄んでいて鮮やか、低いほど濁りがあり色味が薄くなります。そして、明度と彩度の複合された色の表わし方を調子と呼んでいます。

注¹⁷ レオ・レオニ作、谷川俊太郎訳『ひとあしひとあし』(好学社 1975)。

注¹⁸ エリック・カール作、もりひさし訳、『はらぺこあおむし』(偕成社 1976)。

注¹⁹ 内田莉莎子再話、佐藤忠良画、『おおきなかぶ』(福音館書店 1962)。

注²⁰ マーシャ・ブラウン絵、瀬田貞二訳、『三びきのやぎのがらがらどん』(福音館書店 1977)。

注²¹ 古今社ホームページ

<http://www.kokinsha.co.jp/top.html>

注²² 1949年、アメリカ、ミシガン州グランドラピッズ市生まれ。ミシガン大学、ロードアイランド・デザイン校などで学ぶ。同校で、デザインなどを教えている。本職は彫刻家。1981年に『ジュマンジ』で、1985年に、『急行「北極号」』で、コールデコット賞受賞。

注²³ クリス・ヴァン・オールズバーグ作、辺見まさなお訳、『ジュマンジ』(ほるぷ出版1984)。

注²⁴ クリス・ヴァン・オールズバーグ作、村上春樹訳、『名前のない人』(河出書房新社 1989)。

注²⁵ クリス・ヴァン・オールズバーグ作、村上春樹訳、『ベンの見た夢』(河出書房新社 1996)。

注²⁶ 1910年、オランダ生まれ。1939年に渡米。45年に帰化した。59年に『あおくんときいろちゃ

ん』を発表。子どもの本の仕事を始める。ユニークな色彩と形態で物語を表現。63年に『スイミー』を、出版、67年には『フレデリック』を描いて、詩人（芸術家）の姿をユーモラスに感動的に表現。1999年没。コラージュを用いた独特の表現で絵本を制作した。

注²⁷ レオ・レオニ作・絵、谷川俊太訳『さかなはさかな—かえるのまねしたさかなのはなし』（好学社 1975）。

注²⁸ レオ・レオニ作・絵、藤田圭雄訳『あおくんときいろちゃん』（至光社 1984）。

注²⁹ 1929年、ニューヨーク州生まれ。大恐慌の

後、6歳で両親とともにドイツに渡る。その後、ストットガルトの美術学校を卒業。やがて、幸せな幼年時代を思い返し、アメリカへ帰国する。グラフィック・デザイナーとしてNew York Times社に就職。また、広告代理店のアート・ディレクターとしても活躍する。現在はマサチューセッツ在住。エリック・カール美術館を設立し、その作品や彼の絵本作りを公開している。

注³⁰ <http://www.eric-carle.com/home.html>

（ふじもと ともみ フェリス女学院大学教授）

「非日常の世界—物語る手法のからくり」資料紹介リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	Papa, please get the moon for me	Eric Carle 作・絵	Picture Book Studio USA c1986	Y19-A588
	パパ、お月さまとって!	エリック=カールさく	偕成社 1986.11	Y18-2327
2	Mister Seahorse	Eric Carle 作・絵	Philomel Book c2004	所蔵なし
	とうさんはタツノオトシゴ	エリック・カールさく さのようこやく	偕成社 2006.9	Y18-N06-H309
3	Dream snow	Eric Carle 作・絵	Philomel Books c2000	Y17-A6345
	ゆめのゆき	エリック・カール作 あおきひさこ訳	偕成社 2002	Y18-N03-H6
4	The very quiet cricket	Eric Carle 作・絵	Philomel Books c1990	Y17-A6232
	だんまりこおろぎ: 虫の音がきこえる本	エリック・カールさく くどうなおこやく	偕成社 1997	Y18-M98-83
5	The very hungry caterpillar	Eric Carle 作・絵	Philomel Books c1987	Y17-A118
	はらべこあおむし	エリック=カール作・絵 もりひさし訳	偕成社 1976.5	Y17-4826
6	The very lonely firefly	Eric Carle 作・絵	Philomel Books c1995	Y17-A6231
	さびしがりやのほたる	エリック・カールさく もりひさしやく	偕成社 1996.8	Y18-12084
7	エリック・カール:色の魔法を学ぶ	NHK「未来への教室」プロジェクト著	汐文社 2003.2	Y6-N03-H51
8	Little blue and little yellow : a story for Pippo and Ann and other children	Leo Lionni 作・絵	I. Obolensky c1959	Y19-A680
	あおくんときいろちゃん	レオ・レオーニ作 藤田圭雄訳	至光社 1967	Y18-N04-H85
9	Alexander and the wind-up mouse	Leo Lionni 作・絵	Knopf c1969	Y17-A411
	アレクサンダとぜんまいねずみ	レオ・レオニ作 谷川俊太郎訳	好学社 (1975)	Y17-4474
10	Fish is fish	Leo Lionni 作・絵	A.A. Knopf c1970	Y17-A6534
	さかなはさかな	レオ・レオニ著 谷川俊太郎訳	好学社 1975	Y17-4434

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
11	A color of his own	Leo Lionni 作・絵	Alfred A. Knopf 2000, c1975	Y17-A7943
	じぶんだけのいる	レオ・レオニ著 谷川俊太郎訳	好学社 1978	Y17-5916
12	Swimmy	Leo Lionni 作・絵	Knopf c1991	Y17-A847
	スイミー	レオ・レオニ著 谷川俊太郎訳	日本パブリッシング 1969	Y7-1688
13	Inch by inch	Leo Lionni 作・絵	Mulberry Books c1960	Y17-A404
	ひとあしひとあし	レオ・レオニ作 谷川俊太郎訳	好学社 (1975)	Y17-4473
14	Frederick	Leo Lionni 作・絵	Knopf ; Distributed by Random House, Inc. 1967, c1995	Y17-A405
	フレデリック	レオ・レオニ作 谷川俊太郎訳	日本パブリッシング 1969	Y7-1689
15	平行植物	レオ・レオニ著 宮本淳訳	工作舎 1990.5	KR333-E1 (本館)
16	Two bad ants	Chris Van Allsburg 作・絵	Houghton Mifflin c1988	Y17-A879
	2ひきのいけないアリ	クリス・ヴァン・オールズバーグ作 村上春樹訳	あすなる書房 2004.9	Y18-N04-H426
17	The wretched stone	Chris Van Allsburg 作・絵	Houghton Mifflin 1991	Y17-A794
	いまいましい石	クリス・ヴァン・オールズバーグ絵・文 村上春樹訳	河出書房新社 2003.11	KS151-H146 ※
18	Jumanji	Chris Van Allsburg 作・絵	Houghton Mifflin Co. 1981	Y17-A904
	ジュマンジ	クリス・バン・オールズバーグさく へんみまさなおやく	ほるぷ出版 1984.7	Y18-414
19	The wreck of the Zephyr	Chris Van Allsburg 作・絵	Houghton Mifflin c1983	Y19-A660
	西風号の遭難	クリス・ヴァン・オールズバーグ絵と文 村上春樹訳	河出書房新社 1985.9	YQ11-488 ※
20	The stranger	Chris Van Allsburg 作・絵	Houghton Mifflin c1986	Y17-A774
	名前のない人	クリス・ヴァン・オールズバーグ絵と文 村上春樹訳	河出書房新社 1989.8	KC482-E119 ※
21	The mysteries of Harris Burdick	Chris Van Allsburg 作・絵	Houghton Mifflin c1984	Y17-A885
	ハリス・バーディックの謎	クリス・ヴァン・オールズバーグ絵と文 村上春樹訳	河出書房新社 1990.11	KC482-E196 ※

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
22	Ben's dream	Chris Van Allsburg 作・絵	Houghton Mifflin c1982	Y17-A762
	ベンの見た夢	クリス・ヴァン・オールズバーグ絵・文 村上春樹訳	河出書房新社 1996.4	KC482-G45 ※
23	魔術師ガザージ氏の庭で	クリス・バン・オールズバーグさく へんみまさなおやく	ほるぷ出版 1981.2	Y17-7575
24	Just a dream	Chris Van Allsburg 作・絵	Houghton Mifflin 1990	Y17-A772
	ゆめのおはなし	クリス・ヴァン・オールズバーグ絵と文 さいごうようこ訳	徳間書店 1995.4	Y18-11587
25	エリザベスは本の虫	サラ・スチュワート文 デイビッド・スモール絵 福本友美子訳	アスラン書房 2003.10	Y18-N03-H570
26	ベルのともだち	サラ・スチュワート文 デイビッド・スモール絵 福本友美子訳	アスラン書房 2006.9	Y18-N06-H338
27	The gardener	Sarah Stewart 作 David Small 絵	Farrar Straus Giroux 1997	Y17-A2778
	リディアのガーデニング	サラ・スチュワート文 デイビッド・スモール絵 福本友美子訳	アスラン書房 1999.10	Y18-M99-521
28	L'amie	Sarah Stewart 作 David Small 絵	Syros jeunesse c2005	Y17-B6108
29	Company's going	Arthur Yorinks 作 David Small 絵	Hyperion Books for Children c2001	Y17-B548
30	The journey	Sarah Stewart 作 David Small 絵	Farrar Straus Giroux 2001	Y17-A7959
31	The mouse and his child	Russell Hoban 作 David Small 絵	Arthur A. Levine Books c2001	Y8-B371
32	So you want to be president?	Judith St. George 作 David Small 絵	Philomel Books c2000	Y1-A126
33	The three pigs	David Wiesner 作・絵	Clarion Books 2001	Y17-A7994
	3びきのぶたたち	デイヴィッド・ウィーズナー作 江国香織訳	BL出版 2002.10	Y18-N03-H336
34	Hurricane	David Wiesner 作・絵	Clarion Books c1990	Y17-A769
	大あらし	デイヴィッド・ウィーズナー作 江国香織訳	ブックローン出版 1995.8	Y18-11284
35	Tuesday	David Wiesner 作・絵	Clarion Books c1991	Y17-A620
	かようびのよる	デイヴィッド・ウィーズナー作・絵 当麻ゆか訳	徳間書店 2000.5	Y18-N00-213

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
36	Free fall	David Wiesner 作・絵	Lothrop, Lee & Shepard Books c1988	Y17-A621
37	June 29, 1999	David Wiesner 作・絵	Clarion Books c1992	Y17-A771
	1999年6月29日	デイヴィッド・ウィーズナー作 江国香織訳	ブックローン出版 1993.8	Y18-8929
38	Sector 7	David Wiesner 作・絵	Clarion Books c1999	Y17-A6264
	セクター7	デイヴィッド・ウィーズナー作	BL出版 2000.11	Y18-N01-415
39	おぞましいりゅう	デイヴィッド・ウィーズナー, キム・カーン再話 デイヴィッド・ウィーズナー絵 江国香織訳	BL出版 2006.10	Y18-N07-H176
40	Seven blind mice	Ed Young 作・絵	Philomel Books c1992	Y17-A626
	七ひきのねずみ	エド・ヤング作 藤本朝巳訳	古今社 1999.9	Y18-M99-503
41	Lon Po Po : a Red-Riding Hood story from China	Ed Young 作・絵	Philomel Books c1989	Y17-A639
	ロンポポ : オオカミと三にんのむすめ	エド・ヤング再話・絵 藤本朝巳訳	古今社 1999.10	Y18-M99-547
42	つる : サダコの願い	エリナー・コア文 エド・ヤング絵 こだまともこ訳	日本図書センター 2005.6	Y18-N05-H241
43	Cat and Rat : the legend of the Chinese zodiac	Ed Young 作・絵	H. Holt 1998	Y17-B3974
44	The lost horse : a Chinese folktale	Ed Young 作・絵	Silver Whistle/Harcourt Brace c1998	Y17-A7590
45	Mouse match	Ed Young 作・絵	Harcourt Brace c1997	Y17-A5787
46	アンソニー・ブラウンのキング・コング	アンソニー・ブラウン作 藤本朝巳訳	平凡社 2005.12	Y18-N06-H58
47	絵本はいかに描かれるか : 表現の秘密	藤本朝巳著	日本エディタースクール出版部 1999.10	KC511-G61 ※
48	おじいちゃんのライカ	マッツ・ウォールぶん トード・ニグレンえ ふじもとともみやく	評論社 2005.11	Y18-N06-H3
49	おとうさんの庭	ポール・フライシュマン文 バグラム・イパトゥリーン絵 藤本朝巳訳	岩波書店 2006.9	Y18-N06-H342
50	おんぶはこりこり	アンソニー・ブラウン作 藤本朝巳訳	平凡社 2005.3	Y18-N05-H173

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
51	子どもに伝えたい昔話と絵本	藤本朝巳著	平凡社 2002.6	KE178-G49 ※
52	こびととくつや：グリム兄弟の童話から	グリム（著） カトリーン・ブラント絵 藤本朝巳訳	平凡社 2002.2	Y18-N02-161
53	さびしがりやのトッケピ	ハン・ピョンホ作・絵 藤本朝巳訳	平凡社 2006.8	Y18-N06-H313
54	シェイプ・ゲーム	アンソニー・ブラウン作 藤本朝巳訳	評論社 2004.7	Y18-N04-H322
55	そうくんはどっちを向いている？：楽しい絵本学	藤本朝巳著	フェリス女学院大学 2001.12	KC511-H3 ※
56	トッケピのこんぼう：韓国の昔話	チョン・チャジュン文 ハン・ピョンホ絵 ふじもとともみ訳	平凡社 2003.7	Y18-N03-H537
57	どうぶつえん	アンソニー・ブラウン作 藤本朝巳訳	平凡社 2003.5	Y18-N03-H409
58	昔話と昔話絵本の世界	藤本朝巳著	日本エディタースクール出版部 2005.9	KE178-H25 ※
59	リベックじいさんのなしの木	テオドール・フォンターネ文 ナニー・ホグロギアン絵 藤本朝巳訳	岩波書店 2006.5	Y18-N06-H212
60	漁師とおかみさん：グリム兄弟の童話から	グリム[原作] カトリーン・ブラント絵 藤本朝巳訳	平凡社 2004.7	Y18-N04-H398
61	Once upon a banana	Jennifer Armstrong 作 David Small 絵	Simon & Schuster Books for Young Readers c2006	Y17-B8290

レジュメ

参考図書の紹介—アメリカの絵本を知るためのブックリスト

福士 輝美

1. 全般

	書名・著者	出版事項等	請求記号	備考
1	<i>100 most popular picture book authors and illustrators : biographical sketches and bibliographies</i> / Sharron L. McElmeel	Englewood, Colo.: Libraries Unlimited, 2000. xxix, 579 p. : ports. ; 26 cm. Popular authors series. Includes bibliographical references and index. 別タイトル: One hundred most popular picture book authors and illustrators. ISBN:1563086476 ((cloth : hardbound))	YZ2-A61	1997年に全米の教師及び学生を対象に行われたアンケート調査で、子ども達に最も読まれている絵本の作家と画家100人を収録。
関連 1-1	<i>100 most popular children's authors : biographical sketches and bibliographies</i> / Sharron L. McElmeel	Englewood, Colo.: Libraries Unlimited, 1999. xxxi, 495 p. : ports. ; 26 cm. Popular authors series. 別タイトル: One hundred most popular children's authors. Includes bibliographical references and indexes. ISBN: 1563086468 ((cloth))	YZ57-A29	1997年、全米およびカナダの教師と学生を対象のアンケート調査「児童文学で最も重要な作家と画家100人」で選ばれた100人をアルファベット順に収録。
関連 1-2	<i>The 100 most popular young adult authors : biographical sketches and bibliographies</i> / Bernard A. Drew.	Rev. 1st ed. Englewood, Colo.: Libraries Unlimited, 1997. xxviii, 531 p. ; 26 cm. 別タイトル: One hundred most popular young adult authors. Includes bibliographical references and indexes. ISBN:1563086158	YZ2-A72	1990年代に活躍したヤングアダルト (対象年齢12-18歳) 作家を中心に、図書館員、作家、書店、出版社が選んだ100名について、伝記的事項とジャンル別 (フィクション、ドラマ、詩など) 作品書誌を収録。
2	<i>A to zoo : subject access to children's picture books</i> / Carolyn W. Lima, John A. Lima.	7th ed. Westport, Conn.: Libraries Unlimited, 2006. xxiii, 1692 p. ; 29 cm. Children's and young adult literature reference guide. Includes bibliographical references (p. xi) and indexes. ISBN: 1591582326 ((alk. paper))	YZ-B891	就学前の児童から小学2年生までを対象とした英語で書かれた絵本28,000タイトルについての、ABCの本からZOO (動物園) まで1,350以上の主題からなるリスト及び、作家名順リスト。巻末に書名索引、画家名索引あり。

3	<i>American writers for children since 1960. Poets, illustrators, and nonfiction authors / edited by Glenn E. Estes.</i>	Detroit, Mich.: Gale Research Co., c1987. xiii, 371 p. : ill., facsim. ; 29 cm. Dictionary of literary biography; v.61. "A Bruccoli Clark Layman book." Includes bibliographies. ISBN: 0810317397	YZ2-A46	主に1960年代以降に活躍している作家（詩人・挿絵画家・ノンフィクション作家など）32名について、著者写真・代表作品写真も含めて紹介。
関連 3-1	<i>American writers for children before 1900 / edited by Glenn E. Estes.</i>	Detroit, MI Gale Research Co. c1985. xiii, 406 p. : ill. ; 29 cm. Dictionary of literary biography;v.42 "A Bruccoli Clark book." Bibliography: p. 401-405. ISBN: 0810317206	YZ2-A13	1900年以前に活動していたアメリカの児童文学作家52名について、肖像写真、著作リスト（刊行年順）・略歴・表紙写真、作家の伝記、参考文献のリストを収録。
関連 3-2	<i>American writers for children, 1900-1960 / edited by John Cech.</i>	Detroit, Mich.: Gale Research Co., 1983. xiii, 412 p. : ill. ; 29 cm. Dictionary of literary biography; v.22. "A Bruccoli Clark book." Includes index. Bibliography: p. 377-381. ISBN: 0810311461	YZ2-A15	「子どもの本の黄金時代」といわれる1900年から1960年にアメリカで活動した児童文学作家43名について、肖像写真、著作リスト（刊行年順）・略歴・表紙写真、作家の伝記や参考文献のリストを収録。
関連 3-3	<i>American writers for children since 1960. Fiction / edited by Glenn E. Estes.</i>	Detroit, Mich.: Gale Research Co., c1986. xiii, 435 p. : ill. ; 29 cm. Dictionary of literary biography; v.52. "A Bruccoli Clark book." Includes bibliographical references (p. 429-433). ISBN: 0810317303	YZ2-A14	1960年から1980年代半ばにかけてアメリカで活動した創作児童文学作家44名について、肖像写真、著作リスト（刊行年順）・略歴・表紙写真、作家の伝記、参考文献のリストを収録。
4	<i>Best books for children : preschool through grade 6 / Catherine Barr, John T. Gillespie.</i>	8th ed. Westport, Conn.: Libraries Unlimited, 2006. xvi, 1783 p. ; 26 cm. Children' s and young adult literature reference series. Rev. ed. of: Best books for children / John T. Gillespie. 7th ed. 2002. Includes indexes. ISBN: 1591580854 ((alk. paper))	YZ-B976	就学前の児童から小学6年生までを対象とした入手可能な図書約25,000タイトルを収録。主題で並べられ、その中は、作家名順。書名、作家名、画家名、刊行年等の書誌事項の他、短いあらすじ、レビュー掲載誌を含む。
関連 4-1	<i>Best books for middle school and junior high readers : grades6-9 / John T. Gillespie, Catherine Barr.</i>	Westport, Conn.: Libraries Unlimited, 2004. xviii, 1172 p. ; 26 cm. Includes indexes. ISBN: 1591580838 ((alk. paper))	YZ-B977	Supplement to the First Edition 2006 xv, 339 p. ; 27 cm. ISBN: 1591584116 (alk. paper) 9781591584117 (alk. paper) (所蔵なし)

関連 4-2	<i>Best books for high school readers : grades 9-12</i> / John T. Gillespie, Catherine Barr.	Westport, Conn.: Libraries Unlimited, 2004. Description: xix, 1182 p. ; 26 cm. ISBN: 1591580846 (hbk.)	(所蔵なし)	Supplement to the First Edition 2006. xv, 314 p. ; 27 cm. ISBN: 1591584108 (alk. paper) 9781591584100 (alk. paper) (所蔵なし)
5	<i>Beyond picture books : a guide to first readers</i> / Barbara Barstow, Judith Riggle.	2nd ed. New Providence, N.J.: R.R. Bowker, c1995. xvii, 501 p. ; 27 cm. Includes indexes. ISBN : 083523519X	YZ1-A91	就学前から概ね小学2年までを対象とする作家名順リスト。書誌事項、主題、内容紹介を含む。巻末に主題、書名、画家、対象年齢別、シリーズインデックスを収録。
6	<i>Companion to American children's picture books</i> / Connie Ann Kirk.	Westport, Conn.: Greenwood Press, 2005. xlii, 396 p. : ill. ; 26 cm. Related URL: Table of contents http://www.loc.gov/catdir/toc/ecip058/2005003395.html . Includes bibliographical references (p. [367]-383) and index. ISBN: 0313322872 ((alk. paper))	YZ-B811	アメリカの主要な児童文学賞を受賞した本を中心に、作家、画家、トピックを400項目以上にわたり収録。本の項目には、あらすじ、原画の制作材料、受賞情報、主題等を含む。
7	<i>The New York times parent's guide to the best books for children</i> / Eden Ross Lipson.	3rd ed., fully rev. and updated. New York: Three Rivers Press, c2000. xix, 530 p. : ill. ; 24 cm. Related URL: Contributor biographical information http://www.loc.gov/catdir/bios/random052/00037727.html . Related URL: Sample text http://www.loc.gov/catdir/samples/random043/00037727.html . Related URL: Table of contents http://www.loc.gov/catdir/toc/random041/00037727.html . Related URL: Publisher description http://www.loc.gov/catdir/description/random047/00037727.html . 別タイトル: Parent's guide to the best books for children. Includes bibliographical references (p. 519) and indexes. ISBN: 0812930185 ((pbk.))	YZ-B532	アメリカの子どものための推薦図書リスト。1,001タイトルを収録。絵本、文字なし絵本、読み物を対象とし、年齢別(幼児からヤングアダルトまで)に解説している。巻末に書名・作家名・画家名・主題索引と、参考文献リストがある。

2. テーマ別

2-1 おはなし会、読み聞かせ等

	書名・著者	出版事項等	請求記号	備考
1	<i>Picture book activities : fun and games for preschoolers : based on 50 favorite children's books</i> / Trish Kuffner.	Minnetonka, Minn. ; New York: Meadowbrook Press, Distributed by Simon & Schuster, c2001. xii, 243 p. : ill. ; 23 cm. Includes bibliographical references (p. 236-237) and indexes. ISBN: 0881663921 ((pbk.))	YZ72-A48	就学前の子供を対象として、絵本を読むだけでなく、その本に関連したさまざまな活動を紹介した本。最初に絵本を紹介した後、その絵本を元にした工作、料理、指あそび、遊戯、ゲーム、また、さらに読み進める場合の本が挙げられている。
2	<i>The storytime sourcebook : a compendium of ideas and resources for storytellers</i> / Carolyn N. Cullum.	2nd ed. New York: Neal-Schuman Publishers, c1999. xix, 469 p. ; 28 cm. Includes bibliographical references (p. 331-399) and indexes. ISBN: 1555703607	YZ72-A39	図書館員、教師、親などによるお話会、読みきかせの際の選書やプログラム作成を助けるための本。
3	<i>Books kids will sit still for 3 : a read-aloud guide</i> / Judy Freeman.	Westport, Conn.: Libraries Unlimited, 2006. xvii, 915 p. : ill. ; 27 cm. Children's and young adult literature reference series. Rev. ed. of: <i>Books kids will sit still for</i> . 2nd ed., c1990. Includes bibliographical references (p. 733-747) and indexes. ISBN: 159158163X ((ISBN-10 : alk. paper)). ISBN: 1591581648 ((ISBN-10 : pbk. : alk. paper)). ISBN: 9781591581635 ((ISBN-13))	YZ-B984	1995年から2005年までに出版された約1,700タイトルを収録。それぞれの項目には書誌事項、対象年齢、あらすじ、活動のためのヒント、関連タイトル、主題が収録されている。巻末索引(作家名・画家名、タイトル、主題)あり。

2-2 多文化関連

	書名・著者	出版事項等	請求記号	備考
1	<i>Black Books Galore! guide to more great African American children's books</i> / Donna Rand, Toni Trent Parker.	New York: Wiley, c2001. viii, 247 p. : ill. ; 24 cm. Companion to: Black Books Galore! guide to great African American children's books. c1998. Includes indexes. 別タイトル: Guide to more great African American children's books ISBN: 047137525X ((alk. paper))	YZ1-A203	アフリカ系アメリカ人の子どもや親に読んでほしいと作られたアフリカ系アメリカ人の児童書1990年代以降の児童書450タイトルのリスト。 <i>Black Books Galore! guide to great African American children's books</i> . c1998 (500タイトル収録) の続編。
2	<i>Great books for African-American children</i> / Pamela Toussaint.	New York, N.Y.: Plume, c1999. 278 p. ; 21 cm. Includes indexes. ISBN: 0452280443	YZ1-A115	アフリカ系アメリカ人の子供のためのブックリスト。収録図書数約250タイトル。大半は1990年代発行のもの。
3	<i>A guide to children's books about Asian Americans</i> / Barbara Blake.	Aldershot, Hants, England ; Brookfield, Vt.: Scholar Press ; Ashgate Pub. Co., c1995. xv, 215 p. ; 24 cm. Accompanied by a booklet containing the missing pages (p. 216-223). ISBN: 1859280145	YZ1-A72	アジアの人々とアジア系アメリカ人を子どもによりよく理解してもらうための就学前児童から小学校6年生までを対象のガイド。1970年から1993年に出版された図書約460タイトルを収録。
4	<i>Multicultural children's literature : through the eyes of many children</i> / Donna E. Norton.	2nd ed. Upper Saddle River, N.J.: Pearson/Merrill Prentice Hall, c2005. viii, 366 p. : ill. ; 26 cm. Includes bibliographical references and indexes. ISBN: 0131178067 ((pbk.))	YZ-B690	アメリカの児童・青少年の多文化理解のための選書、読書指導用参考書。現場の教師の利用を想定。
5	<i>Multicultural picture books : art for understanding others</i> / by Sylvia and Kenneth Marantz.	Worthington, Ohio: Linworth Pub., c1994- . v. : ill. ; 28 cm. Professional growth series "A publication of The book report & Library talk"--[Vol. 1] Includes bibliographical references and index. ISBN 0938865226 (([v. 1])) ISBN: 0938865633 ((v. 2) Library has [v. 1])	YZ1-A55	多文化の絵本のブックリスト。最初に多文化理解の必要性を述べた後、アジア・太平洋、中東・アフリカ、カリブ及びラテンアメリカなどの6つの地域別に、必要な場合、さらに国別に本を内容、対象年齢も入れて紹介している。

6	<i>Our family, our friends, our world : an annotated guide to significant multicultural books for children and teenagers /</i> Lyn Miller-Lachmann.	New Providence, N.J.: R.R. Bowker, c1992. xiii, 710 p. : maps ; 26 cm. Maps on lining papers. Includes indexes. ISBN: 0835230252	YZ1-A92	多民族化が進むアメリカ社会の文化的・人種的多様性を理解するとともに、経済的・政治的により密接な関係を持つようになっている世界の国々を理解するための児童・青少年向けの図書のリスト。収録対象は米国及びカナダで発行された英文図書。
7	<i>This land is our land : a guide to multicultural literature for children and young adults /</i> Alethea K. Helbig and Agnes Regan Perkins.	Westport, Conn.: Greenwood Press, 1994. xi, 401 p. ; 25 cm. Includes bibliographical references and index. ISBN: 0313287422 ((alk. paper))	YZ1-A65	アフリカ系、アジア系、ヒスパニック、ネイティブ・アメリカンの4つのマイノリティを扱った児童・青少年向けブックリスト。主に1985年～1993年に出版された図書559点を収録。

3. その他—インターネットから 100 Picture Books Everyone Should Know より

	書名・著者	出版事項等	請求記号
1	<i>Ten, nine, eight /</i> Molly Bang.	1st ed. New York: Greenwillow Books , c1983. [24] p. : col. ill. ; 19 x 22 cm. ISBN: 0688009069 ISBN : 0688009077 ((lib. bdg.))	Y17-A581
2	<i>The Random House book of Mother Goose /</i> selected and illustrated by Arnold Lobel.	New York: Random House, c1986. 176 p. : col. ill. ; 29 cm. Includes index. ISBN: 0394867998 ISBN: 0394967992 ((lib. bdg.))	Y17-A4165
3	<i>Yoko /</i> Rosemary Wells.	1st ed. New York: Hyperion Books for Children, c1998. 1 v. (unpaged) : col. ill. ; 24 cm. ISBN 0786803959 ((trade)) ISBN: 0786823453 ((lib. ed.))	Y17-A6922

参考図書の紹介

—アメリカの絵本を知るためのブックリスト

福士 輝美



参考図書の紹介—アメリカの絵本を知るためのブックリスト

今回はアメリカの絵本がテーマとなったので、この機会に、多くの絵本が出版されている中、どのようなものがアメリカの中で選ばれているのかを、国際子ども図書館に所蔵する書誌類を使って、ご紹介したいと思います。お手元の資料は、国際子ども図書館ホームページの「児童文学の研究書・参考図書紹介」に掲載されている資料を中心にピックアップしています。このサイトは、国際子ども図書館の第一資料室、第二資料室に開架している研究書・参考図書の中から、主なものを選んで紹介しています。

選書ツールとしては、伝統ある広範にわたる書評誌などもありますが、時間の関係もありますので、それらは紹介せずに、できる限りキーワードをアメリカ絵本（アメリカで出版されたもの）にしぼれるものとしました。絵本以外のものも含んでいますが、絵本としての項目がまとまっている書誌も紹介しています。年代的には最近10年ぐらいの間に刊行された比較的新しいものを取り上げました。

1. 全般的なもの

- ① *100 most popular picture book authors and illustrators : biographical sketches and bibliographies* / Sharron L. McElmeel. Englewood, Colo.: Libraries Unlimited, 2000. xxix, 579 p. : ports. ; 26 cm. Popular authors series. Includes bibliographical references and index. 別タイトル: *One hundred most popular picture book authors and illustrators* ISBN:1563086476 ((cloth : hardbound))

(YZ2-A61)

1997年に全米の教師及び学生を対象に行われたアンケート調査で、子どもたちに最も読まれている絵本の作家と画家100人を収録。内容は伝記的事項、作品一覧と作家に関する書誌一覧、雑誌記事論文などのさらなる情報およびウェブサイトのアドレス。作家名のアルファベット順配列。

この資料は、アメリカの作家・画家に限定しているわけではありません。アメリカで刊行されている絵本の中で支持を得ているものです。

しかし、その中でも支持率90%以上を獲得したのが、今までのお話を聞いていらっしゃる、予想がつくと思いますが、ドクター・スース (Dr. Seuss) です。以下、50-89%がマーク・ブラウン (Marc Brown)、エリック・カール (Eric Carle)、トミー・デ・パオラ (Tomie de Paola)、スティーブン・ケロググ (Steven Kellogg)、マーサー・メイヤー (Mercer Mayer)、ビアトリクス・ポター (Beatrix Potter)、H.A.レイ (H.A. Rey)、40%以上がフランク・アッシュ (Frank Asch)、イブ・バンティング (Eve Bunting)、ジョアンナ・コール (Joanna Cole)、ジェームズ・マーシャル (James Marshall)、ビル・ピート (Bill Peet)、ジャック・プレラツキー (Jack Prelutsky)、クリス・バン・オールスバーグ (Chris Van Allsburg) です。

日本に関係した人としては、安野光雅、アレン・セイ、カザ・敬子が入っています。安野光雅は、日本が本拠地ですが、カザ・敬子、アレン・セイ (Allen Say) はいずれも10代に日本からアメリカに渡り、現在はアメリカを拠点に活躍しています。

<関連資料> 100 most popularシリーズの中の児童文学関係のものをご紹介します。

100 most popular children's authors : biographical sketches and bibliographies / Sharron L. McElmeel. Englewood, Colo.: Libraries Unlimited, 1999. xxxi, 495 p. : ports. ; 26 cm. Popular authors series. 別タイトル: One hundred most popular children's authors. Includes bibliographical references and indexes. ISBN: 1563086468 ((cloth)) (YZ57-A29)

1997年、全米およびカナダの教師と学生を対象のアンケート調査「児童文学で最も重要な作家と画家100人」で選ばれた100人をアルファベット順に収録。作家解説に加えて肖像写真を含む伝記的事項、作品一覧と作家に関する書誌一覧、雑誌記事論文索引を収録。

小中学生に読まれる本を想定しています。支持率98%を獲得したのがラモーナシリーズなどで知られるベバリー・クリアリー (Beverly Cleary) です。以下、80%以上がジュディー・ブルーム (Judy Blume)、R.L.スタイン (R.L.Stine)、E.B.ホワイト (E.B.White)、70%以上がロアルド・ダール (Roald Dahl)、A.A.ミルン (A.A.Milne)、ローラ・インガルス・ワイルダー (Laura Ingalls Wilder) となります。上位27名までが支持率40%以上を獲得しています。

The 100 most popular young adult authors : biographical sketches and bibliographies / Bernard A. Drew. Rev. 1st ed. Englewood, Colo.: Libraries Unlimited, 1997. xxviii, 531 p. ; 26 cm. 別タイトル: One hundred most popular young adult authors. Includes bibliographical references and indexes. ISBN: 1563086158 (YZ2-A72)

1990年代に活躍したヤングアダルト (対象年齢12-18歳) 作家を中心に、図書館員、作家、書店、出版社が選んだ100名について、伝記的事項とジャ

ナル別 (フィクション、ドラマ、詩など) 作品書誌を収録。1990年代の作家ではないのですが、映画やテレビなどで親しまれ、根強い人気をほこるルイザ・メイ・オルコット (Louisa May Alcott)、ジャック・ロンドン (Jack London)、ルーシー・モード・モンゴメリー (Lucy Maud Montgomery)、マーク・トウェイン (Mark Twain) や、ファンタジー作家とヤングアダルト作家に大きな影響を与えたJ.R.R.トールキン (J.R.R. Tolkien)、J.D.サリンジャー (J.D. Salinger) も含みます。

② *A to zoo : subject access to children's picture books* / Carolyn W. Lima, John A. Lima. 7th ed. Westport, Conn.: Libraries Unlimited, 2006. xxiii, 1692 p. ; 29 cm. Children's and young adult literature reference guide. Includes bibliographical references (p. xi) and indexes. ISBN: 1591582326 ((alk. paper)) (YZ-B891)

就学前の児童から小学2年までを対象とした英語で書かれた絵本28,000タイトルを収録。ABCの本からZOO (動物園) まで1,350以上の主題からなるリスト及び、作家名順リスト。巻末に書名索引、画家名索引があります。主題リストより作家順リストのほうが書誌記述が詳細です。

③ *American writers for children since 1960. Poets, illustrators, and nonfiction authors* / edited by Glenn E. Estes. Detroit, Mich.: Gale Research Co., c1987. xiii, 371 p. : ill., facsim. ; 29 cm. Dictionary of literary biography; v.61. "A Brucoli Clark Layman book." Includes bibliographies. ISBN: 0810317397 (YZ2-A46)

主に1960年代以降に活躍している作家 (詩人・挿絵画家・ノンフィクション作家など) 32名について、著者写真・代表作品写真も含めて詳細に紹介。トミー・デ・パオラ (Tomie de Paola)、レオ・レオーニ (Leo Lionni)、アーノルド・ローベル (Arnold Lobel)、モーリス・センダック (Maurice Sendak) 等が含まれています。巻末付

録の "Children's Book Award and Prize" では
コールデコット賞をはじめとする15の賞の簡単な
解説と、本書刊行年までの受賞者リストを収録し
ています。

< 関連資料 > 他 の American writers for
children のシリーズを紹介します。

American writers for children before 1900 /
edited by Glenn E. Estes. Detroit, MI: Gale
Research Co., c1985. xiii, 406 p. : ill. ; 29 cm.
Dictionary of literary biography; v.42. "A
Bruccoli Clark book." Bibliography: p.
401-405. ISBN: 0810317206 (YZ2-A13)

1900年以前に活動していたアメリカの児童文学
作家52名について、肖像写真、著作リスト (刊行
年順)・略歴・表紙写真、作家の伝記、参考文献
のリストを収録。日本でも親しまれているルイザ
・メイ・オルコット (Louisa May Alcott) や、フ
ランシス・ホジソン・バーネット (Frances
Hodgson Burnett) らが含まれています。

American writers for children, 1900-1960 /
edited by John Cech. Detroit, Mich.: Gale
Research Co., 1983. xiii, 412 p. : ill. ; 29 cm.
Dictionary of literary biography; v.22. "A
Bruccoli Clark book." Includes index.
Bibliography: p. 377-381. ISBN: 0810311461
(YZ2-A15)

「子どもの本の黄金時代」といわれる1900-1960
年にアメリカで活動した児童文学作家43名につい
て、肖像写真、著作リスト (刊行年順)・略歴・
表紙写真、作家の伝記や参考文献のリストを収録。
オズの魔法使いで知られるフランク・バウム (L.
Frank Baum)、ソートン・バージェス (Thornton
W. Burgess)、マドレーヌシリーズで知られるル
ドウィッヒ・ベームルマンス (Ludwig
Bemelmans)、マーガレット・ワイズ・ブラウン
(Margaret Wise Brown)、マリー・ホール・エッ
ツ (Marie Hall Ets)、ワンダ・ガアグ (Wanda

Gag)、H.A.レイ (H.A. Rey)、ローラ・インガル
ス・ワイルダー (Laura Ingalls Wilder) などの
ほか、ウォルト・ディズニー (Walt Disney) も
収録されています。

*American writers for children since 1960.
Fiction* / edited by Glenn E. Estes. Detroit,
Mich.: Gale Research Co., c1986. xiii, 435 p. :
ill. ; 29 cm. Dictionary of literary biography;
v.52. "A Bruccoli Clark book." Includes
bibliographical references (p. 429-433) . ISBN:
0810317303 (YZ2-A14)

1960年から1980年代半ばにかけてアメリカで活
動した創作児童文学作家44名について、肖像写真、
著作リスト (刊行年順)、略歴、表紙写真、作家
の伝記、参考文献のリストを収録。アーシュラ
・K. ル＝グウィン (Ursula K. Le Guin)、スコット・
オデール (Scott O'Dell)、アイザック・バシェビス・
シンガー (Isaac Bashevis Singer)、絵本作家と
してはジュディス・ポースト (Judith Viorst)、ロー
レンス・イエップ (Laurence Yep)、シャーロッ
ト・ゾロトウ (Charlotte Zolotow) などが含まれ
ています。

④ *Best books for children : preschool through
grade 6* / Catherine Barr, John T. Gillespie.
8th ed. Westport, Conn.: Libraries Unlimited,
2006. xvi, 1783 p. ; 26 cm. Children's and
young adult literature reference series. Rev.
ed. of: Best books for children / John T.
Gillespie. 7th ed. 2002. Includes indexes.
ISBN: 1591580854 ((alk. paper)) (YZ-B976)

2002年に刊行された第7版のアップデート版第
8版です。5,000タイトルが新規に追加されまし
た。就学前の児童から小学6年までを対象とした
入手可能な図書約25,000タイトルを収録。主題で
並べられ、その中は、作家名順。書名、作家名、
画家名、刊行年等の書誌事項の他、短いあらすじ、
レビュー掲載誌を含みます。絵本は Literature—
Books for Younger Readers—Picturebooks の項

にまとめられていて、約5,000タイトルを収録しています。絵本の前にABC、カウンティング・ブック、文字なし絵本の項目もあります。作家、画家、書名、主題、対象年齢別の索引があります。

<関連資料> このシリーズは年齢別に刊行されていますので、それをご紹介します。

Best books for middle school and junior high readers : grades 6-9 / John T. Gillespie, Catherine Barr. Westport, Conn.: Libraries Unlimited, 2004. xviii, 1172 p. ; 26 cm. Includes indexes. ISBN: 1591580838 ((alk. paper)) (YZ-B977)

Best books for high school readers : grades 9-12 / John T. Gillespie, Catherine Barr. Westport, Conn.: Libraries Unlimited, 2004. 1200p. ISBN: 1591580846 (当館所蔵なし)

⑤ *Beyond picture books : a guide to first readers* / Barbara Barstow, Judith Riggle. 2nd ed. New Providence, N.J.: R.R. Bowker, c1995. xvii, 501 p. ; 27 cm. Includes indexes. ISBN : 083523519X (YZ1-A91)

就学前から概ね小学2年まで(4-7才)を対象とする作家名順リスト。書誌事項、主題、内容紹介を含みます。絵本ばかりではありません。巻末に主題、書名、画家、対象年齢別、シリーズインデックスを収録。グレードはA (Reading Level low)、B (middle)、C (high) の3段階に分けてあります。

刊行年は少し古いものですが、2007年12月に第3版が刊行予定ですので、ご紹介しました。(その後、刊行済み)

⑥ *Companion to American children's picture books* / Connie Ann Kirk. Westport, Conn.: Greenwood Press, 2005. xlii, 396 p. : ill. ; 26 cm. Related URL: Table of contents <http://www.loc.gov/catdir/toc/ecip058/2005003395>.

html. Includes bibliographical references (p. [367]-383) and index. ISBN: 0313322872 ((alk. paper)) (YZ-B811)

アメリカの主要な児童文学賞を受賞した本を中心に、作家、画家、トピックを400項目以上にわたり収録。本については、作家、画家、あらすじ、原画の制作材料、アネクドート(逸話、エピソード)、受賞情報、作家、画家の生年月日、主題を含みます。

具体的に見てみましょう。お手元にお配りしたコピーはセンダックの『かいじゅうたちのいるところ』の一部です。その前の作品の部分が写りこんでいて、そこにいろいろな項目が書き込まれています。メディア(原画の制作材料)は「多分鉛筆」、アネクドートと書いてあるエピソード的なもの、ここでは、この本は友に捧げられていると書いてあります。

⑦ *The New York times parent's guide to the best books for children* / Eden Ross Lipson. 3rd ed., fully rev. and updated. New York: Three Rivers Press, c2000. xix, 530 p. : ill. ; 24 cm. Related URL: Contributor biographical information <http://www.loc.gov/catdir/bios/random052/00037727.html>. Related URL: Sample text <http://www.loc.gov/catdir/samples/random043/00037727.html>. Related URL: Table of contents <http://www.loc.gov/catdir/toc/random041/00037727.html>. Related URL: Publisher description <http://www.loc.gov/catdir/description/random047/00037727.html>. 別タイトル: Parent's guide to the best books for children. Includes bibliographical references (p. 519) and indexes. ISBN: 0812930185 ((pbk.)) (YZ-B532)

アメリカの子どものための推薦図書リスト。1,001タイトルを収録。絵本は約250タイトルが紹介されています。その前に文字なし絵本の項目があります。それぞれの項目の中では、書名のアルファベット順に排列されていますが、文字なし絵

本のトップにあるのは、安野光雅の*anno's journey*です。読み物を対象年齢別（幼児からヤングアダルトまで）に解説しています。巻末に書名・作家名・画家名・主題索引と、参考文献リストがあります。

2. テーマ別書誌

次にテーマ別にまとめられた絵本類のリストを紹介します。ここでは、絵本を利用した活動としておはなし会、読み聞かせに関するもの、そして、アメリカ文化を特徴づけるものとして、多文化に関するものを取り上げてみます。

2-1 おはなし会、読み聞かせ等

① *Picture book activities : fun and games for preschoolers : based on 50 favorite children's books* / Trish Kuffner. Minnetonka, Minn. ; New York: Meadowbrook Press, Distributed by Simon & Schuster, c2001. xii, 243 p. : ill. ; 23 cm. Includes bibliographical references (p. 236-237) and indexes. ISBN: 0881663921 ((pbk.)) (YZ72-A48)

就学前の子供を対象として、絵本を読むだけでなく、その本に関連した様々な活動を紹介した本。最初に絵本を紹介した後、その絵本を元にした工作、料理、指あそび、遊戯、ゲーム、また、さらに読み進める場合の本が挙げてあります。子どもにこういう質問をすとか、こういう点に注意して読み聞かせるといったようなことも記述してあります。取り上げられている50タイトルの絵本は『ジャムつきパンとフランシス』『どろんこハリー』『ぼくにげちゃうよ』などいずれも長く読み継がれている絵本です。付録として、基本的な工作のやり方、簡単な製本法、児童文学関係の賞一覧などがあります。巻末に索引があります。

② *The storytime sourcebook : a compendium of ideas and resources for storytellers* / Carolyn N. Cullum. 2nd ed. New York: Neal-Schuman Publishers, c1999. xix, 469 p. ; 28 cm. Includes bibliographical references (p.

331-399) and indexes. ISBN: 1555703607 (YZ72-A39)

図書館員、教師、親などによるおはなし会、読み聞かせの際の選書やプログラム作成を助けるための本。祝祭日、動物、誕生日、環境、クリスマス、お金、怪獣といった146のテーマの下に関連した絵本2,200冊、ビデオ・カセット・CD711点を収録、さらに指あそび、工作、遊戯、歌を挙げてあり、おはなし会などがすぐ企画できるようになっています。巻頭に年間行事等のカレンダー、巻末に出版社、ビデオ取扱会社、音楽カセット・CD取扱会社一覧、参考文献、書名索引、著者名索引、歌名索引があります。

③ *Books kids will sit still for 3 : a read-aloud guide* / Judy Freeman. Westport, Conn.: Libraries Unlimited, 2006. xvii, 915 p. : ill. ; 27 cm. Children's and young adult literature reference series. Rev. ed. of: Books kids will sit still for. 2nd ed., c1990. Includes bibliographical references (p. 733-747) and indexes. ISBN: 159158163X ((ISBN-10 : alk. paper)). ISBN: 1591581648 ((ISBN-10 : pbk. : alk. paper)). ISBN: 9781591581635 ((ISBN-13)) (YZ-B984)

著者は長年、学校司書とストーリーテラーの経験を積んでいらっしゃる方です。それを活かして、この本を編集しました。1995年から2005年までに出版された約1,700タイトルを選択して収録。絵本は「やさしいフィクションと絵本」(約900タイトル)の項にまとめられています。他にフィクション、民話、ノンフィクション等の項目があり、その中は作家名順で並べられています。それぞれの項目には書誌事項、対象年齢(小学6年まで)、あらすじ、活動のためのヒント(Germ)、関連タイトル、主題が記載されています。巻末に作家名・画家名、書名、主題の索引があります。

2-2 多文化関連

① *Black Books Galore! guide to more great*

African American children's books / Donna Rand, Toni Trent Parker. New York: Wiley, c2001. viii, 247 p. : ill. ; 24 cm. Companion to: *Black Books Galore! guide to great African American children's books*. c1998. Includes indexes. 別タイトル: *Guide to more great African American children's books* ISBN: 047137525X ((alk. paper)) (YZ1-A203)

1990年代以降刊行された入手可能なものを中心としたアフリカ系アメリカ人の児童書450タイトルを収録。アフリカ系アメリカ人の子どもや親に読んでほしいと作られたものだそうです。タイトルを見てわかるように、*Black Books Galore! guide to great African American children's books*. c1998の続編です。幼児・就学前児童、低学年、中学年、高学年・青少年といった対象年齢別に書誌事項、内容を紹介しています。付録として、両親・家族向けの本のリスト、コレッタ・スコット・キング賞受賞者リスト、アフリカ系アメリカ人のテーマを扱って、ニューベリー賞・コールデコット賞を受けた受賞者及び奨励賞者リスト、書名、作家、画家、テーマの索引を含んでいます。

② *Great books for African-American children* / Pamela Toussaint. New York, N.Y.: Plume, c1999. 278 p. ; 21 cm. Includes indexes. ISBN: 0452280443 (YZ1-A115)

アフリカ系アメリカ人の子供のためのブックリスト。収録図書数約250タイトル。一部1990年以前発行のものもありますが、大半は1990年代発行で購入可能なもの。4歳以下の子供向けから青少年向けまで年齢別に選書の要点を述べた後、対象年齢別に具体的な図書を挙げ、書誌事項、テーマ、あらすじ、読みどころを挙げています。雑誌・テレビ番組・ウェブサイトのリスト、コレッタ・スコット・キング賞受賞者リスト、子どもと読書についての文献リスト、本文に挙げた図書を扱っている書店の地域別リストも収録しています。巻末に著者・書名索引、テーマ索引があります。

③ *A guide to children's books about Asian Americans* / Barbara Blake. Aldershot, Hants, England ; Brookfield, Vt.: Scolar Press ; Ashgate Pub. Co., c1995. xv, 215 p. ; 24 cm. Accompanied by a booklet containing the missing pages (p. 216-223). ISBN: 1859280145 (YZ1-A72)

アジアの人々とアジア系アメリカ人を子どもによりよく理解してもらうための就学前児童から小学6年までを対象にしたブックガイド。1970年から1993年に出版された図書約460タイトルを収録。それぞれの国の歴史とその国からの移民史を概説した第1部と、ジャンル（フィクション、ノンフィクション）、対象年齢別に分け、その中を著者のアルファベット順に図書を紹介している第2部に分かれています。付録（本文では印刷ミスで白紙となってしまったpp217-223の部分）として、著者索引（扱っている文化付）、書名索引、文化別図書索引があります。絵本としてまとまった項目立てはありません。

④ *Multicultural children's literature : through the eyes of many children* / Donna E. Norton. 2nd ed. Upper Saddle River, N.J.: Pearson/Merrill Prentice Hall, c2005. viii, 366 p. : ill. ; 26cm. Includes bibliographical references and indexes. ISBN: 0131178067 ((pbk.)) (YZ-B690)

アメリカの児童・青少年の多文化理解のための選書、読書指導用参考書。現場の教師の利用を想定。最初の章で、多文化理解の必要性、それを助ける図書の重要性和利用法について述べたあと、アフリカ系、ネイティブ・アメリカン、アジア系、ラテン系、ユダヤ系、中東系の図書を章別に取り上げ、章の前半で歴史、文学ジャンル別の特徴などを具体的な作品を挙げて概説し、後半で選書・読書指導上の留意点、具体的方法を述べ、図書一覧を付しています。各解説のあとに、国・地域ごとのブックリストが掲載されています。巻末には書名・著者索引があります。この版は第2版です。

2001年の初版にストーリーテリングの重要性とその方法、読書を他の活動につなげるため生徒指導の方法などが追加されています。

内容は絵本だけではありませんし、ブックリストもそれほど多くはありません。「日本」の項目を見ると、民話、広島原爆に関する絵本などのほか、日本の古典『虫愛ずる姫君』の英訳本もあります。どのように訳されているのかと思うと興味がありますが、残念ながら当館では所蔵がありません。

絵本というジャンルにしばられているということで、次の書誌を紹介します。ただし、国際子ども図書館では1巻しか所蔵していません。¹

- ⑤ *Multicultural picture books : art for understanding others* / by Sylvia and Kenneth Marantz. Worthington, Ohio: Linworth Pub., c1994- . v. : ill. ; 28 cm. Professional growth series "A publication of The book report & Library talk"--[Vol. 1] Includes bibliographical references and index. ISBN 0938865226 ([v.1]) ISBN: 0938865633 ((v.2) Library has [v.1](YZ1-A55)

多文化の絵本のブックリスト。最初に多文化理解の必要性を述べた後、アジア・太平洋、中東・アフリカ、カリブ及びラテンアメリカなどの6つの地域別に、さらに、細かく国・地域別に分けて、本の内容、対象年齢も入れて紹介しています。付録として、追加資料リスト、関連機関一覧、多文化関係絵本出版社リスト、参考文献、人名・書名

¹ 現在は *Multicultural picturebooks : art for illuminating our world* / Sylvia and Ken Marantz. Edition Information: 2nd ed. Published/Created: Lanham, Md.: Scarecrow Press, 2005. (Originally published as vol. 2 of: *Multicultural picture books: art for understanding others*. Worthington, Ohio : Linworth Pub., c1997. Includes bibliographical references and index) を所蔵。(YZ-B1358)

索引があります。

- ⑥ *Our family, our friends, our world : an annotated guide to significant multicultural books for children and teenagers* / Lyn Miller-Lachmann. New Providence, N.J.: R.R. Bowker, c1992. xiii, 710 p. : maps ; 26 cm. Maps on lining papers. Includes indexes. ISBN: 0835230252 (YZ1-A92)

多民族化が進むアメリカ社会の文化的・人種的多様性を理解するとともに、経済的・政治的により密接な関係を持つようになっている世界の国々を理解するための児童・青少年向けの図書のリスト。収録対象は米国及びカナダで発行された英文図書です。米国内のアフリカ系、アジア系、ヒスパニック、ネイティブ・アメリカンの4つのグループと、アフリカ、中東、東欧等の14の地域について、対象とする図書の出版状況、傾向について概説した後、対象年齢別に図書を挙げて解説しています。巻末に、それぞれのグループと地域についての参考文献、シリーズのリスト、出版社一覧、著者索引、書名・シリーズ名索引、事項索引があります。絵本としてのまとまりではありませんが、年齢別に分かれているので絵本かどうかの大体の判別は可能です。

- ⑦ *This land is our land : a guide to multicultural literature for children and young adults* / Alethea K. Helbig and Agnes Regan Perkins. Westport, Conn.: Greenwood Press, 1994. xi, 401 p. ; 25 cm. Includes bibliographical references and index. ISBN: 0313287422 ((alk. paper)) (YZ1-A65)

アフリカ系、アジア系、ヒスパニック、ネイティブ・アメリカンの4つのマイノリティを扱った児童・青少年向けブックリスト。主に1985年から1993年に出版された図書559タイトルを収録しています。マイノリティ別に、フィクション、伝承、詩というカテゴリーに分け、著者のアルファベット順に、対象年齢を添え、類書にも言及し、内容

紹介を行っています。巻末に書名索引、対象年齢別書名索引、事項別図書索引があります。絵本だけでまとまっているわけではありませんが、picture-story bookと説明の最初に書いてあるので、大体の判別は可能です。

2001年に次のタイトルの後継書が出版されていますが当館では所蔵していません。

Many peoples, one land : a guide to new multicultural literature for children and young adults / Alethea K. Helbig, Agnes Regan Perkins. Published/Created: Westport, Conn. : Greenwood Press, 2001.

3 その他—インターネットから

今回は国際子ども図書館で所蔵する資料を紹介するというので、本をご紹介しましたが、インターネットでも子どものためのブックリストはたくさん見ることができます。最後に手軽に見られるリストということで、インターネットで公開されているリストを1つだけご紹介します。

ここでご紹介するのは、*Companion to American children's picture books* (資料番号I-⑥)の選書リストにもあがっているニューヨーク・パブリック・ライブラリーのホームページに掲載されている100 Picture Books Everyone Should Know²です。ニューヨーク・パブリック・ライブラリーでは他にもいろいろなブックリストを掲載していますので、機会がありましたら、ご覧ください。また、今回紹介するリストは他の多くの図書館でもリンクを張っていますし、教育の場でも活用されているようです。ある学校では夏休みの読書プログラムとして、このリストを活用していました。

このリストに載っているのは、純粋にアメリカの作家によるというものではありません。アメリカで出版されていると捉えるほうがよいと思います。アメリカの児童文学賞の受賞作が多く、一般的によくなじまれている作品です。このうち、国

際子ども図書館で所蔵している資料は70%ほどです。また、このリストの70%のタイトルが和訳されていますので、表紙を見れば、知っているというものが多いと思います。

では、アメリカでは和訳されていないものはどういったものかということ、日本語になりにくい本(ABCの本、カウンティングブックなど)、民話を中心にした多文化関連が多いようです。ここでは和訳されていないものを中心に少しだけ原本をお見せしながら紹介します。

ブルーノ・ムナーリ (Bruno Munari) のABCの本は、昨日、三宅先生がご紹介くださいました。

モリー・バング (Molly Bang) の*ten, nine, eight*。だんだん数が減っていくカウンティングブックで、最後はベッドの中となる、おやすみ絵本でもあります。1984年コールドコット賞オナーブックです。モリー・バングは京都に1年半ほど滞在した方です。2000年コールドコット賞オナーブックの『ソフィーはとってもおこったの』(*When Sophie gets angry-- really, really angry--*) は和訳されています。

Random House Book of Mother Goose はホームページに画像がないので、どのような本かお見せします。アーノルド・ローベルがマザーグースの中から選んで絵を描いています。今は、1986年刊のこの版は入手不可能なようで、*The Arnold Lobel Book of Mother Goose* というタイトルで復刊されているそうです。

多文化関連では、日本に関連したものをご紹介します。

アレン・セイの『おじいさんの旅』(*Grandfather's journey*) は日本からの移民がテーマです。この本は、コールドコット賞を受賞していますが、アレン・セイの作品は『おじいさんの旅』も含め、たくさん和訳されていますので、タイトル紹介にとどめます。

ここでは、和訳のないローズマリー・ウェルズ (Rosemary Wells) の*YOKO*をご紹介します。ウェルズは、これまで30年以上も児童書の出版にかかわり、作品の数は60を超えているそうです。うさぎのマックスが、シリーズとして日本でもよく知られていますが、*YOKO*もシリーズになっ

² <http://kids.nypl.org/reading/recommended2.cfm?ListID=61>

ています。この本の主人公YOKOはねこです。でも、お母さんのねこが着物を着ていますので、日本人とわかりますね。「おすし」という外国の食文化を題材に、どのように異文化を理解しているかといういかにもアメリカ的なテーマです。

まだまだ、ご紹介したいものもありますが、す

でに時間がなくなっていますので、これで終わらせていただきます。

ありがとうございました。

(ふくし てるみ 国際子ども図書館資料情報課長)

レジュメ

絵本ギャラリーの紹介

小沼 里子

「絵本は舞台－19世紀英国の3人の絵本作家によるお話しと童謡と詩の世界」

(平成12年5月公開)

絵入り雑誌や絵本が市民生活の中に積極的に取り入れられた19世紀後半のイギリスの絵本の世界を紹介するプログラム。長くイギリスで語り継がれてきた物語や絵本を題材に、華やかに絵本の舞台が開幕したこの時代を代表する作家のうち、ランドルフ・コルデコット、ケイト・グリーナウェイ、ウォルター・クレインの3人の絵本を紹介している。

「コドモノクニ－1920年代の日本・子どもたちを見つめた画家のまなざし」

(平成14年5月公開)

1922（大正11）年1月に創刊された雑誌『コドモノクニ』の初期の10年間に掲載された約300枚の絵を中心に紹介している。「ギャラリー」では、『コドモノクニ』の代表的な画家たちが、どのように子どもたちを見つめ、芸術家として子どもたちのために、どのような自由な表現をしようと試みたか展示している。

「ユーゲントシュティルと絵本画家たち」(平成17年5月公開)

19世紀末から20世紀初頭にかけて、「ユーゲントシュティル」（または「アールヌーボー」）とよばれる様式に従って創作した絵本作家の作品を紹介している。欧米諸国で出版された8か国11冊の絵本の原書を、朗読や内容にあわせた音楽とともに紹介している。

「江戸絵本とジャポニズム」(平成18年5月公開)

江戸時代の庶民に親しまれた草双紙の中から10作品を選び、その全ページを、和楽器による背景音楽にのせ、落語家らがわかりやすい現代語訳で朗読している。併せて、江戸絵本から影響を受けた西洋の絵本2作品を紹介している。解説では、当時の庶民文化や社会状況を多くの図版と共に概観するとともに、江戸時代の表現技法が西洋の絵本画家に及ぼした影響についても触れている。

「子どもの本 イメージの伝承」(平成18年5月公開)

絵本が市民生活の中に積極的にとり入れられた19世紀の資料を中心に、算数や読み書きの本、行儀の本、昔話や冒険物語など、子どもたちの身近にあった本や、当時の著名な挿絵画家の作品、現代のアルファベット絵本の源ともいえるホーンブックなど、29作品の絵本画像約2,000枚を紹介する画像データベース。

「モダニズムの絵本 日常の中の芸術」(平成19年5月公開)

1920年初頭から30年代にかけて世界各地で同時に起こった新しい芸術運動が表現されている絵本10作品を掲載している。音声による日本語・英語の朗読および解説と、その時代に合わせた音楽をつけて紹介。ロシア語の朗読を聴いたり、しかけを動かして遊ぶことのできるしかけ絵本も見ることができる。

絵本 ギャラリー

絵本ギャラリー
について

挿絵本の時代 絵本の時代 絵本の黄金期

1750 1870 1900 1920 1930

子どもの本
イメージの伝承

江戸絵本と
ジャポニズム

絵本は舞台

ユージン
シュティルと
絵本画家たち

ニガハモト

モダニズムの絵本
日常の中の芸術

絵本の画像データベース
ビューイック クルックシャンク ロスコー リア テニエル
ドレ アプトン ドイル コルデコット グリーナウェイ 他

江戸の草双紙 イギリス絵本にみるジャポニズム
根太郎 金太郎 ふんぶく茶茶 ニコルソン クレイン
はちかづき姫 鼠の嫁入り 舌切り雀 他

イギリス絵本の古典
コルデコット クレイン グリーナウェイ

ヨーロッパ絵本の名品
ラッカム ロビンソン ブルック フレーザー モンヴェル ペスコフ
エレ カスパリー レフラーとウルバーン ビリーピン シャイネル 他

日本を代表する絵雑誌
武井武雄 本田庄太郎 那地孝四郎 古賀春江
初山巖 安井小登太 竹久夢二 岡本帰一 他

ソ連・ドイツ・アメリカ・日本のモダニズム
レーベジェフ リシツキー パホーモフ エルモラーエウ フロイト
シュヴィッターズとシュタイニッツ ハイン 飯塚正夢 山下謙一 他

home | English |

国立国会図書館国際子ども図書館

絵本ギャラリーの紹介

小沼 里子



国際子ども図書館企画協力課企画広報係長の小沼と申します。よろしくお願ひします。

国際子ども図書館では、2000年の開館当時から電子図書館事業を進めています。その一つの柱として、「デジタルミュージアム」である絵本ギャラリーを制作しています。こちらに映し出されているのが、国際子ども図書館ホームページのトップページになります。右側に「絵本ギャラリー」という項目がありますので、クリックしますとご覧いただけます。お配りしているレジュメに同じものを載せています。現在「絵本ギャラリー」には6つのコンテンツがありますけれども、そのコンテンツの6タイトルと、収録している絵本の年代が分かる年表を掲載しています。レジュメの一番下にホームページのURLを載せましたので、ご自宅でゆっくりご覧いただけたらと思います。

「絵本ギャラリー」は、マルチメディアの特性を生かして、絵本の発祥から20世紀までの発展の流れを、内外の貴重な絵本の画像に音声をつけて、インターネット上で紹介するサービスです。国際子ども図書館は2000年5月に部分開館しましたが、当時から提供を開始しております。

古典的な名作にはいいものがたくさんありますが、多くの人に見ていただくのは難しいので、デジタル化して、朗読や音楽をつけてインターネットで配信することにより、国際子ども図書館に来館できない人にも見ていただけるようになっていきます。ホールの後側にあるメディアふれあいコーナーの6台のパソコンでも提供しております。この連続講座が行われています3日間は、メディアふれあいコーナーは休室しておりますので、ご覧いただくことはできませんが、お近くの方やお時間のある方は、ぜひ来館してご覧いただけたらと

思います。

1. 「絵本は舞台—19世紀英国の3人の絵本作家によるお話と童謡と詩の世界」

まず初めに、部分開館にあわせて制作しました「絵本は舞台」というコンテンツを紹介いたします。19世紀後半のイギリスの絵本の世界を紹介しています。当時のイギリスでは木版による多色印刷が可能になりまして、絵本製作は画期的な時代を迎えていました。紹介しているのは、絵本の創始者といわれているランドルフ・コルデコット、ケイト・グリーナウェイ、ウォルター・クレインの3人です。

アメリカの絵本に与えられる賞としてコルデコット賞とニューベリー賞が有名ですが、コルデコット賞はアメリカで前年に出版された絵本のうち、もっとも優れた作品を描いた画家に贈られる賞です。1938年に創設された賞ですが、国際子ども図書館では、創設から今日までのコルデコット賞の受賞作品を、2階の資料室で手にとってご覧いただけるようになっています。このコルデコット賞の名前の由来となりましたのが、イギリスのランドルフ・コルデコットです。こちらに作品の一覧がありますが、赤い四角いマークがついているものに関しては、作品の全ページをご覧いただけます。先ほど吉田先生の講義にありました『ジャックの建てた家』(*The House That Jack Built, 1887* [初版1878])を紹介しながら使い方をご説明いたします。

こちらに解説が書かれていますが、「積み重ね唄」という繰り返しのリズムで展開しております。右端にあります「プレイ」というボタンを押しますと、自動的にページをめくるようになっていま

す。「ポーズ」というボタンを押しますと、その画面で止まるようになっていきます。「すすむ」と「もどる」というボタンがありますので、自分の好きなところをめくっていくこともできます。

「オプション」という機能があります。「じまくオン」、「じまくオフ」というボタンがありまして、「じまくオン」を押しますと、上のほうに日本語訳が表示されるようになっていきます。

それから、コルデコットの作品一覧の下の方に「作家について」というボタンがあります。こちらを押しますと、ランドルフ・コルデコットに関する解説が載っています。

「展示について」のボタンを押しますと、「絵本は舞台」がどのようなコンテンツであるか、解説がご覧いただけます。

「凡例」というボタンを押しますと、それぞれのボタンの解説がついておりましたが、その下に「このプログラムの構成」というボタンがあります。こちらを押していただきますと、「絵本は舞台」がどのような構成になっているのか、一覧でご覧いただけます。こちらのボタンがついているところを押しますと、それぞれの作品に飛ぶことができます。

続きまして、ウォルター・クレインの作品をご紹介します。ウォルター・クレインにつきましては4つのコンテンツがあります。一番下の『三つ子』(Triplets, 1899) は本の表紙と解説のみとなりますが、あとの3つは全ページご覧いただくことができます。『赤ん坊のイソップ』(Baby's Own Aesop, 1899 [初版1887]) を見てみます。イソップ物語にウォルター・クレインが挿絵をつけている作品です。「索引」というボタンがあります。こちらを押しますと、『赤ん坊のイソップ』にどのような作品がのっているかをご覧いただくことができます。よく知られています「ウサギとカメ」「風と太陽」といったものもご覧いただけます。

最後にケイト・グリーンナウェイの作品をご紹介します。こちらは『窓の下』(Under the Window, 1878)、『マザーグース』(Mother Goose, 1881) 『ハムリンの笛吹き』(The Pied Piper of Hamelin, 1888) の3つの作品を見ることができ

ます。『マザーグース』は非常に有名ですので、いろんな方が挿絵をつけておられますが、こちらでは、ケイト・グリーンナウェイが挿絵をつけた『マザーグース』をご覧いただけます。

このように、「絵本は舞台」は、絵本の創始者といわれるイギリスの画家3名を紹介しています。イギリスの絵本に親しんでいただくよう、イギリス人による朗読をつけています。その当時の文献などを調べまして、当時にあわせた音楽を使っており、お楽しみいただけるようになっていきます。

2. 「コドモノクニ—1920年代の日本・子どもたちを見つめた画家のまなざし」

続きまして、2002年の全面開館にあわせて公開した「コドモノクニ」を紹介いたします。「コドモノクニ」は、1922(大正11)年1月に創刊されて、1944(昭和19)年3月までの22年間にわたって刊行された絵雑誌です。倉橋惣三という方が編集顧問となりまして、北原白秋、野口雨情が童謡顧問、中山晋平が音楽顧問、編集主任が和田古江、絵画主任は岡本帰一が担当しました。

「コドモノクニ」では雑誌『コドモノクニ』の初期10年間に掲載されました約300枚の絵を中心に紹介しています。画面の中央部分に「ギャラリー」、「童謡」、「コドモノクニの画家たち」、「コドモノクニ」のこどもたち、「この展示について」という項目があります。お好きな項目をクリックしてご覧ください。

「ギャラリー」では『コドモノクニ』の見開き1ページで完結している絵を愉しんでいただけるようになっています。最初に武井武雄の作品が出ています。下のほうには本文が掲載されています。「リスト」というボタンを押しますと、「ギャラリー」で紹介している画家の作品が一覧できるようになっています。インターネットで見られるのは、リンクが張られている部分だけになっています。リンクが張られていないものにつきましては、著作権処理の関係で、こちらのホールのメディアふれあいコーナーの館内提供版のみでしか見ることができません。

続きまして、トップページに戻り、「童謡」と

いう項目を開いてみます。「兎のダンス」は皆さんご存知かもしれません。「歌を聴く」というボタンを押しますと、童謡が流れてくるようになっています。消す時はもう一度ボタンを押していただくと止まるようになっています。こちらのページですが、作詞が野口雨情、作曲が中山晋平、絵は岡本帰一となっています。右側は、画家を紹介するページに飛ぶようになっております。画家の経歴、画家に関する解説など見るできるようになっています。

またトップページにもどりまして、「「コドモノクニ」の画家たち」の項目を開きますと、『コドモノクニ』で表紙を飾った画家たちの解説が載っています。「「コドモノクニ」の子どもたち」の項目では、その時代の子どもの遊びですとか、生活の解説がご覧いただけます。インターネットを通じてご覧いただけますのは以上となりますが、メディアふれあいコーナーで提供している館内提供版には「おはなし」という項目も備わっていますし、「年表」では、その時代、画家たちが何歳ぐらいで、どのような時代背景で、どの作品を描いていたか、見ていただくことができますようになっています。

3. 「ユーゲントシュティルと絵本画家たち」

続きまして、2005年に公開しました「ユーゲントシュティルと絵本画家たち」の作品をご紹介します。19世紀末から20世紀初頭にかけて、ユーゲントシュティル、またはアールヌーボーと訳されますけれども、アールヌーボーが絵本にどのように影響を与えたかを見ていただけるコンテンツとなっています。欧米諸国で出版された8か国、11冊の絵本の原書について、日本語の朗読をつけ、内容にあわせた音楽とともに紹介しております。

アメリカの絵本としては、ハワード・パイルが絵を描いた『ヤンキー・ドゥードル 昔の歌 1775』(Yankee Doodle An Old Song 1775, 1881)という作品を紹介しています。午前中の吉田先生の講義にも出た画家です。「作家について」というボタンを押しますと、解説を読むことができます。絵を見ていくことがメインとなっていま

すので、日本語での朗読をつけています。“English”というボタンを押しますと、英語での朗読を聞くことができるようになっています。

ホームページでは、掲載作品のリストをご覧いただけますが、星印がついているものは、「解説」の中のみ紹介となっております。

4. 「江戸絵本とジャポニズム」

続きまして、2006年5月に公開しました「江戸絵本とジャポニズム」を紹介いたします。

江戸時代の庶民に親しまれた草双紙の中から10作品を選びまして、全ページを和楽器による音楽を背景に、落語家の方がわかりやすい現代語訳で朗読しています。あわせて、江戸絵本から影響を受けた西洋の絵本2作品を紹介しています。このコンテンツの中で人気があるのは『桃太郎宝の蔵入り』(1830-40年頃)ですが、今日は『舌切り雀』(1844-47年頃)のさわりだけ見てみます。こちらの『舌切り雀』はおじいさんとおばあさんではなく、親子が登場しています。ほかにも『ぶんぶく茶釜』(1735-45年頃)など、よく知られた日本の昔話が出てきますけれども、江戸時代に生まれたものは現在知られている話とは違ったストーリーになっていますので、違った楽しさを感じていただけたらと思います。今お聞きいただいたように、落語家の方が現代語訳でわかりやすく語っていますし、三味線、太鼓、笛などの音楽もつけまして耳からも楽しめるようになっています。

「江戸絵本とジャポニズム」というタイトルにもありますように、江戸絵本だけでなく、ジャポニズムの影響を受けた欧米の絵本2作品を紹介しています。ひとつはウォルター・クレインの『長ぐつをはいた猫』(Puss in Boots, 1875 [初版1873])です。1ページにいろんな場面がでてくるところが、ジャポニズムの影響を受けているといわれています。こちらの「片ページ」のボタンを押していただきますと、1ページだけが出てくるようになっています。「見開き」というボタンを押すと、絵本の見開きが画面に出るようになっています。もうひとつはアメリカの画家ウィリアム・ニコルソンが挿絵を描いている『四角いどうぶつ絵本』(The Square Book of Animals, 1900

[初版1899]) をご覧いただくことができます。この絵を見ていただくとC.B.Fallsの"ABC Book" (1925) の挿絵とよく似ているのがご覧いただけるかと思えます。目次ページの右下にあります「解説」に「欧米の絵本にみるジャポニズム」、「江戸絵本とその時代」がありまして、日本の絵本が西洋の絵本にどのように影響を与えたかを解説しています。

5. 「子どもの本 イメージの伝承」

2006年5月に公開しましたコンテンツとしても一つ、「子どもの本 イメージの伝承」があります。絵本が市民生活の中に積極的にとり入れられた19世紀の資料を中心に、算数や読み書きの本、行儀の本、昔話や冒険物語など、子どもたちの身近にあった本を中心に紹介しています。4つのパーツに分かれ、約2,000枚を紹介する画像データベースとなっています。2006年の公開時には29作品が入っていましたが、2007年5月、新たにランドルフ・コルデコットの作品を3つ、ケイト・グリーンナウェイの作品を4つ追加しました。

「年代順」という索引を開きますと、年代ごとに作品が並んでいますので、選んで見ていただけるようになっております。「50音順」の索引からも探すことができます。それから「画家名」順にも並んでいますので、こちらからも探すことができます。「キーワードけんさく」もあります。例えば乗り物を見たいときには、「のりもの」を開きますと画像が出てきます。「プレイ」を押しますと自動的に絵が変わるようになっています。ただ、このコンテンツは絵を見ていただくものですので、朗読は入っておりません。一度止めて、「この本について」を開きますと、本の紹介を見ることができます。

6. 「モダニズムの絵本 日常の中の芸術」

最後になりますが、2007年5月に公開しました「モダニズムの絵本 日常の中の芸術」を紹介い

たします。ヨーロッパにおけるモダニズムの芸術が絵本の中でどのように表現されたかを、ロシア、ドイツ、アメリカ、日本の4つの国について探っていこうというものです。

こちらのコンテンツでは、仕掛け絵本がみられるようになっていたり、ロシア語の朗読を加えたりして、ほかの作品と趣向を変えて作っています。ドイツの『魔法の舟』(*Das Zauberboot*, 1929) は仕掛け絵本で、仕掛けがいくつも散りばめられた本です。日本のモダニズムの本も2つ紹介しております。『米』(1937) は『小学科学絵本』の第11巻です。『小学科学絵本』は1937(昭和12)年に刊行された、全12巻の絵本となっていて、日本で最初の科学絵本シリーズといわれています。画面についての解説がイラストとともにわかりやすく紹介されています。もう1作品見ていただきます。こちらはロシアのサムイル・マシヤーク作、ウラジーミル・レーベジェフ絵の『サーカス』(И и р к, 1928 [初版1925]) という絵本があります。こちらのほうはロシア語でも聞くことができるようになっています。ロシア語でも日本語でも聞くことができます。ロシア語で書かれている原書ですので、ヒアリングの勉強にも使えるのではないのでしょうか。モダニズムの解説も載っています。

絵本ギャラリーの6つのコンテンツをそれぞれご紹介しました。時間の関係で一部しかご紹介できませんでした。興味のある本をご自宅やお近くの公共施設でじっくり見ていただきたいと思います。今、アメリカの絵本に関する絵本ギャラリーを制作中です。来年5月に公開ですので、当連続講座講義録が刊行される頃に、あわせて絵本ギャラリーを見ていただけたらと思います。簡単ですが、以上で終わらせていただきます。

(こぬま さとこ 国際子ども図書館企画協力課 企画広報係長)

講師略歴（五十音順）

灰島かり（はいじま かり）

1950年生まれ。国際基督教大学卒業。PR誌編集を経て、英国のサリー大学ローハンプトン大学院で児童文学を学ぶ。子どもの本の翻訳者、研究者。白百合女子大学他講師。絵本学会理事。日本イギリス児童文学学会監事。

著書 『絵本翻訳教室へようこそ』、『絵本をひらく』（編著）、『英米児童文学ガイド 作品と理論』（共著）、『英米児童文学の宇宙』（共著）等

訳書 『アーサー王の剣』、『ケルトの白馬』、『チューリップタッチ』『へそまがり昔ばなし』等

藤本朝巳（ふじもと ともみ）

1953年生まれ。青山学院大学英米文学科卒業。米国ポートランド州立大学留学、白百合女子大学児童文学科博士課程終了。フェリス女学院大学英文学科教授。日本イギリス児童文学学会理事。

著書 『子どもに伝えたい昔話と絵本』、『絵本はいかに語れるか』、『ぞうくんはどっちを向いている？楽しい絵本学』『絵本のアナトミー』（仮題）等

訳書 『リベックじいさんのなしの木』『おとうさんの庭』等

三宅興子（みやけ おきこ）

1938年生まれ。大阪市立大学大学院家政学研究科終了。梅花女子大学大学院文学研究科（児童文学専攻）教授。日本イギリス児童文学学会理事。絵本学会理事。

著書 『もうひとつのイギリス児童文学史』、『イギリス児童文学論』、『イギリス絵本論』、『イギリスの絵本の歴史』、『児童文学12の扉を開く』（共著）、『フィリパ・ピアス』（編著）、『学校図書館発絵本ガイドブック』（共著）、『絵本と子どものあふ場所』（編著）等

吉田新一（よしだ しんいち）

国立国会図書館客員調査員（平成17年度～平成18年度）

1931年生まれ。立教大学大学院文学研究科英米文学専攻修士課程終了。立教大学、日本女子大学勤務を経て、立教大学名誉教授。日本イギリス児童文学学会会長、絵本学会初代会長を務める。

著書 『イギリス児童文学論』、『絵本の愉しみ』、『絵本の魅力』、『ピーターラビットの世界』、『絵本・物語るイラストレーション』等

訳書 『ランドルフ・コールデコットの生涯と作品』、『宝さがしの子どもたち』等

Pleasure of picture books: the history
of American picture books
Transcript of the ILCL Lecture Series
on Children's Literature, 2007

Contents

Foreword	Yukiko Saito	3
Introductory Notes		4
The Early Days of American Picture Books		
— The predecessors of Wanda Gag	Shin' ichi Yoshida	6
Prosperous Years for American Picture Books: Wanda Gag and her contemporaries		
— The 1920s, 1930s, and during World War II	Shin' ichi Yoshida	27
The Development of American Picture Books		
— The post-World War II period	Okiko Miyake	51
The Maturity of American Picture Books		
— Maurice Sendak: Part I	Shin' ichi Yoshida	78
Maturity of American Picture Books		
— Maurice Sendak: Part II	Kari Haijima	106
A Fantasy World		
— The Masterful Narrative Techniques.....	Tomomi Fujimoto	122
Reference Books on American Picture Books		
— From the ILCL collections	Terumi Fukushi	150
Introduction of Picture Book Gallery	Satoko Konuma	165
About the Speakers		171

平成 19 年度国際子ども図書館
児童文学連続講座講義録「絵本の愉しみ（2）—アメリカ絵本の展開—」

平成 20 年 10 月 16 日 発行

編集・発行 国立国会図書館国際子ども図書館
〒110-0007 東京都台東区上野公園 12-49
電話 03-3827-2053 FAX 03-3827-2043

印刷・表紙デザイン 株式会社 丸井工文社
〒107-0062 東京都港区南青山 7-1-5

I S B N 9 7 8 - 4 - 8 7 5 8 2 - 6 7 2 - 9

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。本誌のPDF版を国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) でご覧いただけます。なお、訂正があった場合は、ホームページ上に掲載いたします。

